



ピアノは私だ 3-C

2016年4月29日から
2017年2月22日までの
全ブログ集

裕イサオ

2016.04.29 Fri 皆さん、お元気ですか？

ブログを書かなくなって、一か月半ぐらいが経ちました。うーーん、再開の予定はないのですけれど・・・。

久保の兄貴が大変な状況になってしまいました。私の故郷は福島県いわき市。その心労は大変なものであること、私は知っているつもりですけど、結局、何もしてあげられない。私の故郷と同じ状況になってしまいました。フランスでも日本でも、私は異邦人。息が苦しくなってきます。無力という内的な圧力が掛かってくる。でも、やはり、と考え直す。微小な「私」ができることは、自分ができることをするだけ。つまり、ピアノを弾くしかない。「私の可能性」、微小な一個人ができることをやるしかないのでしょうか。私見では、それが他者、他人との精一杯の接点であると考えています。

私はブログを開店したまま閉鎖してしまいました。

しかし、うーーん、日本ブログ村エッセイ部門を愛して止まない私ですが、私のお気に入りブロガーさんたちは健在。そして、強力な「おばあちゃん」の独り言を拝読できる。素晴らしいです。

開店閉鎖しているのに、閲覧数が変わらない。深謝致します。

本日は5月5日2016年。超が付くような快晴。

私は午前1時に起床。仕事を終え帰宅したのが午前7時半。睡眠時間、20h30-01h00 07h30-10h00 13h00-15h00と三度寝。健康には良くないけれど、そういう仕事なのだ。ドライバー。ずっと眠い。エールフランスの羽田便のパリ到着は04h30。でも、03h50には到着するのが通例である。ドライバー泣かせのフライト。すでに、四日間のハードスケジュールの後に、最後のホームランのような仕事。しんどい。でも、二日休めるから十分に二日酔いできる。算数上は。

五日間ピアノを触っていない。三度寝の後、くやしいから、いきなりビールを飲む。眠い目をこする。ピアノの蓋を開ける。ぼーとしているから、自分がピアノ弾きであることを脳が忘れている。一瞬、不安が過る。「あれっ、俺ってピアノ弾けたっけ?」。ぼーとしながら、十本の指を鍵盤に乗せる。打ち放たれた子犬軍団。知らぬ間に物凄いスピードでピアノを弾いている。

身に付いた「技術」の恐ろしさを自分で実感する。世間の柵だのといったちゃらちゃらしたものを、すべて、技術、自分の体が跳ね除ける。そして、自分と自分の技術が、健在であることに、
ほっとする。表裏一体とはこのことなのだ。生と死というやつね。どっちが先に来るのかは、「あなた」次第。

突然、金子さんのことを考える。金子光春。「僕は、もう、詩に愛想が尽きたから書きません」と書いた後の、膨大な詩群。裕イサオはブログに愛想が尽きた?　さまぁーず三村さんの口調で・・・、「おっ、こええー——!　なんだよおー、おまえっ!　マジかよおー!」。

ハービー・ハンコックとティナ・ターナー。早朝のTSF JAZZで初めて聴いた。痺れた。午前二時の高速で聴いた。痺れた。ハービーのピアノの和声は現代ジャズの極北である。ティナ・ターナーの擦れた声。圧倒的である。現代ジャズの最高点であり、ブラックミュージックのそれでもある。「人種差別」。肌の色ではない。別のものでの差別に私は反対しない。嫌な奴は、嫌なのだ。綺麗な人は綺麗。黄黒白。私は黄だから、あえて一番先にしたけれど、こういう拘りが問題なのだ。順番はない。嫌な奴は、嫌なのだ。綺麗な人は綺麗。生き様の問題と申し上げる。

「さまぁーず三村です。あれっ、大竹さんに似た感じではあるけれど、十ぐらい上かなぁー？
大竹より少しだけハンサムなチャンジの方が・・・」

「おっ、三村さん、裕です」

「裕さん？ おいっ、狩野っ、だれっ、なの？」

「さぁぁー」

「はい、三村さん、私は、そっ、世界で最も有名な無名ピアニストなのだよ。存在が大竹ワールドそのもの、なのだ」

「げっ、モヤモヤ、そのものじゃんかよお——————っ！ 番組、潰れちゃうぞってっ！」

「パイシンゴム用、あたしゃー、あんたらの業界用語の原点なのだっ、ムラミっ」

「やばぐねっ、こういう人出して？」

勝手に無料でさまぁーずさんに出演してもらっちゃった。

はい、「即興美」について書こうと思った。一応、二度と同じ曲は、表向きは出来ないことにしてあるけれど、嘘なのだ。でね、ちょっと、哲学するけど、卵ね。殻が生きている訳ではないのだ。中身が生き物になる。音楽に例えると殻は譜面。

「わっ、やばぐねっ、狩野っ、こんな一言。モヤってねえーじゃんっ！」

というタイトルで、またまた、書いている。でね、ブログ執筆力をお小説の方へ注入しようと思ったわけ。そうなったのか、じえんじえんなのだ。どうも、お小説とは、何かが違うようなのだ。お小説はお文学するぞっ、ニャロオー、みたいに畏まる。でも、読者ゼロ。うちのカミサンも息子も読めない。唯一、日本語を読めるのは娘だけ。平仮名と片仮名に限定。身内さえ、馬鹿親爺のお小説を読まない、読めない。何度も書いた通り「サハラ砂漠のど真ん中文士」と化す。今まで書いたお小説は、ミュージシャン仲間が読んでくれている。「流石あー、すげえー」とか言ってくれている。「でも、どこも出版しねえーだろなあー、フリーズジャズと一緒に」という結論。と、才能がないということにしてみると、自分でも非常に十二分に分かり易いから、あんま、モチベーションは上がらないのである。私は褒められないと力が出ないのである。でね、ブログを書く時間が浮くと何が変わったのか？ うーーん、夕飯への力が漲ってる。私は料理狂だから、夕飯前のブログ執筆をカットすると、夕食はそりゃー見事になる。それと、わっははははあー、なんかピアノがブログを書かなくなったら、すげえー上手くなった。不思議である。結局、久保の兄貴からのメッセージ。「力を分散させるなっ！ バァーロオー」。師匠の一言は絶大である。なんちゃらかんちゃら、ブログだ文学だと逡巡している脳おー、なのだけれど、結局、すべてはローマじゃなくてピアノに収束する。このピアノエネルギーは、一体なんなの？

日本語発音の「レゾンデュートル」ちゅうやつなんだかなんだか分からん。ありゃ、フランス語発音だとね、「レゾン デュ トル」。わっもおー、「存在しているだけで疲れるのです」なあーーんて、マルセル・デュシャンはインタビューで言ってしまったから、やっ、やばいっ！

開店閉鎖と言いつつ、ちまちまと記事を書いている。どうして？ 不思議なのだ。元々、少ない閲覧数。自慢じゃないけど一桁。たまぁーに二桁。これが、まったく変わらない。むしろ、若干、増えている。新規のご訪問もある。その上、私が敬愛する素晴らしいブロガーさんから、溜息が出るほど素晴らしい複数のコメントを頂いた。こうなると芸能人の端くれの木っ端の末端であるわたくしとすると、元々の出たがり体質。しかも、ステージにライト、しかも、グランドピアノの蓋まで開いているっ！ という感が込み上げてくる。しかし、三年半に渡りブロ愚を書き捲り、ブロ愚の記事数千を突破しているっ！ もう、これ以上やると、チャンジーリピートになる。と、わざとズージャ語にしちゃった。当初からお付き合い頂いている方々には再放送になってしまうけれど、ここに「しがないピアノ弾き」自身が登場しているビデオがあるので、新規ご訪問の方々への御礼の意味を込めて、「初めまして」ということで再掲載、再放送とすることにしました。しがないが滲み出ていると自負して居る次第でございます。撮影はb-a-k-a tv 噓。もう、裕センセ、すぐ出てきちゃう。孤高のピアニストということにしとかんといかんのにねえー。すぐ愛想笑いして両手モミモミして出てきちゃうところが、有難味に欠ける最大の要素よねえー。だれだ？ 勝手に書くなっ！ 人のブログに。昨日、細長い庭の小さな畑にトマトを植え、インゲンを蒔いた。ピアノをステージで弾いている時と同じぐらい至福の時を過ごした。のだ。

昨日、久しぶりに動画撮りをしてみた。ここ三年ぐらいで覚えた諸々のテクニック満載のソロピアノをやろうと思っていた。10テイクやってみた。諸々のテクニック剥き出しこれ見よがし系にしようと思っていたら、思惑と逆になった。諸々が吹っ飛びむしろテクニックはあまりないシンプルな曲ばかりが出てきた。結局、テクニック剥き出しこれ見よがし、あまり、音楽の本質ではないということになる。わっ、人間論みたいっ！ 一番最初に作った「ラストシーン」という曲の流れにあるだろう「セnder」という曲を2回弾いた。結局、テイク1を採用した。このタイトルには諸々の思いがある。けれど、それは書かない。

「いきなりの冒頭追記」

本記事は今朝ほど書いて下書き保存したもの。その内、来週辺り、または、FC2の「一か月以上更新のないブログへ表示されます」の表示が出る前辺りにアップしようと思っていた。その矢先、温かいメッセージを頂いた。「うちの近所に年中無休で閉店セールをしているお店があるんです・・・」。もう、爆笑。閉店セール、これは分かる。この年中無休で、もう仰け反るぐらいにおかしいっ！ 私のブログの総タイトルを「年中無休閉鎖セールブログ」にしようかしらぁー？ 温かいメッセージに鼓舞されて、結局アップしちゃったぁー！ 節操ねえー、ったく。

開店閉鎖と何度も仰々しく書いているのに、結構、記事らしきものを書いている。閉鎖開店？

どっちなんだかモヤモヤ。なんだかめんどうだから、これは撤回してしまった方がいい感じがしてきた。考えてみたら、ブログを始めた最初の理由がしがないピアノ弾きのユーチューブ動画の宣伝という実に分かり易い理由だった。結局、なんか三年半で元に戻った感じもする。ミュージッ

シャンのコマーシャルブログだったのだっ！ 元々は。じゃ、初心に帰れば？

ところで、私の最新動画を添付するのだけれど・・・。

私は五歳から十二歳までピアノを習っていた。お袋の話だと結構優秀な生徒の一人だったらしい。その後、野球、受験戦争、自閉症、詩、美術、就職、小説。人生ぐちゃぐちゃ。売り手市場だったので三十四歳で課長に就任。諸々をやりながら「わっ、俺って、そもそもなにをやりたかったの？」。三十五歳の時にカワイの電子ピアノを購入。独学でジャズピアノの勉強を開始。とはいえ、とにかくこの頃は忙しかったから、そんなに練習する時間はなかった。本格的にピアノの習得を開始したのは会社を辞した五十三歳の時。

一応、ピアノに関わっていた期間は計算すると二十九年。そう考えると、まあ一下手だ。でも、本格的に習得開始したのが四年前ぐらいと考えると、結構、上手い気もする。もし、私が著名なピアノ弾きであれば「続けることが大切だ」なぁーんていいそうさ。でも、別に続けなくてもいいのだ。ピアノがあろうがなかろうが人生に支障はない。単に私の場合は支障があったらしいから、続いた。だけ。うーん、自分のピアノ。2.3流ぐらいにはなっている感じもする。三流から二流に迫ってきたのかな？

はい、開店閉鎖は撤回致します。どうして？ はい、「いたずらっこさん」のお力。さすがに、ドライバー業もあるので、毎日更新は無理ですが、開店営業中に訂正致します。営業日は不定期ですけど、できる限り、営業させて頂く所存でございます。えー、ぼさって居りました方も、スパイダーマン的復活をなされた。なんのなんのっ、難のこれ式理論では、可能なのでございます。これが、超素敵っ(その記事がです)！ いたずらっこさんとスパイダーは随筆、散文詩の名手なのだと、再度、オフサイドからの賛辞を惜しまないわたくしでございます。

やはり、ブロガーにはマイケル応援が必要としみじみとシジミの形になりました。

ところで、わたくし、エッセイと随筆の違いが今一つ分かりません。インターネットで調べると、随筆は事実に基づく。エッセイは事実に基づく架空理論みたいに分類されているみたいです。わたくしは、「随筆」に憧れている。でも、わたくしのはエッセイです。とほほ。

ところで、上から目線というものがあれば、当然にして下から目線もある。大体、毎々、書いて居るわっ、俺っ！ 私たちとか我々って、大体ね、上から目線なんだ、皆よっ。上も下も表裏一体。しかし、先記のお二人には「それ」がない。名付けて「平行目線」。これこそが、随筆の神髄なのである。お若い方よっ！ 読めよっ！ あら、あんたのは読んでないけど読んでるわけね。

ところで、私は理科系だから、うちのカミサンを上から目線。ばあーかって。しかし、細かいチョンボの数は、カミサンは千倍ぐらいだけれど、どチョンボは私がする。二年に一回ぐらい。理科系脳の弊害で計算した後の融通と実社会との接点がなくなる。結果、社会的ばあーか。じゃ、おっ、上から見ているつもりの私を、カミサンは、更に上から覗いているってことになる。げっ。

「訳分かんねえー」さまあーず大竹さんの口調で。おっ、絶対に、さまあーずを取り仕切っているのは、三村さんだっ！ 俺はキャッチャーだったから、女房役の意味がよく分かるのだ。

またしても、訳の分からないタイトル。ブログ閉鎖宣言をしたのが三月十三日。再開宣言が昨日五月二十日。二か月と一週間経っている。閉鎖「中」の記事が八。なんなの？ 大体、閉鎖とか断筆というのは、一回で終焉するものなのに、閉鎖の後に「中」が付いているところの変だ。どうして、閉鎖しようと思ったのか？ 書くことがなくなったということに自分でしたのである。うなことはないのだけれど、記事内容の重複を避けたかった。お話しすることがなくならないように、書くことがないなどということはない。続ける気になれば、私はおしゃべり人間ではないけれど、元々の更新狂、記事は泉のごとく湧いてくる。

なんとなく、人前でピアノを弾かないぞっ宣言みたいで、たとえば、ジャズクラブに行く。仲間の演奏をじっと聴く。「おっ、イサオ、お前もやれよ」「いいよ、俺は」「えっ、どうしたの？」という感じを二か月ぐらいやっていると、芸能人の端くれ木っ端末端出たがり体質がむらむらむら。こんな感じー。わたくしだって、愚ブログではありますが、ブロガーの端くれなのだ。

私が一番最初に提携というよりも一方的に「推薦店」登録をさせて頂いた老舗「蝶店」より、再開店へのメッセージを頂いた。わっ、すいません。節操のない再開店なのに……。この老舗のお料理は、絶妙のバランス、心のヤジロベエ、定点観測の揺れ動きが絶妙な文章力にて活写されている類いまれなものなのである。私は、ずうーと大ファンで拝読を続けているのである。私の愚ブログから移動される方が複数いらっしゃるとのこと。おっ、もしかすると、単に「蝶店」へのアクセスページとしてご利用なさっておられるのでは？ 正解っ！

私が見様見真似でブログを始めた頃、「蝶店」は人気店第一位。やはり、一位というのは気持ちがいいし、凄いつ！ 元々、閲覧数の少ない部門ではあるけれど、閲覧数の桁が全然違う。当然にして、一位の方のレベルがその部門全体を反映しているのではと思い覗いた。仰け反った。やはり、素晴らしかったのである。そして、私は、その部門全体に安心したのである。私の愚ブログは変種フリーブログとして末端を担えばいいかしらねえーという感じになった。でも、なんだか一時期、私自身が三位になるという異常事態まで発生したのだ。

現在、「蝶店」は知る人ぞ知る玄人好みの老舗名店みたいな感じであるけれど、定休日も多いけれど、通い詰めた常連が多い人気店であることに変わりはない。

今朝、起き抜けにコーヒーを飲みタバコ。雨空を見上げながら、なんとなく「仲間」という言葉が脳裏に浮かんた。

私がピアノを続けていること。もちろん、私の内的なものも多分にはある。しかし、と思ったのだ。仲間の力を忘れてないの？ しがないピアノ弾きを評価し鼓舞してくれて一緒にセッションをしてくれる仲間。毎々、聴きに來てくれる仲間。無名時代のヘンリ・ミラー。彼には、サンドラルス、アナイス・ニンという仲間がいた。生涯無名のままだったフェルナンド・ペソアにも少数のリスボンの仲間がいた。バン・ゴッホ。ピサロがいたしゴーギャンがいた。

私が毎々、小説を書こうとしてなんか士気が上がらない理由が分かった気がする。たとえば、出版社の編集者がいらっしゃる。「裕さん、来週までにお笑い小説百枚お願いします」。私は律儀だから絶対に仕上げて渡す。すでに、編集者とのセッションが始まっているからだ。ないしは、物書き仲間にぼろくそ批評される。むむむむむうーとなる。こういう仲間がいないから力が沸かないのだ。フランスのパリの隣の人口三万人の小さな町で日本語で書いているのだ。鬱病になっちゃうってっ！

私のお気に入りブロガーさんたちを「仲間」と呼ぶのは超僭越なのだけれど、やはり、セッションをしている感じは私の中にある。これが楽しい。ブログが続く理由もずばり「これ」なのだ。

この「セッション」という単語、たぶん、ミュージシャン、とりわけインプロバイザーが良く使う。たとえば、私のユニット。楽譜もなければ、打ち合わせも一切しない。音の突っ込みとボケ。わざと突っ込み突っ込みとしたり、その瞬間瞬間でどんどん変容する。故意に合わせようとしなのがコツなのだ。そして、それぞれの楽器が違う。違うものがぶつかり合ったり協調したりしながらユニットとしての一人ではできないうねりが生まれる。仮に、ソロ演奏の場合でも、お客様が目の前にいるからお客様とのセッションになる。

なんだよお——、結局、一人じゃ、なにもできねえ——っ！ と、超絶的単純回答人生訓が導き出されると共に、私が固執する「文学」。なんか閉じこもってやる方がおかしいし、文学と書かれた紋付き袴着てやるもんなのか？ と思うのである。さまあ——ずのお笑い芸を見る度に、段々とその思いが強くなってくる。彼らは「笑わせよう」としていない。変な無理がない。このスタンスはお笑い芸人という立ち位置を考えると至難の業と私は思う。

またまた、恐ろしい単純回答。裕センセが仰々しくお考えの「文学」ですが、もう、既に個々人の人生がそれだからねえー。しがないピアノを仲間に支えられて弾き続ける君、それこそが文学なんじゃね？ もう、朝からそういう分かり切ったこと書くんじゃねえーって！ うん、分か

り切ったことを、しばしば忘れるのだよ。

このタイトル、とても素敵な日本語である。

皆さんも、実感している通り、文章に「それ」が一番出る。いや、剥き出しだ。じゃ、音楽には出ないの？ という素朴な疑問。もちろん、出る。でも、文章ほどではないと思う。いや、ちょっと、違うかな？ たとえばね、素晴らしい演奏をする音楽家。ぶっちゃけ、嫌な奴が多い。いわゆる天狗。ジャズなんちゅう元々マイナーな音楽にもいるところが、凄いつ！ 馬鹿としかいいようがない。

とはいえ、ミュージシャンの悪口は言いたくないから、ちょっと、カバーする。馬鹿って言う
ちゃったからねえー。

まあ、音楽技術の習得はシビアである。これを乗り越えるほんの一握りが一流の音楽家ってなる。で、ジャズは？ やっぱ、習得は超シビア。クラシック音楽と違い、その人柄自体が音楽だから超やばいのだ。いや、別に嫌な奴でもいいのだ。音から出る人柄が問題なのである。技術の前にそっちが来ると思う。

でね、嫌な野郎は技術に走る。いや、逆なのかしら？ でね、人柄のいい俺みたいのは、技術の以前に走る。下手だからよっ。という算数式が成り立つ。

私は、私の世代に多い「パソコン駄目駄目系」の一人である。とはいえ、二十四年間、会社員をしていたから、多少は知っているという感じ。でも、ユーチューブ動画を自分で作ろうとした時、へろへろになった。一応、習得した後、もっと高度な映像ソフトを購入。しかし、私の一番安いパソコンのキャパシティーでは機能せず。それから、ユーチューブ動画を紹介するという目的でブログを始めた。

なぁーんて、書いているけれど、これは以前書いた。「ブログ」？ 「風呂具のこと」？ 「サムネイル」？ 「泣き寝入り」？ 「テンプレート」？ 「てんぱっている」「鉄板焼き」？ と、この有様だった。幸い、息子と娘は若い世代プラスパソコンかなり詳しい方。随分と助けてもらった。あまり同じことを聞くと、彼らだって鬱陶しいからパソコンノートというのを作り、毎々、書き留めた。

一応、なんとなくパソコン用語は覚えたけれど、今以てなんのことか分からない単語の方が多い。

でね、なんか再開したぁーと騒いでいる手前、リニューアルせんといかんべなぁーとちょっと思ったわけ。まず、風呂具の泣き寝入りをどうすんべな。なんか毎々、自分の顔写真。自己顕示君とか露出狂ナルシス。エキジビショニストなぁーんて、思われているかもなぁー。とも考えたけれど、なんか一種の口ゴみみたいになっちゃってるから今更なと考え直す。お気に入りブログ

ガーさんたちのそれも頭に焼き付いている。第一、サクライさん(cocode note)に至っては、そのサムネイルが目飛び込みお邪魔したのだ。過去記事から小説サイトまで読み捲ったのである。出会い自体がサムネイルなのだ。

じゃ、泣き寝入りは止めて鉄板焼きの方を変えようといくつかのプレビューを見てみた。なんか、自分の風呂具じゃないような感じ。それと、私は老眼だから字が小さいのは自分で読めなくなっちゃうし、それと文字とバックが同色系も目が受け付けられないしハレーション系も駄目だ。

むむむううーん、そうすると、わっ、「内容自体のリニューアル」という最も難しいお話しになる。ブログ総タイトルの変更？ わっ、他のタイトルはないのだ。

結局、どうでも良くなってしまったし、三年半のブログリングで全ブログエネルギーは使い果たしてしまったから、もう、好々爺ブログにしかならんわな。

動物と植物、どちらが好きですか？ 私は植物。

猫と犬。私は犬。

人間と犬。なんで考えるのかが分からない。どちらかと言えば・・・。

輪廻する。私自体ではなくて「私のようなDNA」は確実に輪廻するのだけれど、仮に「私という個体が輪廻した」とすれば、私は植木職人になりたいと思う。

あのね、うちの細長い庭の奥に自分で植えた青りんごの木が二本あるわけ。一番奥はすくすく。手前が何年経っても幹が太くならない。しまいには、幹の一部が、赤蟻。私はその部分をナイフでこそぎ落として、植物性のパテを埋めた。それから、丁寧に剪定。それから、庭に行く度に話し掛け、幹を肩を叩くように叩いた。それから、二年ぐらいしたら食べ切れないぐらいの青りんご。ずうーと、思っていたわけね、問題児の教育？ みたいなのかなって。教育という言葉は大嫌いなものだけれど・・・。樹木が人間の言葉を解することは知っている。

というタイトルを付けた。うん、新聞みたいな感じである。私が好きな「ライブ」に近い。この感触はいい感じである。大体、自分の過去記事、私はまったく読まないし、興味がない。でも、すべて、印刷して段ボールの中にあるところが、鋭いのだ。やはり、人生の一部を切り取って書いているのだから、一応、現物として残しておきたい。いずれ、息子と娘がフランス語に翻訳すると健気にも言ってくれているしね。

ずうーと、私は「ブログ批評」をしようかな、と思っている。っても、私のお気に入りブロガーさんたちの。でも、なんか、私はいいのかも知れないけれど、先方から「止めて頂戴長大な余計なお世話っ」となる可能性が大なのでやらないでいる。ちゅうか、批評じゃなくてオマージュだから、むしろ、さり気ない方が恰好いいのである。

ところで、記事内容が重複してはいかんと考えていた。でも、おしゃべりは重複している。じゃ、いいのだ、ライブだから、となった。

私がピアノを再開した理由をもう一度箇条書きにしてみる。

女にもてたい　ちやほやされたい　格好付けたい　あがり症＝自意識過剰を克服したい　箒り症を治したい　大体私は家からほとんど出ない庭仕事とスーパーの買い出し以外は行きたくないしコンサートも億劫なのである人と会うのがめどうだカミサン以外にはあんま会いたくないのである後は息子と娘結局ほっておくとピアノ料理庭弄り小説書きカミサン息子娘以上という異常な生活になるから少なくともコンサートぐらいはしないと昔患った自閉症域に幽閉となるというお話ね。

やはり、マルセル・デュシャンの「自分にとって自分ほど興味のないものはない」。こういう先達がいたから一応、おっ、十二分に楽しく生きとるわいっ！　若人よっ、箒っちゃ駄目だぜってっ！　中年も高年も一緒なんだから。

楽譜がないと音楽が出来ないという方がいらっしゃる。とりわけ、私の印象では日本に多い。楽譜、譜面ともいうけれど……。ここで、屁理屈苦言。あのね、お話しする時に台本いる？

ほ
らぁー。台本読んでカフェでしゃべくる奴はお笑い芸人にはいるかも知れないけれど、芸能人というのか芸能雑誌の方がいう「一般人」にはいないのだ。たとえば、社会に出て、「マニュアル君」、これは馬鹿と言われる。特にクレーム処理とか。結局ね、楽譜、人生ではなんの役にも立たない。逆に縛り。マゾヒストの語源ザッヘル・マゾッホである。では、楽譜を暗譜すればいいのか？ 同じことだし、なんだか頭の良さの競争にしかない。

あのね、音楽ちゅう字は「音を楽しむ」って書くわけ。楽譜だって同じ。学譜ではない。大体、音楽を仰々しいものにしてはいかんのである。鼻歌で十分。口笛。太鼓どンドン。こういうものに楽譜なんかいらん。西洋音「学」の教育的弊害と申し上げる。音楽にランキングなんかないから、いいのだ、どうであっても……。下手で構わないの。

とはいえ、私だって練習する時、楽譜を見る。れれれ。でも、フランス語しゃべる時にフランス語辞書なんか見るかってっ！ 人間関係のスピードに付いていけない。第一、日本語の文法なんてソルボンヌで教えられないのだ。知らないから。フリースジャズのコンサートで私が楽譜を十センチぐらい持って行ったとする。即解雇通知。

人生自体が即興の堆積のはずなのである。だから、折角、音を楽しむ音楽だけ大リーグボール養成ギブスを自分で嵌める。馬っ鹿じゃねっ！ と言いつつ、聴く側はお好きなように、ですな。

しくしく、でも、分かって欲しいなぁー、やる側の
方も……………。

私はいつものようにユーチューブで「さまぁーずげりらっぱ」という番組を見ていた。「さま
島シ

リーズ」の一部。孤島で「さまぁーずアイランド」を作るという企画。以下、正確ではないけ
れど、筏の上での彼らのトーク、及び、括弧付けで私の解釈印象を書く。

三村さん田代さんへ「あのさぁー、ゼロから1になるのって、すげえ一大変。天才しかできねえ
ーと思う。一度、1になれば、ちょっとだけの才能でいけちゃう」(芸能界で多少売れるとか地位
を築くのは大変、でも、一度、土台が出来ると、天才的な才能はいらない)

三村さん田代さんへ続ける「ゼロから1になる。これを大竹さんがやってきたんだ」

(大竹は天才的なやつ。俺は、乗っかってんだよ)

大竹さん「あっははははははあ」

(なに、水臭いこと言ってんだよっ、ばぁーか、ロケちゅうによっ、筏の上でっ、でも、ありがと)

三村さん、別のシリーズで「俺、あんま、しゃべんねえんだ、普段は。お笑いやろうと思って
なかったし、服飾の方に行こうと思ってた。でも、大竹に誘われて始めた。なんとかするしか
なかった、俺なりに」

このコンビ、ユニットの相性の良さは抜群だし、人間関係の非常にいい例である。

即興演奏の練習？ ない。あまりいい例えではないけれど、でも、一番いい例え。喧嘩に似ている。

喧嘩をしている時に、相手のシナリオだの台本楽譜、こういうものはない。ランダムな怒りが来るだけである。フリージャズは喧嘩のシュミレーションだから、ずっと、文化的だ。しかも、パート
ナーへの暴力怒りはない。でも、喧嘩に似ているのは・・・。

たとえば、空手家と巷のチンピラ。これは全然、コンセプトが違う。空手家は究極、暴力の抑制の方へ向かう。

たとえば、私は、延々とコードワークの型を覚える。しかし、実践では直接の役には立たない。楽譜もシナリオもないから、相手が型通りには来ないのだ。しかし、延々と型を覚える。その型の堆積が最終自己防衛となる。咄嗟の型が多いほど、こちらが有利になるし、圧倒的に有利であるとすると、喧嘩という暴力自体に意味がなくなる。

と、私たちミュージシャンは、みんなで「これ」をやっている。

5月29日、シャノワールでベルリンのトランペッター、ポールと我々トリオとのコンサート。コンサート前に社長から電話。「明日の仕事ドタキャン、ごめん」「あー、仕方ないですね」。内心、

ふおふおふおー、飲めるっ！ 真師匠と北駅の中華屋。水入らずで打ち上げ。べろべろ。

5月30日、社長から何度も電話。切っているので携帯繋がらず、自宅フィックス電話に掛かる。家内が応対。半分寝ながら聞いていた。緊急に仕事が入ったらしい。起きる。私以外のドライバーは皆埋まっていることを知っている。へろへろだけれど、行くしかない。午前1時に帰宅。それ以後、昨日まで、深夜の帰宅が続く。この5日間・・・。

豪雨 国鉄スト ガソリンスタンドスト 政府が国民の反対を押し切り労働法改定を強行採決
あちこちでデモ デモ隊が次第に暴徒と化す 警官負傷者300人 民間人1名死亡 大問題になる
昨年1月テロ以降の警備にあたる警官隊 すでに過労の極致 その中、パトカー内へ火炎瓶
市民からの暴行 彼らだって限界であろう セーヌ川の氾濫 車の洪水 交通網麻痺 ローランギャロス、次々と豪雨のため試合中止 サッカーヨーロッパチャンピオンシップが始まる
矢先、選から漏れた選手が人種差別であるとの談話 大事になる 試合前の士気が台無しになる
ルーブル、オルセー、グランパレ閉鎖 地上階の作品をすべて階上へ移動作業始まる 明日から再度の豪雨

この混乱のパリの中を深海魚のように泳ぐリムジーンドライバーたち。我々も過労の限界。

私信

心配メール、コメントを頂きました。ありがとうございます。私の住む町は現時点では大丈夫です。それと自宅は丘の上。フランスの国土が水没しない限り、被害はありません。

パリのリムジーンドライバー、ジェームズ裕。洒落た物腰でもないし、五木寛之にもジェームズ・ボンドにもまるで似ていないしけたおっさんである。しがなさと赤貧生活苦丸出し。

ジェームズはお客様をレストランへお送りし、レストラン裏の小道で待機。いつものように玉割りゲームに夢中になる。尿意。いつもお手拭きを常備している。木陰で立ちしょん。お手拭きで拭き拭きする。たばこ。車中に戻る。玉割り、飽きる。

お気に入りブログ「cocode note」を開く。鎌倉の美しい写真。記事を読みながら見惚れる。「おっおっおっ、俺も今週末、カミサンと鎌倉行こうっと。久しぶりだなあー」とマジで一人呟く。

ジェームズの左側で、なにかキラキラと光る。エッフェル塔のイルミネーションが始まったのだ。過労なのだろう、彼はフランス在住であることを100パーセント失念していた。お客様をホテルへお送りしたら、高田馬場の立ち食いそば屋でコロッケそばを食べようと彼は本気で思っていたのだ。

フランス国鉄のストが昨日で七日目。セーヌ川付近の道路は封鎖。それだけでなくとも慢性渋滞のわりに、通勤列車を奪われた郊外の人々が止む無く車で来る。セーヌ近辺が通れないから環状線の方へ押し寄せる。二週目に入り通勤者たちも疲れているから、当然、事故が増える。慢性渋滞の更なる悪化の更なる悪化・・・。

当然、我々プロドライバーの運転時間は通常の倍以上。時間距離がまったく違うから、一息入れる時間がなくなってくる。私もやや過労状態。そこにフランスの会社から新規オーダー。お客様、フランス人、イギリス人、日本人の混合。トコロテン式にフランス語の習得と共に英語はどっかに行っているのに話さないといけない。しかも、通るルートが普段行かないところばかりである。通常、このケースは事前に下見を私はするのだけれど、大渋滞の中、下見をする時間がない。なんとかぶっつけでやるしかない。

初めて通る道。ナビの表示は左折。曲がる。行く。正面の二本の道。一通。行けない。やや焦る。Uターンするしかない。お客様の手前、あまりプロらしくない。ゆっくりとバックする。後方障害物探知機はなっていない。軽い衝撃。バックミラーごしに右のテールランプが粉々に飛び散るのが見えた。七名のお客様が乗っている。動揺するわけにはいかない。笑顔で運転を続ける。

空き時間に確認。思ったほどではなかった。社長に電話。超不機嫌。

サービス終了後、お客様へ見っともない運転のお詫びをする。お客様、「いやあー、裕さんこそ、この大渋滞の中、連日のお仕事、大変でしょう。ご苦労様です。車、傷付いちゃいましたね。残念ですね」と、労ってくれた。私、笑顔で「ありがとうございます。車の破損は問題ありません。お客様のお怪我がない限り問題ではありません。プロドライバーがお客様へ運転技術への不安を与えるようなミス、大変、申し訳ございません」と返事。

夕方、社長から電話。「なんだよおー、すげえーぶっつけたちゅうから今見に来たけど、メカの破損じゃないから大したことないよ」。なんとなく、ハッピーエンドになる。わっ、ガレージで時間を見る。私自身が帰宅する電車。すでに一本しかない21h57。サンラザール駅までぎりぎり。大渋滞の中の運転の後、これだもんなあー、疲れるわけ。毎日、電車ないから早朝起床だし。

今日から、ちょっと暇。やれやれ。先日のコンサートビデオの編集しないといけないし、庭の石壁の瓦直さんといかんし・・・。

俺の名前は、年野・フェアリー・功。ジャズのピアノ弾きだ。ピアノだけじゃ飯が食えんからクエン酸を飲んでいいるのではなく、リムジンドライバーをやっちょる。ちょっと、マヒナ(暇)になった。よく考えたら、来週は、いつもと違う場所で二発のコンサートが入っている。その一なんだけれど、展覧会のオープニングだ。どっかのスクウェアらしい。音楽をジャズクラブ「バビロ」が担当。佐藤真師匠へコーディネート依頼。うで、俺に出ろっという指示だ。師匠の依頼を断ると支障がでることは君も知っている通りだぜ。

コンサートの詳細は分からない。二十分のセッションを三回。以上。どっちにしろジャズ屋は空気読みの天才だ。ピアノがあって俺が行けば、すでに始まる。

ただし、ピアノ弾きは俺だけではない。もう一人、日本人女性のクラシックピアニストが出る。俺より四半世紀若い。たぁーりりんっ！俺は、そんなに若くはないけれど、三十代の頃、やばい失敗をしている。ジャズのピアノ弾きが経営するジャズクラブ。普通は彼の演奏が主体である。酔った勢いで押し掛ける。なんとなく、年野の野郎に弾かせんとやばい雰囲気になった。で、弾いた。経営者の彼とは技量的に同格。だからこそ、燃えた。ライバル心がめらめらと。技量が同格であれば、なぜか分からない「俺が勝つ」には、スピードしかない。マッハ2で弾き捲った。70人ぐらい入っていたお客、皆、仰け反り大喝采を浴びた。彼の出番はなくなったし、面子は丸潰れ。でも、俺は、たぶん、「勝ち誇った顔」をしていたはずなのだ。それから、気まずくなった。

この構図が還暦近いおっさんの脳裏を過る。

展覧会のオープニング。主役は展示者。若い同国のピアニスト。クラシックだ。俺の読みでは、このラインでの曲目は、ドゥビッシー、ラベル、サティ。この空気に俺が乱入する？クラシックピアノは事前に、たぶん、こんな空気だろうと脳内に、ないし、実際に譜面を持ってくる。事前に選曲も終わっている。ジャズ屋は、諸、その場の空気、客層で臨機応変変幻自在。

彼女はいい演奏をする。そのあと、俺が出ていく。すべての空気を内包しながら即興する。ピアノ技法は絶対に彼女が上。しかし、この空気との一体化。絶対に俺の方がいい感じに、および、上手く聴こえるのだ。

彼女の面子はどうなる？ 展示者が主役だろ？ 俺のコンサートではない。

と、おっさんピアニストは、演奏以前の人間関係を結構真面目に考えているのだ。でも、ど

うせ、酔った勢いで弾くからねえー。でも、酔った勢いの空気読みは天才級かもねえー。自己表現って鬱陶しいのだよ。いや、お若い人は「やれっよっ！」だけど、おっさんのそれはいかさない。

昨日、実に久しぶりに日本ブログ村エッセイ・随筆部門のランキングページを開いてみた。普段はマイページしか開かないのだ。お気に入りブロガーさんたちの更新状況が一目で分かるので重宝なのである。それと、自分の順位とか注目記事としての自分の記事の順位とかも自動的に表示されている。とはいえ、四年近くブログを書いているのに、ずうーと、読者一桁、たまあーに二桁というこのハイアベレージをキープしているから、順位の意味はまったくなくなっているのだ。結局、どうであれ読まれないということが判明しているから、

あっ、そ、という程度の興味である。

最近、当然にして仕事中、車の中でお気に入りブロガーさんたちの記事を拝読することが多くなった。私の携帯サイトではリンクして頂いているブロガーさんのみが表示される。そっ、つまり、この弊害は、それ以外のブログはまったく目に留まらないのだ。昨晚、やや反省し開いてみた。その結果、素晴らしい知的で素敵なブログを発見した。テンプレート、文体、内容、脱帽だった。「もし、猫だったら」です。いかに、わたくしのブログがブロ愚であることを思い知らされ

たっ！ いやあー、他の部門まったく知らないけれどエッセイ部門の方々の筆力実力を思い知らされてしまったのである。

と、良かったよおー、今日は、たまたま、珍しくほんの少し哄笑じゃなくて高尚な記事を書こうと思っていたのである。

現代美術の世界に「オールオーバー」という概念がある。この代表がジャクソン・ポロック。どういうことか？ 絵画は額縁の中に三次元の世界を模倣しようとしてきた。セザンヌ辺りから二次元化の試みが始まる。しかし、まだ、額縁内でという考え方だった。ポロックが額縁という概念を取っ払ってしまった。四角く切り取られた無限大の絵画の任意の部分にってしまったから、カンバスの端から絵画が無限大の世界に飛び出している。これは画期的な概念ではあるのだけれど、いつもそうなのだ。それから半世紀前にマルセル・デュシャンがオブジェの概念にすでに到達してしまっていた。オブジェ、工業製品である。自己表現、自我といったものを一切受け付けない、世界の断片そのものなのだ。

フリージャズは以前から、ポロックのオールオーバーの概念に酷似していると思っていた。譜面という額縁がない。その時、その場の空気自体が音に即興変換される。ミュージシャンと聴衆との境目はもはやない。同じ空気、同じ時間を共有しているだけ。ミュージシャンは単に音変換するアダプターである。オブジェなのだ。

「額縁」。絵画でいえばその通り。音楽では譜面。文学的には本とか完結したストーリーという感じになる。

美術の世界では額縁という概念は、随分前から消滅している。いかんという意味ではない。逆手に取って意識的に使う。これは理論上構わない。音楽、これも同じ。別に譜面を見ながら弾くことがまずいわけではない。文学、これも同じ。

私がおかしいのかも知れないのだけれど、私個人は額縁にはとんでもない違和感を覚える。現代世界の混沌振りは無限大である。その途轍もない世界が額縁の中に収まる？ とはとても思えないのである。混沌世界と常に対峙していること自体がクリエーションという皮膚感覚しか残らない。しかし、額縁の中に自ら閉塞というのか隠遁するののも一つの方策でもある。しかし、私はミュージシャンだから、ちと、無理だ。

なんども書くけれど、マルセル・デュシャンは百年以上前にオブジェという概念に到達してしまっている。音楽のジョン・ケージは、その概念を音楽化した。文学の世界ではヘンリ・ミラーがすでにエクリチュールのオールオーバー。北回帰線の原文が本に無理矢理収まった五倍の分量がある。結局、エンドレスなのだ。フェルナンド・ペソアの断章。スーツケースにぎっしり詰まっていた。こちらもエンドレスなのだ。

額縁に収めることをいかんと言いたいのではない。収めないといかんと思いついでいる不自由を指摘したいだけ。楽しくないもおーん。折角、呼吸してんだから、酸素、自由の領域が広い方が楽しいにきまっちゃう、ということをお願いだけ。

でも、俳句短歌、これはどう考えても額縁とは思えない。ミクロコスモスである。日本人はこういうとんでもないことをする凄い民族だと思うのである。ミニマムなコスモスを作ってしまう。うーーむ。

そもそも、人間に順位なんぞっあるのか？ もちろん、ない。じゃ、ハービー・ハン
コックと私のピアノを比べと、仮に彼が一位だとすると、私は一億三十万位ぐれえーだろう。順位
を付ける定規を規定すれば、そうなる。でも、ここが人間の凄いところで「自分のスタイル」
という別のアンチ定規が出現する。ハービーよりイサオの方がいいという人々も現れてくる。
でも、技量差はどうしようもないくらい開いているけれど、でも、「それでいいのだ理論上」は
、それで良くなっちゃう。でも、自分の力量ランキングを客観視することは大切である。だって
、いつも「自分自分」じゃ詰まらないし、気持ちが上昇しないし、技量も低空飛行になる。なん
のなんの、この、ど下手あーと自分で鼓舞してた方が、楽しいし、余計なお世話、社会迷惑かも
知れんが長生きするのだ医学的に。「長生きが目的の人生」なんてもんはない。「パリに住むの
が夢でしたあー」なんちゅう、姉ちゃん。本末転倒である。どこに住んでいてもいいのだよっ
てのっ！ 第一、パリ、ハードジャングル。止めときなさいと申し上げる。

あらっ？ だからね、順位を付ける定規をへし折ってしまうと、順位は自分で付ける、もし、
必要ならば、だけれど。

学歴 偏差値 身長 体重 容姿 家系 収入 住んでいる地区家 乗っている車 カミサン
ないし旦那の容姿

こういうのを社会的な定規ちゅうやつでよおー、なんちゅうことねえーだろが。

「おっさんの独り言」

自分で書いて、その定規にそって「自分ランキング」してみたら・・・。あまりの順位の低さ
に庭の畑のトマトの横で倒れている裕センセがいたことをお伝えしておく。わっ、だ
れだあー、人のブログに追記すんじゃねってっ！

昨日は、午前三時起床。帰宅、午後十時半。昨晚は一応寝たけれど、午前中にミニバスを掃除、ガレージに戻さないといけないから、十分な睡眠ではなかった。ひたすら眠い。ぼおーーとしながら、ブログ村のマイページを開いた。ブログ村の表示に添って拝読した順に・・・。

私信 1 「楽譜」

楽譜を読み解く楽しみ。そして、その通り弾く楽しみ。そして、それなしで弾く楽しみ。うーーん、楽しいです。でも、最後は「自分の音」しか出てこない。うーーん、その通り。私のように、楽譜をスキップしてしまう脳って、もしかするとプレイヤーじゃなくて作曲家なの？ とも思っちゃった。そうなのかも知れない。誤解されると困るのですが、既成の曲を自分なりに弾く方法ではなく、自分で自分の曲を作る。わっ、俺ってよおー、超絶傲慢マンなんじゃねっ！ しくしくしく。だから、美しい散文が書けないのですね。うるうるうる。目頭を押さえる音。一度、聴かせろっ！ 君の音をっ！ あらっ？ 絵葉書からはみ出しちゃったあー、文字があー、もじもじ。

私信 2 「鳴き声と牛の顔」

どうして、韓国では犬の鳴き声がモンモンなのかしら？ 母国語で初期入力されたように聞こえるのかしら？ もしかすると、遠近法が脳インプットされているから、風景が「そういう風に見える」のと同じなのかも知れません。ミュージッシャンとしては実に興味深いです。あっ、ドレミって、イタリアと日本だけでしたあーっ！ これも各国違うのですねえー。わっ、そうすると、我々ミュージッシャンでエスペラントマンじゃないのおー、凄げえーと自負自負しちゃったり……。しかし、牛の顔、皆、本当に違いますね。人間とまるっきり一緒です。ある意味、皆、よく似ているのですけど、人間も。でも、よおーく見ると全然違う。しかし、DNAって宇宙的です。同じものがないなんて凄過ぎ。

私信 3 「道德」

そうかも知れません。私ごときミュージっちゃんがとやかく言えませんが、経済効率優先。これは幼少期から本当に違和感がありました。物欲、当然にして金金金。私の心は金属ではありませんから、それほど必要はないのです、それは。金属化した心の「更生」物質がフェアリーさんのブログであること、わたしは確信して居るのであります。毎日、服用して居りますのでお元気で楽しく、ね。それとね、実家のトイレに相田みつをさんのその日の言葉が書けてあるのですけれど、毎々、フェアリーさんのブログで再発見しています。分かり易い言葉の凄さを実感しています。重いものほど、平易な言葉の調性がぴったりするのですね。私の音楽のあり方を考えさ

せられます。

私信のような。「もし、猫だったら」の最新記事。私には、「フェルナンド・ペソアのブログ」のように読めました。

スパゲッティーボロネーズ、私の得意料理の一つを食べて、ポルトガルとアイスランドのサッカーを見て、爆睡して、明後日のコンサートの準備を明日しないと行けない。パリ19区のアートセンターだったのだよ、場所は。世界中からの美術家のスクワットでのコンサート。私は元美術家だから、おわぁー、どうしてピアノ弾きとして登場しているの？ まっ、人生色々。色気が欲しいねえ。

もう忘れている。リスボンにカミサンと行ったのは昨年だったのか？　うちのカミサン旅行狂。私、出不精。とはいえ家の近辺へのお出掛けというかスーパーとか中華食材店へ行くのは好きである。結局、ピアノから離れたくないということなのだろう。馬鹿かもしれない。いつも、旅行前日までぐずぐず文句をいう。「俺は心の中で毎日、旅行しているから、実際のそれは必要ないのだ」などと、インテリぶっているけれど、カミサンに首根っこを掴まれてついていく。ははは、結局、旅先ではエンジョイ人間だったり、結構、詩人になっちゃったりしている。ポルトガル、リスボン。なんか懐かしい空気が漂っていた。昔の大国の空気。ヨーロッパって本来、こんな感じなんだろうなあーとか思っていた。フェルナンド・ペソアが確か、「なんかヨーロッパのどこかにある忘れられた国」と書いていたはずである。

昨晚、私はポルトガルという国のファンだから、ポルトガル対アイスランドのサッカーの試合を観た。昨日、ブログ内でも間違えて書いていたアイ「ル」ランドと。違ったアイスランドだった。国の人口三十三万人。聞き間違えかアナウンサーが桁を間違えてんじゃねと思いながら試合を観た。結局、両方応援していたのだ。ポルトガルはサッカー大国。その超ハイレベルに立ち向かう氷の国の選手たち。そのレベルの差は歴然。ハービー・ハンコックと裕センセのピアノという感じもしてきた。わっ、結果は引き分け。自分のピアノを投影して観ている私も馬鹿だけれど、そう感じちゃうのである。

ご存じ、世界最高峰のサッカー選手。メッシーとの双璧。クリスチャノ・ドナルド。そのテクニックの凄い事っ！　ゴム紐でボールを筒りつけているようにみえる。サーカスである。しかも、これ、全身筋肉バネという体。なで肩のせいなのか、毎々、馬が人間に変身するとこんな感じーと思ってしまう。世界一のもて男である彼のもう一つ特異なところは、「試合中にカメラ映りを確実に意識している」こと。いつも笑顔だし、映る角度なんかを考えている。この余裕はなんなのだ？　無尽蔵の体力なのか？　笑顔でカメラ目線のまま凄まじいプレーをする。宇宙人なんじゃね？

忘れられた国の現代のスーパーヒーローのカメラ目線笑顔、なんだか私は凄く楽しくなるのである。このとんでもない余裕に。そういやあー、ハービー・ハンコックも演奏中、笑顔だ。えっ？　わたし？　歯を食いしばって凄い形相だよおーん。レベルがちゃうんだろな。

昨年の一月のテロ。それからのフランスオーケストラは不協和音。リズム感もなくなっている。度重なるテロ、スト、ストに便乗する暴徒、洪水。今年に入り、観光業は大きなリストラ、閉鎖、倒産。2014年度比75%減ではやっていけない。私の仕事、リムジーンドライバーも同じ状況に置かれている。ハーモニーとリズムを取り戻すいい機会が訪れている。EURO2016。しかし、開幕後、イギリスとロシアのサポーターがマルセイユで暴徒と化した。暴力が日常化しているのはどういうことなのか？ これでは私たちはサッカーの試合さえ見に行けないではないか。テロの標的になる多大なリスクを抱えて警備に当たる警官隊。試合後の暴徒。彼らの過労も極限に達している。そんな中、今週の月曜日の深夜の惨劇。詳しくは書かない。三歳の男の子が巻き添えになっている。医師団がメンタルケアに必死になっていることが伝えられているとだけ書いて置く。

この混沌たるオーケストラの指揮棒を唯一握っているのが、フランス代表監督ディディエ・デシャンなのかも知れない。フランスサッカー史上最強チームのキャプテンだった男だ。国民の信頼は高い。指揮者に異論はないだろう。新生フランスチームのメンバーを私はジネディン・ジダン引退後、サッカーを観なくなっていたからまったく知らなかった。

私の印象。随分、若い選手が多いな。チームの雰囲気はいい感じである。これは見ていると分かる。この雰囲気は大切である。オーケストラなのだから……。名プレイヤーが揃っているけれど、今一つ、オーケストレーションが噛み合っていない。しかし、ぎくしゃくしながらも二戦、終了間際に勝ち点を取っている。この精神力は素晴らしいと思う。

フリースタイルのオーケストラに非常に似ているから私は興味深く観戦している。それはさておき、私が新たにファンになった選手たち。

「アントワン・グリーズマン」なんかいかにもフランスのハンサム男の雰囲気。憂愁が漂っている。詩人顔だ。サッカー選手に珍しい顔立ちに惹かれる。フランス10チームから不採用通告を受けてスペインで開花した。経歴もなんか詩人している。

「ポール・ポグバ」お馴染みのヘアースタイル。見るからに剽軽でいい人感が漂っている。ギニヤ系フランス人である。見ただけで楽しくなってくる。なんか存在が明るい。

そして、どう見ても、今大会のキーパーソンは「ドミトリ・パイエ」である。テクニックは申し分なし。アシストの精度は素晴らしいし、自らゴールも確実に決める。オーケストラの首席奏者であることは間違いない。彼も存在感が明るい。日本の北島康介に顔がよく似ている。かわいいのだ。初戦、試合終了間際の勝ち点ゴール。交代を告げられベンチに戻る際の男泣き。なんか

彼がハーモニーもリズムも狂ってしまったフランスオーケストラを背負って立っている感じまでしたのは、私だけではあるまい。彼自身、たぶん、どこかでそれを感じているはずだ。主催国フランス、混迷の中での初戦の敗北はなんとしても避けたい思いがひしひしと伝わって来たのである。29歳の男の肩に乗った重責だけれど、二戦目を観て、彼の精神力と実力が確かなものであることを皆理解した。

フランスというオーケストラの立ち直りを切に願っている自分がいることに気付く。フランス代表を熱い眼差しで観ている自分がいる。1998年、ワールドカップ優勝、2000年、ユーロ優勝、あの歓喜の交響曲が戻ることを切に願っているのである。もしかすると、私の母国はフランスなのではないの？　とも思う。

俺はパリ沖(至)組のチンピラだ。親分は俺より十八年長だ。いつも、ダンディー。下ネタを一切言わない。人の悪口も一切言わない。スローさんの記事に呼応するけれど、jeeちゃんには全く見えない。現役、フリースタイルシーンを背負って立ってきた存在感。そういう人なのだ。沖組の若頭、真子ちゃん(佐藤真師匠)も、俺より十三年長だ。いつも、ジーンズ。オシャレなTシャツかワイシャツ。まったく、jeeちゃんには見えない。

一番、相対的に若い俺がファッションには真逆。いつも、同じものを着ている。安物ばかりである。おっほほほほおー、ファッションに無頓着なの？　これが全く違う。私は着るものにはうるさいのだ。以前に書いた絶賛フレーズ「ブランドは俺だ」。ブランドがブランド品なんぞ絶対に着ないのである。自分に似合うもの以外は絶対に着ない。「しがないピアノ弾きに似合うもの」、これ以外は絶対に着ないのである。おっ、結局、俺がボロ着ててもピアノを聴けば分かるやんけえーという、なんか真奥から出る諸々自負があるんだろねえー、鬱陶しい奴だねえー、裕センセって。勢い付いて書きちゃう。そのですねえー、「こういう時にはこういう恰好」という定規が嫌いだし「アーティストとかミュージシャンらしい恰好」、これも大嫌い。だあーらよおー、着るものがなくなっちゃう。だあーら、いつも、同じ物を着る。中身が変わればいいじゃん。

わっ、哲学者っ！　「らしい」というのが名犬ラッシーじゃねってのっ！

あらっ？　昨晚はアートセンターでのコンサート。なんか、前のブログで「ベルリン在住のクラシックピアニスト」と書いたけれど、jeeんjeeん違った。「アイルランド在住の元クラシックピアノをやっていたインプロバイザー」。こうなると俺の諸々の危惧なんちゅうもんはない。一部、ばんばん弾いてもらった。素敵だった。やっば、いわゆる基礎からやっているピアニストとチンピラはちゃうねえーという実感ね。仲良しになった。同業者は仲良しに越したこたあーねえー。

あれっ？　なんか元々書きたかったこと、なんだっけな？

あっ、そうそう、俺が階上でビールを頼んでバカでかいホールに降りて行ったら、沖組長のトランペットの音。真若頭のドラムス。やっ、やべえーとピアノに向かう。主催者がセッティングされていた俺のビデオカメラを落とす。電子ピアノのボリュームをいじる。演奏が始まっているのにがしゃがしゃする。

沖組長がソロ演奏中の一瞬の間合いで「なにやってんだっ、馬鹿っ」と言った「ように聞こえた」のだ。演奏前にチンピラは二秒ぐらい沈んだ。組長に叱られたのだ。

今、ビデオの編集をしていたら、組長は、「どうしたの？」とおっしゃっていたのだ。しかし、もう、遅い。叱られたチンピラはマイナス点を取り戻そうと必死の演奏。

翌日、組長から「お疲れえー、イサオ、最高だったよっ！ (^-^)/」だって。

確か3月のバビロでのコンサートの後に、沖師匠から「イサオ、6月19日開けといてくれる。日本祭があるんだよ、その日」と言われた。「はい、開けときます」。私は昨日まで、日本人会、または日仏親善協会の内輪のお祭りだと思っていた。先日のアートセンターのコンサートの時に沖師匠に、「師匠、すみません、19日の時間と場所教えて下さい」「あれっ、メールしたんだけど・・・」「あれ、頂いてないですけど・・・」「あれっ、パリのあっちこっちにポスター貼ってあるけど見てない?」「えっ、マジすかぁー、そういうレベルのイベントなんすかぁー」とちんぷんかんぷんの会話。師匠からメール。別途、インターネットで調べる。わっ、「Grand Matsuri」、わっ、パッサージュパノラマが日本の夏祭りになりまぁーす。パリで最も有名なアーケードだ。諸々の催し物、屋台・・・。げっ、こんな大規模な企画だったのかよぉーとさまーず三村さんになった。しかも、私が出演するのはトリ。「沖至と仲間たち」だった。たーりーりーん。

とはいえ、わたくしもジャズ屋の端くれ。聴衆が2人でも5000人でもピアノがあれば、あとはへめらも、なのだ。もちろん、内奥に若干の緊張はあるにしても、手だの足だの震えたりはしない。もう、単に指さんたちにお任せえーという感じいー。

そう、おっさんになると自意識なんちゅうもんは克服しちゃっているから、余計な緊張はしないのだ。人に見られているなぁーんてもんも、なんも感じない。どっちでもいいのである。指さんたちのお散歩に来ている飼主のおっさん。以上なのだ。うで、指さんたちを褒められると、やっぱ、飼主だからうれしい。きゃーーかわゆいーーとか、俊敏なのねえー、お宅の指さんたちいーーとか。うっししししい、となる。とはいえ、日頃の教育成果が出るだけであるから、がたがたしないのだ。できること、出てくるもの以外は、できないし出てこない。肘から指先までの筋肉以外ねえーんじゃねっという感じになっちょるなぁー。

「裕さん、なにかスポーツは?」

「はい、ピアノを少し」

「健康法は?」

「はい、毎日、欠かさず、努力の賜物です。赤ワインで全身アルコール消毒をして居ります」

「裕さんの腕、指、筋肉むくむくですね」

「肘から下だけセクシーボーイ。うっししししいー、見える所だけ自動的に鍛えている。こんな効率のいいボディービルはありません」

今日は6月18日2016年です。本日、アップする記事は午前中に書いて予約投稿になっているけれど、こちらが夏時間になっているので午後5時を過ぎているのに公開されていない。わぁおーっ、村上春樹のブログじゃあるまいしねえー。そんな大事なのおー？

ところで、この雫が調理される頃じゃね、この記事が公開される頃、わたくしはパッサージュパノラマで演奏しておるのだよ。なっ、なんと、沖師匠にメンバーは？ と気楽にメールしたら、ぎょわぁーん、オーケストラに近いのだっ！ 大袈裟だけれど12名編成。うで、気が動転したのか？ しないのだ。後はへめらも。

それでね、母方のおばあちゃんのことを、実は、少し前に書いたのだけれど、記事を削除した。書いている内に、確実に太宰治顔になっていたはずだ。別にブログに他意はないけれど、自叙伝的文学的わたくしのセンチメントを直撃する内容は、ブログには書かないようにしているのである。うーん、なんかねえー、「読み捨て」じゃイヤイヤ感かしらねえー。

あらっ、結局、書かないで終わっちゃったじゃん。

ねえ、裕センセ、段々、文体がおねえ言葉になってませんか？ あらっ、そうかしら？ そうねえー、あたし、男止めてもいいわよ。どうせ……。はっくしょんおーん。〇〇〇に未練ないし……。というかあー、ぽくあちゅどうもんどささふえろんとんそましゅぱっ！ 突然、フランス語は止めて下さい。おばあさまの記事ではなかったのですかっ！

ごっほん、じゃ、君。タグだけ箇条書きにする。

母方のおばあちゃん 小学から高校ぐらいまで同居 どう見てもイタリア人にしか見えない美人 私は溺愛された

なんかいつも私の後ろにおばあちゃんがいる気配を感じるのだけれど、私は理科系脳科学脳であるけれど、その存在は、私には確かなものなのだ。説明？ どうこう分析の必要はない。私はおばあちゃんを愛していた。医学的に生存している私の脳内でおばあちゃんは生きている。それだけね。

16日はパリ19区のアートセンター。沖師匠、真師匠とのトリオ。燃えた。昨日、19日はパリの日本祭りでコレクティブインプロビゼーション。

ベルリンから来ていたトランペッターのケイさんとコンサート前に話した。「なんなんですかね、たとえば、ドイツでは、もう、純粹に騒音で皆ハイになるんですよ」「あっ、そういう傾向あるよね。沖師匠も山下(洋輔)さんもドイツでのコンサートが多いもんね」「フランスとかイタリアとか音感が違うんですかね?」「うーん、俺の感触だとさ、ラテン諸国はメロディーがないと音楽に聞こえないんじゃないの。まあ、悪く言えば保守的でもあるのかな。でも、音楽観はそれぞれのもんだから、それでいいよね」。

当然、我々、「無調性コレクティブインプロビゼーション」をやった。ピアノを弾きながら聴衆の反応を見ていた。「わっ、喧しいーん！」という組と、なんか熱くなっている組に明らかに分かれている。どうして、こういう真逆反応になるのか私にはよく分からない。

えっ、やっている方？ 超楽しかった！

今、ビデオの編集中なのだけれど、実に楽しそうに指揮をする沖師匠と真師匠。

ここまで、午前中に書いた。つまり、素面だ。ここからは「酔った勢い」になる。わっ、明日からドライバーのゴトシ(仕事)がびっしり。ブログ更新はちとすんどいかんずいー。でね、もちろん、音楽の好みはそれぞれ。じえんじえん問題ない。なんか、ケイさんと話してて、確かにドイツ人は、たとえば無調性無機的ないしはノイズミュージックで熱くなる傾向がある。当然にして、我々、フリージャズ屋には非常にいい感じーの聴衆が多いのだ。分からない、どうしてそうなのか？ で、いつもじゃないけれど、私もしばしば「それ」をやる。うーん、なんなんだろう、ミュージシャンの個性みたいのが騒音の中にかき消された方が、聴衆個々人の感情移入がし易いのかも知れない。極論だけれど、ラテン諸国はメロディーに個々人の感情移入をする傾向がある。おっ、やっぱ、ベルリンに転居すべかな？ でね、これも極論だけれど、日本人はリズムとエモーションに震える傾向がある。私もそうだ。なんか民俗学的な理由はあるんだろうね。

あっ、そうそう、午前中の続きだった。そのビデオ。私のバックにいるホーンセクションは画面から外れてしまった。ごめんなさい。沖師匠と真師匠の実に楽しそうな指揮者振りが凄く良く撮れている。近日中にユーチューブにアップするつもりではあるけれど、初対面のミュージシャンばかりで、名前が分からないのだ。そのままアップはでけん。なんかねえー、ワールドオーダーのビデオのフリージャズ版ちゅう感じなわけ。パリの雰囲気も良くでちよるよ。

と、更新、ちと途切れるけれど、赤ワインでアルコール消毒でもしててね。私の両師匠。見た感じも性格も真逆。このお二人の実に楽しそうな指揮振りっ！ おっ、沖師匠。ダンディー、下

ネタを一切しない、人の悪口を一切しない。おっ、今ね、真師匠は、真
逆って書いちゃったけど。やっ、やばぐね。真剣に読まれると。おっ、俺は、正直、下ネタと
悪口、大好きだぁーっ！ はははぁ、真師匠も俺も一目置いている好きな人の悪口しか言わない
ところが、本物のインテリちゅうことにしとく。下ネタはさまぁーず芸的という下ネタ。品のあ
るそれだっ！ 嘘つきっ！

ブーランビリエ駅。午後十時五十分。早朝からの激務が続く疲れ切った男がいる。この駅はパリのジャンの憧れであろうパッシー地区のど真ん中に位置している。高級マンションが立ち並ぶ地区である。ここから男の住む北西の小さな町まで電車が出ている。閑静な住宅街の駅、駅に人気はない。男は十時五十四分の電車に乗るつもりだった。リムジーンドライバーの一日の閉めである車の掃除を手早く片付け、ガレージの最寄りの地下鉄へ急ぐ。激務、まるで日本の夏のような夏日が続くパリ。体力の消耗もいつも以上なのだ。男は一瞬立ちくらみを感じさえした。軽い熱中症？ 家路を急ぐ。ブーランビリエ駅の表示。電車がキャンセル。次の電車まで四十分。疲労困憊しているから、一瞬、怒りのようなものが込み上げた。

この駅は男が営業マン時代から良く知っている。お客様の密集地帯だったのである。小さな深夜まで開いているスーパーがあることも、男は当然知っていた。重い足取りでスーパーへ向かう。レジの兄貴が退屈そうにスマートフォンをいじっている。男は1664ビールを買う。路上での缶ビールはパリのマナーに反することは男も知っている。しかし、人気がない。構うものか。

駅の広場に戻る。ビールをゆっくりと飲む。駅を囲む明かりの点いたマンションを見上げる。俺もいつかこんなところに住んでやる。と、男は腹を減らした狼のような目付きで男を囲むマンション群を睨み付けた。

のではなくて、男は五十七歳のおっさん。郊外にシティーハウスをすでに持っている。二人の子供たちも親爺より立派になった。カミサンとも仲良しである。単に、ビールを飲みながらでへへへえー、うまっ！ と好々爺目になっちゃったあー。しかし、なんだよおー、暑くてたまんねえーっ！ でね、高級マンション見上げながら、一等地だけどよ、狭苦しいねえー、俺んちの方が俺的にはいいねえー、おっ、ピアノ弾きてえー、まあ、いい年こいてよ、好きなことやってんだからよ、俺はハッピーチャンジーだよなあー、と思っていた。じえんじえん、ハードボイルドにならん。ボイルされてんのは俺自身。一日だけだよおー、お休み。

今日は、六月二十四日。午前中に「腹を減らした狼」という記事を二杯目のコーヒーを飲みながら書いた。こう見えなくても、わたくしは、元作家あー選手をやっていたことがある。この巧みなドリブル的トラブル文体は皆さまご存じの通りである。皆さまの推定数は久保の兄貴のアクセス解析では八百万と出ている。

でね、またまたたまたま、明日から多忙の石と化す。でね、裕センセまじめだから、世界中の「女性ファン」、男どもは馬鹿だからどうでもいいのだ。その女性ファンが毎々服用している怪しげなスリク、違った薬。その名は、はい、わたくしが開発したユウーズブログリンという薬である。これは、中毒症状が頻繁に出るから、医者処方箋が必要である。でも、医者に行ったら白衣着た裕センセが志村けんみたいに座っているのだ。インターポールでは「危険人物」と認定されていない。これが、危険なのである。こうして、系たん姉さん、爆笑っ！ 「業務連絡。これは予約投稿です」だってっ！ 牛の顔をじーと見せられたり、業務連絡っ！ ユーモアの達人です。と、わたくしも、明日の女性ファンのお薬を今書いちょる。業務連絡。これは前日に酒の勢いで書かれた戯言であり、一切の文責は、当社、IYエンタープライズではお受け致しかねます。もし、万が一、処方を間違え、ブログが炎上した際は、わたくしが畏敬して止まない「三島由紀夫の金閣寺」をお読み下さい。

そうそう、でね、そうなんだよねー、格好良く決めたいわけ。それがねー、駄目なのよー、奥さん。あたし、おかまじゃないしいー、お鍋でも、薬缶でもないから、フライパンなのかしらねー。真師匠との業務アポリネールはいつもおねえ言葉なのだわ。真子ちゃん、ちゅっちゅっ、伊沙子、最近、どうなの？ ご無沙汰ねっ。はっきり言って、二人とも馬鹿だ。おっ、佐藤真、河出書房「フランス料理」その二が上梓されてんじゃないのかしらねー。あの女は、ドラムは上手いは、パリの日本語新聞オブニーの編集長だったし、料理教室なんてやったり、あの女、新潟のいい高校から東京の難関私立大学法学部なんて出ているのよ。嫌な女ね。

と、超絶インテリ男子の裕イサオと佐藤真は隨時やっているのである。まっ、まさかっ、本当に嫌な女がこれ、読んでねーだろうなあ？ 「嫌な女ごっこ」って、おもしれえーけどね、「嫌な男」は、裕センセも真師匠も、福島と新潟のまじめ直球系だから、駄目なのである。これってさあー、男子校の弊害なんじゃね？ どっちがしょんべん天井まで行くかなんちゅう競争してたんだよ。おかまになれば？ おかまいなく。そっとしといて、今日はバラードがいいわ。

疲れてるし、雉も捌いたから禁則文字はゆるちてね。久保の兄貴、大変な状況、存じてます。ブログの早期の復興、願うばかりです。いや、ブログじゃなくて、ご家族の、です。その上に、ブログがちょこん。人生配分はそうですよね？ 逆になると作家あー選手。

先日の日本祭りのビデオができた。物凄く綺麗に撮れている。ワールドオーダーのフリージャズ版のようにも見える。

正確には、6月19日に行われた「Grand Matsuri」、パリ最古のアーケード、パッサージュパノラマにて撮影。ビデオカメラは事前にフックスされていたので、私の後ろのホーンセクションが画面から外れてしまった。ごめんっ！ それと、ほら貝、飛び入り参加のクラリネット、お名前が分からない。ビデオのメンバーリストに入っていない。ご容赦を。

毎々、私の愚ブロ愚に登場、および、右側のプロフィールにも書いてある私の両師匠。トランプett 沖至。ドラムス佐藤真。この両師匠の楽しい感じが良く映っている。沖師匠は神戸出身。日本を出たのが確か1973年のはず。当時、西の沖至。東の日野皓正。二人でスイングジャーナルの人気トランペッターの1位を争っていた人である。ヒノテルが主流派ジャズの親分だとすると、沖師匠は反主流の親分である。日本フリージャズの先駆者の一人。舞踏土方巽、詩人白石かずこ、吉増剛三と異種セッションの先駆者である。パリの師匠自身のユニットは、ベース、アラン・シルバ。元アルバート・アイラーのユニットメンバー。ベース、ケント・カーター。ポール・ブレイのベーシスト・・・とそうそうたるジャズジャイアントたち。ドラムスは真師匠が担当している。

真師匠は「俺は永遠のアマチュアだっ！」という謎めいた自負心をお持ちの方である。繊細なドラミング。引っ張りだこである。料理、著述業のプロと多彩な人。真師匠は私の兄貴分なので今回はこれぐらいにしておく。

業務連絡。本日は午後から仕事。またまた、更新が途切れてしまうけれど、本ビデオを御覧になりお待ちくださいませ。だれも待っていない？ わっ、サミュエル・ベケットの世界なの俺のブログ？ だれにも読まれていないのに一生懸命ブログを書いているおっさん。ゴドーを待ちながら、カフカの城じゃねっ！ いいもおーーん、それで。画面があるから書くのだ。

５７歳は正確にはシニアではない。会社内だとそうなるけれど。

もう、リムジーンドライバーの仕事が忙しく、ヘロヘロモヘ爺と化している。本日も午後から深夜に掛けて仕事。気が狂いそうっ！ いや、すでに狂っている？ 次回のコンサート準備をしないといけないし、日本からロックバンド、「ゼーゼーハーハー」がパリに来る。できる限りお手伝いしたいのだ。同業者だもんねえー。

大体、月曜日は午前２時起床。帰宅午後１０時だよぉー！ 昨日は、起床午前５時。帰宅零時過ぎ。ハードを通り越して、脳麻痺だっ！ 笑顔でミニバスを運転するロボットと化している。脳内はカラ。当然、会社もその辺は心得ているから、今日のように睡眠日を設けてくれる。そうしないと８００００００のわたくしのブログ読者から会社にクレームが行く。会社機能がパンクするという仕組み？ のはずだ。

しかし、ふと、早朝とか深夜のパリの風景を見ながら、これが２７歳のジャズメンだったら、なんか恰好いい感じがする。こういうハードライフも。なんか夢に向かって走っているリムジーン・ドライバーちゅう熱い憂愁が漂う。しかし、５７歳だよ、俺。夢はない。輝かしい将来もない。ついでに住宅ローンもない。ないない尽くしじゃねえーかよぉーっ！

おっ、そういうね、諸々のシガラミからこうして裕センセは一步步確実に解放されて行っているわけ。恰好よくはないけれど・・・。悟りは小学校６年生の時に開いている。これを今実現しているちゅうことなんだろうね。うん、俺は元気だぜっ！ ギラギラ感ゼロだけど、気持ちがね。さっ、お仕事お仕事。正確にはお給金お給金。あんまりボービン(binbo)で、ちょっと痺れているのである。清貧管理を怠ると赤貧になる。こうなるとメンタルヘルスがやばくなる。

今日も午後から仕事。今の内に記事を書いて予約投稿。

このタイトル、私が以前やっていたユニットの名前。他に、「黄土」「フォーブ(獣)」、これは続いている「バンサン・バン・ミラー」。「フォーブ」は音楽的に私もっとも気に入っている。ヤニック、アルトサックス。リヨン音大ジャズ科の学生だった。トマ、パーカッション。リヨン大学経済学部学生だった。この二人が超ハンサムだったから、毎々、お客様、女性が一杯だった。

「バンサン・バン・ミラー」は私がバンドマスターということで、コンセプトは「舞台に立ちたい人は参加自由。法に触れなければなにをやってもオーケー。なにやらなくてもオーケー。ステージに布団ひいて寝ていたい、オーケー。プロ、ど素人、経歴は一切問わない。年齢制限なし・・・」ということなのでめちゃくちゃでいいのだ。このユニットの超おもしろいところは、「客席にお客がない」ということ。だって、みんな参加しちゃうからお客がないわけ。ライブハウスは大喜び。大酒のみばっかだから飲み代の稼ぎがばっちりはある。こういうライブってなんなの？ ライブというか全員参加の飲み会？

話が逸れた。夢追いなのだけれど、昨日、夢はないと書いた。輝かしい将来もない。ないない尽くし。本当にないのだ。

私の夢？ 「俺も、ビル・エバンスのように、キース・ジャレットのように、山下(洋輔)さんのように、ピアノ弾けたらなあー」と中学二年生の時から思っていた。そして、レベルはまったく違うけれど、「それ」は現実になっている。実現している夢のクオリティーアップにアップアップしているという毎日なのだ。

また、話が飛ぶ。息子の親友、司法書士。彼はDJでもあり、素晴らしい写真を撮る。毎々、息子と私のコンサートを聴きに来てくれる。とうとう、彼とエレクトリックユニットを作ろうとなった。彼が、電気機器一切のコントロール。私がシンセサイザーで色付けする。これは、ずっとやりたかった。超シンプルなメロディーで、後はリズムマシーンでノリノリの踊れる音楽。フリージャズという難解な音楽をやっているから逆噴射なのだ。これは若い世代とのコラボがないと、摩滅したおっさんフィールではでけんと思っていたから、うっしししししい一的申し出なのである。貧乏暇なし。ジャズメン用語だと、ボービンマヒナし。楽しいねえー、本当。彼も息子とおない年だから27だ。私より30年少。いいねえー、私の30年が再度、燃え上がるっ！

ミューじっちゃんにとって、今出している音以外に意味はないのだ。こりゃー、現在進行形の哲学と命名するぞっ！ ねっ、そうだよな？ 今が一番若いんだよね？ ね。

「トーナリティー」、音楽用語。「調性」と訳される。単純に曲の音階でもあるし、その曲の色調とかムードという意味も含まれている感じがする。私は一度、ブログを完全に閉鎖しようと思ったし、二か月ぐらい記事を書かなかった。ブログという媒体に飽きてしまったせいである。閉鎖しているのにサイトはそのままだにしていた。やはり、未練があったのだろう。

ところが、閉鎖中の閲覧数が変わらないという現象が起きた。これは正直不思議だった。元々一桁アクセス零細企業的ブログではあるのだけれど、「閉鎖しているのに閲覧数が変わらない」。これは心に染みた。静かな静かな応援者の方々の存在をインターネットの画面の中に感じた。そして、とうとうフェアリーさんからコメントを頂いた。「楽しいわ、うっふふふ」って。もうこうなると、ピアノの蓋を開けたまま、「僕は演奏しませんっ！」と意固地になっているピアニストなんじゃね？ 弾けよっ！ 書けよっ！ となった。

結局、再開したのだけれど、ブログ自体には飽きている。のに、なんだか楽しいのだ。これは静かな静かな応援者の方々のテレパシーなんじゃね？ ふむ、もしかすると私はその応援者の方々に向けてお手紙的私信を書いているのかしらあー？ というトーナリティーに私のブログは移行したような気がする。

おまけに、私のブログの順位が三位。二年前ぐらいにも一度だけあった。ブロガー全盛期の頃と言ってもいい。今は全盛期を過ぎた余生ブロガーと化しているのにこの順位は凄過ぎる。これも静かな静かな応援者の方々なくしてありえないのだ。深々とお辞儀。ところで、ブログの順位自体には興味はない。でも、応援して下さるという心意気に熱くなる。嬉しいのだ。

プロ野球の順位じゃあるまいし、何位でも構わないのだけれど、単純に多少は目に付きやすい辺りがいいかしらねえーというのはある。やはり、インターネットを通して書いているのだから、読者の方は多い方が楽しい。でも、他のカテゴリーの閲覧数、ゼロが二つ多かったりするから、これは恐ろしい。エッセイ部門のアットホームな数字を私は好む。ブログの炎上なんていう恐ろしい事態は、本当に恐ろしい。楽しくないのだ、うなもの。

そうかあー、ブログの進化ではなくて私信化なのか？ いいよねえー、自分のブログだからね。

ところで、この三位という順位。私のブログは変種変態メビウスパラレルワールドのお笑いマジ馬鹿文学というカテゴリーに属していると思っている。このカテゴリーとすると凄いいいいいいいいと思う。そして、わっ、この順位は、そっくりわたくしの師である横ちょのご隠居Tsuhaaji Booku氏に差し上げたいと思っていた。わたくしの師匠は、そういう下世話な世界を超越なさっておられるからである。しかし、ちと、待て、もうひとつ、避けては通れないOutポイントがあったじゃん。見た。わっ、Tsuhaaji Booku氏は三位なのだ。やはり、世間は知っている

のだった！ 二つの三位を分け合っちゃったりしちゃったりしていてなんか嬉し楽しや。

おっ、私は自他共に認めるお人よし。私の順位よりお気に入りブロガーさんの順位の方が気になる。私的に不本意だと毎々クリックマシーンと化す。むむむうー、なんでなんで、この順位、不満っ！ とか言ってクリックする。一番困るのは、実際にそうなんだけれど、わたくしが脱帽している素敵なブログが私の次にある。わっ、これは逆だぞっ！ クリックする。翌日、逆になる。やれやれ、なんてやっている。でも、なんか、その実力が草野球という意味ではないので誤解なきよう。プロ野球とかプロサッカーの順位は、そりゃーマジだ。でも、ブログはなんか草野球チームの順位的ほのぼの感が漂っていたいのである。わっ、最下位かよおー——！

なあ——ーんて楽しい。

このタイトルになんらの意味もないのだけれど、音が似ているというだけ。確か、五月の中旬にいんげんを庭の畑に蒔いた。延々と芽が出ない。普通は遅くとも二週間ぐらいには赤ちゃん葉っぱがもりもりと土の中から現れる。それを好々爺目で愛でる。

今年のフランスは、ご存じの方も多いと思う、雨雨雨の毎日。しかも、フランス語で「牛のおしっこのような」雨。つまり、豪雨。昨日、ちっとも芽の出ないいんげんを掘り返してみた。私の推測では、豪雨で流れてしまった、または、腐ってしまったのいずれか。掘り返してみたら、いんげんの種さえない。たぶん、豪雨で流れ出た種を鳥が食べたようだ。450円種代の回収の見込みはなくなった。再度、蒔こうかちょっと考えている。うーーん、もぎたてのいんげんの天ぷらとか、茹でて生姜醤油・・・。ああーあ。残念。

トマトも、ビニールハウスを作れば良かったと今更思っても遅い。でも、苗六本。一応大きくはなっている。どうかなあー、トマトなるかなあー。長雨、日照時間の不足。駄目っぽい。確実に、今年のワインは外れ年のはず。

私の家の畑なのだけれど、周りの家々で野菜作りをしている人はほとんどいない。土質が悪いらしく、作物が育たないせいだと思う。腐葉土、馬糞、石灰等で土壌改良は可能だけれど、そこまで大規模にやるような畑ではない。または、いっそ、農薬を若干使うという方法もあるけれど、そんな大量な収穫を見込んでやっているというわけでもない。単に、うんうん、可愛いねえー、トマトととつつあんの観賞用みたいな感じ。

おっ、ここで人生訓みたいになる。当たり前のだけれど・・・。この土質が悪い畑。豪雨豪雨豪雨。この状況下でいんげんはどこかに消えてしまったし、トマトも元気がない。しっ、しかしっ！ この雑草君たちの強力なことっ！ 間もなく、雑草君たちの天下。なんとかしないと、トマトが見えなくなってしまう。雑草のように強く生きるなんていうけれど、強過ぎっ！ まあ、いいか、「僕の趣味はねえー、雑草を手塩に掛けて畑で育てている」なあーんて飄々と言っちゃおうっと。庭の芝生も芝生なのか苔とたんぽぽなのか判然としない感じ。わあおおー、ジャズはどっちかという雑草の方かしら？ 「That's so」なんて曲作ちゃうかな。

やっと、二日休み。明日からまた忙しいのだよ。ああーあ。雑草のように・・・か。とつつあん雑草。様にならねえー。ギラギラ感ゼロ。

七月に入ったのに毎日毎日雨。もう、あの歌を歌って雨を蹴散らすしかない。

今日の午後から螺子回し(ドライバー)の仕事がびっしりだから、昨日、「酔った勢いで」予約投稿記事を三編書いた。書き終わり予約投稿にしたけれど、今朝、すべて下書きにしてしまった。楽譜の中の指示にピアニッシモとかフォルテッシモとか馬が走るようにとかあるけれど、私的に追加したいのが、この「酔った勢いで」Copyright HK(久保の兄貴)である。私のピアノ演奏はすべて「これ」なのだ。

なんか、「酔った勢い」の記事。なんとなく、元々馬鹿の上に親馬鹿が乗っかっている感じがする。読み方によってはお自慢系にも読めるから、アップしないことにした。それと、結構名指しで書きちゃうから、もちろん、オマージュなんだけれど先方が止めて「クレヨン」Copyright町田康となってしまうと傍迷惑である。

昨日は、小雨の中、トマトの周りの雑草君たちを撤去。それから詩ばかり(芝刈り)。

「忘れられないトマトの思い出」

まだ、子供たちが小さかったから二十年以上前だ。南西のサントという町にバカンスで出掛けた。白いトヨタカローラDXで。一軒家を借りた。その家の中に鍵盤調律よれよれの古ピアノがあった。まだ、ピアノを再開していなかった頃のはず。なんか嬉しいような懐かしいような感じでビールを飲みながら、その古ピアノを弾いた。その頃だったはずだ、私は手配課長というポストに任命されたのである。私の中で「俺は一体フランスに何しに来たのだ?」、この?で一杯になっていた。その時の古ピアノ。なんか心の真奥が動いた気がする。

その家の庭に畑があった。見事なトマトがなっていた。大家のおばさん「ご自由にどうぞ」。早速、挽ぎりそのまま食べた。熟して甘いトマト。幼少期の庭の畑で食べて以来忘れていた味だった。たぶん、その古ピアノと真っ赤なトマトの味が、ピアノ再開の内なる原動力になったような気がする。初心が蘇ったのだと思う。

日本のロックバンド「ゼーゼーハーハー」が来仏する。「ジャパンエキスポ」という催し物に出演するために。彼ら、二十代のはずだ。パリ公演の成功を祈るばかりである。

今、私の方は、息子の親友連のDJ Unitとのコラボレーションの計画がある。息子とおない年の二十七歳。今、メール添付にて送られてきた彼らのサウンドを聴いている。実におしゃれなエレクトロニックサウンドだ。リズムボックスとコンピュータで作られている。銜いがなくて素敵である。

とっつぁんである私の音楽は、ややもすると深みとか年輪みたいなものが出てしまう。よく聴くとちょっとペダンティックにも聴こえる。まあ、とっつぁんだからそんな感じになる。彼らのサウンドにはそういうものがない。自己表現なんちゅう姑息な感じがない。その場の空気を音で作る。その場の空気の裏方さんたちという感じが清々している。

さぁ——てと、私の積み重ねてきた三十年を払拭して、彼らのサウンドに付いていけるのかしら？

とっつぁんにとっては大いなる自己実験でもある。ちと大袈裟だねえー。楽しくシンセサイザー、ノリノリで弾けばいいのだ。踊りながら。私だって二十七歳だった時があるのだ。三十年後のもう一人の私との間に狭間はない。と決め台詞。かっくうえ——！ 肩と腰痛えーけど。彼らが我々のユニットの名前考えてくれているのだけれどYO2(腰痛)というオジギャグは止めてくれな。

私が日系企業旅行部の手配課長に就任したのが三十四歳。家を購入、および、ピアノ再開、三十五。この頃、エロティックボックスという美術の新作を作製しつつ、小説第四作目「水の記憶」を執筆していた。よく過労死しなかったと思う。

五十歳。住宅ローンが終了。息子二十歳。娘十八。どちらも成人する。この時、私は、父親も会社員もすべて引退しようと思っていた。結局、三年延びたけれど五十三歳の時に当初の計画通りになった。ミューじっちゃん、裕イサオの誕生である。でも、この芸名は三十九の時からだから結構長い。

以前にも書いた。お袋からの電話。「お母さん、俺、芸名考えてんだけど」「あら、よく当たるおばあちゃん占い師に聞いてみるわよ」となった。なんか、名前でも苗字でもいいから「裕」を使えだって。おばあちゃん、「あなたの息子さんは芸術家ですね。強烈な自我と自己顕示とプライドの塊。でも、優しさと女々しさが同居している。この優しさと女々しさが前者を上手く抑えている。四十の時に芸術家として大成します」。そして、よく当たるおばあちゃんの予言の一番最後のフレーズは諸外れた。

結局、「裕」を仮に苗字に使うなら名前は三文字。片仮名か平仮名にしろとのこと。当時書いていた小説の中に出てくるピアノ弾きの名前がイサオだったから、おっ、丁度いいじゃんってなった。私の本名はお習字によく出てくる漢字が四つ。視覚的に実に綺麗なのだけれど、フランス人には覚え難いし発音し難いのである。フランス語の幼児語にピピ(おしっこ)カカ(うんち)ドド(ねんね)があるのだけれど、私の名前を名前から読むと、限りなくピピカカ・ドドと同じリズムになる。それと、昔住んでたアパート内にアルジェリア系の人がいた。ムスタファ・ダビという名前でアルファベットの私の名前と視覚的にほぼ同じ。郵便配達がいつも逆に入れていた。Isao YU シンプルで覚え易いのである。フランス人の発音だと若干「イザオ」になるけれど。

芸名もオフィシャルになると、本名呼ばれると「えっ、俺？」なんてなる。

娘が、「ライブハウスにいるパパはパパじゃない」だって。

昨晚というのか今朝というのか帰宅が午前 1 時過ぎ。その日と言うのか前日と言うのか、起床が午前 4 時。何時間仕事をしていたのだろう。

ビールを一缶飲んで気絶するように眠る。と言っても、その日と言うのか今朝と言うのか起床 4 時半。3 時間しか気絶していない。一仕事終え帰宅。1 時間半気絶、風呂、昼食。二度気絶をしようと思ったけれど、これから、また、仕事。脳オフにならないから、眠いまま起きてしまった。

今朝、午前 5 時 2 9 分。私はドゥゴール空港へ向けて、フランジリアンと呼ばれるイルドフランス地方をぐるっと囲む環状線を走っていた。パリから 30 ないし 40 キロ離れているから、森、畑、起伏も多い。丘の上からカーブを下る時、一瞬、行ったこともないサンフランシスコの風景ってこんな感じ？ などと考えていた。すでに、朝日が昇っている。水平線近くの横から来る朝の光。地上はまだ暗い。マグリットの絵をいつも思い出す。暗い高速を走りながら、遠くの真っ青な夏空を見る。巨大な鷲が飛び立つような雲。水平に飛行機雲が三本。私の眼には、なんか檻の中から飛翔しようとしている巨大な鷲に見えたのである。と、折角、綺麗な散文っぽくなったのに、つまり、鷲はわしを指している。わしの心が飛翔しているように、わしの心に雲の形が投影された。わしの精神状態は、大変によろしいと自己分析したわけ、わし。

ところで、会社を辞した直後に作った「ラストシーン」という曲。私の動画の中でもっとも再生回数が多い曲のひとつ。動画のコメントに書いたような気がするのだけれど、隠し味的に隠し曲が入っていて、それは・・・。

「籠の中の鳥はいついつ出えやある」なわけ。籠の中の鳥は私でもあり、あなたなのかも知れない。巨大な檻から飛翔しようとする巨大な鷲。それは、私かも知れないし、あなたかも知れない。心の位置って凄いもんだなあーと今朝思った。

睡眠不足(と酒不足)でへろへろである。わぁおーっ！ 夜のサービスがなくなった。帰宅した。

でね、ご多忙のとっつあん

うで、この糞忙しいのに、なぁーにがブログじゃいっ！

禁治産者っ！

私の高度な理論上は、「だからこそ」ブログを書くのである。こういう大変高度な非論理的論理を忠実にハチ公みたいにわたくし裕センスはやってきたのだ。やっぱりねえー、わたくしは自他共に認める芸術至上主義者なのだっ、えっへんっ！ でもね、ぱっとしないから、意外と謙虚だし腰が低いから螺子回し(ドライバー)の売れっ子になっちまうという悪循環のようなお給金が、がっぽがっぽじゃなくて、砂上の楼閣的にさらさらと・・・。

「マルセル・デュシャンさん、今、一番、聞いて欲しい質問はなんですか？」

「はい、お元気ですか？ です」

昨日、記事を書いた記憶がない。久しぶりに夕飯時に帰宅したから、「まず第一にすること」はビール、赤ワイン、がぶがぶ。臓腑が酒欠乏状態だったから「喜びの歌」の大合唱。久しぶりにカミサンの顔を見たからぺらぺらぺらとお話した。十時間寝た。午後から仕事。今、パソコンを開いた。記事がある？ 巨人の星の花形満が違ってホームベースへ向かう時のイメージが浮かんだ。しかし、そこまでして、しかも無内容な記事をアップする必要があるのか？ ない。まあ、「喜びの歌」の勢いなんだろう。

「リムジーンドライバーたちは徒党を組まない傾向がある」と、プロライセンス取得のための学校で教わった。たぶん、そうだろう。ジャズメンもそうだ。一匹オオカミ、孤独系、組織に馴染まない、こういう男たちが多い。

この仕事、なんか一日中車の運転をしていると思われがちである。実際は正反対。ガレージからミートポイントへの移動。つまり空車で運転していることの方が多い。お客様が乗車している時間はそれほど長くないのだ。では、それ以外は何をしているのか？ 待機しているのである。延々と忠犬ハチ公。いいドライバーとそうではないそれとの差は、ずばり、忠犬度なのだ。いつ終わるのか分からない宴。延々と近辺、裏通りとかパーキングとかで待つ。これに耐えられない奴は、遊びに行ってしまう。つい、酒を飲んでしまう。女のところへ行ってしまう。

急にお客様のお一人の具合が悪くなる。幹事の方からお電話が来る。すぐに車を付ける。当然、どこかに行っていたらできない。この失態は致命的なのだ。

七月七日。ドゥゴール空港隣のロワシー村のパーキングに一人の高年のドライバーがいた。フランス対ドイツの試合は見れない。車の周りを散歩する。時々、タバコを吸う。夏の夜空を見上げる。ムーンすしというすしのテイクアウトの店の配達員の出入りを見る。村の掲示板を見る。村の地図を見る。

寝静まった様な村の家々から大歓声。「うおーーーーー」。その男はピンと来た。インターネットで試合結果を見る。フランスが得点を入れた。そして、また、「うおーーーーー」。二点目だ。午後、十一時頃、遠くの方で花火、爆竹、クラクション、ゴム喇叭、歓声。フランス、沈み込んでいたこの国、久しぶりの歓喜。その男は、心底、良かった、おめでとうと心の真奥で思った。

私はしばしばドキュメンタリーの撮影をしている様な、いや、されている様な錯覚を覚える。少し、孤独な風景の様にも思う。その男が？ 違う。我々が、である。そして、私は「仲間」のことを考える。

運転が荒っぽい 車の掃除が嫌い 不潔感 おしゃべり 無口 トーク範囲が狭い 方向音痴
土地勘がない

自分のことばかり話す 自慢話 「俺はこう見えても、実は・・・」

と、諸々の不適合要素がある。なんのことはない、すべての仕事に該当している。

では、リムジーンドライバーに向いている人。当然、上記の反対要素。

運転が穏やか 車を労わる＝商売道具だし、唯一の仲間でもある 清潔 お客様次第のトーク
方向感覚抜群 土地勘

自分のことを話さない 自慢話をしない 「あっ、私ですか？ 一旗揚げにフランスに来たんですけど、ふふふっ、白旗でしたあー、とほほ」(これは以前書いた)

そして、フロントガラス越しに世界を鳥瞰している孤独な人。サンテグジュペリみたいに……。世界は水族館に良く似ている。

サッカーフランスチームが敗退した。翌日である今日はフランス全土のリズムが短調になっている。虚脱感。しかし、昨日は昨日だし、決勝戦まで行ったチームをなんだかんだだれも言えない。そして、人生負け組の私は、大先輩、これも以前書いたけれど、坂田明の名言を・・・、「勝負とは勝ち負けではない」。優勝パレード用のオープンバスがパリに向かって走っている映像がテレビに出た。あのバスは、ひっそりと、また、元のガレージへ戻ったはずである。サッカー番組の合間に、闘牛士の死のニュースが流れた。私はいつも思い出すフランスでは珍しい猛暑日にF1レーサー、アルトン・セナが事故死した。闘牛士、レーサー、死のリュッサックを背負っている仕事である。ご遺族の悲しみは言葉にならない。けれど、死と隣り合わせの仕事を選んだ男の遺族。理解する以外にはない。ピカソが闘牛を愛して止まなかった理由も当然にして良く分かる。大島渚は「愛のコリーダ」という恐ろしい映画を撮影している。日本軍が出征する。沿道の国旗。たった一人だけ逆方向から歩いてくる男。藤達也。この男は一日中セックスをしているだけなのだ。このシーンは忘れられない。異端、異邦人、エトランジェ、そのものである。

ずーと仕事仕事。十日間、ピアノの蓋さえ開けていない。ピアノ中毒、ピアノ中には痺れる。でね、もちろん、過労気味。こういう時は、なんか知らないけれど文体が強張り、なんとなく詩のようなものを書きたくなる。フロントガラス目線で。雑念が払拭されて、なんかね、「人生の意味」みたいなものが凝縮するのだろう。わっ、十五日はコンサートなのだぁ！ まったくピアノを触ってないまま・・・。

ー昨日、私はドゥゴール空港ターミナル2Eのハイヤー専用パーキングにいた。

見知らぬ日本人ドライバー 私と同年くらい 銀髪 疲れ果てて車の中で寝ている フライトが着く頃起きる 猫背 どうしたらこんなに疲れた感が出るのだろうというくらい疲れた足取り 「俺はなぜにパリに来たんだ？」という疑問さえとうに無くなって諦め疲労の塊

見ていて痛ましいのだ。えっ、俺？ いつもスマイルだよん。ピアノは私なんだから、大丈夫っ！

「崖から飛び降りる」。これは、私には自殺ないしハングライダー。「決意」という意味であるなら、「清水の舞台から」でないと日本語にはならない。と、思うのだけれど・・・。

久保の兄貴の記事の中にアウトサイダー＝部外者、なんか変？　ということが出てくる。兄貴の翻訳では「はみだし者」「はぐれ者」。私も兄貴と同感である。

なんかこういう言語感覚の人たちはあんまり信用しない。日本語として変だし、もし、彼らがそういう風に考えているのならば、「こちらの微細な脳内の精神世界」を理解できるとは思えない。

ブーツストラップさんの記事の中に、どきっとするフレーズ。すいません、私なりに勝手に要約してしまいます。「運のいい人というのは、日毎宝くじを買い、ちっとも当たらず平穏な日常を送っている人なのではないか」というコードが出てくる。私は涙が出るほど感動したのである。「運のいい人」は私なりに「幸福な人」になる。「毎日毎日、ピアノに精進しているのに、ちっとも当たらないジャズピアニストの平穏な日常」。すっ、凄いとマジで実感体感したのである。

私は仮面ライダーでも、キカイダーでも、三ツ矢サイダーでもなく、もちろん、マグマ大使でもミラーマンでもない。そっ、アウトサイダー。この中に世間への超複雑な怨念と超自我超自負と超卑下の・・・、もう、煎じ詰めると人生全体、生きていること、人類史、ホモサピエンス、弥生時代へと複雑な気持ちがテラノザウルスする。

「えっ、イサオ。あー、インサイダーの中じゃ、結構知られているよ」。フリージャズメンは全員アウトサイダー。アウトサイダーのインサイドってなんなの？　部内者？　ちゃうちゃう、「仲間」。徒党を組まない一匹狼がたまたま一緒にいる。一匹狼同士の「逆」仲間意識は強いのかも。リムジーンドライバーたちもそうだ。そして、一匹でいる野郎ほど、我々は尊敬する。半端じゃねえー、はぐれ者って。座頭市みたいな感じがしらねえー、楽器持った。そっ、音楽用語のバンドって「群れ」という意味だから、私は使わない。

私は実際に貧乏だけれど、別種の貧乏も背負い込んでいる。

その前に、祭日、そっ、日本ではパリ祭という途轍もなく美しく翻訳された今日も午後から仕事。7月3日から繁忙期。6月も繁忙期。延々と仕事をしている。その3日から本日までの11日間で仕事日が10日。なっなんだぁー！ 今、テレビではシャンゼリゼの様子が放映中です。

今朝、コーヒーを飲みながらお気に入りブログを拝読していた。蝶姉さんの記事の中に、どきっとさせられるフレーズ。勝手に要約。すいません。「変わり映えしないことと、変わらないことは違う」。ぐさっ！ と来た。どうして？ わっ、俺、前者だよなぁーと咄嗟に思ったから。

その別種の貧乏は記事のタイトル。またまた自分の話で恐縮です。などど、まったく恐縮していないのにしゃあーしゃあーと書きちまう。私は若い時分から諸々のことに手を出してきた。たぶん、なんかを変えようと思っていたのかも知れない。諸々のこと。私は器用だから、それぞれ「そこそこのレベル」にはなる。料理も庭仕事も大工仕事も、すべて、そこそこ。詩だ小説だ、おっ、ピアノだと、こちらも、そこそこ。と、考えてみると、これはカミサンともよく話すのだけれど、私のやって来たことで突出していたものってなんだったの？ 客観的に見て現代美術家。これはそこそこのレベルではなかった。私は20代だったから、学問の世界と同じで、たとえばノーベル賞受賞者の基礎論文みたいなものは20代で出来上がっている。と、たぶん、私の才と年齢が上手くリンクしたのだと思う。しかし、マルセル・デュシャン大師匠の教え「繰り返さない」、これを忠実に守ったから作品制作は中止した。正確には休止したのである。

同じことを繰り返さない。日毎変わろう変わろうとする。結構、私は本気でやって来たのに変わり映えしない。わっ、凄い結論になっちゃったぁ！ 私が唯一、普遍的に変わらないこと。それこそが、永遠に変わり映えしないことかよぉー！ とほほ。

セ・ラ・ビっ！ へへへえー、といいつつ、毎日、楽しくやっとなのだよ。明日は「変わり映えのしないコンサート」だぜって！

「読者の反応」裕センセって、幸せな親爺よねえー、明るい高年プータローの見本みたいよねえー、明るくしがたい。

昨日、7月14日。午後9時半に帰宅。ビールを飲む。本日はコンサートだから、明日も含めて2日間久しぶりに休みをもらった。当然、こちらも久しぶりに赤ワインをゆっくり飲んだ。夕飯を取る。午後10時20分頃、カミサンが「あなた花火見に行く？」「花火？」「今日は7月14日よ」「あれれ、毎日仕事で忘れてた。おっ、久しぶりに行こ行こ」。

丘の上にカミサンとオシドリのように並んで久しぶりに花火を見た。轟音と共に見事な花火が快晴の夏の夜を舞った。見ている内に、なんか悲しくなってきた。美しいものは儚いのか？ 逆なのか？ なんか我々の人生も巨視的に見ると花火みたいだなあーとか……。ジーンとしながら帰宅した。さあ、明日はコンサートっ！ ばっちり行こうぜっ！ 風呂場で歯を磨いていたら、階下からカミサンの声。「あなた、ニースで、大参事が……」「えっ？」。

サロンのテレビで臨時ニュースを見た。私は滅多なことではかつとしない。しかし、その映像を見て私の真奥に途轍もない怒りが込み上げてきた。暴力と暴力の拮抗の中でしか平和が保てない現代世界の構造。これは根本からおかしいのだ。陽炎のような平和。花火に刹那を感じることも我々の生の一つの様相である。その生を見知らぬ他人が踏み躪る。そんなことが許されるはずは当然にしてない。

そう言えば、男女同権が進んでいるフランス国でも、「芝刈りをしている女性」を見たことはない。男女同権がもっと進んでいるオランダの私の友人宅も、芝刈りは旦那。やっぱり、昔からチャンジー(爺ちゃん)芝刈り、チャンバー(婆ちゃん)洗濯なの？ 内のカミサンも洗濯好きだ。わっ、「もし、猫だったら」の日本昔話新解釈記事。凄過ぎっ！ ずばり、インテリブログ。知性の塊。私の痴性とは訳が違う。是非是非、ご訪問願いたい。

昨日はコンサート。二週間まったくピアノを触らずいきなり本番。両肩が痛いよおー。やっぱ、ほれ、スポーツピアノと日頃言っているから練習しないでやるとこうなる。音楽以前にスポーツなのだピアノは、私にとっては。でも、超素敵な一夜だった。

昼時、スパゲッティを茹でていたら、プロパンガス切れ。うまあー、半年持った。驚異的。これが不思議で、暇こいている時は私は料理狂。その頃は三か月ぐらいで切れていたのに、今は半年。そっ、手の込んだ料理をしていないということだよな。カミサンも含めて。えがったあー、今日、土曜日じゃん。スーパー開いてるとスパゲッティを食べながら考えていた。おらっ、車、娘がリールの結婚式にご招待されているから乗ってっちゃってる。車がない。買いに行けない。まあ、電熱器でなんとかするべ。おっ、バーベキューセット、新しい奴、昨日組み立ててる。そっちもいいや。烏賊の塩焼き。

そうかあー、娘二十五歳だから、同級生たちの結婚式か。お年頃ちゅう訳ね。年取る訳だぜって、親父は。

話を戻す。芝刈り。それはいいのだけれど、壁際とかの処理がめどうになった。これは、明らかに年のせいだ。真ん中だけ刈る。つまり、丸く刈る。わぁおーっ、年取って丸くなるって？ そのものずばり、でした。

芝刈りしてたら汗かいて二日酔い治っちゃったあー。また、飲み出したわけ。

七月中旬から八月末まで、フランスはバカンスシーズン。私の住むシティーハウスの右二軒、左一軒、バカンスでいない。何度も書いているけれど、私の住む小さな町はパリから三十五キロ離れている。パリへの通勤圏ではあるけれど、半分は田舎の空気。隣人が不在、半分田舎の自宅の庭、もうド田舎の別荘にいるような感じがする。ピアノも弾き放題。と、隣人がバカンスにいらっしやると、私自身が「自宅でバカンス」を楽しめるという実に経済的な自動バカンスなのだ。赤貧の醍醐味かしら？ まあ、バカンスに行くお金がないわけではないけれど、私は出不精だから素敵なのね、こういうの。と、第一、私はバカンス中ではない。単に久しぶりに週末家にいるだけなのだ。

ところで、フランスの一般的な風潮は、たとえば、パリとかイルドフランス地方在住者。「定年後、アパートないし持ち家を転売し南仏へ」という感じ。ないしは田舎に引っ越す。私もカミサンもあまり南仏コートダジュール辺りは好きではない。もし、転居するならばボルドー方面かな？ それと、老後は田舎で過ごす。これはカミサンとも意見が一致している。老後は。むしろ、都会で過ごす。パリとは言わないけれど地方の中都市のド真ん中に住むという意向なのだ。なんか、人気のない田舎で老夫婦。ぴったりし過ぎ。逆の方がにぎやかだし、第一、ジャズメンはどうしたって都会が必要なのだ。都会というより人の集落かしら？ 牛さんたちの中に熱狂的なフリージャズファンがいなくても限らないけれど……。試してみようかしら？ 牛乳出なくなっちゃたりして。

と、もちろん、人それぞれの好みだよなぁー。やっぱ、理想は大都会の田舎なんだけれどパリじゃ十億円あっても買えないだろうね。まあ、ドライバーもジャズメンの仕事も私のケースはパリ。そして、半分田舎の自宅に帰ってくる。丁度いいのかしらね、これぐらいで。

ブーツさんにパリでお会いした。日本ブログ村エッセイ部門の重鎮であり、そう、部門のレベルを別のベクトルへ持ち上げてくれているブロガーさんの一人である。私はなぜか、四十五歳ぐらいの、ちょっと、気難しい方と思っていた。実際は、大変に気さくな高年イケメンでした。中年ではないなあー。

ブーツさんのブログは毎々拝読していた。その博識。きちんと資料がベースにある記事。私のいい加減な、いいー加減と書くと、ちょっと調性が違うのだけれど、いい加減なそれとは比較するのもおこがましい。

ブーツさんと色々とお話しさせて頂いた。沖師匠と真師匠とともに。実に楽しい一夜だった。でね、わっ、実は、書きたいことはブーツさんじゃなくて、その左側にいた人のことなのですだす。

事前にブーツさんの御年はメールで知っていた。当然、インテリ高年えーんと思っていた。実際、確かにインテリハンサム銀髪の紳士だった。その横に、若い美女。わっ、やっ、やばあー、この人、本妻じゃねえー！ というのが第一印象。でも、聞けないじゃんねえー、うなもん。と言いつつ、俺は聞いちゃうのだ。「あのおー、ブーツさん、あのおー、嫌だなあー水臭いなあー文識あるのにいー、言って下さいよおー、ね。もじもじ、めっ、妾連れて来たんですよね？ パリに。いやあらしいー、ぎょ」。

信じられない。私よりちびっと年長の本妻だった。ねえー、奥さんさあー、どう見たって俺より十以上下に見えるぜってっ！

卑怯者っ！

このビデオは謹んでブーツさんご夫妻、および、「どこでもドアーじゃなかった」久保の兄貴に捧げます。

なんだかくわっと暑くなった。その途端、ドライバーの仕事が暇になった。ずっと忙しかったから丁度いいし「夏休み」っていう感じはなんとなく懐かしい。でね、色々と宿題をやらねばならないわけ。

暑いし両隣が不在だから庭でバーベキューばかりやっている。菩提樹の葉ががばっと庭のテラスを覆っているからパラソルがいない。こう暑いと「影」、そっ、日陰の存在に改めて気付いたりする。近所のタバコ屋へ。日向は暑いから日陰木陰を求めて歩いている。うーーん、なんか知らぬ間に詩人してんじゃね、俺？ で、暑いから白ビールを木陰で飲む。ソーセージをむしゃむしゃ食う。

夕方、階上のサロンへ。息子の親友のDJが、私のためにカラオケを作ってくれた。これにピアノを入れないといけない。何度かやった。いい感じで演奏が出来た。のに、なぜなのだ？ 途中でビデオ撮影が中断している。メモリーが一杯です？ そんな馬鹿なっ！ メモリーにファイルはないのだぞっ、おい。現代文化センターでのコンサート時、主催者がビデオカメラを何度もおっことしやがった。若干、おかしくなっているのかも？ でね、ビデオが回っているかどうかずっとカメラの方を見ながら撮影するはめになった。なんかとんでもなくへんてこりんな映像になったけれど、私の馬鹿面がおもしろいので公開しちまう。

六月から七月中旬まで、リムジーンドライバー繁忙期。ピアノをほとんど触っていない。その後、コンサート、知人の滞在、ワンちゃん付きと来て、昨日は私の勤める会社社長の「お疲れ様労いディナー」。結局、昨日までなんだかんだと忙しかった。ピアノもコンサートとビデオ撮影の時以外触っていない。

昨日のパリ 33℃。日向は暑くて歩けない。私の町からサンラザールへ向かう列車。日中だったから各駅停車のそれしかない。41分間、クーラーなし、しかも、窓もほんの少ししか開かない列車。熱中症で倒れるような気さえた。

ところで、ずっと前に一度書いたのだけれど「熱中症」。もう一度、誤解なさっている方がいらっしゃると命取りになるので書いて置く。「水分の補給」が必要なのではなくて「塩分補給」。くらっと来たら安静にする。そして、なるべく早く「トマトジュース」「ポカリスエット」「塩水」または「塩そのもの」を摂取する。要は、塩分を至急補給すること。これは実際、私の父がその状況になった。小田原の大雄山のお寺。38℃。父がお寺の縁側に倒れるように横になった。「早くっ、トマトジュース三缶買ってきてくれっ!」。ジュースを飲み干し、しばらく安静にしていた。「あぶなかったな、熱中症だ」。ことなきを得た。父が、「昨日のニュースで医者がゴルフ場で熱中症で亡くなった。気の毒ではあるけれど、医者の末路としては実に見っともない」と言ったのである。

皆さん、お気を付け下さいね。

ところで、ありがたいことだ。労いディナー。鴨とフォアグラの専門店。パテ状のそれではなくて、本物のフォアグラの蒸し焼き。雲丹みたいでしたっ! タヌキ腹で、またまた、蒸し風呂列車に乗った。

もちろん、こんな会はない。第一、私は、会合とかそういった類には一切参加しない孤独系。組織とか団体とか、皮膚感覚で受け付けないのだ。でも、である。私と同じ気質の人々が「たま固まっている時」、これは、ずはりジャズ屋のコンサートだ。こういう非営利幻団体は超好きである。そりゃー、孤独系だって仲間はあるぞって。でね、「ブログる文学振興会」は、私の脳内には存在しているのである。会長、副会長、幹事の名前さえすらすら出てくるのだ。そっ、私の脳内で。こういうことは止められない。楽しくてしょうがないのだ。山下洋輔大先輩「冷やし中華振興会」。筒井康隆が会長だった。その主旨が「なんでなんで冬に食えないの?」、馬鹿だ。どうでもいいのだ。けれど、楽しい。

昨日、あまりに暑いので庭の菩提樹の木陰でうとうとしていた。起きようと上半身を持ち上げた。なんか折り紙のような体の感触。また、痩せたの、と思いつつ階上の風呂場の鏡。確かに私ではある。ちょっと、21度ぐらい斜めになってみた。ぎょ、私は二次元、つまり、平面化していたのだわ、しくしく。先日、引力と同じ力を体内に内蔵すれば、怖いものはないぞうおーーという実験をしていたら、やっぱ、体が浮いた。2メートルも。副作用かちら? 別に体が平面でもいいのだけれど、影と違ってカラー版なのだ。布団の上に寝ていると、布団の柄になっちゃう。柄でもねえー。

でね、歯を磨こうと口に歯ブラシ入れたら、わっ、俺の顔、破れちゃったの。

昨日から、「電子ピアノとパソコンの接続」、これをやっている。私は理科系だけれど世代的パソコン音痴。私のサイレントピアノとマクスンス君とのコラボは、単にインアウトのコード接続で簡単に出来た。当然、私のステージピアノ、ローランドの一番高えーやつだぞっ！ とのパソコン接続も同じように出来るはず。だった。おわっ、もおー、パソコン内にMidi接続ドライバをダウンロードして下さい、だって。詳しい戦いの状況は書かない。要はコンピュータとコンピュータの接続で、一応、知能指数はわりかし高い裕センスの五十七歳の見る影もない現在の痴呆指数では歯が立たんのだ。一応、数学得意系の自負が仇になる。悔しいのだ。負けが。

どうして、こんなに意固地になっているのか？ 内のカミサンは変なところが鋭い。「Isao YU meets Maxence」を聴いた。マクスンス君とのバランス、つまり、若い人とのバランスが悪い。あなたのピアノのキャラ強烈だから、ピアノじゃなくてシンセの方が彼、若い人とのバランスがいいと思う、だって。ほっほほほおー、わたくしだってミュージっちゃん。うなことは、わたくしが一番知っている。ジャズに興味のないカミサンの一言が実に的を得ていたのだ。私自身がそう思ったから……。だから、ローランドとの接続に必死になっていたわけ。

明後日から、フランスの隣の隣の国にカミサンとおしどり旅行。ブログは夏休み。わたくしが気になるのは「イサ中(裕イサオ中毒症候群)の方々」である。とはいえ、裕センスのブログは熱中症には一切効力がない。そうだなあー、「炎天下の陽炎を見ちゃって少し逆鬱になっちゃったよおー症候群」、これには効くぜってっ！ 後ね、塩が悪い悪いじゃなくて、猛暑の時は、そっ、血液の塩分がなくなっちゃうとあの世なのだ。

我々が海から来たこと、健康健康塩分控え目、もちろん、必要以上にはいらない。けれど、血液は塩分であること良い子の皆さん、忘れないように。ジャズは健康に悪い？ うん、昔からそう言われている。えっへへへえー、わたくし、俺、俺たち、元気元気なわけね。そっ、適度な塩分と毒はいるちゅうこと。健康健康と健康ストレスが一番体に悪いよ。

裕イサオそっくりのなんか分からないものが、ひらっ。正面も後面も同じであるけれど・・・。このロボット、裕センセの予算が足りないらしく二次元平面なのだ。とはいえ、大変などうでもいい使命を帯びている。「裕センセが不在中のイサ中患者のためになんでもいいからアップアップ」。

裕センセは二次元低予算ロボット開発と並行し、引力逆引力リニア人間実験をしておった。うで、成功した。けれど、単に浮かんただけで前進がでけんことが分かったから箸で放棄した。うで、二次元ロボットの作製は成功。

しかし、ペイパームーンじゃんっ！ キーボードがおせんのだ。ああーあ。

おっ、凄げえー、記事、短けえー！

パソコンとステージピアノの接続。楽器の専門店に行き、キーボード担当者と一時間、一緒に調べた。USBメモリで行けるとの結論。帰宅。試す。なんとか漕ぎ着けた感。キーボードコントロールパネルの表示「メモリのサイズエラー」。羽毛っと再度「ローランドドライバー」をダウンロード。「シーケンサー」をダウンロード。羽毛っ！ たぶん、メモリのサイズが違うのだろう、機能しない。夏休み前に私の新しい音楽ユニットの原型を作っておきたい。羽毛っ、こういう時は古典的な方法しかない。パソコンをスピーカーに繋ぐ。ステージピアノ正面の暖炉の上に設置。曲を聴きながら演奏。ピアノ演奏は別途、ピアノからライン取り。二つの音をパソコンでミックス。で、でけた。

やはり、アコースティックピアノの演奏はピアニスト裕イサオ君が前面に出過ぎ。シンセサイザーにすると、若いDJマクサンス君のフィールと上手く融合する。たぶん、我々の新しいユニットの原型になったはずだ。

なかなか、三十年の時空を超えた新しいユニット。諸々の人生訓が脳内を過った。ユニット名は私が勝手に付けてしまった。なんか新しいコカ・コーラ系のような感じになった。

もう、超古典中のオジギャグ。たまに書いてみたい。「この記事がアップされる頃、私はパリにはオランダ」。なんかこのオジギャグ、いまだに得意気にいうオジさんがいる。なんか熱いものさえ込み上げてくる。「どこのドイツだ?」。あっ、書きちゃったっ！

注 ヘッドホーンないしパソコンにステレオ、または専用スピーカーを接続しお聴き頂くと微細な音の変化が分かります。

私と家内は長い間苦楽を共にしてきた。生活苦はずっと続いているが、赤貧までは行かない。適度な貧乏と申し上げる。元々、金銭欲物欲が二人共あまりない。「贅沢は敵」という生活を余儀なくされては来ている。しかし、私たちはそうは思っていない。「贅沢」の質を問いて見ればいいのである。そう考えると、私たちは大変に贅沢な暮らしをして来たという結論になる。

この記事が掲載される頃、私たちはオランダのユトレヒトにいる。

パリから格安バス 安ホテル 朝食代節約のため湯沸かし持参 昼はスーパーのお惣菜であるからフォーク持参 赤ワインは必須であるから栓抜き持参

結局、ユトレヒトの普通の人たちがやっているだろうことを旅人としてやるわけであるからこんな贅沢な旅はないのである。百円のソフトクリームの食べ方が問題なのだと追記する。ねっ、フェアリーさん。

ここは、ずっとお付き合い頂いている読者様にはお馴染み、懐かしのセントレイニーホスピタル。脳ベル賞受賞は確実と噂されるユング・チャオイ教授のリニーマン研究所をお訪ねした。

「ユング先生、リニーマンってなんですか？」
「単なるネーミングだよ、ちみ。絡むわけ？」
「あらっ、話が續かない・・・」
「あのね、正確にはリニアスーツちゃうことね、あんた、もやもやさまぁーずだよ、うんうん、ファンだからお答えするぞって」
「げっ、ユング先生、うなもん、みてんすかっ！」
「おっ、三村っ」
「いきなり、呼び捨て・・・。なんか、ユング先生、大竹に似てない？」
「うん、良くいわれるわけねーだろって。感じは似ているかもな」
「で、センセ、リニアスーツってなんすか、それ？」
「三村君、大竹君の顔真似でご説明していいかちら？」
「そんな芸あるんすか？」
「いいじゃん、あんたらのファンなんだから・・・」
「そのおー、いいとかどうとかっちゃう問題ではないと思うんですけど・・・」
「あんた、絡むわけ？」
「いえいえ」
「でだっ、引力を巨大な磁石と考える。まっ、プラスとしよう。このプラス磁石にプラスをあてれば浮くはずじゃん。うで、あんまり浮き過ぎてもよおー、ヘリウムガス風船になっちゃうから、適度な磁力を研究した。で、でけた。おっ、三村っ、やってみ、とうるるさまぁーずじゃん」
「センセ、二メートルって高過ぎねっ」
「うん」
「で、なんの役に立つんすか？ これ」
「おっ、いい質問。たとえば、ちょろちょろするワンちゃんの散歩。浮かんじやったら風船引張ってんのと一緒にじゃん。しかし、だ。そのちょろちょろくんくんこそがワンちゃんであるから本末転倒。しかるに、飼い主の方が浮かんでワンちゃんに誘導してもらうわけだ。突然、ワンちゃんが鳩とか見付けて駆け出すとちと怖いけど。あとね、たとえば、私の銅像の設置。リニアスーツで巻いて浮かせる。簡単じゃん。まっ、重量物全般の輸送には適用でける。たとえば、グランドピアノね、浮かばして会場まで散歩がてらに引張っていく。途中、風船持った子供たちとすれ違う。オジちゃん、その風船どこで買ったの？ なんちゅう楽しい会話が成り立つ・・・」

「なんか、むさ苦しくね、そんな風船・・・。センセ、このおー、浮かんだまんま撮影してんすけど。しゃべりにくうーっ！ 水平だしっ！」

「おっ、三村君、そのまんま散歩しよっ。それで撮れ高okじゃん」

昨晚、オランダの古都ユトリヒトから帰って来た。旅先で見聞したことが別のレベルに消化昇華するには、私の場合は一週間ぐらい掛かる。一種の時差ぼけ的文化ぼけなのかも知れない。今日は、書きたいことを箇条書き的に書いてみる。

格安長距離バス。共同キッチン付のユースホステル。近所のスーパーで買ってきたものを共同の食堂で食べる。別におかしな話ではない。ただし、この風景の中に私たちのような高年夫婦はいなかった。もしかすると、私たちの内面が相変わらず若者をしている根底に、こういう若者ルートをごく普通にいい年こいてやっていることがあるのかも知れない。「年相応の」諸々という定規がそもそもないことを実感した。やはり、これは一種の逆贅沢のような気がした。ジャズメン冥利なのかも？

今朝起きてユトリヒト＝ゆとり人という語呂合わせが浮かんた。町が綺麗。人々の笑顔。外国人と分かるとすぐオランダ語が英語に切り替わる。汚い、イラついた人たち、外国語拒絶症のパリの風景を思う。このコントラストはなんなのだろう？ 人口三十万人の町。オランダ最古の教会。イギリスのカンタベリーに良く似ていた。ユトリヒト大学医学部出身の医者たちが、日本にヨーロッパ医学を伝授したとなんかのガイドブックに出てきた。不思議な感慨が沸いて来た。

ユトリヒトがどこにあるのかも、きちんと知らない。アムステルダムの南東35キロ。第一、アムステルダムがどこだったか思い出せない。「ベルギーのアントワープの上の方」。フェア(いいー加減えーん＝肯定的リズム＝長調の方です)なのだ。おっ、フェアリーさんのハンドルネームの意味が、今、分かったっ！

自転車自転車自転車

地球が自転していることを改めて思い知ったというのは嘘

たとえば、リスボン、マドリッド、私はこよなく愛する

しかし、である フリージャズをする気には一切ならない

かつての大国 郷愁とフリージャズは相反する

ユトリヒトの人たちを見ていて、私は、ここでコンサート、演奏したいと本気で思った

小さな大国 現在形の国だ フリージャズ こういうものが非常に似合っている

「私信」

私の師匠沖至の教えのひとつに、「疲れた、どこが痛い、調子が悪い、そういう話はするな。少なくとも演奏前はな」。私は以後、肩が痛い、腰が痛い、指の調子が悪い等演奏前も後も言わなくなっていました。「えっ、最近？ 調子？ うん、最高だよ」って言っている自分になっていました。

「追記」

オランダの人々、世界一長身。単に長身というだけでなく、老いも若きもとてもシックなご婦人までもが澆刺と自転車に乗っている。なんとなく、自分の老体を見詰めている自分がいる。精神年齢は相当若いのだけれど、肉体年齢が二十ぐらい先走っている。昨晚、密かに何年振りだろうっ！ 息子の使っていた三キロの鉄アレイを引っ張り出した。三島由紀夫がギリシャ旅行の後にボディービルを始めたことは周知の通りである。もちろん、そこまではやらないけれど、いくらなんでも「ピアノを弾く筋肉以外にない五十七歳男子」。ひど過ぎっ！ と自覚した。

「ミストーン」。トーン村のミスの選考会のことではなくて……。だれもそんなことは思っていないのに書く。「ミストーン」、音楽上の「間違った音」のことなのだけれど、これは以前書いた。「フリージャズにミストーンはない」と。これは音楽的哲学的に再考されるべきことである。だってねえー、「間違った人生」なんてあのかよおー？ 「ない」または「すべて」だ。

今朝起きた時、脳内音の違和感。「ユトリヒト」？ なんか一音違うんじゃない？ ユトリヒトゆとり人……。うん、いいじゃん。でも、なんか、どこか一音違う。おかしいのではなくて、和音として、違う。わっ、ユト「レ」ヒトであった。訂正するには諸々書いたからしない。文章のリズムが違ってしまう。やっぱ、俺ってミュージシャンなんだよなぁーと再認識した。

でね、フランス語の町名の読み方と、日本人である私の脳内メモリのズレが凄い。たとえば、エクスラシャペル＝アーヘン。脳が振れる。シャルルマアニュ大帝＝カール大帝。同一人物とは音的に思えない。アンベエー、これは東北弁に聞こえる。アントワープなのだ。ユトレヒトはフランス語だとウットレッシュ。ウォッシュレットの発祥地にしか聞こえないっ！ フランスの方々、もう少し、言葉に関してはグローバリゼーションして頂戴。ペカン、シャンアイ、これぐらいは許せる。マンショコ、これはチョコレートか卑猥な単語に聞こえる。満州のことだけれど。毎々のカミサンとの会話が時々、地名で珍聞漢文。「あなた、アンベエーっていい町だったわよね？」「おっ、俺はいいアンベエーだぜっ、いつもよっ」「あら、次の停車地、アンベエーだって。懐かしいわ」「だぁーら、俺はいいアンベエーっていったらろっ！」「あら、アンベエーの郊外かしら？」「あのねえー、お前の旦那は日本人なんだから、アントワープといえっ！ ないしは、アントワープでもいいからっ！ フランス人めっ！」

オランダのユトレヒトの澆刺とした人々を見た後、ユースホステルのシャワールーム。自分の上半身が鏡に映る。腕。肘から指までは筋肉が張っている。しかし、肘から上、および胸筋の辺り。「生きる屍」「鶏の首、ないし、鶏冠」「老人」・・・。

私は「自然体で朽ち果てる」ことを、少し理想としているから高年のスポーツ、ボディービル。こういった無理はしないことにしている。というか、していた。年相応のホテルに泊まるなんてことには百パーセント興味がない。そういうどうでもいい社会的なことは、私には一切必要がない。その論理上でも、じゃ、年相応の自然な体でいいじゃんっ！ ピアノ筋があれば。となる。

しっ、しかし、自分の上半身を見ての率直な感想。「生気がない」「生きているという張りが無い」「投げやり感」。もう、酒タバコで朽ち果てるもおーーんという強固な意志ではなく、「だらしなく醜い」のだ。これは、「元元元」ナルシストとすると、わっ！

でね、筋トレを始めた。っても、無理はしない。三キロの鉄アレイを十回ずつ左右。一応、一日、二百回ずつやった。

ところで、私の師匠沖至は腕立て伏せ百回。腹筋運動百回。これを一日の日課にしている。昨日、久しぶりにトランペットを吹いてみた。腹筋がコンニャク。音が出なかった。佐藤真師匠。料理とドラムスで鍛えている。自動筋トレ。

でね、あのね、痩せ型、悪玉コレステロールゼロの恩恵なの？ こんなどうでもいいような筋トレ三日で、私の腕、見違えるとは言わないけれど、二十七歳の痩せ型の腕に戻っているのだ。「腕に生氣」「生きているぞっ感」「細いけれど醜くはない」。

シュワちゃんみたいな裕センセの「お」写真掲載も夢ではないっ！ 悪夢という種類のそれもあるけど。

起床する。妹と弟のメールに返信する。返信しながら、いつもの拙いパターンが脳裏を過る。なんとなくほろ酔い気分で、私は友人知人に、後で読み返すと、なんか独り善がりのメッセージをしばしば送っている。的外れだったり、なんか、私だけがハイになっている。受け取る側のご迷惑、ないしは不快感をまったく考えていない所が、善良な自己中なのだと思う。たぶん、これは治らないと思っている。ブログのコメントも含めて、この被害を被られている方々。申し訳ない。善良な熱血漢の大きなお世話体質は治らない。長男、生徒会長、野球部のキャプテン、日系企業の営業統括、バンドマスター……。悪く言うと、親分気質なのだと思う。

諸々のメール返信を済ませ、昼食を作る。えび天井。赤ワインを一杯飲む。コーヒー、たばこ。少しゆっくりしてから風呂に入る。私は烏の行水系。でも、今日はなんとなくゆっくりと入った。ゆっくりと入りながら自分の腕の出来栄えを見る。高々四日間の軽い筋肉トレーニングで劇的な変化はないはずだ。しかし、なんか、いつもの私のそれと違う。ひとつには気持ちの在り様が腕の筋肉を通して違っている。自然体を標榜はしてきた。ここに、ひとつの大きな興味が生まれてくる。ピアノを弾くための筋肉のみ発達している。それ以外の筋肉を鍛えるとピアノの演奏がどうなるのだろう。という素朴な実験である。すでに、メリハリが付いている。高々四日間で。人間の体のバランスを体感しているのである。少なくとも、腕回りの変化はない。しかし、弛みがすでになくなっている。たぶん、心の弛みもある意味払拭されているような錯覚が起きるのだ。風呂の中で自分の腕を洗っているのではなく、磨いているという仄かな錯覚を感じた。

風呂から上がり、ゆっくりと鼻毛を整えた。夏の陽光の中。鼻の内部が良く見える。久しぶりに髭を剃る。白髪交じりの疎らな髭なぞない方がよろしいと剃りながら思う。髪に水性無臭のポマードを塗りオールバックにする。顔に珍しくクリームを塗る。父が使っている銘柄が幼少期の記憶として一瞬頭の中を過る。

すっかり綺麗になった私は、ゆっくりとタバコ屋へ向かった。

すっかり綺麗になった私はタバコ屋へ向かった。1900年に開発された、開発という言葉が少し変ではある、古い家並みが左右に並ぶ住宅街を抜ける。日差しが強いから、北側の影の方を歩く。所々、影に隙間ができる。金色の日差しの部分は足早になる。黒い影と金色のように見える日差しの部分のコントラストがとても綺麗である。

数分も掛からない。とても古い市民公園へ入る。芝生の上で語らう若者たち。ベンチで日光浴の人たち。老人。小さな町、フランス全土が夏休み。人の数は大変に少ない。

木陰を探しながらゆっくりと歩く。市民公園、斜めに横切ると十分も掛からない。出口の小道に出る。小さな町の大聖堂のファサードが正面に見えてくる。なんとはなしに時々入る。サングラスを外して、ゆっくりと大聖堂の内部を細かく見てみる。いつも、ほとんど人はいない。私は無宗教、無政治である。でも、この大聖堂の内部という空間をこよなく愛している。信仰、祈り、それぞれの中にあればいいと思う。私がジャズを信じているように。そして、祈りの空間の静寂はとてもいいと思うのだ。

フランスは、どこの町、村でも必ず中心に教会がある。こうして、膨大な時間を流れてきた人々を統括してきた。そういう意味で、人々、私も含めて中点は必要だと思う。そういう風景が好きである。仮に、私のそれがピアノ、ジャズであっても生の遠近法とすれば、同じ構図になる。だから、私はジャズがすべてではないことを認識している。ミクロな世界の信仰、おのおのの中で・・・。

私の住む小さな町。ピサロのほとんどの絵が制作された町である。「歴史的な町」の認定を受けている。大聖堂の左側の小道。本当に短い。カフェ、レストラン、ワインバー、ベトナム系フランス人のガラス細工のお店。この小道を抜けると丘の頂点である斜めに傾いだ広場にでる。タバコ屋はその対角線の向こう側である。

風呂上がりの綺麗な私はタバコ屋からの帰路というほどでもない行程を歩きながら、正直に書く。諸々の逡巡。長男であること、老いた両親を被災地に放置していること、母国へのノスタルジーが皆無であること・・・。私が自由を求めてここに来たこと。そういった諸々の逡巡が、まったく頭の中から消えていた。

今だ、二十年後、ベンチに座っていた老人は・・・、よく見ると、私だったのではないかと一瞬思いつつ、同時に、私はキリコの絵の中を歩いて来たとも思った。

そして考える。脳と体のバランスのことを。そして考える、それを今は考えることができるということ。できなくなった時、たぶん、私は、それでもピアノの前にいるような予感がする。怖くて悲しい風景にも見える。

「先生、何卒、これで・・・。ご不満ですか？」

「うん、不満」

「おいっ、富山あー、もうひと箱持ってこいっ！」

ユング・チャオイ教授の研究室のソファテーブルの上に、十二億円の現金が乗っている。もうひと箱の中には三億円。むっ、ひと箱に入るのか作者の私には分からない。

「先生、十五億、です」

「あのね、僕の開発したりニアスーツなんだけど・・・、ご存じの通り、重量物の運搬、非常に高いところでの作業等々、実用化されると経済効果は十二兆円と試算されてる」

「しっ、失礼致しましたあー！ 富山、あと、二十箱持ってこいっ！」

「でね、これをね、軍事関係に応用した際の経済効果？ 私は戦争が経済効果とは理解していないが、試算すると三百八十兆だよ」

「しっ、失礼致しましたあー——————っ、おい、富山あ——、あと・・・」

ユング教授の前に段ボール箱が積み上がった。

「ぜえぜえ、先生、百五十億ございますが・・・」

「不満だね」

「えっ、そんな殺生なあ——」

「石山君、あんた、社長だよな？ あのね、僕が言いたいことはね、うん、結論から言うね。特許権はあなたには譲渡しないよ。うん、僕のね、私生活だけで活用することにしたんだ。たとえば・・・。二階の窓拭き。浮いてるから駱駝。でね、最近ね、新しい筋トレね。空中水泳。手にね、内輪持ってクロールの真似すると、凄くゆっくり前進するわけ。高年に丁度いいわけ。でね、垂直浮遊象さん足を開発したんだよ。見て見てっ、この象さん足を履くとね、垂直に浮くのだっあ——、可愛いでしょ？」

石山社長、富山部長。

「だめだあ、こりゃ」

自分でも暇なのか忙しいのかよく分からない。タイトルは多忙としたけれど、多忙ではないなあー、いくらなんでも……。考えてみれば、大体、考えないと気が付かない方がおかしいのだけれど、本日から一週間、私はリムジーン会社の方、在宅勤務なのだ。お客様の質問、見積もり依頼に答えないといけないのだけれど、問い合わせがないから、勤務しているだけでなんもしていないのだ。一応、勤務してるぞっ体制にはなっているけれど、次のコンサートの企画だの、新しいユニットの打ち合わせだのをやっている。

新しいエレクトリックDJユニットのお披露目は10月13日に決まった。わっ、諸々の微調整をせんといかんけど、まあ、時間はあるよなあー。とうとう、息子の親友とグループかよおーと少し感慨が沸いてくる。ぴったり、30歳違うんだもんなあー。今朝、彼が新曲11曲をWeTransferで送って来てくれた。いい感じである。これはカラオケじゃないから聴いてフィールを掴むだけ。

おっ、またまた、急に思い出した。彼の送って来た私用のカラオケの音を私のローランドステージピアノで再生し、私がシンセサイザーを被せる。見事に失敗したのである。USBメモリ、ローランドドライバーのダウンロード、シーケンサーのダウンロード、一応、理科系脳で考えたこと、調べたことはすべてやった。駄目だったあー！

そして、その、勤務時間中に？ 本当に突然、ローランドの液晶パネルの表示が脳裏を過った。「メモリサイズエラー」。この推理小説的謎の表示。メモリサイズ？ パソコン音痴にはなんのこっちゃか分らん。でね、突然の刑事コロボっ！ 彼が送って来た11曲の右側にMP3 MP3 MP3・・・と表示されている。ローランドドライバー、シーケンサー、よおーく考えたら、正式名称はもローランドMidiドライバー、Midiシーケンサー。こっ、これだっ！ なんのこっちゃか分らんけれど、サイズというのか周波というのか録音形式というのか、なんか、そういうものが違うんじゃないか。で、論理的に調べることはひとつである。「MP3をMidiへ変換する」と自分でもなんのことかまったく分からないのに要点はこれしかねえーべ？ 今、調べた。ずばりである。

「MP3-Midi無料変換ソフト」。でっ、出たあー！ 早速、試してみっぺって。勤務中だけど……。

注 勤務中っても出来高払いだから、別に他のこととしていいわけ。でも、勤務中でないといかんところがねえー、まあ、そういう職種なわけ。待機中であって休みではないのだ。お給金は出来高＝ご質問等にお答えした実労時間なんだよねえー。そういう仕事なんです。

書かないこと、かなり強固な意志で絶対に書かないこと、これと、書きたくないこととは当然にして違う。私が畏敬する富岡多恵子の見解では、文学とは、この後者を書くこととなる。ブログでも同じだ。書くという営為に変わりはない。しかし、書くのであれば、富岡さんみたいなとんでもない気骨がいる。なんとなく、日課のように書いちゃったあ——というスタンスではねえーとなる。この後者にブログで迫れるのか？ これは長年というのか永遠というのか、私の馬鹿真面目脳逡巡要因のひとつなのだ。う——ん、トライしてみる。

このタイトルの二つの日本語。妹と発作的にメールのやり取りをする。この中に、頻繁に表れた単語だ。

もちろん、黙読＝漢字で前者の意味は分かる。読み方が分からない。ビジュアル黙読で想像する。しかし、語源が分からない。後者、就職活動の略の誤字？ これが第一印象である。「終わる」という漢字と「活動」、真逆の漢字が合体している。いかに、フリーズ屋でも脳が振れた。しかも、前者と後者は、幾分か合体している。「終活のための断捨離」。正直、意味が分からなかった。

私の家内に下手なフランス語で、この二つの単語の意味を翻訳した。はっきりした回答。

「若者だろうが高齢者だろうが、今、生きていることは同じ、そんな追い詰める様なことは論外。自分の去った後なんて考えなくていい。今、生きている。それだけ。ガラクタの整理、それは次世代の仕事のひとつ」

個人主義の理論を私は相変わらず、なんか、感情的センチメンタル系なのか、結局、理解していない。

怖い裏側。つまり、野垂れ死にもありえるという結論なのだ。やはり、金子光春の晩年の自伝三部作がまたしても脳裏を過る。「西洋世界では、敗者が生き残る公算も復活することもない」。

そう、次世代の判断に異論を挟まないということと理解した。お互いに勝手気ままであるから、理論的にはそうなる。少し勉強になった。

ところで、「断捨離」、読み方も意味も、ヨガ的な意味も理解したというか、私は、小学校六年生の時に、すでに理解していた。私の持っている物の中で金銭的な価値があるもの。家、ピアノ二台、以上なのだ。身の回り品？ 中箱の段ボールひとつ。すでに、整理されている。美術家

時代の全作品資料未完成作品の設計図。小説原稿。プリントアウトされたブログ記事。ピアニストデビュー当時のカセット。これだけだ。

「終活」？ 私のピアニスト「活」動がすでに「それ」だ。うん、昨晚、ひとりで笑った。私はお墓の場所は決めてある。お墓の設計図だけなんじゃないの？ 残っているのは。うん、バン・ゴッホのお墓の蔦のない初期の状態。となる。息子と娘に口頭で伝えてある。「死んじつまった親父に多額な金なんぞ掛けんじゃないよ。墓参りの後にね、美味しいもの食べてもらって頂戴。墓石なんてよ、俺は嫌いだから、気楽な縁取りがいい

なぁー。なんか、じゃ、つうー感じになるじゃん？ 第一、墓参りだの、俺の墓のデザインだの、残ったお前らにとっての、なんか、行事みてえーなもんだから、お前らが、馬鹿でか墓作んねえーと立場上、やばいってんだったら、そうしな。でも、世間的な面子とかよぉー、俺、パパの一番嫌えーなベクトルでやるんだったら、ノン・メルシ」。

私は「人間の寿命」は五十年と理解している。変ですか？

筋肉トレーニングなぁーんていう仰々しいものではないけれど、軽いそれを初めて10日ぐらい経った。痩せ型の得なところは、すぐにその成果が分かる、見える。腕回りの「プルプル」はなくなった。これだけでも随分違う。腕を曲げると力瘤、大したものではないけれど、くっきり。今の息子の年に半年間、本格的にやったことがある。この時は本格的だったから腕回りがぶっとくなった。今でもその時の写真をたまにカミサンが細目で見ている時がある。「これぐらいだと、さすがに恰好いいわね」といい、「現在の私」をちらっ。若干悲し目になる。「あなた、もう、水着は無理ね」「えっ?」。そう、今週末から10日間、一家で海っ端の小さな貸別荘に行くのである。わっ、肉体改造、間に合うかしらぁー！ 体重差30キロの息子の横を歩いていると、なんか別の生物(私)のような感じになる。「手拭と洗面器持って、前を手で押さえて海に入る」という風情なのだよっ！ なんのなんの腕だけでもなんとかしてやるぞっ！ 海難救助隊に流木と間違えられて片付けられちゃったりして。

まあ、「みすぼらしい」感じは若干なくなったのはいいのだけれど、わっ、肩凝りが酷くなってきた。鉄アレイも段々と重く感じられてきた。高々、この程度で私の筋肉が悲鳴をあげている？ なさけねえーなぁー、ったく。

あのね、今より体重が20キロ重かった15歳のイサオ君。キャッチャー。四番。野球部のキャプテン。甲子園を目指していたし、一級先輩は実際に行ったのだ。甲子園投手の球を二年生の時にブルペンで受けていた彼は、だれだったのだ？ 同じ人とは到底思えないねえー。

なんか気になる単語をくっ付けてしまった。私の興味は「終活」という日本語の意味というのか、日本でどんな風に使われているのか？ 以上なのだけれど・・・。

たとえば、私の家内も娘も「ちまちま買い物」大好きである。私は、こういう女性の「買い物欲」は自然だと思っているから、哲学概念としての「断捨離」とは関係ない。たとえば、私からすれば「同じような」衣類、アクセサリー、バッグ……。私と息子は、家内、娘からクレームが来ない限り、ずっと、同じ衣類、カバン、靴……。もう、私の一家に関しては、男どもは毎日が断捨離なのである。

女性の「ちまちま買い物」。こういうものを哲学的なもので抑制するのは良くない。女性が哲学的ではないという性差別ではもちろんない。どうしてなのか、私はおかまではないから分からないけれど、ヨーガの哲学概念をこれに当て嵌めるとするのは音楽にならない。その、私にとって、仮に似たようなTシャツが千枚、これは算数上、当然にして必要ないといいたいけれど、それは、私が「似たような」と私の中で判断しているからなのだ。だって、私にとってTシャツはTシャツというひとつの形で以上おしまい。色なんてどうでもいいのだ、私には。と、これこそ、哲学概念の断捨離。こういうことを楽し気にバーゲンセールで盛り上がっている方々にしたり顔で・・・、わっ、怖いっ！

「終活」、こちらは興味ある。インターネットで調べたら、元々はお墓とか、その自分が去る時の準備という意味だったそうです。それが、「それ」を自覚することによって、じゃ、どうしたら充実した日々を送れるのか？ というポジティブな意味に変わったらしいです。

もう、まとめてしまうと、「死を見詰めることで生の在り方を考えなさい」。これなんだけれど、自慢話ではないよなあー、私は十二歳の時から、ずっと、「そう」思っていた。年取って気付くなんていう方が、私には？

ブーツストラップさんの記事「うつせみ」、フェアリーさんの桂歌丸師匠の談話、もう、「それ」について、私がぐだぐだ書く必要はないと思う。

「パソコン内の曲を、私のステージピアノから鳴らす」。正確には、私の新しい若い相棒が作ったカラオケ曲を流し、それに同時にピアノないしシンセサイザーの演奏を追加する。簡単にできるとパソコン音痴だからこそ思っていた。

私の持っているヤマハのサイレントピアノ。こちらは約二秒で接続完了。当然、ステージピアノ(ローランドの電子ピアノ)の方が、そもそもそういう機能を最初から持っているはずだから、約一秒で完了すると思っていた。

わっ、人間関係ともしかするとまったく一緒なのかしら？ 考えてみたらどちらもパソコンなのだ。似た者同士の接続の方が超難しかったのですよぉー！

一昨日午後、私の新しい相棒宅で諸々の打ち合わせ。なにしろ若者だから飲み込みが早い。「ねえー、メールでもらった曲なんだけどよぉー、俺のローランドで鳴らねんだよ。どうしたらパソコンと接続できんの？ 知ってる？」

「あれれ、イサオのやつってさ、プロ用のすげえーやつだよ。できないわけないじゃん。モデル名教えて」

「Roland RD-700GX」

パソコンちゃかちゃか。

「わっ、すげえー、全機能付いてんじゃん。ちょっと、待って……。うんうん、はいはい、そうそう……。USBメモリで行けるよ」

「あのねえー、楽器屋さんで調べてさっ、もう、やった。メモリエラーって出てきた」

「あっ、それね、今まで使ったメモリでやったんでしょ？ あのね、新しいの買ってね、ローランド専用にすることと、ローランドで初期化して使えば大丈夫だよ」

「なんのこっちゃか分かんないよぉー、MP3 WAV Midi、おっさんの頭には入らないの、いやいやしちゃって」

「あっ、それね、形式変換なんていらんよ、イサオの持ってるやつ、すべての形式に対応してるって書いてあるよ」

「なんだよぉー、そういうことじゃないの？」

「うん、新しいメモリ買ってね、ここがポイント、ローランドの電子ピアノ内のインジケーターの中に初期化つういの絶対あるから、これをする。その後、俺の曲のコピー、戻す、再生」

「本当かよぉー、そんな単純な話なのかよぉー、もう、三日ぐらい悪戦苦闘してんだぞっ、俺っ」

さっき、スーパーでUSBメモリを買ってきた。七百円ぐらい。言われた通りにやった。十分後、私のローランドから流れる相棒の曲を聴きながらこれを書いている。理科系数学元得意だ

ったあー自負心は粉々の木っ端ミジンコっ！ なんの役にも立たんかった。

ねえ、マクサンス君(相棒の名前。自分のレーベルをすでに持っているのだ。レーベル名を日本語訳すると「空中少女」)、こんなおっさんとエレクトロDJユニットなんか作っちゃって大丈夫なのかい？ 「インジケーター」、これだってイジケタやつって聞こえてたんだっ、正直言うと・・・。

私がちんぷんかんぷん、かんぷんちんぷんの会話をしている間、息子がソファーにどんと座り本を読みつつ、たぶん、サングラスの中は点目だったような気がする。「ねえー、パパ。初期化が必要なのはあなたです」って。

明後日からブルターニュ地方の海っ端へ一週間行ってくる。このリムジーンドライブの休みなのだけれど、「仕事のない日」も多い。しかし、これは休みの日ではないのだ。大袈裟に書くと「いざ、鎌倉状態自宅待機」。突然の会社からの電話、オーダーに答えられる状態になっていないといけないのである。と、なんだかややこしいのだけれど、明後日からは「休み」なのだ。

夏のバカンス真っ只中、隣近所、ほとんどいない。このフランスの夏の長期休暇は、一年の仕事と気持ちを半分にする感じ。以前にも書いたのだけれど、私が日本を出る頃、「俺がとっつあんになる頃は、日本にもバカンスが定着してんじえね」と思っていた。外れでした。たとえば、フランスで有給休暇を一日削減するなあーって、政府が言う。暴動が起きる、確実に。もう、フランス革命は生きている。年間五週間の有給休暇も国民が勝ち取ったという意識が強いのだ。まあ、フランス人一般の興味は、家庭、持ち家、食事、セックス、バカンス、定年。会社とか仕事は圏外のはずだ。

うん、私たち、そう、我々老夫婦と息子娘と曖昧にもう一人若い人と曖昧にもしかするとワンちゃん。男どもの持ち物なんぞほとんどない。しかし、スズキスイフトのトランクはないに等しい。乗れんのかよーって、おいっ！ 本当に申し訳ない例え。戦時中とか難民という言葉が浮かんでくる。まあ、私も自慢ではないけれど社会的経済的難民ではある。といいつつ、海、海岸真正面の小さい貸アパートを借りているから、貧乏なのかどうなのかよく分からない。貧乏なのになんでバカンスなんかやっちゃうの？ という疑問もある。とはいえ、わざとミュージシャン用語にするけれど、フランスではジキコもバカンスなの。

まあ、働き者の私とすれば、別に延々と仕事していて別に構わないのだけれど……。でも、こういう仕事中毒の人ばかりだと、国は滅びる。商事化すると少子化。文化の分化。夫婦関係は不倫ジャズ。世界が歪む。小説は憔悴、お小水。詩は死。ブログは風呂具。休むこと、一回、社会から切れることも大切です。などど、糸の切れた社会的風の裕センスはおっしゃって居るぞっ。

やっぱ、わりいー、私の見解では、
あっ、雰囲気がつ、痩せたっ、マツコ・デラックスっ！

日本は文化的先進国にはならんと思う。いや、すいません、西洋世界的なという意味では。うん、ならないならならぬでいいのだ。でも、そういう意思を感じない不思議な国に映る。あたしはっ、モンペしか履かないっ！ こういう感じはない。

まあ、フランスのバカンス。私は諸々の意味でとてもいいと思うのだけれど・・・。

ピアノなし ブログ書きなし 拝読はするけど 海 日光浴 水泳 飯 家族 ウォーキング
うおーー！ キングの生活っ！ だれだっ、横綱のことを、スモーキン
グっ！ しっ、失礼だっ！

私は東北生まれ育ち。なんか夏のバカンスも北へ向かう傾向がある。南国のトーナリティーが好きになれないのだ。南国の人々への偏見はない。好きになれないだけなのである。ジャズ。ニューヨークのそれしか聴かない。ウエストコースト系は受け付けない。フェルディナン・セリーヌの「北」という小説。阿部薫の数少ないレコード「北」。どこかで、私の琴線に触れる。そのタイトルだけで。ヘンリ・ミラーの処女作も「北」回帰線なのだ。わっ、根暗なんじゃね？ うん。

でね、良い子の皆さん、これ聴いて、待ってて頂戴ね。三十年という年齢差を一応乗り越えたつもりで作りましたっ！

じゃ、行ってきまあーーーーす。馬鹿んすへっ！ なんなん残暑っ！

注 お手持ちのヘッドホン、可能であれば東京ドームに鳴り響くぐらいの巨大スピーカーにてお聴き頂くと、猛暑吹き飛び若返るはずです。

あっははは、どうでもいい記事更新なのだ。マクサンス君との新しい音を聴いていると、聴きながらなんか書きたくなる。もちろん、赤ワインをちびちびしながら・・・。

10日間ぐらいピアノを弾けないから、バカンス前の閉めの練習をした。やや、ぎこちない音階の練習というサドマゾ的なプログラム。いざっ、バカンスっ！ 盛り上がって、弾きなれた曲を弾くという手もある。しかし、わざとぎこちない系にした。バカンス後のことをピアニスト先生は考えていらっしゃるようである。すっ、すごっ！ くつろがない主義なの？

内村選手の演技をリアルタイムで見た。まぁー、すごっ。スピード、形が圧倒的。金メダルじゃないと、他が言い訳でけんだろな、あのレベルでは。水泳、体操、柔道、おっ、日本の若者、元気だなぁー。いいことだ。

でね、筋トレは続いている。しかし、なんか筋トレをしていたら、むしろ、体操なんじゃね、とつつぁんには・・・と思った。でもね、筋トレしてたら「そう」思ったから、多少は体に張りが出て来てんだろな。筋も金肉むくむくも無理だ。そうかぁー、ピアノ弾きには体操がいいかも・・・。昔は演奏前にやってたんだよなぁー。体操さえできないカチカチ体になっとったんだねえー。柔らかいのは頭だけかよってっ！　なんか違うなカチカチヨボヨボヘタラになってたんだろな。

えっ、内村さんみたいに？　わっ、ご大層っ！　ストレッチングちゅう程度、です。

若干、脳が活性化している気もするという気のせいも起きる。体と脳のバランスのことを、おっ、この記事がアップされる時、わたくしは海辺にいるんだべ。うん、脳は前からあるけど、体もある。でもね、股間の中央の司令塔のような方が昔はいらっしゃって、脳と体と司令塔という三つ巴状態から、わたくしは解放された。司令塔は脳のはず。しかし・・・、そうならんのだよね、当時は。

書き溜めを自分の演奏ビデオを聴きながらやっている。ナルシスなんじゃね？

うーーーーん、そうかも知れん。元、だろうなぁー。今は見てくれなんてどうでもいい感じ。志村けんさんと柄本明さんの芸者コント。「どうでもいいわよねーーーー」。

わっ、考えたら、92パーセントぐらいのことが「これ」だ。家族が元気で音楽してればいいという分かり易い人にやっとなっちまったぜっ！

昨晚、ブルターニュ地方の海辺のアパートから自宅に帰って来た。諸々のことが脳内で渦巻いた。しかし、ブログ記事として書く気持ちがまったく沸いて来ない。その訳は、もちろん、私が一番知っている。

海岸の真正面のアパートの、しかも、地上階のテラスでビールを飲みながら、私が僭越にもリンクさせて頂いている五人のブロガーさんたちの記事。リンクはしていないけれど、ブーツストラップさんと、もし、猫だったらさん、計七名のブロガーさんの記事を毎日拝読した。私のそれは本当に愚ブログだと思っている。たぶん、だからこそ、この素晴らしいブロガーさんたちからの啓発は凄いのだ。私の脳内で海の音とお気に入りブロガーさんたちの記事がフリーズした。

その結果、いつもの私の悪い癖なのだ。「あとがき」を書きたくなる。あとがきだけの小説を書いたこともあるのだ。うん、もう、ブログは止めようと二秒前まで考えていた。で、私のサイトを開きご訪問頂いた方のリストを見た。更新していないのに毎々ご訪問して下さる方々が私にはいる。本当にありがたいことです。「私の愚ブログを毎々楽しみにしてくれている方」がいる。私はミュージシャンだ。毎々、私のコンサートに足を運んでくれる少数の方々がいる。絶対に裏切れない。逆にシャキッとす。

ヘンリ・ミラーの「裏」代表作に「マルーシの巨像」という紀行小説がある。

たぶん、ブーツさんの影響なのだと思う。きちんと調べて、私なりの「小説」にしてみようと強烈に思った。

私が、自分の体験を小説化しようと切望する。これは、非常に稀なのだ。しかも、長調でだ。

陳腐なタイトルにしてしまった。私が一週間過ごした町はペロスギレック。ブルターニュ地方最北端、人口7500人の小さな町。実に美しい砂浜が広がる。砂浜の、もちろん、陸地側の中央に観光局がある。私が借りたアパートは、その観光局の真正面。つまり、砂浜のど真ん中。モダンな一軒家なのだけれど、二階が大家の自宅で、一階を3分の2と3分の1に区切り、貸別荘になっている。3分の2の方を借りたのだ。お隣は毎年来るイギリス人ご一家。両親、娘、息子。子供たちは中学と小学校だろう。

毎々のプランは旅行狂の家内が決めるのだけれど、私は夏に海辺。難色。どうして？ 人々人でごった返すことが当然にして予測される。何度かこれには辟易させられているから、今回も??? とはいえ、息子娘も一緒だ。20代の連中にど田舎という訳にもいかない。とりわけ息子は水泳、海狂。やはり海辺となってしまった。

砂浜のど真ん中。パーキング付き。予想に反して、それ程の人でもない。高年、小さな子供連れのファミリーがほとんど。南仏みたいに金持ちのコンクールなの？ という私の大嫌いな雰囲気ゼロ。もう、真正面が砂浜だから、息子は朝起きると早速海パン一丁で海へ走っていく。パーキング探して難儀している人たちの車をテラス越しに見る。

雨の多いブルターニュ地方。雨が降ったのは一日のみ。後は快晴。若者は海へ。我々高年夫婦は海沿いのハイキングコース。このコース。西側には高名なバラ色巨石群。東側にはこちらも高名な切り立った巨石群。家内と夢中になって歩き回った。

海岸沿いの小道。アンリ・ルソー。

バラ色巨石群。イブ・タンギー。

切り立った巨石群。マックス・エルンストのフロッタージュ。地獄絵図とか世界の終わりの光景にも見える。

海、ブルトン人気質、古代の風景・・・。

メールゼロ。会社員時代、バカンス中でも電話、メール70件。どこがバカンスだったのか分からないのだ。

頭が初期化して行くのが自分でもよく分かった。逆に諸々のことを考えもした。昨日、ヘンリ・ミラーの「裏」代表作「マルーシの巨像」と書いた。どうして？ ミラーといえばハレーションを起こしたフリージャズの文体がその第一の特徴。しかし、「マルーシの巨像」は実に静謐な柔らかい文体で書かれているギリシャ紀行。

私の中にも、レベルが同じとはいわないけれど、ミラーにこんな散文を書かせた恒常的な幸福感のようなものが込み上げてくる。苦行ではなく、楽行の末に悟りを開くというような、少し笑いさえ込み上げてくる現象が起きている。もう、絵に描いたようなバカンスだった。

昨日、23日はリムジーンドライバー夏休み明けの仕事始めの日。朝、風呂場で歯を磨いていた。若干、中腰でうがいをしていた時、腰の背骨、私にとっての左側に違和感。激痛という感じではなく違和感。シャツ、ネクタイと仕事の支度。階段を降りる時、腰に痛み。

我が社のお客様の大半はビジネストリップ。しかし、昨日は、プライベートな家族旅行。このケースは、気さくで陽気でフランスのことならなァーでも知っているベテラン高年運ちゃん、この調性がベストなのだ。昨日使用した車。ワーゲンのミニバス。車体中央の馬鹿でか扉の開閉、かなり腰を振じる。トランクルームの馬鹿でかバックドア。跳ね上がるから、気を付けて開けないと顎直撃。スーツケース6個と連絡が来ている。とはいえ、トランクルームの床が低いから比較的持ち上げるのは楽。

この諸々を笑顔でできるのか？ 腰痛しかめっ面不機嫌運ちゃんになっちゃったらやばい。幸い、昨日の車。中央扉電動。うっひひひ。笑顔。バックドア。痛たっ。跳ね上げを抑える時に痛み。でも、口元「だけ」笑顔。旦那さん、どう見てもジムで鍛えている。スーツケースを軽々と積んでくれた。セーフだった。ホテルはポーターがいるから大丈夫。

ほっほほ、車中は気さくで陽気な・・・に徹する。セーフだった。因みにうちの社長。私より5歳年長。慢性腰痛で重いものが持てない。目駄目、歯駄目、本人談では頭も駄目。本人談では下半身も駄目。作者の診断では、初老性ロリータ症候群。しょっちゅう電話がくる。9割以上、下ネタとオジギャグ。「社長、すいません、ご要件は？」「あれっ、俺、なんで電話したんだっけなァー。裕さんのレベルに合わせちゃうからちっとも仕事の話にならんなァー」などと、私のせいにするのだ。

昨晚はびっこを引きながら坂の上の自宅に辿り着いた。

今朝、コーヒーを飲みながら久保の兄貴のブログを開いた。「ヨーツー」。久保の兄貴は私のブログ師匠。この涙ぐましい師弟関係。笑い過ぎて・・・、腰痛が悪化っ！

裕イサオのユニット名をYO2と陰口叩いているのはっ、どこのドイツ人だっ！ ドイツもこいつもっ！ 都々逸のひとつもやってくれっ！ ど、ドついたるっ！ これは、同一犯ですね。土井警部。

伊沙ノ助、御年 89 歳。推定資産 120 億円。

現代美術のマルセル・デュハクソン受賞が 28 歳。芥山賞、36 歳。スイングジャーナルルベストピアノ賞、57 歳。すべての賞を総なめにして来た。美術作品は億単位で売買。小説はすべて永遠のベストセラー。ピアノCDは、ついにキュンス・ジャレットのケルルンコンサートを追い越した。

いつの間にか億万長者。

しかし、伊沙ノ助、根っからの貧乏性。というのか、贅沢品にまるっきり興味が無いし、収集癖もゼロ。

家 小さい平屋

食事 美味しい庶民的なもの

車 燃費とハンドリングのいい小型車

衣類 興味がない

女 御年 89 歳のトメと初婚のまま鴛鴦

毎月入ってくる巨額な利子はすべて諸々の文化事業に寄付。二人の子供たちには生前贈与。といっても次から次から金が入ってくる。湯水のように入ってくるばかり。溢れる温泉。しかし、伊沙ノ助、ピアノの難しいコードワークの習得以外に脳内にはない。

と、一昨日、ここまで書いた。でね、昨日ね、仕事の後に某高級ホテルからカクテルパーティーのお誘い。まあ、客足の激減したパリのホテルを少しでも宣伝してえーという、ちょっと、悲痛な感じもしなくもない。三部屋の見学。料金？ 知りたい？
じゃ、行くね。8000、1500、800eurosです。百万、二十万、十万つうー内訳、もち、一泊だよ。シャンパンとおつまみっても二つ星レストランのそれだ。美味かった、正直。

うん、もう、本当に溜息が出るくらい素敵だった。のだけれど、私自身は、もちろん、経済的に不可。でも、泊まりたいの？ これもゼロ。じゃ、箇条書きにするね。

建物調度品が重厚、とりわけ、扉が腰痛の私には重過ぎて開けられない。薄暗いライティング。今、パリのジェットセット(大金持ち＝社交界)の間で人気。顔を見られたくないのだろう。オスマンスタイルだから迷路。方向音痴の方は玄関に辿り着けない。緊急時はやばい。テラスでカクテルを飲むお客。我々ビジターの方を見る。

全員 ふんぞり返って 葉巻 我々を見て あからさまな 嫌悪感 貧乏人は 来るんじやねえーという表情

私は、当然にして元営業マンだから植木等のものまね。嘘。

でね、うちの哲学者のKamisanにその話をしたら・・・。

「あなた、「こっち」が不快感持つのと同じことだよ。よかった、だから、言ったでしょ、ワイシャツにもう一度アイロン掛けるって」

どうでもいいような狭い衣装棚から日中35℃のパリヘだったから半袖出したら背中がしわしわだったらしいのだけれど俺はもうネクタイまでしているからめどうだなあーもう一回脱ぐのってダダを捏ねていたのだもしかするとやばかったのかしらねえこういうカクテルパーティーにしわしわシャツでもね図書館まであんだよねそこにスタンウェイのグランドピアノがあった

外は炎天下 35℃

北フランスでは滅多にない

この中 黙々とピアノの練習作曲ビデオ撮りをしている男がいる

雨戸を締め切り サロンのブラインドは降ろしたままである

この孤独に支えられてステージに上がる

日本語 主語がないからだれなのか分からない

ヘンリ・ミラーの晩年の家。アメリカのどこか。調べる気力がない。池田満寿夫さんのエッセイの中に、訪問時の様子が書かれていた。大きな一軒家の大きなサロン。サロンに大きな一人掛けのソファとテレビ。これしかなかったと書かれてあった。このエッセイを読んだのは、確か、私が十九歳ぐらい。このイメージは今でも焼き付いている。

考えてみれば、現在の私の生活。椅子、机、パソコン。サイレントピアノとステージピアノ。安ワインと煙草。もう、これで全部という感じである。かなりミラーに近い。当時、ミラーは八十代。ホキ徳田さんに熱烈な求愛中だった。これは無理だ、私には。

あっははは、先日、某高級ホテルのカクテルパーティーにご招待されたことは書いた。以下、生活困窮者の負け惜しみ？ を書いてみる。

私というかカミサンも含めて小旅行の時に泊まるホテル。フランスで二番目に安いチェーン。一番、安いのが「F1」というところ。我々が利用するのは「プロミエクラス＝ファーストクラス」。格安ホテルにファーストクラスというネーミングがなんか楽しい。正規料金は普通48euros。事前予約すると36euros。日本円換算するとそんなに安くもない。朝食は別途5.50euros。考えたら、私が日本、たとえば仙台とかで泊まるビジネスホテルが朝食付きで六千円ぐらいだから、それ程安くないなあー。納豆だのゆで卵が出てくるからむしゃむしゃ食べる。フランスではコーヒーのみ。で、生活が貧窮しているから湯沸かしと粉末コーヒーとミルク持参。カミサンの朝食はクロワッサンだから前の日にパン屋で購入。これで、 $5.50 \times 2 = 11$ eurosが浮く。ケチ？ どうでもいいような朝食にしては物凄く高額じゃありません？

どうしてここを気に入っているのか？ 安ホテルだけれどほとんどが新築＝清潔。そして、先記の高級ホテルの迷路密室感。これの対極。各部屋の入口が各部屋に付いている。扉を開けると外なのだ。この解放感が実によろしいのである。私は愛煙家だからますますよろしいのだ。泊り客も、扉開けっ放しという方々、パーキング横のハイキングテーブルで夕飯なあーって方々も多い。先日もペロスギレックの貸アパートに行く前日に泊まった。三階のテラスから煙草を吸いながら泊り客を観察。オフシーズンは工事関係の人たちのバンが多いのだけれどバカンス真っ最中。商用車はほとんどない。

パーキングに並ぶ車を見ていて、あれれ？ 生活困窮者用安ホテル＝小型大衆車が並んでいないと少し変なのだけれど、なっなんと三分の一ぐらいが高級車。三分の一が中型。三分の一が小型。BMWの四駆だのレンジローバー、プジョーの黒塗りの大型車。どうしてこういう車が並んでいるの？ お財布の紐が固いというのか、実に堅実だよなあー。寝るだけなんだもんねえー、ホテルなんて。実は、高級ホテルの営業の別嬪のお姉さんに「俺、プロミエクラスの方がいいなあー」と言いそうになったのだ。

ついでに、食事。これは皆に馬鹿にされるのだけれど、私はカフェテリア「フランチ」の大フ

ァン。マックより安い。しかも、ワイン付きの定食。6.50eurosから・・・。しかも、添え物は食べ放題。とりわけ、ガスのバーベキューで焼いてくれるお肉が実に美味しい。ビックマックに7eurosなんちゅう高額な料金を払う気にはならない。私は料理狂だから自分で作れるもの、しかも、自分で作った方が美味しいものを絶対にレストランで食べない。スパゲッティー系、ピザ、クレープ、うどんそば・・・、ついでに握り寿司。ムール貝の白ワイン蒸し。

あっははは、ここは日曜日も開いている。フランスでは珍しい。日曜のお昼に良く行く。ここで食べてお散歩。家族連れ。たぶん、慎ましい暮らしをしているであろう高年初老夫婦。一人暮らしの人。外にテラスもある。なんか、私はこういう慎ましい日常生活の中にいる方が気持ちがいいから、星付きレストランとかは駄目なのだ。どうしてもいいけど、ラーメンとケバブは家でできないから前者はパリの日本人街に行く。後者は近所のトルコ人のおじさんの店に行く。

一流品を知らない無粋者？ うん、そうかも知れん。昔、旅行会社のマネージャーやっていた頃、当然にして高級ホテルから宿泊のお誘い。星付きレストランから新しいメニューの試食のお誘い。エールフランスのカクテルパーティーへお呼ばれ・・・。なんかね、周りのスタッフは超ご機嫌で自慢げにお誘いを受けていた。俺？ うん、正直、「俺はいいよおー、そういうのは・・・」と内心なってたけれど、仕事の一部だから行ったけど。でも、その時「だけ」、歩き方がジェームズ・ボンドしていたことは告白して置く。

演奏ビデオの中の音だけを抽出して、別の映像と合体させる。これは簡単にできると思っていた。パソコン音痴の弊害。やろうとしたら、またしてもとんでもなく難しかった。いや、違うな結局はムービーメーカーで簡単にできることを知った。電子ピアノから別の音源を鳴らす。これと同じで諸々やって駄目。結局、USBメモリだったのと似ている。

久しぶりに、私本来の演奏スタイルでピアノを弾いた。毎々、自分の姿も鬱陶しいからIY Studio内をぐるっとビデオ撮影した。IY Studio？ なんのことはない、私の家のサロンである。いつの間にか私の書斎兼音楽室になってしまった。撮影したビデオをなんとなくブルー系のモノトーンに変えた。この映像を見てみると・・・。「金持ちの家」に見える。現実とは真逆だ。どうしてなのか？

高価なものは、当然にしてピアノと音楽機材。これはかなり高い。それと一部の陶器は若干高い。といっても二つ三つ。とこれだけなのに、なんか重厚な雰囲気。今、サロンを見渡しながら書いているのだけれど、壁に掛かっているものは、とんでもない安価で買ってきた骨董市の掘り出し物ばかりだ。そう、購入価格的には安物ばかり。でも、逆に考えると古いものばかりだから、「安っぽいもの」がないといえ言える。そして気が付く。それ以上に、1900年に建てられたこの家の建築資材が現在では大変高価なものばかりなのだ。大理石の暖炉、正確には分からないけれど日本で言う樺みたいな素材、ラジエターなんて南部鉄みたいだし、その上に乗っているのは本物の大理石、扉の取っ手なんかもそうなのだ。と、結果、重厚な感じ。

亡くなったルーマニアの現代彫刻家ダニエル・ネゴの自宅。白塗りのモダンなアパート。わずかな家具。しかし、シャンデリアも含めて年代物の素敵なものばかり。生活は困窮していたのにどうしてこんな高価な家具ばかり？ といぶかしんだ。「あっははは、イサオ、これ全部エマウス(カトリックの生活困窮者支援団体)で買ってきた」「えっ？」。

サロンのテーブルと椅子がこれまたお洒落。「ねえ、ダニエル、このテーブルセットも？」。彼はニヤと笑い、一脚の椅子のお洒落な布カバー、色といい布のカッティングといいとにかくお洒落、を取った。庭用の安価なプラスチックのガーデンチェアだった。サロンの床に丸めた新聞紙。私の目線を感じた彼は、また、ニヤと笑い「俺の新作だよ」。

今日は、8月27日。明日からドライバー業の繁忙期。記事の書き溜め。もちろん、そこまでして更新の必要はない。まあ、赤ワイン飲みながらパイプ煙草を吸っていたら書きたくなった。本当は、そうではなくてカミサンが英語メールを書いてくれというのでパソコンをつけた。で、書いた。で、勢い付いてブログる。わっ、フランスに住み始めて33年が経っているのにフランス語書けないのだ。さっ、最低っ！ 日本語だって怪しい。私の英語力？ はい、中学生レベル。バイリンガルなんて超おこがましい馬鹿因果る

だっ！ とはいえ、日本語とフランス語と英語でおねえちゃんを口説けるぐらいのレベルなのだよ。中学生だって、女の子口説くから、十分なのだよ。

ところで、毎々、ユーチューブを見ていると、いわゆる、私が勝手に新ビックスリー。有吉さん、マツコさん、ローラ。番外編、さまぁーず。タモリたけしさんま、志村けんの構図に似ている。敬称略。有吉マツコ、毒舌が売り。だった。ローラ、タメ口。なんとなく違うようで、毒舌もタメ口も、空気タイミング相手を間違えると大変なことになる高等技術。この3人の知能指数は素晴らしいはずだ。そして、私が愛して止まないさまぁーず。彼らは、いわゆる「一流芸人」だし、大竹さんの先駆的コントは歴史的なものである。しかし、その「一流感」が希薄。なんとなく庶民的。これって凄まじく難しい立ち位置だと思う。大竹さん、結構、テレビの中で本気でイライラしているところが子供っぽい。やはり、天才系なんだろう。女房役の三村さんの味わいが年と共にどんどん増長して来ている。夫婦に良く似ている。

あっ、そうそう、昨晚、5時に夢中で「綾小路翔」さんを初めて見た。キミマロさんと哀川翔が合体したみたいで凄い人だ。一発でファン。あの「腰の低さ」。見てくれとのギャップが凄過ぎっ！ 言っていることは、超真面目でまとも。

昨日、お客様をホテルにお送りし、その後、社長とガレージでタイヤ交換。

「タイヤ交換」、もちろん、私は初めてではない。車をジャッキで持ち上げる。五本のネジを外す。新しいタイヤホイールを付ける。五本のネジを締める。ジャッキを降ろす。以上なのだ。けれど・・・。

ワーゲンの九人乗りミニバス。二トン以上だろう。ジャッキがどこに入っている？ 取り換えるスペアタイヤはどこにあるの？ 小型中型車であれば、五本のネジを外し、足で蹴っ飛ばすと、タイヤホイールは外れる。プロドライバー取得のための学校で、「ミニバスのタイヤ交換は超絶的に難しい」と聞いていた。社長「裕さん、プロドライバーのこの作業の目安は三十分ね。でも、今日はいいよゆっくりで」。

工具箱。すぐ分かった。スペアタイヤ。これもすぐ分かった。トランク内ではなく、本体底に直接付いていた。ジャッキを差し込むためのポイントを見付ける。ここだけ二トンを支えられるようになっているのだ。これを知らずボディーを持ち上げると、ボディーに穴が開いてしまう。お若いの知ってるよね？ いや、これは世代年齢は関係ないな。知っている人とじゃーんじゃーん二極に分かれる。ジャッキで持ち上げる。わっ、すでに厳しい人生っ！ 五本のネジ、びくともしない。これはプロレスラーでも無理だ。そうなると槌の原理しかない。L字の螺子回しに更に鉄棒を延長し腰に力を入れてグィ。回った。全部外す。蹴っ飛ばす。社長と交互にやる。わっ、厳しい人生っ！ びくともしない。ホイールを外すのはプロレスラーでも無理。社長「ニャ。やっぱ駄目だね。どうする裕さん？」。私、一分ぐらい考える。「おっ、さすが痴呆指数が高いっ！」。五本のネジを緩い状態に戻す。ジャッキを外す。

もし、これで不意に前輪タイヤが外れたら・・・、大事故になるからタイヤはぐらぐらしても外れないようにしておかないと超やばい。

二トンの車重がタイヤホイールに係るから外れるのでは、と考えた。びくともしない。「裕さん、さあ、どうする？」。煙草を吸いながら五分ぐらい考える。「社長、手順間違えると車自体壊しちゃうけれど、論理的には、急発進急ブレーキとかやってタイヤホイールに極度な圧力掛けるしかないと思うんだけど・・・」「おっ、さすが痴呆指数っ！」。

しかし、ここでベテランの一言。「裕さんさ、それ以外に方法はないんだけど、タイヤホイールの五本のネジね、ホイールが外れたら大事故。でも、締めてたら車体から外れない。その中間を見付けないといけないわけ。俺の経験では締めた状態から四回し半ぐらいなんだよ。やってみ」。

急発進急ブレーキなんどもやる。外れない。しかし、これ以外には方途はない。二十回目ぐらいに微かに車が傾いた感触。エンジンを切り、確認。タイヤホイールとディスクブレーキの間に隙間。外れた。

わっ、厳しい人生っ！ 後は再度ジャッキで持ち上げてスペアタイヤ。しかし、スペアタイヤはトランクの下の車体の底。どうやって外すのだった！ 以下略。作業終了まで約二時間。腰腕へろへろ。プロドライバー作業時間上は失格。

無事終わり社長と一服。「おっ、新しいベンツの方さ、スペアタイヤねえーんだよ。応急処置用の充電器とボンベだけなんだけど、ついでだ、やってみんべ」となる。充電器を充電させながらボンベを付ける。そのボンベはタイヤの空気入れに本来は取り付けなければなら
ない・・・・・・・・・・のに取り付けないまま社長。充電器をオンにしちゃ
ったあ——————っ！ 簡
単に書くと消火器を二十秒ぐらいランダムに噴射させましたっ状態。ベンツ二台トランクルー
ム真っ白。お隣の我々のじゃないフィアットボンネット真っ白。床真っ白。裕センセ、右半分真
っ白。液体ゴムだった！ 乾いたら取れなくなる。社長と二人で「泣きながら」お掃除。

「うん、裕さん。失敗も大切だよ人生には・・・」社長談。でも、目は泣いていた。

昨晚は疲労困憊。風呂パス。今朝起きる。裕センセの髪右半分。液体ゴムで綾小路翔。

8月31日2016年。8月の最終日。やはり、夏の終わりという感じになる。毎々、ミッシェル・ルグランの名曲「思い出の夏」が脳内を流れる。とはいえ、甘い切ない恋の余韻なぁーんてオジサンにはない。

今年のフランス、イルドフランス地方は6月まで雨雨雨。7月から急に夏になった。通常、7月快晴夏日で8月に入ると急に秋めくという年が多いのに今年は8月も猛暑日が多々あった。いかにも夏でしたぁーっという感じ。

オランダのユトレヒトへの小旅行。快晴。ペロスギレックでの家族バカンス。1日を除いて快晴。もうバカンスでしたっ！　といい感じだった。

明日から毎日ドライバーの仕事。6日間休みゼロなのだけれど、以前書いた逆9時5時。日中は家にいるという怪しいオヤジシフト。これやってみると結構しんどい。睡眠不足、日中も脳がオフにならないからなんか変な長い1日になる。

もちろん、バカンスが開けるとコンサート活動が始まる。今年の後半戦はいつものトリオと新しいマクスンス君とのエレクトリックユニットと二股。それと、ちと、やばい気もしているのだけれど、「私は美術活動は今のところ封印」としている。やっ、やばいっ！　若干、これに火が付きそうな感じなのだ。どうして？　そっ、私のピアノの演奏の音だけを別の映像とミックスできる。この映像をどうするか考えていくと限りなく美術家脳になってくる。多芸は無芸器用貧乏の復活？

この美術家脳で考えていくと・・・。私の主観をすべて排除した映像。人込み、レトロなお店、パリの名所、移民街、下町、チャイナタウン、廃屋になった工場、修道院・・・。なんかパリの素顔を撮りたくなってくる。しかし、私の主観は入れないとなると方法はひとつ。アンディー・ウォールの手法になる。「固定カメラ」「シンメトリックな構図」。たとえば、凱旋門のロータリーをシャンゼリゼのど真ん中から延々と撮影する。となる。これをやりたくてむずむずし始めている。この主観排除映像に、わっ、のこのこと芸能人、ピアニスト裕センセのピアノソロを入れる。一番いいのはサンラザール駅のヤマハピアノでソロ演奏するのが面白いのだけれど・・・、行き交う人々が映るから面白い。しかしなぁー、目立ち過ぎと自己顕示し過ぎなんだよなぁー。それとプロと、及び、一応端くれは街頭では演奏しない密かな掟があるのだよ。無料では演奏しないという掟なのだ。そうしないと価格破壊、音楽ダンピングで全員の首を絞めるから駄目なわけ。まあ、明確な企画の上でノーギャラを了解してやるケースは別。うーーん、微妙・・・。

と、書き掛けの小説が二作、音楽ユニット二股。大丈夫なのかよぉーってっ！　色々手出しでよっ！　治らんのです。第一、ドライバー業、12月中旬まで繁忙期なのだぞっ！　とにかくやっちまってから考える。フランス語の習得と一緒に。一言もしゃべれないのに来ちゃったのだ。ピアノだって人前で弾いてから習得を始めた。ヘメラモ脳と私は名付けた。

スズキスイフト正面左側が二十センチぐらい凹んでしまった。犯人は書かない。物は壊れるから大した話ではない。車は消耗品？ いや、私には人生の相棒という感じで、とても大切にしている。けれど、やはり、物は壊れる。でも、とても大切にしているからなんとか修繕しようとする。

タイヤハウスの裏から押せば直ると推定。実に薄い鉄板なのに張力が半端ではない。軽量化と車体剛性の両立という難題をクリアした結果なのだ。通常、金属は表面張力みたいなものがあるから元の形に戻ろうとする。一番簡単な修繕はドライヤーで温め一気に冷却。元に戻る。でも、エアードスターのスプレーを逆さにしてやるのだけれど、これ、大変有害なので避けたい。

裏から押せば表面張力で戻ると判断。駄目。ドライヤーで温めながら・・・、駄目。どうしてなのか？ なんか人間関係と一緒に円形というのか球形の凹みは表面張力が生きている。でも、今回の凹みは「金属表面に折れ」。これでは張力は効かない。

そうなると少しずつ裏から押し出しするしかない。ドライヤーで温めながらやった。凹みはかなり元に戻ったけれど、一旦折れた金属が円形というのか綺麗な球形には絶対に戻らないから、元に戻ったような凹みの部分がなんとなく波打った感じ。

はっははは、いつもの手を使うのである。そこに黒いイルカのカーステッカーを張る。黒い本体に黒だから良く見ないと分からない。でも、よく見るとイルカの親子が波の中を泳いでいるような感じに見える。心理的に目がイルカに行く。凹み後に意識が行かないのだ。凹み後が気になって見る。でも、目に映るのはイルカ。

ホテルプラザアテネでコーヒーを飲んで愛車ポルシェカレラに乗り込む。最初の信号。携帯が鳴る。なんとなく視線を逸らした時、トン。前方のミニクーパのバンパーに軽く当ててしまった。フランスでは大した話ではない。モデルであろうフランス人女性が車から降りてきた。裕も車を降り丁寧に謝る。女性はチラッとバンパーを見て笑顔になる。「大したことないわ」。裕はやはりぶつけたことは確かであるから財布から二百ユーロ札を五枚抜き取り女性の掌に差し込んだ。「あら、そんな・・・」「結構ですよ、お嬢さん、お茶でもどうぞ」「あっ、あなたイサオ・ユウっ！ 聴きましたよシャトレ劇場のコンサート。素敵だった。これ、あたしの名刺です。コンサートのご案内頂けますか？ おこがましいですけど・・・」。

裕イサオ、今、世界で最も売れているジャズピアニストである。CDはミリオンセラー。エッセイ集はベストセラー。テレビCMに引っ張りだこ。ブログのアクセス「ピアノはタワシだ3」の一日のアクセス百七十万。男性の羨望の的であり、女性からの指示は甘いマスク、洒落た物腰、温和な性格と絶大であり、結婚したい男ナンバーワンに輝いている。

広大なベルサイユの敷地に建つプティシャトー、自宅である。ポルシェカレラを正面に付ける。

広大な寝室のトワレット。鏡を見ながらカツラを外す。カツラ掛けに丁寧に載せる。老眼のコンタクトを外す。入れ歯を外しポリデントの溶液に浸ける。シリコン製の模造筋肉下着、及び、模造筋肉パンツを脱ぐ。

階下から妻の多恵子の声。「お父さんぁーん、夕飯はなにに致します？」

「ぁーん、母さん。サバの味噌煮の缶詰あったよな。それと納豆がいいなぁー」と返事をしながら、もう少し自然体を売りにすれば良かったと毎々の後悔が脳内を過る。「本当は・・・、今更、遅いけれど、売れなくてもいいから、今更、無理だけれど・・・、フリースジャズをやりたいかったなぁーん」。

私は東京MX「五時に夢中」の大ファン。特にマツコさんの出ている月曜日。それはさておき・・・。

逆9時5時シフトが続いている。眠い。日中は家にいるのに帰宅から起床までの時間が7時間。この中に晩酌、夕飯が含まれるからどうしても睡眠が5時間ぐらいになってしまう。やはり眠い。

昨日？ 一昨日？ 眠い目をこすりながら「人造人間」というショートショートを突然書いた。なんか模造筋肉下着を着けているオヤジというイメージが急に脳内を過り、10分ぐらいで書きちゃったあー。自分でもこういう突然のインスピレーションは良く分からない。

眠い目をこすりながら書いたせいなのか、今朝、車の中で再読したら・・・。

カツラをカツラ掛け(?)に「乗せる」

老眼「鏡」のコンタクト

ポリデントの溶液に「付ける」

ん？ となった。今、訂正した。

載せる 老眼のコンタクト 浸ける

模造筋肉下着なんて暑苦しい。バットマンの衣装の下着版？ なんか外から見えない分、どうか滑稽。

えっ？ 高年筋トレ？ これが実は相変わらず続いているのだ。意外と私はピアノ弾きのせいかしむとい。とはいえ、回数とか鉄アレイの重量をアップする。一切しない。3キロ、片腕50回、腹筋運動10回。もう、トレーニングなんちゅうレベルではない。でも、止めてしまったら、またまた、ヨボヨボオヤジ。これだけやっているだけでも若干、目に見えるのだ、違いが・・・。気持ちのせい？ おっ、仮にそうであっても「そういう気持ち」になっているところがなんか嬉しいでしょ？

わたくし裕イサオの秘書、避暑地マリと申します。裕は逆9時5時シフトにて脳が麻痺していると申して居るため、わたくし避暑地マリが口頭筆記にて記事を捏造しろとの指示がございました。無内容、破天荒等々のクレームに対しまして、わたくし自身は仲介者でございますから、避暑地マリの文責ではございませんこと、予めご了解の程、よろしく申し上げる次第でございます。

「あなたは？」

「秘書の避暑地マリでございます」

「あっ、どもども、初めまして」

「センセ、大丈夫ですか？」

「(=°ω°)/[emoji:v-15](・Д・)ノ[emoji:i-2][emoji:e-442][emoji:e-499]です」

「今晚で逆9時5時シフトは終了ですね」

「∠(^o^¬)¬ ヽo...[emoji:e-451]」

「明日は久しぶりにピアノ弾けますね」

「♪(○・ω・)ノ)[emoji:v-91][emoji:e-453][emoji:v-217][emoji:v-218][emoji:v-220][emoji:v-275][emoji:v-266][emoji:v-208][emoji:v-238][emoji:v-341][emoji:v-420][emoji:v-424][emoji:v-481][emoji:v-510]この人だれ？ えっ、すっ素顔？[emoji:v-281][emoji:v-416][emoji:v-410][emoji:v-286]」

江戸時代辺りの世代交代のサイクルは、50-30-10ぐらいだったと推測する。周知の通り、医学の発達と共に人間の寿命は伸びたから現代では、80-50-20という感じだと思う。世代の間隔が30年になった。さらに寿命は延びるだろうから90-60-30。この数字に私の家系も限りなく近付いている。そして、100-70-40-10の時代が来るのだろう。

たとえば、パリ症候群の外国人の「パリに来る目的」が、以前書いたけれど、「パリに住むこと」。これは目的とは言わない。同じ意味で「人生の目的が長生き」ではもちろんないとなる。と偉そうに書いているけれど生への執着はだれしもあるのだろう。なぜ、だろうなのかと言えば、私はないのだ。

19歳の頃、吉増剛造の詩を読んだ。記憶が曖昧だけれど私なりに要約すると、「死はすぐそこにある。君の手首、プラットフォームに入って来る電車。ほんのちょっとした勇気があれば、すぐそこにある。でも、そう言った勇気が難儀に思えるのなら、君の血管の中を流れるものが生きている証しなのだ」。

57歳の現在でも、過労気味、やや鬱の時、入って来る電車を見ると脳内にこの詩が蘇る。死と言うものは私にとっては一切れのパンみたいなもので、自分の肉体の消滅が甘美な夢のように思われるから、そういう意味で生への執着はないのだ。いつ消滅しても構わない。音と同じである。私はあまりヒューマニストではないのかも知れない。人間が自然界の頂点であるなどとはどうしても思えない。

私は自死には賛成しない。自然のサイクルに相応しくない。もちろん、不慮の事態で世代の順番を追い越してしまうことはあるだろう。でも、自分の意思でそれをやることには賛成しない。残された側への傲慢な暴力と解釈している。いずれ来るのだから慌てる必要もないのだ。呑気にピアノの習得をしていれば良いのである。

もちろん、高齢者の方が元気に長生きし老後を楽しむ。大賛成である。ただ、私個人の危惧が若干ある。私には長生き志向はない。健康維持も最低限という有様である。ジャズメンは長生きしない傾向があるから別にそれで構わない。そう、私自身がすでに少しずつ自分の老後を考える終活の時期に片足を入れ始めている。問題という言い方もおかしいのだけれど、私の周りのご高齢の方々、私よりずっと元気なのだ。もちろん、素敵だ。でも、これが気掛かりなのである。どうして？ 自分でも意図せずに世代を追い越してしまう気がするのだ。私の方が先に老衰死するのではないかと・・・。

蝶姉さんの記事(9月8日付け)を拝読。もう、最後は笑ってしまった。盗用した側が盗用記事をさらに盗用されて憤慨している。蝶姉さんの不快感は想像に余りある。コピペのコピペ盗用盗作となると、わたくしはコピペではなく新しくパピプペポと名付けたいと思う。

「追記」再度、きちんと読んでみたら、そうではなくて盗用盗作した側が原本を盗用盗作だと言って憤慨している。という盗用人の倒錯という恐ろしくカフカしてる。こうなると「アディオス・エンジョー・ユアセルフ」と申し上げる。

超零細ブログの「ピアノは私だ」も、私の名前を叩くと出てくる出てくる盗作ブログが……。しかし、私のブログ記事の中には頻繁に「裕センス」とか「裕イサオ」とか実名が出てくる。それがそのままパピプペポだから盗作ロボットも節操がない。

まあ、ロボットに悪意はない。でも、そのプログラミングをしているのは人間だ。そして、私が一番嫌いなのは、たとえば、私のブログ。なんの営利もない個人レベルの楽しみごと。この個人の慎ましい楽しみを営利団体のシステムが大量漁業のように検索ロボットですくい上げ、営利ブログをでっち上げる。やはり、私の親しくしている田見根田さんをお願いしたい気持ちが強くなる。ロボットにはロボットかしら？ そういえば、パリでお会いしたブーツストラップさんがこの件でやはり憤慨なさっていた。「きちんと調べて、長時間掛けて書いている記事のコピーは許しがたい」とおっしゃっていた。「なあ——んも調べないで、短時間で書いているいい加減な愚ブロガー」裕センスでさえ怒るのだから、ブーツさんの怒りは裕センスの比ではない。当然である。そして、急に思い付いた。ブーツさんが「あまりにコピーブログが多過ぎて、僕の記事、コピーできないようにしました」とおっしゃっていた。あっ、やはりっ！ 以前、ブーツさんの記事の一部を抜粋させて頂こうと思いコピーしようとしたら出来なかったのである。「あれれ？」。手打ちで写すには少し長い文章だったので記事自体を断念したのである。

今、調べた。

テンプレートのhtml

これを見ていくと()というのが出てくる

これを()に変える

あれれえ——っ！()に横文字が入っているのにプレビュー画面には出てこないのだった！

スパイ文字なの？ インターネットに沢山コピペ禁止の説明が出て来ますのでご興味ある方はそちらをご参照願いまあーす。

これだけらしいのでやってみた。

私はパソコン音痴なのでhtmlの中のインシュタイン文字を弄るのはモジモジする。

じゃ、田見根田さんに電話しよおーとっ！

「業務連絡」

本日、既に一記事を予約投稿にしてあるのですが、緊急記事(大袈裟だけれど)としてアップしまぁーす。本日は二記事アップ。愚ブログのバーゲンセール日と致しまぁーす。なんのこっちゃ。あっ、そうか明日に回せばいいわけだよね？ うん、そうする。

マルセル・デュシャンは永遠の無名的要素が多分にある。ピカソと同時代の人なのに、ご存じないの方が圧倒的に多い。

美術史を変えてしまった人物は、私の解釈では二人しかいない。レオナルド・ダビンチとマルセル・デュシャンである。好きとか嫌い、そういうレベルの話ではない。根底から美術(人間)史を彼らは変えた。美術の世界のアインシュタインというと分かり易い。

何度か書いた、マルセル・デュシャンは三十三歳の時、未完のまま代表作通称「大ガラス」を放棄した。第一、その制作期間が八年間である。商業主義の真逆を彼は本当に実践した唯一の美術家である。それから八十一歳で亡くなるまで作品はない。と、我々は思っていた。死後公表された通称「遺作」は推測では六十歳から亡くなるまでの二十年間、秘密のアトリエで制作されていたのだ。

「彼のもっとも美しい作品は、彼の時間の使い方である」と、だれかが書いている。

「彼」は三十三歳から、図書館員、チェス、フランス語の先生と慎ましく生計を立てていた。現代風プータローの極致である。八十の時のピエール・カバンヌとの対話。私なりに、私の記憶の中から翻訳してみる。

「私はとても運が良かったと思います。生活のために働かなくともなんとかあったのです。ブランクーシの作品の売買なんかも少ししましたけれど」

「マルセル・デュシャンさん、あなたが一番聞いて欲しい質問が、お元気ですか？ 質問致します。お元気でいらっしゃいますか？」

「はい、私は元気ですよ。少し前に簡単な手術を受けましたけど、この年では良くある話です。私は死後の世界、そういうものに興味はありません。単に、肉体の消滅。自分が消滅する、快感さえ覚えます」

「彼」は、友人との夕食後、自宅で倒れ、そのまま消滅した。八十一歳である。この禅僧のような去り方。フランスという個人主義の極北の国で生まれた「彼」は、母国を反面教師とした、と私個人は解釈している。

「解決なんてありませんよ。そもそも問題自体がないですからね」

「無関心である自由という自由もありますよ。私は頻繁に美術館とかには行かないのです」

「なんか毎日せかせかと動き回ってます。大した用事もないのに」

「多くの人々の一人であることを忘れてはいけません」

「そうですね、人は単に存在しているだけで疲れているのです」

「私にとって私ほど興味のないものはない」

こんなことを言うフランス人は稀である。まるで東洋思想の大家のようである。

「日本の方々から来てくれないかというお誘いが多々ありますがけれど、私は特に東洋に興味はありません。ヨーロッパとアメリカで、もう、十分です」。実にそっけないぐらいに単純な回答。以前に書いた、詩人吉岡実のインタビューと実によく似ている。

今年のイルドフランス地方は、なんども書いたけれど六月末まで雨雨雨。七月一日から急に夏。それからずーと快晴。九月に入っても快晴日が続く。実に気持ちが良い。これから庭の芝刈りをするぞっ！

ブログを始めてほぼ四年が経過した。ピアノ弾きのくせに書くことが私はよほど好きらしい。もう、日課になっている。ピアノ、料理、高年筋トレ、こういうものも日課になっちゃっている。ピアノはちょっと違うけれど・・・。空手家が日々精進するのと同じことだから止めることはないのだ。

ブログ記事に全盛期(?)の勢いはない。一つには夕方書いた酔いどれ記事を翌朝削除するというのを毎日やっている。そう、私の最近の記事は午前中素面記事。やはり、酔いどれ記事の方がリズム感がフリージャズしてて面白いのだけれど、若干、誤解を受けそうな文面も多いのでばっさり削除する。やはり、私の記事で不快な思いを・・・、正確には、そういう風にも読めるかもしれないという心配。そういう心配が付き纏うのであればアップしない方がいいとなる。

最近の心境の変化は、小説ブログをやっちまおうかしら？　と思い始めている。書き掛けのものが二編あるのだけれど、もう、インターネットに直接書いてしまおうかな、と。なんか「もし、それで、私の中の文学のようなものが形になる」のであれば面白いと思い始めた。ブログ記事は日常のスナップ写真。小説は、晴れ着を着た写真館のそれという感じ。当然にして内容、文体は違ってくる。この辺りが自分でも面白いのだ。

おっ、芝刈り芝刈りっ！

おっ、庭の小さな畑で取れたトマト。いやぁー美味しかったぁーっ！　やっぱ、果物なんだぁーって思いました。

幼少期のやはり共同の畑があったのだけれど、そこで取れたトマトとかトウモロコシの甘かったことっ！　懐かしい。

私はボービンである。問い自体に意味はない。働かない、つまり、社会的なゴトシをしないから、「こう」なる。どうしてしなくなったのか？ 「それ」をやり過ぎたからである。もう少し、きちんと書くと、「じえんじえん、己の体質に合わないこと」をやって居ったわけだね、明智君。私は日本社会の脱落者。そういう基礎ベクトルを無理して「真面目なサラリーマン」なんちゅうものを二十四年間捻じ曲げてたら、おっ、心まで捩じ曲がったっ！ しかも、おフランスでだ。結局、会社を辞めちまったから、当然、ボービンである。

前置きが長かろう、えっ？ はい、わたくしのボービンクッキングっ！

先日、いつも行くハイパーマーケット、ルクレール。豚肉1.6kg 6.10euros。超絶的に安い。カミサン難色。あまり豚肉好きではないのだ。「大丈夫だぁー、ボービンクッキングでなんとかするからぁーっ」。

チャーシューとご飯

チャーシュー麺

トンカツ

カツ丼 これから作るのである

明日は、チャーシューを使ってチャーハン

同じバージョン、ムール貝だと・・・。

スパゲッティーボンゴレ はい、ムール貝の白ワイン蒸しとバタースパゲッティーと生パセリです

翌日、余ったムール貝とフレンチポテトフライ

翌日、余った、まだ、蒸していないムール貝 味噌汁 うっ、うめえーーーーっ

どうだね、明智君。僕は立派なボービン主夫と自負して居る。

ピアノは 時なり 金で買えないもの を 夢見る心こそ 裕 字余り

わっ、今朝、鏡を見たっ！ 目＝ムール貝。鼻＝ブーちゃん。

本日から、またまた、6日間仕事仕事。ドライバーの。そして6日目の夜にコンサート。非常にシビアな1週間。まあ、ジャズはこれぐらいハードな方がいい音が出る。はずだ。でも、老体は大丈夫なの？ 大丈夫ではない。当然。難のこれ式理論上は、なんとかなるはずだ。いつまで続くの？ 私にも分からない。

昨日は日曜日。カミサンと庭のトマトの味が忘れられない。「あなた、ちょっと先の農家にね、自分で採って採った分だけお支払いっていうところあったの覚えてる？」「うん、娘たちご一行が行ったところね」「そっ、行ってみましょ、トマト採りにっ」「うん、いいんじゃない」。

行った。広大な農園。トマトの表示に添って行く。何万個というトマト。箸って食べてみる。じえんじえん、美味しくない。「あら、スーパーのとおんなじじゃん」カミサン「別のトマト、試食してみよっと」私「げっ、美味しくない」。「なんだよおー——、お前、話が違うじゃんかよおー——」。お散歩して帰宅。

れれっ！ おっ、ピアノの練習のこと？ うん、退屈退屈退屈。でも・・・。

まずはピアノ筋をつまりピアノをハードに弾くための筋肉を鍛えるという意味とどうしようもなく退屈な形を体に染み込ませるプロなんだからこういう努力はしないとプロではなくなるからやるけれど退屈なのだってもやらないといかんだこれを努力と呼ぶのか私には分からん勉強とか努力は大嫌いだから普通はしないのだけれどピアノに関してはする

今、帰宅して、会社に本日の報告書を出して、自分のブログ記事を再読。「トマトを取る」。むむむむむうー。和音が変じゃない？ 「トマトは採る」だったことに気付く。日本語は難しいといえは難しいけれど、すべての言語は難しいと極論してしまう。

ところで、自分で野菜を採ってお支払い農家。私の家から車で20分ぐらい。何ヘクタールあるのだろう？ 「広大な敷地」とお茶濁し。トマトセクションまでも歩いて結構掛かった。カミサンと二人で「あの甘い果物」探しに。結果は昨日書いた通り。

トマト6苗=700yen 腐葉土推定200yen。この先行投資に対してトマトは2である。むむむむむうー。我が家のトマトは高額商品だったぁーっ！

本日は睡魔せん

ご家老、ご家老っ、如何なされましたっ！ 単なる過労じゃ

チューリップが一番咲く県は？ 咲い玉県

そういうきらいがあるところが嫌い

ねえ、新しい課長ってだれなの？ 花鳥風月さんでえーす

過労ドライバーの独り言

象は運転中、眠ったりしない象っ！ 車に入らない

いい加減に心臓っ！

系たん姉さんが赤ワインについてだとおーー、百年早いわいってっ！

だって僕、知さらさら、肝臓と肺、ぼろぼろです。いかんぞうー、そんなことじゃ、ハイ

お粗末でしたっ！ 好寝造がお送り致しました。

俺は、毎日、三時間半しか寝ていない。ドライバー家業はシビアだ。客が超高級レストランで飯。俺は、車の中でチャーハンと牛肉の炒め物だ。チャーハンを口に入れた。少し酸っぱい感じがした。夜の十時だ。午前中に弁当を食べてしまった。腹が減っている。狼の目付きになっている。客は、うまいもん食っている。あまりに腹が減っているから食った。食いながらMijimeという母国語が脳の中で蠢く。目頭が熱くなった。

翌日、腹痛と下痢で午前四時に目が覚めた。

仕事に行かなければならない。しかし・・・、トイレの中で蹲ったままだ。

トイレに三度行った。腹痛の精神と唱えた。サンドイッチの不屈の精神、治った。

「あっ、私ですか？ 二年ぐらい前からドライバーしてます。えっ、どうしてフランスへ？ そうですねえー、日本社会の脱落者ってことでしょうか？」

「でも、運転手さん、なんか生き生きしてますねえー」

「ギクっ、あっ、それ・・・、モジモジ、毎日ね、心の薬を飲んどるのですよ」

「えっえっえっ、心の薬？」

「ヒポポタミンフェアリーアッハアッハ」私信。

いやぁー、忙しかった。一日の労働時間が16時間なあって日もあったのだ。たとえば、翌日、お休みだったらなんとかなるのだけれど、これが続くと限界値。一日24時間から16を引くと、残りが8。この中に朝の1時間。通勤往復2時間。夕飯晩酌と寝るまでの1時間半が含まれる。8-4.5=3.5とこれが睡眠時間になる。でも、日中の待ち時間に車の中で1時間気絶的昼寝。これでなんとかなった。

会社だってドライバーに無理はさせたくはない。でも、通しのお客様の場合、途中でドライバー変更ってちょっと変だ。それと、金欲系ではないけれど、「仕事がある時に稼いでおかないとない時に禁治産者」という公式がある。だから、がんばらないといかん時が多々ある。

なんかね、昨日、車の中で少し酸っぱいチャーハンを食べているドライバー=Mijimeと書いたけれど、これは若干、小説風の記事だったからそう書いた。でも、半分は本当で正直2秒ぐらい会社を辞したのは拙かったかな？　とも毎々思う。そして若干涙目になっている。でも、2秒後には「わっ、俺ってさ、なんのしがらみもない。利害関係って社長しかいないじゃん。っても車と一緒に乗っている訳じゃないし、第一、社長との関係ちゅうより飲み友達っていう感じいー。なんちゅうお気楽野郎なの？　第一、ピアノ弾きにはぴったしじゃんねえー」となっている。「でもさぁー、37歳のジャズピアニストが食えないからドライバー、それはなんとなく格好いいし今に見ていろっていう勢いがあるけど、還暦近いおっちゃんではねえー、格好いいという感じにはならんねえー、哀愁のドライバーちゅう感じだよねえー。うっひょひょ」などと脳内独り言。

あっははは。結局、この仕事気に入っているのだ。その日暮らしで前後の繋がりがないこと。これはストレスが溜まらない。上司とかがいるようでいない。繁忙期とド暇が交互に来る。ド暇の方が多い。

でもなぁー、37歳の野郎だったらさ、酸っぱいチャーハンは論外だけれど、車の中でチャーハン食べて、車の外で一服しながらパリの夜景に鋭い視線。ラジオからマイルス・デイビス……。格好いいよなぁー。小栗旬みたいじゃんねえー。でも、志村けんさんだとパリの夜、徘徊する変なおじさんかよおーっ！　えっ、俺？　ちょっと、前者に見えるのか後者に見えるのか……。

私が母国を離れた、追放された、のは1981年の1月10日である。21歳だった。詰め込み教育受験地獄で18歳ぐらいから自閉症。かなり酷い「それ」になった。一応、高校は卒業した。私の推測では「こんな馬鹿、留年させても無駄」という学校の判断があったと思う。でも、現在では思春期を若干過ぎた強度の鬱病と自己診断している。というより自己診断できるぐらいの高年になった、あるいは成り果てたのだ。つまり、慢性的な鬱病ではなかったことは確かなのだ。

フランス大陸にクアラルンプール、ロンドンを経て上陸したのが1983年。現代美術家としてやってきたのだ。美術史を変える意気込みで。カミサンと一緒にになった。カミサンの腹が大きくなった。桃の中から桃太郎。尖がった芸術家が父親？ 算数上無理だ。しかも、元鬱病患者である。再度、「それ」の兆候が出てきた。しかし、父は強しとだけ申し上げる。鬱病の父親？ これでは生まれた方が顔を顰める。そういう顔で息子は出てきたけれど。

それから就職し仕事仕事仕事、そして、家を買った。同時にピアノを再開し小説を書き、美術作品の大作に着手というほとんど意図的な過労死を匂わせる生活をしていた。たぶん、動いていないと「鬱」が戻る恐怖があったのだろう。元々、体が丈夫だから、まだ、生きている。

そういう生活を24年間していた。53歳。限界値を超えそうな予感がした。

どうして、そんなにがんばっているのか？ 自分で分からなくなった。私は愛妻家だから、カミサンのためもある。子供たちのためもある。しかし、息子23歳。人生設計は見事に出来ているし実行している。娘21歳、大学を卒業した。では、父親は永遠ではある。でも、彼らには政治的な家長的な「父」は必要がない。と判断した。そして、父親は辞めることにした。同時に会社も辞めた。

自分のために生きることにしたのだ。これこそ、傲慢の極み。自由になるとは、そういうことだと今では、昔から知っていたけれど、理解ではなく、実行してしまうぐらいの年になった。から、「今しかない」という判断を4年前にした。

ピアノが三倍ぐらい上手くなった。この技術が、確実に私の晩年余生、そして自分自身の支柱になることは知っていた。「その」判断をするタイミング。「それ」はミュージシャンだから間違っただけでなかったと自己解釈するのだ。

9月15日

4日間の激務が終わり午後2時に帰宅。遅い昼食。あまりに疲れている。昼寝をするか迷う。でも、中途半端に寝てしまうと夜眠れなくなる。パソコンを開き17日のコンサート案内をメール再送する。それから台所、風呂、トイレの掃除。動いてないと眠ってしまう。午後4時。いつものようにビールをちびちび飲みながらピアノの練習を始める。できないコードワークの習得を試みる。駄目だ。疲れ過ぎていて頭に入らない。そういう時は、好き勝手弾くことにする。好き勝手弾いた。邪念が消えているから半分眠りながらも凄い演奏をしてしまう。

早めに布団に入り、「もやもやさまぁーず2」。22h00睨が自動閉店の予感。一応、渾身の力でメールチェック。ライブハウスからメールが入っている。「ディー、イサオ。フライヤー見たけれど、当方、17日コンファームはしていない」。「えっえっえっ」。

10日前にもフライヤーを送っている。その時に言って欲しかった。すべてのメールを確認する。そう、私の勘違いである。「17日前後で希望日を言ってくれ」としかないのだ。それからバタバタとキャンセル処理。仲間たちにお詫びメール。早くしないと、お客さんが来てしまう。仲間各自も通達を諸々のところに送っているから尚更キャンセル処理は手早くやらないと問題が起きる。疲労困憊の中、布団に半身を起こしてやった。爆睡した。

9月16日

若干充電された感じはするけれど、まだ、だるい。買い物に行く。午後4時。ピアノの練習開始。できないコードワークを黙々とやる。

9月17日

起きる。メール確認。日本からメール。すぐにピンと来る。十分に予期していた事態が起きている。地球の裏側である。飛んで行けない。この飛んでいけない不甲斐なさ、無力、高年プータローのお気楽人生、不義理・・・、諸々の思いが脳内で渦巻く。幸い、弟が駆け付けたことを知る。その道の専門家、権威だ。これ以上の人材はいない。弟からの連絡を待つしかない。諸々の思いで押し潰されそうになりながら、午後4時。ピアノの蓋を開ける。本来ならコンサート会場に向かっていたのだ。諸々の思いが脳内を駆け巡ったまま演奏した。正直、練習ではなく狂人の演奏である。たぶん、聴衆の方がいらしたらその鬼気迫る狂気の演奏に皆仰け反ったと思われる。それから、すでにブログ記事をアップしているのに、突然、「無題的自叙伝」という記事を書いた。

雨の日も風の日も晴天の日も、嬉しい時、悲しい時、二進も三進も行かない時。どのような状態でも私は必ずピアノに這って行く。たぶん、私にとってピアノは私個人のささやかな信仰なのだろうとしみじみと思う。または、ひとつの狂気なのかも知れない。

いやあー、今年の9月はお天気もいいし、激務日が続くとオフ日が続き、また激務。仕事もお休みもまとまっているところが中々いい。そんなに都合よく仕事は入らないのだけれど、もちろん、会社の配慮もあるけれど、全体的にうまい具合になっているのだろう。こういうリズムは助かる。

自慢じゃないけれど、私のどうでもいい愚ブログ。とうとう5年目に突入したのだ。まあ、よく続くなとも思う。なんどか書いているけれど、元々、書くことは好きだ。どうして？ やはり、自分の脳内を整理している感じがあるから……。私はどちらかというと几帳面だから、脳内も整理したいのだ。

若干、鬱とはいわないけれど、気持ちが沈んでいる時とかは尚更、書くことで自分を元気付けしちゃっているところも多分にある。私はユーモアの信奉者であるから、段々脳内が真面目で一杯になってくると、自営本能ギャグみたいなものが、ドッドドォーと脳内に駆け込んでくる。

私はなんか超真面目なようでどこか滑稽な感じというのが、一番好ましいと思っている。ジャズメンはこういう傾向が多分にある。坂田明大先輩。彼の「サマータイム」の演奏なんて、淡い夏の終わりの悲しい余韻みたいなもんはまあーたくどこかに行っちゃって、聴いているうちに爆笑しそうになる。素敵だ。皆さん、ご存知のジャズの帝王、マイルス・デイビス。超強面。ダンディー。でも、有名なタモリさんのインタビューを見ると、なんかどこかにお笑い感が漂っている。ジョン・コルトレーンにはまったく。だから、最近、コルトレーンを聴かなくなった。もう一人の現代美術の原基と呼ばれるマルセル・デュシャンもマイルスと似たところがある。デュシャンのインタビューもよく読むと「えっ」というフレーズが沢山出てくる。微笑系だ。どこかにお笑い感が漂っているのである。あの有名な台詞「解決なんてないんですよ。そもそも問題自体がないですからね」。これだって実にユーモラスである。この考え方が凄く自然だし、なんか切羽詰まった芸術家を若干、笑い飛ばしている感じがする。

そういう意味で、私の分身である芸名、オフィシャルな芸名、裕イサオという人物は、私の思い描くマジ滑稽系に上手く近付いていると思う。ねえ、裕さん。はい、裕さん階級って呼んでっ！ 浮遊層の裕さん階級ね。裕さん、裕さん、お鼻の下が長いのねえー。

皆さん、お早うございます。

事情がありまして、しばらく休筆致します。

拝読の方も難しい状態です。残念です。

私は元気なのですが。

それでは、皆さん、お元気で。

私信追伸

コメント、ありがとうございます。

そうなんです、五年目になりました。

早いものですね。

実家のパソコンを開き、久しぶりに日本ブログ村を訪問した。

まったく記事を更新していないのに、毎々、ご訪問して下さる方、インポイントバナーをクリックして下さる方。心から御礼申し上げます。私は大変元気にして居りますが、残念ながら記事の執筆、拝読等非常に難しい状況に置かれています。

母国を離れて三十六年。いつかこういう状況を迎えることは当然にして知って居りました。

そう、高齢、看護、介護。パリのプータローが今直面しているのですね。三十六年の不義理が物凄い重量と共に押し寄せているのですね。故郷の空を見上げながら、なんというのか鬱とも違うのですが、自分がどこにいるのか分からないという真空地帯のようなものが頭の中に込み上げて来ます。

とうとう、三日前。そう、私が五歳の時にピアノレッスンを始めたヤマハU1の蓋を開けた。一時間半ぐらい弾いた。不思議なもので、三十六年間の不義理という負い目の重量に私のピアノが対峙した。突然、真空地帯を彷徨っていた私の目に力のようなものが蘇っていた。大袈裟は承知なのだけれど、ひとつの蘇生なのかもしれない。

なんか変なタイトル。「山は越えた」ということなのだけれど。親父が入院。私の判断で緊急帰国。帰国後三日目、お袋が過労で入院。十月六日には羽田のホテルに泊まり、翌日のフライトでフランスへ戻る予定だった。いくらお気楽ドライバーとはいえ十月は年間で最も忙しい時。コンサートも立て込んでいる。

でも、会社を辞めてフリーランスのような仕事に就いた「そもそもの理由」が「こういう時に素早く帰国できる」だったから、正解といえ言えるのである。妹も弟も非常に忙しい。私は暇というより浮遊層に自らセッティングしていたからなんとでもなる。

一番、役に立たないであろう馬鹿長男がいきなり介護マントを着て現れた。皆、その危機管理の鋭さに仰け反る。しかし、である。常日頃、至近距離で諸々の世話をしてくれている妹の立場はどうなるのだ？ いきなり外タレスターである。私は元営業マン、しかも、営業統括という恐ろしいタイトル保持者。当然にして、そのようなギクシャクはしない。あたしゃー、通りすがりの介護人、名前をいうほどのものじゃござんせんスタンスになる。滅相もないシフトないしトーナリティーである。私は、家族親族間の不協和音が大嫌いなのだ。ミュージッシャンは音も含めて人格者でなければいけないと愚直に信じている。

実家 ゴミ捨て 断捨離手伝い 諸々の大工仕事 ご近所付き合い 親父の世話 高齢者マークを付けたままの車の中の私

イカシテいると申し上げたいっ！

私は実家と病院を行ったり来たり。父は、観察室と一般病室を行ったり来たり。容体安定の確約が今だ取れない。長期化は必至。元に戻る可能性はある。あるのであれば、治療を続けるしかない。父は意識は実にクリアーな高齢者。寝たきりという姿がなんだかそぐわないのだ。発作を起こして高圧酸素マスクをしているのに手でサインを寄越すし、マスクが曇って酸素濃度の数字が確認できないとナースコール。高圧酸素マスクを外し、鼻からの管に変えると普通に話し、超几帳面だからテーブルの上を両手で整理し始める。看護師さんに、酸素濃度は安定したから、高圧マスクを外してくれと駄々を捏ねる。「こんなのしてたら死んじゃうよっ！」などと本末転倒な台詞を真顔で言ったりするのだ。老眼鏡を取り出し、間食のリスト、看護師さんが書くべきものを自分で書いたり、出す薬を間違えていると看護師に注意しろなどと言っている。看護師さんたちはいつも笑顔。私は「すいません、わがままで」とペコペコ。

ところで、日本。どこのお宅も物の山。どうしてなのか分からない。お届け物、お土産、菓子折り、お返し、ご近所からの差し入れの山。実家には私と高齢の母しかいない。しかも、私は一切の間食をしないから、お菓子とお煎餅の箱が山。なんか冷凍の牛タンなんかが届き、それから生協の配達が届き、お隣から私が帰っているからと煮込みうどんが届き、近所を通ったからとお弁当が届く。食べ物の山。冷蔵庫も食べ物の山。缶ビールを入れることの方が私には遥かに重要なのに。

断捨離をすでに終えている私。高校の同級生たち。その一。自分の持ち物はランニングシャツとバミューダとビーチサンダル。その二。三代続いた家。当然にして諸々の骨董品で溢れていた本家。すべて廃棄処分にしたとのこと。あの桐ダンスは？ あの茶器は？ あの掛け軸は？ すべて廃棄したそう。現金あったんじゃない？ あったかも知らんけど、いいべ、それ＝廃棄でとの回答。私の同級生は断捨離はすでに終了しているところがバンカラで有名な男子高校出身者らしい。

それと、ガラケーという日本語を初めて知った。その一つ。軽自動車。私の郷里では半分以上がそれだ。これは実に素敵。まず、デザインが素敵だし、日本の道路事情にぴったりだし、地球に優しいし、なんの張ったりもない走る道具感が実に素敵。なんでフランスで売ってないのぉーっ！ 規格に合わないらしいのだけれど、残念である。珍しく若干の物欲。ダイハツのタントの黒なんて欲しくなった。後ろにローランド電子ピアノなんて超恰好いいぞっ！ おじさんでも。

高齢者が澆刺と元気になさっていることは、もちろん、素晴らしい。しかし、次世代の前に立ち塞がり君臨する。こう言った元気は老害である。「断捨離断捨離ってうるさいわよねー、死んじまった後なんてどうでもいいわよねー。ははははははあー」という会話を耳にした。「死んじまった後」に残るのは次世代である。

私は自分の子供たちに「そんなこと」は絶対にやらせない。そう、「やらせりゃいいでしょ」、このスタンスがすでに指示形になっている。独立した個人である子供たちの前に君臨している形になる。私が長年フランスに住んでいるせいではなく、私の基本ポリシーが親子は対等なのだ。そして、もっとも親密な血の繋がった他人でもある。家内は究極の他人であり世界一親密な人。だから、順番は家内、子供となる。要は皆他人なのだ。その他人へ指示を出す。無礼である。という事になる。

分からない、日本に帰りあっちこっちで同じような高齢者の会話を耳にした。当然、嫁だ息子だとなる。ほとんどが批判愚痴。

人間の動物としての寿命は五十年。医学の進歩を加味しても七十歳は、体と家、多少のお金はいるにしても、少なくとも身辺整理は終わっているのが常識と思っている。当然にして、いわゆる第一線は退いているのも常識。仮に私のケースでは息子は四十歳になる。穏やかなジャズ老人、孫の面倒付きがもっとも自然な音階である。すでに私は家長としての父親は辞任しているのだ。

世界最先端の超高齢化社会と少子化の国、日本の老人が先記のような意識意見を持っている。違和音にしか私には聞こえない。私がおかしいのか？ 分からない。「まだ、イサオちゃんは若いから、その内、分かるわよ」と言われても、断捨離は終了し終活をこれも四年前から始めている私には、やはり、違和音。セッションにならない。

来週の月曜日に羽田に向かう。一泊しパリに戻る。今回の日本滞在最終週は妹夫婦宅の断捨離手伝い。元々、事務所として使っていたスペースを「綺麗にして欲しい」というご依頼。私は長年、海外引越、フランス国内引越、事務所工場移転の仕事をして来たから、こういったご依頼にはプロとして対応出来るのである。日本で「断捨・リー」と名前を変える。又は、「断・シャリーマン」という家族内の意見が飛び交う。私の仕事振りに賛辞と驚愕が飛び交っている。そりゃー、プロだったから見事な出来栄え。つまり、なんもない空間が出来上がる。どうしてそんなことが出来るのか？ となる。えっえっえっ、マジいーーーーっ！ となる。

えー、わたくしは引越屋以前に現代美術家、空間把握に長けているのだ。そっ、それと実生活がミニマリスト。ついでに悟りの境地ついでに人格者、若干の破綻はあるが……。こういった哲学的ともいえる人間である。その仕事振りは見事にならざるを得ない。

やはり、わたくしの座右の名はエリック・ドルフィー「音は宙に消えて行く」なんだよなあーーーー。わっ、わたくしの目にはすべてが「音に」見える。やばいのかしら？

本日午後、高速バスで東京へ向かう。一ヶ月強の日本滞在。実家、病院、妹宅。唯一の外出らしきものは、町の中心街に二度。それから三十年振りに小学校、中学、高校と母校を見てきた。私がこの町を出て三十九年が過ぎている。となんか諸々の感慨が沸いてくるといいたいのだけれど、なんかあまりに遠い出来事というのか、過去の自分は別人だったといえるほど感慨が沸いてこない。ひとつには私自身が高年になり多感な詩心のようなものがなくなっているせいなのだろう。故郷の快晴の空を見上げても、今回の滞在を頭の中で総括しても、取り立てての感慨はない。ほとんど心のカメラアイになっている。父の容体が安定し回復の方へ。そして、私は混沌としたパリという町に帰る。ジャズメンの日常が戻ってくる。パリという実に美しい泥沼へ。

一昨日、フランスの自宅に帰ってきた。脳の焦点が定まらない。ぼーとしている。フランスへの帰国翌日、マイピアノににじり寄る。弾き捲る。恐ろしい演奏が出てくる。私は、たとえば、この1か月の日本滞在の様相。もちろん、一冊の書物にできる。それぐらいの筆力はある。しかし、怠惰ではなくしないのだ。そう、なんでもかんでも言葉にしたいとは思わない。以前にも書いた。だからこそ書くのが文学だという見地もある。でも、私はしない。音に還元されればいいのである。現在形の音は宙にどんどん消えていく。すでに、今回の日本滞在は過去なのだ。私は私の現在を生きるのみと気張る。30年振りに私の母校である小学校を訪ねてきた。週末だったから生徒はいない。私が野球をしていた校庭に二人の小学生がいた。キャッチボールをしていた。歩み寄り、「俺、45年前に君らのようにここにいた」と伝えたかった。現在形の小学生に高年のセンチメントなんぞいらないから無言で見ている。校庭の鉄棒とジャングルジムが45年前のそれだと気が付いた。懸垂だのその鉄棒でしていた私の姿が蘇る。でも、なんの感情も感慨も郷愁も感じない裕イサオという高年の親父がいた。前進あるのみという、はっきりいって馬鹿高年ジャズメンであることをしみじみと感じた。うなもん、なんぼのもんじゃいって。「うなもん」、まあ、そういった諸々のノスタルジーちゅうこと。でも、その鉄棒にぶら下がっていた私と今の私は別人かも知れないのだけれど、私は絶対にぶれない人間だから、もしかすると、その二人は同じなのかも知れない。

時差ぼけが治らない。体内時計が七時間進んでいるからフレンチライフタイムがへんてこりん。当然にして、これに若干の爺さんぼけも加味されているから治りが遅いのだ。脳内に昔流行った「原風景」ちゅうのが渦巻いている。知らぬ間に太宰治顔になる。とはいえ、こちとら脳天気ジャズメンであるからにして、いつまでもうなもんを背負込まん。たーりりんシフトに早く戻さんといかんのである。

でね、日本滞在時にドチョンボをしていたことが発覚。羽田到着後フランス使用の携帯を三時間ぐらいオンにしていた。ほとんど使っていないのに円換算で二万五千円のご請求書。悪質な飲み屋と一緒にゃんかよおーっ！ と悪態を付いてもオフィシャルなご請求書である。払うしかない。とほほ。皆さんに愚痴ってすっきりしたいっ！

うでね、郷里のコジマ電気で象印の三合炊きの炊飯器を買ってきた。福島から羽田まで炊飯器の箱を持って移動した。コジマ電気おかげさまで六十周年という真っ赤なシールが二か所に張っている。超お洒落なお箱を持ったおパリのジャズメンという超絶的にいかしたお姿のまま、羽田のエクセル東急のフロントへ。フロントマンの目が点目だったし、ご案内嬢のいらっしやいませといった時の、不思議な目付き。「わっ、お宅、高いねえー、当然当然、朝食は込みだよねえー、ねねね」「少々お待ちください。素泊まりでございます」「えっ、この値段で？」フロントデスクには象印の炊飯器。とここまでカッペ丸出しはしなかったけれど、おパリのジャズメンの洒落た物腰がむしろ場違いだった。羽毛、なんならフランス語でやった方が、映画的には素敵だったんじゃない？ でも、流石、わたくし。その出で立ちでエレベーター乗降時にはレディーファーストをやったところが凄い。炊飯器持ったアラン・ドロンだっ！ あらん？ 変なこと言ったかしら？ どろんしちゃおおーっ！

帰宅後、家にあった変圧器を使って鼻歌を歌いながら炊飯器をオンにした。十分後、変圧器が熱くなり自動的にオフになった。ワット驚く為五郎。変圧器のワット数の許容量を失念していたのだ。495wに対応でけんやつだった。インターネットで750wの変圧器を検索。円換算一万一千円。炊飯器、値切りまくって一万二千元。わっ！ しめて二万三千元！ だったら最初から羽田で「海外使用」を買った方が安かった計算だよねえー。

日本で大ファンになった石塚英彦さん？ の食レポ。ワンタンスープ。ワンタンを口からなんか出し入れし、最後につるっ。絶妙の間合いで・・・。

「ワンタンし馬鹿よねえー」

私が幼稚園から高校まで過ごした町は、人口十万人、福島県いわき市平である。常磐炭田で栄え、そして、閉山と共に衰退した町だ。そして、再度、震災原発で負の復興をしている町でもある。地元の人に叱られることを覚悟で書けば、一種の「ゴールドラッシュ」の町とも言える。石炭が原発に変わった。ただし、原発の処理という負のベクトルで栄えている。世界的にも珍しいケースと言える。

何もない町という印象が強い。当然にして地元の人に叱られる。上から目線だからだ。地道に生活をしている方々にそんなことは言えないだろう。

フランスという国の町の構造は、大変、分かり易い。村、町、都市の中心に教会がある。教会、大聖堂から円形に町が構成されている。私の故郷の町、日本の町の典型である。単に広がっている。中心がない。浮世絵と遠近法の違いなのかも知れない。

中心街の若干高級なレストランで親族一同が食事をした。少しすると後方に原発作業員らしき一行。話し方が堅気ではない。どうしても私の位置から親分らしき人と目が合う。でかい声で携帯電話で話している。親分とはいえ組を仕切っている人ではなく、そのチームの一番の年長な荒くれなんだろう。これ見よがしに部下らしき人に怒鳴っている。当然、私は席を立ちそうになる。はったりが嫌いだからである。親族が宥める。

これもひとつのアウトサイダー。それに腹を立てて席を蹴ろうとする私もアウトサイダー。

そして、この何もない町で地道に芸術を追及している少数派。何もない町を変革しようとしている。その筆頭が現代美術家、吉田重信なのだ。私と同じ松田松雄の門下生の一人である。

初めてお会いしたのに、まるで旧知の間柄のような錯覚を受けた「お花のないお花屋さん」。私は痺れた。何もない町という私の傲慢に、彼ら、アウトサイダーズは異論を挟むし、よそ者がっ！とお叱りを受けて当然だと思う。

実家と病院の行き来の合間にも、そういうことは感じられた。

相変わらず脳の焦点が定まらない。原因は私自身が良く知っている。

四十年前に逃げ出した故郷。四十年後、なにも変わっていない。私は「そこ」に一月以上いたのだ。

父の介護に一月以上。美談なのかどうか、私には分からない。十八歳の私は足が速かったから、凄い勢いで逃げ出した。東京へ。マレーシアへ、イギリスへ、フランスへと逃亡してきた。

そう、逃亡した最終地に持ち家、私自身の家族を持った。

諸々は書きたくない。「自由」という概念に私はできる限り近付きたかった。それだけなのである。

五十七歳。逃げられない。逃げる体力もないし尖がった勢いもない。だから、今度は向き合うしかない。と少しは分別が付いたらしい。私は真面目人間だから、むしろ、帰郷された側は大変に鬱陶しい人物の到来となる。「生まれた時から断捨離なんぞ始まっている」「終活、すでに始めている」「人間の寿命は五十歳と認識している」、こういう言動はさぞかし鬱陶しいはずだ。

しかし、逃亡し家、家族を構築してきた。パリという弱肉強食のジャングルで。そこでピアノを弾き続ける馬鹿。これこそ、馬鹿正直な馬鹿。馬鹿真面目の本道。耐えてもらうしかないだろう。グローバリゼーションしてしまった私に。

「長い追記」

と、ここまで昨日書いている。どうしちゃんたんだろう、重苦しい文体。うーん、フランスに戻って一週間。カミサンと手を繋ぎモーモロンシーの森を散歩してきた。ほとんど、心のリハビリみたい。故郷に戻ると、毎々のように、そうだなあー、若い頃の悪夢のようなもんが蘇る。そう、私は、わっ、生の対局の方に行こうとしていたのだよねえー、そう、あっち側に。それがねえー、こんなに長生きしちゃっているから、逃亡者面も様にならないわけね。そう、久保の兄貴の言葉を借りると、「詩はあっちから来る」。たぶん、私は詩心の巫女さんになっていたのだろう。でも、十分に長生きしたと思っている。こういう「馬鹿」でいいと思う。こういう馬鹿に、うーん、終活ができない年長者へは、超絶的にきつくなる。なにもかも理論的にする必要はない。でも、最後は一人で向こう側に行くことが美学上は正しい。一人、そう、金だの物だの一切残さなくていい。去った人の生き様が美しければ記憶に、生きている側に残る。それだけだとなんどでも言いたい。ああーあっ、私は鬱陶しい。ごめんね。

こちらフランス、イルドフランス地方。秋晴れの日が続いている。紅葉もとても綺麗。全体的に、私自身の機嫌はいいのに、ブログ記事を書こうとすると、なんだか不機嫌で重苦しい文体内容。引き裂かれていまあーすみてえーな感じいー。あーーーーあ。

とはいえ、私はユーモアとかお笑いが大好きだから、内なる不機嫌には対抗する術がある。

ユーチューブで「ドクターX」とか「もやもやさまあーず」なんかを見る。「あたし失敗しないので」、超格好いい米倉涼子さんの台詞が脳内に木霊する。

なんかねえー、たとえば「人間関係は複雑」という見地もあるけれど、物欲、金銭欲とか嫉妬だとかこういうものから「複雑」が起きてくる。うなもん知らんわっとなると、そんなに複雑なのかよーーーーっ！ となる。ジャズメン、そう、私の師匠、仲間との人間関係はシンプルそのもの。音以外のお付き合いがない。以上というある意味異常なの？

あーーーーあ、結局、あたしゃー、なんだかんだといいつつピアノを弾く。最近の演奏、重いのであるけれど、重かろうが軽かろうが音は宙に消えていくから、どっちでもいいのだよ。

まだ書いてないけれど、この記事を投稿するのか自分でも分からない。なんか書きたいのだ。久保の兄貴の「詩は向こうから来るから責任は負えない」。この意見に賛成である。詩の語呂合わせで死としても構わん。蝶姉さんの「うっちゃん」にインスパイアされる。ベース、そう、詩心のぶれないサクライ「君」の記事に心が安定する。系たん姉さんのもう一つの異国、スイスに思いを馳せる。フェアリーさんの記事、湯川博士のエピソード、「どうしてこんなことに気が付かなかったのだろう」。ドキッとした。

自己診断で、私は軽度の脳ローゼ。どうしてこうなるのか「故郷への手紙」をしたためる。

と大袈裟なのだけれど、極論するとね。そう、「羊の皮を着た狼」状態で帰るから「こう」なる。はい、「羊」＝本名。「狼」＝芸名。前者を止めればいいのだ、数学上。しかし……。私は外タレおフランス安易な西洋化それに基つく上から目線という貧乏臭い野郎が大嫌いであるから、絶対にしない。しかしである。私は外人タレントであり長年フランスに住んでいるし安易な西洋化なんちゅう安っぽい人生は歩んでないぜってっ！　こうなると「上から目線」なんてものは当然にしてない。なのに、変な遠慮をするから脳ローゼになる。

お前よおー(私です)、そんな柔い人生生きてねえーだろってっ！　外タレでもおフランスでもいいじゃんっ！　上から目線でも。それは、お前がそうなんじゃなくて、そういう人生をやってきた。故郷がそう思うなら、そんな貧乏臭い誤解は蹴散らしてしまえっ！　対峙するしかねえーんなら、「裕イサオ」として帰るのが本道じゃね。遠慮がうざいし、むしろ、それこそ、上から目線じゃね？

わっ、独り言で本質付いたりするわけね。

でね、外タレおフランスお西洋化御上目線と仮に思われようが、次世代にとって、こういう「馬鹿」がいるんだよおーっていうメッセージを若干僭越にも送りたいと思っちゃったりしてんだけれど……。もじもじ。そういう年齢なんだと思うのだ。自分の出る番じゃねえーだろってっ！　俺の出た高校は全国吹奏楽部コンクールで金賞に輝いちゃったりしてんだよな。おっ、俺のトリオでサックス吹ける奴、いる？　ね、福島県立磐城高等学校諸君。俺の頃はバンカラ男子高校だった。なんだよ、止めろよってっ！　校門から女子生徒なんてよっ！　三十年振りに行ったけどよおー、こっちが照れちゃったよ。

なんか、「俺はマジとかガチな人生を送ってきた」という文章になっているけれど、うわっ、本当だと自己診断しています。すっ、吸いませんっ！　タバコは止めんけど。

本日は、二記事アップしちゃって、しばしの休筆です。ドライバードライバー、プラスのドライバ―。

リンドバークみたいに5日間、運転運転運転。車からやっと解放されて電車で帰宅した。地下鉄に乗った。改めてパリは人種の坩堝なのだと認識する。日本には「この感覚」はない。例えて言うと、白人という意味ではなくて、上質な白米と明太子をいつでも食べれるのが「日本の日常」とすると……。パリでそれができるのは金持ちのみ。じゃ、我々、「一般人」は？

はい、それが食べたいとしても、チャーハンとリゾットと混ぜご飯とアフリカの米食とアラブのお米、北欧、東欧、スペインのパエリアと「ごった混ぜのもの」しかないのだ。肌の色、国、文化、教育、宗教、食……と諸々の「違ったもの」の集合体がパリと言う町の基本要素なのである。この摩擦の、強いて言えば、だからこそ、グローバルなんだ。良くも悪くも……。うーん、批判目線ではなく、脳の箱庭化は良くないと思う。と、若干、日本へ上から目線しちゃう。イエローリムジーンドライバーしかもそいつはジャズメン。すべてが蔑称の集合体であるところに「私がいる」という、むしろ、快感なのかも知れない。

疲れた。明日にする。

またまた、重苦しいタイトル。そりゃー、５７年も生きていれば、積み積もった過去の堆積。しかし、私が非情なのかも知れない。うなもんはどうでもいいと考える。近々の記事で、私の母校の小学校を３０年振りに訪ねたことを書いた。私が卒業して４５年の歳月が経っている。でも、ジャングルジムと鉄棒が、その時のものであることは一目で分かった。そう、１２歳の私は人生の最盛期を迎えていた。早熟だったことは間違いないと思う。１４歳からジャズに拘泥する奴は、そうはいないだろう。そう、アルチュール・ランボー系なのだ。１２歳から余生が始まっているから、現在の自分の墮落振りはいかんともしがたい。しかし、私はジャズの巢に帰還してから意外とヒューマンライフを送っている。と、過去を懐かしむつう——感じは私にはない。一つの他人と見なしたいのだ。現在のピアノ弾きである私の現在を聴きながら、これを書いているから、尚更、そう思う。

私の処女出版であり最後の公の小説「水の記憶」の中に、余生の実態は硬質な詩体で綴られているから十分なのだ。

昔話、私はあまり好きではない。

日本から帰って来てパリの町を深海魚(リムジーンドライバーおよびジャズメンとして)のように彷徨っていると、改めて見えて来るものがある。

私の深部のパリはヘンリ・ミラー「北回帰線」、金子光春「ねむれ巴里」、そしてマルセル・デュシャンかも知れないし、マイルス・デイビスかな？ 私の師匠沖至、佐藤真かな？

今に始まったわけではないけれど世界は昔から混沌としていた。インターネットという巨大な網に包囲され、もしかするとその混沌は数十倍？ グローバリゼーションというものに若干皆辟易し始めていることは確か。諸々の世界事象を見ても「内向き傾向」にある。このパリという町は地理的にもヨーロッパの中心という感じはやはりする。ロンドンの方が英語圏だから、よりグローバルなのかも知れない。ロンドンとパリを比較する必要も特にはない。パリは「一つの中心」なのかな？ ヨーロッパの世界の？ 私には分からないけれど、北、東ヨーロッパから人が入ってくる。アングロサクソン、ゲルマン、バイキング……。南、イタリア、スペイン、ポルトガル……。ラテンが入ってくる。それから北アフリカ、アラブ人と黒人が入ってくる。カトリックとプロテスタントと回教、そして諸々の宗教。それに基く食生活、諸々の教育と文化……。

溢れる車、人、自転車、オートバイ、公共機関のバス。人々は信号を一切守らない。運転者、方向指示器は出さないし右優先もほとんどが守らない。世界から集まる億万長者、世界から集まる貧困層。諸々の摩擦がいつも加熱している。暴力の臭いが蔓延している。こんな中で蠢いている一人である私の堆積がパリ市民である。

なんか皆どこかで辟易しているから、むしろ、せめて仲間たちは大切にしようという傾向が強まる。家族愛、ミュージシャン仲間。こういう小さな砦だけでも守らないとパリという泥水に飲まれてしまうのかも知れない。

私は日本の東京という大都市は、世界でもっとも素敵な町だと思う。私の家族、フランス人の友人連も皆同感なのだ。今回、東京駅から羽田を往復しただけでも、やはり、素敵な町だなあと感じた。

でも、パリに帰って来るとなんか心も体も良くも悪くも引き締まり、一種の野生動物感みたいなものが漲っている。私のジャズは、この不思議な感覚に支えられているらしいと再認識する。

毎々、手前の話で恐縮です。つーーっても自分のブログだから、まあ、それでいい。で、私はミュージシャンのくせに若干究極の出不精。パリから三十五キロの人口三万人の町の丘の上のシティーハウスからの眺望を眺めて、ぬくぬくとしているのが好きなのである。ぬくぬく＝料理、庭弄り、大工仕事、ブログ書き、そしてピアノ。酒とたばこがあればエブリシングオーケーという一種の盆栽老人。「パリに行く」となってしまう。以前にも書いたけれど東京に例えると、埼玉県大宮市から新宿に行くという感じ。行く理由はコンサートないしリムジーンドライバーの仕事、以上。だからそれ以外で行くことはない。

昨日、肌寒い雨の日。もともとの用事は真師匠のユニットのコンサートを聴きに、だったのだけれど、なんかパリを彷徨いたくなりポンピドゥーセンターに行ってきた。「ルネ・マグリット展」を見に。マグリットの音のない風景がとても好きだから一点ずつ丁寧に見てきた。それと彼の村人が時計代わりに使っていたといわれる規則正しい毎日。これも私にはとても好ましいからファンなのである。

ポンピドゥーセンターの回りもうろつく。新しくできたレ・アール地区にも行ってみる。なんか恐竜の子供が寝そべっているような屋根が印象的な新しいレ・アールの建物。だれの設計なのか忘れてしまった。私は楽器、食料以外に欲しいものはないから、ブティックが立ち並ぶであろう中には入らない。特に用事もないのに大工工具店内をぶらつく。

ビールが飲みたくなってきたから、予定より早くライブハウスに到着。カウンターで道行く人々を見ながら一人ビール。

以下、割愛。

結局、裕イサオと吉田ケイ(トランペット)が来ているということになり、後半、ゲストとしてステージに上がっちゃっていた。

なんか二年前ぐらいに同じようなことを書いた記憶がある。「プロとはなに?」、そう、社会的には実に単純で「それでお金を稼いでいる人」。この論理だと、バン・ゴッホもマルセル・デュシャンもプロではなかったことになる。デュシャンは趣味ですと自分で言っているから、それでいい。趣味で二十世紀の美術史を変えてしまったから、もう、一般人はなにもいえない。

プロとアマの違いは、その人の心の位相の問題。ちなみに、ピアノに関して言えば、技術とかこの音大出身とか、それ以前にどんだけピアノがあなたなのかちゅうことが、まず、先。うまくてもへたでも。

全身で弾いている。これだけで、まったく違う演奏になる。全身ってのは、その人の「ほぼ全人生」という意味です。

逆に言えば、音楽の本質は「それだけ」。わっ、人生も、そうなんじゃないの?

作者注

同じ曲を素面、ほろ酔い、若干飲み過ぎとか、ゆっくり、普通、ちょっと早く、マッハ3とかやってみる。そうやっていると、仮にベートーベンでも自分の演奏になっちゃう。

しつこいのだけれど、人間の動物としての寿命は五十歳だと思っている。それ以上は老人。超高齢化社会、別になんの問題も私個人にはない。単に、五十歳を過ぎたら次世代のお荷物にならん、という現実を遂行すればいいと思っている。ちょっとだけでも「足し」に結果なるのであれば、それは本望。持ち家はいるだろう。次世代の財産になる。借金は、当然、いらん。家の中はほぼ空っぽの方が、私が死んだ後、整理が駱駝。じゃ、生きている間の私は殺伐とした空間にずっといるのか？ ピアノが一台。これで私の終活は永遠的に現在進行系のまま終焉しているから、毎日が楽しいし生き生きしているしいつ死んでもいいのだ。

こういう心境でこそ、長生きには拍手である。そうでないなら・・・。好きにしてください。お一人で。

もしかすると、ピアノという西洋の機械で禅の世界にも行ける。うん、悟り、つまり、諸々から解放された方が楽しいし長生きの形が問われる。ブログもとってもいいと思う。

当たり前だけれど、皆老いる。私自身がすでに片足を入れ始めている。そして自立が難しい方々は当然にして介護が必要になる。

パリのプータロージャズメンも当然にして直面する。老い、介護、こういったものを諸々と考えないと行けなくなっている。正確には、自分のそれは実にクリアーなのである。あまりにクリアーであっけらかんの世界。単にピアノが私であればいいとそれだけなのだ。でも、そんなにうまく行くのか？ これは私自身も分からない。

以前、九十代の方を七十歳代の娘さんが介護していて、力尽きたという新聞記事を読んだ。力尽きた。つまり、無理心中である。分からない、最善の選択肢の先の結末ではないだろう。選択肢がなかったからそうなった。いや、娘さんが最後に選択した方法だったのだろう。その国のシステム、経済状況、社会状況で諸々の老いの風景が発生する。選択肢がない方々も多いはずだ。私自身がその一人でもある。ほとんど、バン・ゴッホと同じになるはずなのだ。フランス在住の無名のオランダ人画家。赤貧。ほとんど変わらない。

フェアリーさんの以前の記事に禅僧の去り方が描かれていた。数歩歩いて立ったまま息を引き取っていた禅僧に心を打たれた。その反面、往生際の悪いめそめそする僧の姿にも心を打たれた。私本人は前者を目指しているつもりではあるけれど、蓋を開けたら後者である可能性も大のような気もする。ボロボロになりながらピアノの蓋を開けようとしている自分の姿を想像してみるけれど、それほどの違和感は感じない。うーーん、なんかできたら若干お笑いのような去り方が好ましいのだけれど……。ピアノ椅子に躓いてスタンウェイのフルコンサートピアノの中に飛び込み逝ってしまいました。仕方がないのでピアノ自体を棺桶にしちゃったよ。なんていう感じかしら。

昨日、やっと、父が退院した。今朝、私のメール(退院、良かったですという)に返信が来ていて、目頭が熱くなった。「二か月ぶりに風呂に入りすっきりしました」と。そして、今朝、以前と変わらない父からの電話を受けた。少し声が上ずった。

私の父は医者である。神奈川県南足柄市の全校生徒六人の分校で神童と呼ばれた人。小田原中学へと十五歳から親元を離れている。あまりにもったいないと。足柄の富士山に見える金時山。天才児は町へ連れて行って大成させようというコンセプト。現代的ではある。それ以前に、父が医者になる発端が小児麻痺。幼少期にやっているから今でも後遺症が残っている。右腕が震えるのだ。医者なのに注射が怖いのだ。

小田原高校をなぜか一番ではなく二番で卒業している。それから東北大学医学部へ。入学金はお金ではなく「白米」。米俵を東北大学に担いで行ったそう。大学院、博士課程、国費留学で世界一周を二度している。高血圧の論文発表を兼ねて。三十三歳。突然、東北大学高血圧研究のポストに嫌気が差し、福島県いわき市医療法人常磐内郷病院内科臨床医となった。六十五歳で理事長として定年。定年後、八十歳まで赤ひげ先生的クリニックを裏庭でやっていた。今回の入院まで、高坂クリニックの内科一般診療を週二回やっていた。

本当に不思議なのだけれど、裕イサオというパリのプータローの父親である。反面教師ではなく、子供の逆噴射的？ でも、親父いつも言ってたよな。「医者なんて二流でいい、一流の人間は、数学者、哲学者、芸術家、この三つだ」とね。わっ、ジャズのピアノ弾きって範疇なの？ とにかく、退院、おめでとうっ！

昨日の記事、自分でも良いのか悪いのか判断が付かない。そう、諸々を実名で書いたからである。判断が付かないということはどちらでもいいということなのかも知れない。気に障る方、なんかお自慢のように感じる方、当然にしていらっしゃると思う。けれど、私の中にはそういうものはない。むしろ、今回の記事こそ「お自慢」なのである。続けよう。

地方の医者。なんかどこでもそうなのだと思う。地元の名士のような感じになってしまう。私の感覚とすると立派な仕事のひとつではあるけれど、それ以上ではないと思っている。過剰評価は解せない。まあ、それ自体は私の問題ではないのだけれど、「〇〇先生の息子さん」。このように幼少期から見られる。いや見られてもいいような立派な息子さんも五十パーセントはいる。残りは、ずばり私のような「馬鹿息子」なのだ。そう、たぶん、同世代の「それ」の一位は堅気でなくなってしまった高校の番長。二位がわたくし。見事な馬鹿であると自負しているところが、さらに馬鹿なのだ。

なんか医者の家には暗黙の掟があって、跡を継ぐということになる。そう、半分ぐらいは継ぐ。非常に優秀な連中も多い。そうでもない奴もなんとかされる。しかし、優秀ではない、しかも、僕は詩人になるなんちゅうへんてこりんな奴が出てくる。これは一族の悩みの種になる。跡を継がないばかりか、海外に移住してしまい、しかも、訳の分からないフリーズジャズなんていうことをやる奴なんかがいる。正真正銘の「馬鹿息子」なのだ。

私は真面目人間だからストレスだの諸々の責任感だのが脳内を常に渦巻いている。だからこそ、と申し上げるっ！ ジャズメンなのだ。でもねえー、しくしくしく。地元に戻る。裕イサオ＝なんかよおー、パリで、えっ、パリってボストンの首都？ で絵描きやっている馬鹿長男じゃね？
以上おしまいの傾向がある。

二十四年間のサラリーマン生活も、小説をぜいぜいいいながら書いていた十何年も、ピアノ弾きのわたし、ちっとわ、パリのジャズシーンで、ほんの少しね、名の知れた人であるわたしも、おっ、ブロガーのわたしも・・・、じえんじえん理解というか知らないのです。

なにを言っても「イサオちゃんは自由だもんねえー、好きな時に絵えー描いて」。どうにかならんのだっ！ これってよっ！
介護マンしてたのによっ！

編集部

「ねえねえ、裕センセ。これこそ、センセの人徳で
すよお——————っ！」「おっ、そういうことなのねえ————、ハンカチ頂戴」

追記

北海道とフランスの入れ替え作業を延々とやっている。ピアノ、念力、架空力とかいろいろを駆使している。しかし、久保の兄貴の御達しとはいえ、パリに来たはずのご観光者がなぜか札幌のすすき野。で、札幌のすすき野へ向かった親父がシャンゼリゼ。札幌のノートルダム寺院。これは筒井康隆先生にしか無理だ。僕個人は入れ替わると札幌ラーメンが食べれるのでうっしし、ですが。

わっ、格好いいタイトルを付けちゃったのだけれど、ご存知の方はご存知の通り、武満徹の代表作のタイトルです。

確か初演は小澤征爾ボストンフィル、場所はニューヨークだったはず。無機的な現代音楽が多い中、武満さんのこの交響曲、弦楽器が上下にスライドする実に妖艶な、ちょっと怖い曲だった。もう随分と聴いていないけれど、今でもその音が脳内に木霊している。なんか勝手に武満徹と安藤忠雄は独学の大家と見なしている。どちらも大学を出ていない。作曲家と建築家としては世界的にも珍しいお二人である。

フランスに帰り三週間が過ぎた。私の展望台的サロンの窓から快晴の空、紅葉たけなわの風景を見ている。しみじみとフランスという国、確かに美しい国だと思う。系たんさんのスイスのお写真も毎々、わっ、きっ綺麗と思いながら見ている。やはり、ヨーロッパの国々の歴史の積み重ねは半端ではない。何百年も掛けて作り上げられてきた街並み。簡単には真似ができない。ほとんど町の方が永遠だから私たちは皆通りすがりパッセンジャー。こういう明るい刹那を感じちゃったりしているのだ、おっさんは。

おっ、本当、東京都とイルドフランス地方が入れ替わるとどうなるのだろう？ 日本の首都がパリになるの？ 違うな入れ物だけ入れ替えると、「俺、今晚、パリの歌舞伎町でコンサートなんよ」なんちゅう会話になるのかしら？ 「俺、住まい？ パリの八王子だよおーん」とか？ なんならフランスと日本全土を入れ替えちゃうと、「仙台のアミアン大聖堂はスゲー」「ディエップの松島は必見」わっはははは。なんか楽しい。馬鹿じゃね。そうするとフランスでは日本語、和食になるのか？ わぁおうー！ 「北駅の立ち食い蕎麦屋のコロッケそば、うまいんだなこれが」なんていいねえー、コンサート帰りに真師匠と焼酎飲みながら……。あれ？ 久保の兄貴はどうなるのだ？ こりゃー、日本のカンヌでフランス料理のお惣菜屋さんに数学上はなるな？ 余計なお世話っ！ あれれ、「運転手さん、明治神宮まで行ってくれる。せっかくパリに来たから……」、わっ、今から東京都の地図、頭に入るのか？ 裕センセっ！

久保の兄貴と勝手に呼ばせて頂いている久保はつじ「折り合いをつける」19Nov2016を拝読した。「十七の頃、気持に折り合いを付けきれずに.....荒れた。」、このフレーズ。脳に突き刺さる。

私のことを書きたいのではない。これはお断りしておく。私というもう一人の男も、まったく同じ感触を十七歳の時に感じていた。

私は今もって人間の骨幹にあるものは詩力だと思っている。これがなくなった時、生きる屍。今でもそう思っているから、「折り合いはついていない」のだ。折り合いのつかない人間だから、フリーズを手弁当でやっている。「生業」にさえならない。だから、リムジーンドライバーでもある。この摩擦こそが、私が生きている証なのだと思う。

私は、詩という形式で作られたものが「それ」ではなく、その摩擦を内包しながら生きている方が詩人だと確信している。そういう方の書くものこそ、私にとっての詩なのである。

田村隆一の詩集は全部持っている。私は名を馳せた初期の詩に感銘は受けない。若い人の詩は死の臭いが強い。生きているパワー全開だからそうなる。そして、それこそが詩でもある。でも、生き永らえた方はそれに詩を感じなくなる。現実の死が近付いている。詩人ではなく死人の方が近似的なのだ。しかし、生き永らえた側が若干、それを凌駕する手立てはある。永久に折り合いがつかないまま生きること。選択肢はなくなる。どんどん丸くなって、本人が地球の近似値になる。

私は金子光春の晩年の散文小説三部作、マルセル・デュシャンの遺作。この強烈な老境に目頭が熱くなる。表向きはとんでもない好々爺だった。お二人とも。

久保の兄貴の詩根に私は打たれる。

と、若い頃の文体で、兄貴、書いてみたよ。

私のジャズ師匠沖至に初めてお会いしたのは、リヨンのライブハウス。私は三十九歳で師匠が現在の私の年齢だった。

その頃の裕センセは今でも下手なのだけれど、もっと十倍ぐらい下手だった。正確にはジャズ理論をきちんと把握せずに「とにかく音を出しゃいいんだろ」というド下手プラス傲慢ナルシス。世界で一番ピアノが上手いと本気で思っていた。っても、単に早いということと、いわゆる挑発姿勢の全盛期ちゃう感じだった。「俺は四時間ノンストップでピアノを弾き続けられるっ！」と豪語していた。

コンサートの打ち上げで師匠に、なんとなく謙虚ぶって「師匠、俺、弾き過ぎですかね？」と聞いた。師匠は「えっ、イサオ。弾き過ぎ？ ははは、いずれできなくなってくるからできるうちにやっという方がいいよ」ときっぱりとおっしゃった。

あれから十八年。キミマロさんみたいだけれど・・・。

スピード マッハ0.7ぐらい遅くなった

挑発力 挑発しようという気があまりない

ライバル心 ミュージシャンは仲間という感じの方が超強くなっちゃってライバル心がなくなった

モテキ 女性のお客様にもてたい感は若干残っている

演奏時間 練習時間が四時間がいつしか二時間になって現在は一時間 つまり、コンサート時の演奏時間もほぼ同じである

そして、もっと最近の演奏時間は五十分。アンコールもしない。となった。体力と集中力がこれ以上続かないのだ。わっ、その内、裕センセのコンサートは十五分とかになるっ！ これではお金は頂き難い。そうなる五十分はやるけれど、体に負担の掛からない五十分。つまり、内容を薄める。バラード系で体力を温存する。味わいみたいなもので間を持たす。それと、他のメンバーのソロパートを増やし、俺は休む。とりわけ、オリビアはまだ持つから、彼女にベースソロをばんばんやらせ、俺は合いの手だけ入れる。

困っちゃったなあー、私は音楽はライブという頑ななポリシーの持ち主。CD制作Video制作に特化する日も近いの？ まあ、いいか。

昨日、日曜日。天気予報外れ。雨ではなく強風だったけれど快晴。半地下室と庭の掃除をした。小さい畑を来春に向けて耕した。腰が痛い。縦長の庭を熊手を持ってうろついていた。私の至福の時。いい気持ちなのだよねえー、こういう時間。

夕方、ピアノを弾き捲る。それから珍しくカミサンとニュースを見る。あれれ？ なんの選挙なの？ カミサンに聞いたら今回から同じ政党からの大統領選立候補者を一人に絞り、つまり、票の分散を防ぐために、各政党支持者による大統領候補選出の事前投票をすることになったそう。昨日は、フランスの自民党のその第一投票だったらしい。今週の日曜日に最終二候補から一人を選出。ふむ、この事前投票はなかなかボンイデー。党内の内輪揉めで票が分散し、結局、他党に敗北パターンが多いからだ。

たぶん、私が政治のことを書くのは初めてのはず。支持政党なし。第一、フランスの選挙権もなし。政治への興味もミーハーレベル。大統領、極端なビジョンの持ち主でなければだれでもいいという感じ。できたら見た感じが格好いいまたは美しいマダムがいいというミーハー。やっぱ、おフランスだわぁーちゅう見てくれの方が得だろう。

自民党の大統領候補、下馬評ではアラン・ジュペ前首相が一番人気。シラク大統領の秘蔵っ子。七十一歳。いかにもフランスの色男という感じ。美食、酒好き、女好きという雰囲気。シラクさんと同じく漂っている。たぶん、お話もおもしろい人だろうと思う。しかし、賄賂問題がいつも燻ぶっているのもシラクさんと同じ。若干、終わっちゃった人という印象も強い。二番が前大統領ニコラ・サルコジ。前回敗れている人の復活は普通はない。しかも、オランド大統領の誕生もオランドさんの勝利ではなく「とにかくサルコジを辞めさせろ風潮」の追い風による。オランドさんも認めているから、再選は無理。三番がフランソワ・フィヨン前首相。一次選挙の結果はフィヨンさんの圧勝。意外だった。でも、私個人はフィヨンさんが一番好ましい。俳優なんじゃねというぐらいハンサム。着ているものさりげなく超おしゃれ。大声を出さない。人の話を遮らない。穏やかにゆっくりとしゃべる。フランスの政治家では実に珍しいタイプ。典型サルコジさんの対極。第一、わんぱく小僧のようなサルコジ大統領の下で黙々と首相をしていた。テレビにもほとんど出ない。なんかこの寡黙な感じはとてもいいと思う。彼が大統領に仮になると、もう、絶対、彼の衣装は男性陣の見本になるだろう。実におしゃれ。フランスの大統領でえーすちゅう感じでイメージ的にはいいんじゃない。この結果だと、ほぼ、彼が自民党の候補になるだろう。

わっ、そうすると、これから事前投票をするフランス第一党である社会党候補との一騎打ち。普通は現職のオランド大統領で決まりなのだけれど、支持率の低迷を考えると再選はほぼ無理。フィヨンさんに勝てる候補は絞られる。ずばり、現首相マニユエル・ヴァルスしかいない。人気は

絶大。こちらもハンサム。なんか本物のジェームズ・ボンドってこんな感じなんじゃねという雰囲気。真面目。ぶれない。着ているものもジェームズ感が漂っている。フィヨンさんみたいなおしゃれというより、男子のスーツってこれだぜっていう感じ。まだ、五十ちょっとである。

前回のオランダ対サルコジは若干、しらけというより、アンチサルコジ色の強い選挙だったから、来年、もし、ヴァルス対フィヨンとなるとジェームズ・ボンド対ルパンみたいな感じで自民党と社会党のこれからの切り札(なにしろ、前と現首相だもんねえー。しかも、どちらも任期をまっとうした)どうしの対決という感じでおもしろい。アメリカの方のそれはなんだかワイドショウみたいで興味がまるで湧かなかった。

山下さんのファンちゅうより、ご本人の記憶にはないにしても面識があるし、第一、現在の裕センセはある意味日本フリージャズピアノイロドフランス県指定絶滅寸前野鳥的音楽を守る会の一員なんじゃね。こうなった発端は、山下さんの若干先輩である沖師匠であるから、「同罪」。日本フリージャズの先駆者である、お二人とも。で、山下さんのピアノに関してチンピラはなんにも言えない。そう、エッセイの方。こっちは大ファンを通り越している。すっ、凄いの一言。筒井康隆がお株を取られたあーーとおっしゃっているぐらいだから。

今回は山下さんのエッセイに出て来る「ヨボヨボジャズ」のくだりを落語のように裕センセ解釈してみる。

落語「フリージャズピアニストの末路」

裕伊左之助、御年九十二歳。酒たばこの長年の不摂生にも関わらず、まだ、現役。八十の頃に、畏敬していた金子光春と同じく「エロ爺さん」としてバラエティー番組の脚光を浴びる。しかし、本来はフリージャズピアニストであったことが数か月後に発覚した。元々はハンサム系であった。よぼよぼ好々爺になってなぜか女子に訴え掛ける風貌および雰囲気になった。アンケートで理想の爺さんナンバーワンに輝いたのである。しかし、金子さんとの違いは歴然としている。金子さんが愛した「宇満子」にはまったく興味がない。「エロ爺さん」となったのは、諸々の詩的言動によるのであるのだ。MCの糞生意気な合いの手にも関わらず毅然としてエロティシズムについて語る。このミスマッチがなぜか受けた。

裕伊左之助のコンサートは満員。六千席では足りない。

相変わらず楽屋で赤ワインをちびちび飲みながらブログ「私はピアノだ8888336」、もう、四十年以上続いているブログを書いている。「裕センセ、そろそろ」「えっ、お迎えが来たの?」「ちゃうちゃう、コンサート始まります」「まだ、僕、ブログ書きたいんよ」「駄目ですよ、うなこと言って。お客様がお待ちです」「おっ、マミちゃん、こんな爺さんのピアノ聴きに来る人なんているの?」「満席です」「あっそ、金子光春師匠は、あれをね、宇宙に満る子って書いてたんだよ。うるうる」「センセ、昔話は結構、さっ、コンサート」「おっおおーーーー」。

マミが押す車椅子に乗り裕伊左之助ステージへ。「マミちゃん、ケーサ(酒)は?」「センセ、いつものようにピアノの左下」「メルシ」。

マミはヘルパーさんである。ステージの横に看護師さん二名が物干し竿を持って待機している。

「イサノスケ・ユウっ!」司会者のなんちゃらかんちゃら、興味がないから聞いていない。まだ

、なんだかしゃべっている。ピアノを弾き始める。衰えていたスピートはアル中で手が震えるから、その震えと共に復活した。マッハ3は超えている。この年齢で、このスピード、本人は観衆の挑発なんぞ念頭にないのに、若僧どもが仰け反る。ジャズの基本、スピードアンドセックスをこの爺さんは悟りの境地にて達成しているという恐ろしい演奏なのだ。スピード安堵セックスレスという新しい境地である。若僧には無理だ。

主治医の内山先生が盛んに時計を見ている。裕伊左之助、そう、自分で演奏を止めることができない。仮に本人が止めたつもりでも、手がブルブルするから演奏は続く。内山先生は両腕の下に物干し竿を差し込む瞬間とトータルの演奏時間との兼ね合いを見計らっていたのである。

ぴったり50分。両腕の下に物干し竿。看護師二人が両腕を持ち上げた瞬間、マミが車椅子を後方へ。万巻の拍手。いったい、誰へ対する拍手なのか作者にも分からない。裕伊左之助は手をブルブルしたまま楽屋へ。「マミちゃん、ビールビール」。

私の自宅のサロンには大きな縦長の窓が二つある。お天気のいい日は30キロ先のパリ副都心ラ・デファンス地区の高層ビル群まで見渡せる。階下に当たる庭の手前に1,900年、この家が建てられた時に植樹されたと思われる菩提樹の木がある。一階上のサロンから紅葉し四分の三ぐらいが散ってしまった菩提樹の垂直に伸びた枝が見える。薄い雨雲と白い雲とブルーの部分の空が墨絵のような感じで広がっている。時折、秋の透明な日差し。黄色とオレンジと黄緑色の交じり合った菩提樹の紅葉した葉が、その光の中で輝いている。実に美しい光景である。

父の入院に伴い、一か月以上、近くの大病院に毎日通った。父がいた病室は観察室と呼ばれるところである。ベッド数は十ぐらいだった。末期の方々の病室である。幸い父は回復し、自宅に戻った。以前の通りの生活をしている。しかし、観察室にいらした方々。一部の方々は一般病室へと転室のケースもあったと思う。毎朝、私が訪問するたびにいくつかの病室が空になっていた。どちらへ行かれたのか、毎々、気になった。少し不思議に思っていたことは、お見舞いでいらっしゃる方を私はほとんど見ていない。私の訪問時間と入れ違いになっていただけのようにも思われる。

やはり、その風景が脳に焼き付いてしまったから諸々のことを考える。明らかにフランスに戻った後の私のピアノの音は重くなっている。私のブログ記事からも軽みのようなものがなくなっている。いいことなのかどうか、私にもよく分からないけれど、私の十本指の先からそういった重いものがピアノの鍵盤へ放出されているのであれば、私自身は安泰なような気もするのである。なんども書いているように、音は重くても軽くても宙に消える(エリック・ドルフィーの名言の模倣)からどちらでも構わない。でも、書き物の方は宙に消えて行かないから、もう少し、消えてしまってもいい軽いものへ(以前のような)戻りたい気持ちである。

音友は私はミュージっちゃんだから当然にして多い。我々のトリオのメンバー、真子こと佐藤真(ドラムス)、オリビア・セママ(ベース)、しばしばゲスト出演してくれる師匠沖至(トランペット)。

来月から一月に掛けて音友来襲。皮切りはリールからクリスチャン・バッサール。それからベルリン経由日本から吉田ケイ。それからベルリンからポール・シュビンゲンシュローグル。

パーマネントメンバーについては今回は書かない。

「音友1 クリスチャン」以前にも何度か書いた。リール在住のクラシックギターの名手。私の大親友。同じ年。クリスチャンの凄いところはオープンマインド。これに尽きるのかも知れない。古典音楽、クラシックギターの名手であり、リールで大変著名な人だ。本人はじえんじえんそんな粋はどうでもよくて、とにかく音楽とセッションが好きなのだ。私のようなド下手ミュージッシャンと、えっ、いい感じーと二つ返事の回答が返ってくる。私が太刀打ちできないのは、私の、つまり、ド下手ピアニストの本領である即興音楽。わっわっわっ、彼の即興ギター、凄いのである。本当に成熟したミュージッシャンって、人間として凄いことが分かる。自己顕示とか挑発うなもんを技術が超越しているし、当然にして、彼の中でもそういう下らんことは、消化昇華しているのだ。

「音友2 ケイ」彼はベルリンに、確か6年間住んでいた。沖師匠のパリ日本祭オーケストラでお会いした。トランペットは独学と言っていた。私と同じである。私の弟と同じ50歳。いつもポケットトランペットを持っている。「イサオさん、ベルリン、石投げるとアーティストとミュージッシャンに当たっちゃう」「えっ、マジ?」「回りがアーティストとミュージッシャンばかりで、ちょっと、嫌になっちゃったんです」「おっ、分かる分かる、その感じ」「で、パリ経由で一回日本に戻ります」「あっそうなんだ」。先日、二人で飛び入り出演。打ち上げで、「イサオさん、パリに戻って来ました。日本に帰ったら、一か月、もぬけの殻になっちゃってペット吹けなかった」「わっ、やべえーなあー、そういうの」。私には日本のせいなのか、彼自身の疲れなのか判断は付かない。うなもん、野暮だから俺たちは聞かんのだ。

「音友3 ポール」ポールに関しては随分と書いた。私のブログのヘッダー右のトランペット奏者である。私より一つ上。ベルリンで活躍するミュージッシャン。ギル・エバンス・オーケストラのメンバーでもあった。本当に物静かで温厚。私、真師匠と同じ酒飲みなのにまったく変わらない。彼のトランペット、技術以前の重要事項。音が本当にクリアーで綺麗なのだ。ポールはロックからエレクトロからスタンダードジャズ、フリージャズ、なんでもござれのマルチ・プレイヤー。この音階、音のクリアーなミュージッシャン。ジャズの世界では以外にも稀なのだ。テナーサックスのウェン・ショーターが代表格だけれど、類まれな技術と人格がないと出てこな

いのである。

と、仲間のことを書いていたら、いかに自分が未熟なのか分かったのかってのっ！ 裕センセっ！ 自分を叱る夜中まで(コピーライト、さまぁ～ず)。

1時間20分、ピアノの練習をした。コンセプトは「エコプレイ」。当然にしてミュージシャンだって老化する。しかし、である、それに抵抗して筋肉むくむく、下半身ぱんぱん。私個人は好きになれない。そうすると「老化の先取り」、つまり、自分の老化を受け入れて「老化した状態でやる音楽の模索」という人生訓が現れる。こういうところも音楽の素敵どころなのだ。老化に対抗するか受け入れるかという選択ね。私は明らかに後者である。しかし、体育会系熱血漢真面目人間、こういう元々の気質がある。「俺は折れねえー」というツッパリ系。これは矛盾する。矛盾するものをやっているとかロクなことはないから、早々に判断できる内に判断する。これは、自分の老後の問題になる。自分で判断できる内にスタンス、ベクトルと設計図を作る。私は超絶的几帳面だから、ここは折れないのだ。一人で清々と長生きできる状態にする。神業的でもあるけれど、私の終末像はそうでないと困る。しかし、具体的な設計図は本当に難しい。看護師さんの常駐しているところにはないと子供たちに迷惑が掛かる。倒れた時の緊急連絡先が子供たちでは拙い。そういう職業ではないのだ。しかし、である。施設から私はジャズクラブに通うのかしら？ そんな元気があるのなら施設になんでいるのか？ ジャズクラブに行く道すがら倒れる。これでは美しくない。野垂れ死にして結構ですと今から遺書を公にしといた方がいいのかも知れない。

難しい問題は、なるべく単純にしてみる。看護師さんが常駐しているアパート。まあ、施設でもいい。ここにピアノとパソコンとビデオカメラ(俺の、です)を設置して頂く。俺は出不精だから、施設のお庭をうろつくぐらいである。酒たばこを禁止されると喚くから主治医に事前に話は付ける。ここにフィナンスの問題が起きる。うおっ、今から遺書を公示しかないんじゃないかね。

などと、考えながら弾いたピアノ。自分で凄いと思ったりする。

あのね、元々ないけど、ハイテクでもスピードアンドセックスでもいいけれど、こういう挑発音楽をチャンジーがいつまでもやっていること。老害だ。つまり、私もそれがすでに始まっていることを認識しているっていうことが大切。フリージャズ、ロック、パンク、若者の叫び。技術は後から付いてくる音楽。私自身が矛盾しているということ。

でね、強弱付けて間を開ける。真師匠、オリビアのスペースをどんどん提供する。このエコプレイをやってみた。実にいい感じなのだ。テクなんて単純でいいことが分かったりする。

「親父どもに苦言」

お前らよおー、もう少し、俺の音楽聴けってっ！ 鼠色のマンサラたちよっ！ 定年離婚なんて洒落たことすんじゃないかねってのっ！

おっ、奥さんの方からの申し出なの？ 尚更っ、凄過ぎっ！

ここは、ココアではなく、パリの本郷地区にある赤門で有名なパリ大学。歴史の授業を受け持つのは、御年五十七歳、裕混乱先生である。生徒、しかも、女子生徒からの人気は絶大。ヨジレマイオスハナモゲラ理論で一世を風靡。おまけに不倫ジャズピアノの名手。風貌はベートーベンとマツコ・デラックスとマックス・エルンストを微分積分した感じの高年美貌である。

不倫ジャズとはなんぞや。結局、技術は無視の虫の息。なんらかの楽器で音を出して女子の心をゲットする。以上なのだ。即戦力音楽とも言える。えっ？

「さっ、幹たち(これはジャズ用語の君たちに当たるが若者たちの位相を鑑みれば詩的な用語、かちら?)、栃木県にあるベルサイユ宮殿は、ご存知の通り徳川家康の建立であり、結局、徳川十六代、その妻、マリー・アントワネットの住まいでもあった。うで、1789年、日本米騒動、現在、フランスで放送禁止用語であるふうにやららら一揆にて、その幕を閉じた」

「しかし、栃木県に膨大なお金を掛けてベルサイユ宮殿。つまり、庶民勘定じゃね、感情を逆撫でじゃん？」

「先生っ、東京のノートルダム寺院との兼ね合いは？」

「おっ、カワイ子ちゃんっ、いい質問だねえー。うるうる。なんの関係もねえー。ばあーかっ！
うで、仙台にあるモン・サンミッシェル修道院についてお話をする。九世紀の頃、ヘラマコイタが建立を命じた。日本八景の先のはっけよいとして建立したのじゃ、お若いのっ。これは、フランスの鹿嶋市娘神宮と双璧。でね、パリの代々木公園で愛を囁く。お洒落えーってなるじゃん。東京のシャンゼリゼの方が洒落てるだっ？ 馬鹿言わんといてっ！ パリのゴールデン街、舐めんじゃねえ」

「先生、なんで、ここフランスは、日本人ばかりなのですか？」

「それはねえー、カワイ子ちゃん、作者にも分かんのです」

編集部

「いつから、モン・サンミッシェル修道院が日光東照宮になったのか、我々、編集部も理解に苦しんで居ります。でも、見てみたくない？ それ。ブローニュの森が代々木公園でも、ノートルダム寺院が明治神宮でも、原宿表参道がシャンゼリゼでも、作者の自由。スゲーっ、自由ってっ！」

「イーチャン・ユング博士。最近、健康志向病という新種の病いが蔓延し始めて居ります」
「ねえ、その博士っての止めてクレヨン(Copyright Ko MACHIDA)」
「けっけっけっ、医学部受験を白紙撤回ってば聞こえはいいけど、俺は騙されんぞっ！ 能力がなかった。以上なんじゃね？ そういう意味の白紙だぜっ！」
「やっ、やばぐね？」
「それはさておき、博士。その健康志向病についてどうお考えでしょうか？」
「なに、それ？」
「ご存知ないのですか？ 博士というお立場で？」
「お台場がどうかしたの？」
「博士、ご説明致します。症例諸々。健康のために塩分を控えめではなく一切摂らなくなった方が熱中症で死亡。酒たばこを突然絶ちジョッキングを開始。二週間後に死亡。大変健全な方が、つまり健康志向の方が超過勤務にて過労死。七十代の男性がボディービルを始め首を骨折。死亡。ダイエットに勤しむ女性が拒食症的餓死……。こういう兆候のことです」
「ねえ、小田切君？ だっけ？ 健康はね、志向するものじゃないぞ、維持するものじゃ。うで、健康の礎の元に研究芸術ビジネスと諸々の人生の志向が生まれるのじゃ。お分かり、かちら(Copyright Hatsuji KUBO)。生きている目的が長生き。馬鹿でねえーのってっ！ 内容内容っ！ 人生はなにもないようで内容っ！ おいっ、マミちゃん、酒酒っ！」

編集部

大丈夫なんすか、ユングセンセ？ あっ、なんか言った？
えー、毎度お馴染み三遊亭裕楽でござえーやす。おい、家老を呼べっ！ 過労で臥せって居りやす。うだば、シャバドゥビ隊長を呼べっ！ 体調を崩し臥せって居ります。課長を呼べっ！
ばあーたれっ！ 花鳥花鳥でえー——花札やっちょります。羽毛おー——、役に立つ奴はあー——っ、ふむ、フランスの大統領がいるべえー——のっ！ オランダ。お粗末でしたあー——っ！

私はあまり不機嫌な時はないけれど、最近、若干機嫌がいい。その訳はずばり、明らかにピアノが進化したことを自分で実感しているから。なんか延々と練習をしているのだけれど、ステップアップを体感する時ってのはそうそうはないのだ。じえんじえん進歩し
ねえーなぁーと嘆きばかり。なんどか書いたけれど、私の教則本。分厚い黒いファイル。これ、自分で作ったのだ。超複雑なジャズのコードワークが数式のように並んでいる。名付けて「ドラゴンへの道」。基本的に音符はなくて、コードネームの数式。トニック、サブドミナント、ドミナントコードとそれぞれの代理コードとかパッシングコードとかノンファンクショナルコード、異和音とかこういうものが書いてある。まあ、数学の本みたいな感じ。この糞忌々しい数学式を裕イサオサウンドに昇華させようと試みているから、顔がベートーベンにどうしてもなってくる。

なんかね、例えていうと、チェスプレイヤーがいるとする。もう、相手に勝つことはどうでもよくなってチェスという宇宙に一人遊ぶちゅう感じに段々私のピアノも近付いてきている。「俺の音楽を聴けっ!」、こういう感じがどんどんなくなってきていて、もう、あたくし自分のために弾いております、はい。ちゅう境地なの? 急に思い出した。マルセル・デュシャン師匠が「勝ちも負けもしないルーレットのシステム」を考案し毎日カジノに通っていたことがあった。勝ちも負けもしないことを実証するために。さすが師匠らしい。金を稼ぐというギャンブルの基本がどっかいっちゃっている。はっきりいってアホだ。うなこと考えるのは。

うおっ、魚っ! わっわっわっ、そうすると人間関係もそうなってきたの? 相手を凌駕するとか嫉妬に狂って卑下するとかがなくなっちゃって心が路傍の石みてえーにそこにあるちゅう感じなんか? そういやぁー、ライバル心みたいなものを感じなくなって久しいぞ。他のピアニスト聴いて、すっ、凄げえーなんて思っているし、おっ、あの音お

しゃれだねえーなんて。その代わり、げっ、芋っ、なんて思うこともあるけれど、私自身が比較基準にはなっていない。小栗旬みて、かっちょええーーと思うし、上島竜兵さんみて、いい感じだなあーーなんて思う。俺? まあ、鼻眞目でみれば若干ハンサム系でなくもないけれど十人並みハンサムの下ぐれえーてな感じ。大したことはねえー。あ

りゃ、昔のナルシス君うーーん、どこいった? 俺は退化しながら進化している。±ゼロじゃん。てえーことは一体どこが進化したということなのだ? そうかぁー、ソクラテスの名言ちゅうことなのね。±ゼロを実感したことがポイントちゅうことね。ワンタン(昨晚作った。自分で作ったのに超まいううーー)し馬鹿よねえーっ! (Copyright Hidehiko ISHIZUKA)

ピンポーン。「あら、だれかしら？」ネグリジェ姿のイサコ・デラックス。

「グローバル営業世界制覇、村志でえーす。ダッフンダっ(Copyright Ken SHIMURA)」

「あらあー、村ちゃん、どうぞおー」

「ほっほっほっね、イっちゃんっ！」

「やだわあー、寝起き姿」

「ねえねえ、いいもの持ってきた。北の方から持ってきた象おー、増産増産お鼻はどうしたのおー？」

「村ちゃん、なによっ、早く言いなさいっ！」

「むひっひっひっ！ 貧乏な方々にご満足頂くゴージャズカーです」

「うなもん、いらんっ！」

「ちょっとちょっと、イっちゃんの愛車、スギスフトスイのストレッチリムジーン、しかも、五十万円「のみ」高あー」

「村ちゃん、商品のコンセプトおよび購買層をあんた分かってないわね。無用の長物。大きなお世話よっ！ 大体ね、このプロデューサーの裕にね、うなもん持っていくこと考えなさいっ！ 狭いのか広いのか分からん長い庭なのよ、あいつんち。後百メートルの庭なんていらんわよっ。馬鹿じゃないっ。同じことよっ！」

「わおあおーっ！ じゃ、裕センスのところに昼顔の頃のカトリーヌの等身大の・・・」

「それ、正解。あの馬鹿、ピアノとそれしか興味がないのよ」

ここまで昨夕、「酔った勢い」で書いた。今、仕事から帰り一杯飲みながら久保の兄貴の記事を拝読。スズキスイフトのストレッチリムジーンもいらんいけれど、ブガッティーもやはりいらん。私の好みに合わない。むしろ、ダイハツのタントが欲しい。お金はたとあるけれど・・・、ド嘘。いらんものを赤ワインを飲みながらつらつら考える。高さ五十メートルの平屋。光熱費を考えるといらん。ご近所関係が悪くなる。幅一メートルの五十メートルプール。一人しか泳げん。直径二メートルのサッカーボール。絶対にゴールキーパーの勝ちだ。幅三十メートルのピアノ。一人では弾けん。鍵盤の幅五センチ。特殊なグローブせんと弾けない。ベルサイユ宮殿と同じサイズの家および庭。ぎゃっ！ 芝刈り、俺がやるのか？ 自宅内のグーグルマップがあるぞって。そして、カトリーヌ・ドゥヌーブの等身大のお人形。これはピアノの横に置いてもいいから？

若干、これを書くことを躊躇している。アップするかどうかはともかく、書いてみるだけ書いてみる。

日本から帰国した十月二十五日。自宅に到着と同時に電話。家内が出た。「あなた〇〇社から・・・」。出ますかという意味もあって・・・になる。「あれ、もしかすると俺が担当していた案件で分からないこととかあるのかな？ 緊急かもしれないから出るよ」。そりゃー、四年前に自主退社したとはいえ長年営業マンとしてお世話になった会社である。きちんと対応したい。しかも、かつての直属の部下からの電話である。

私の退社が当然直接の原因ではない。とはいえ一因ではあるのかも知れない。当時のスタッフ。私の退社後次々と辞めていった。現在残っているのは二人。私の営業部隊の直属の部下二人のみ。課自体が解体寸前。現在、挺入れのため東京本社から新しい上部が赴任した。かつてのOBに助力要請しろとの指示があった。探しているのは三つのポスト。所長、営業責任者、現場を監督できるスタッフ。

当然にして、この三つができる人間、または統括できる人間はパリ広しとはいえ裕さんしかいないとなったとのこと。まあ、これは本当にそうだから、かつての部下の判断は正しい。五十七歳のジャズプーターローへの申し出であるから、若干、目頭が熱くなった。まともな就職先、後四年半で定年を迎える親父にはそうはないのだ。現在雇って頂いているリムジーンドライバーの職。仕事が激減している中での雇用である。私はラッキーなのだ。しかも大変気に入っている。しかし・・・、仕事数の少なさ、つまり、赤貧に喘いでいるのはいいのだけれど、喘いでいることに疲れても来ている。

ここに微妙な悩みが発生する。かつての会社への復帰。ありがたい話ではある。生活の安定も確保される。しかし、その多忙ぶりを私がむしろ一番知っている。しかも、解体寸前の課の立て直しは尋常な作業ではない。＝ピアノちゃら＝ブログ書きちゃら。こういう公式になることは目に見えている。

と、悩んでいても始まらないから現在の状況を確認およびご説明頂くために、かつての勤め先を訪問することにしたのである。ちょっと、怖いだけれど・・・。だって、「裕イサオ」という芸名の存続に関わる問題なのだよねー。裕センセにとっては巨大問題なのだ。

随分前にここまで書いて本日行ってきた。Come back callを浴びてきた。それはいいのだけれど、作業員の方々、なんちゅう方がおこがましい。あいつらが私の姿を目ざとく見付けぞろぞろとやって来た。「おめえー、なんだよおー、辞めやがってよ、なにこんなところでウロチョロしてん

だよってっ！　で、早よお一戻ろんかいっ、ばぁーたれっ！」。私は彼らからすれば「偉いさん」だったけれど、私は本当に彼らを大切にしてきた。だから、こういう会話になる。一緒に梱包したし引越荷物も運んだ。彼らは私のことを「営業統括」なんちゅう偉いさんとはまったくもって思っていないのだ。ジャズメンとしか思っていないところが泣けた。彼らの嬉しそうな顔。ちょっと、ジーンとした。

暇だ暇だ赤貧だと喚いている割には、毎日、ドライバーの仕事をしている。これくらいあれば生活は安定する。本日も仕事から帰り風呂に入りピアノを弾き捲り、赤ワインを飲みながら平和にブロぐる。いい感じ。本業で飯が食えない。これは芸術系芸能系の定めだから喚いてもだれも助けてはくれん。当然にして二足の草鞋になる。しかし、前の会社へ復帰すると片足鉄の草鞋。片側の草鞋とのバランスが悪いどころかスケボーみたいになっ

ちゃう。二足歩行自体が不可能になる。若い時分の自分ならおーって睡眠削ってなんとか二足にしてきた。今、この年では無理だ。だから、やはり社会的な仕事はジャズメンに似合ったものがよいと思う。帰って来てコールを早口で切羽詰まって連発するかつての部下に、「ねえねえ、ジャズメンとリムジンドライバーって凄げえー似合っていると思いませんか?」。この時だけ、本気で頷いた。結局、ドライバーの仕事が十分にあれば、すべてが解決する。

と、なんかもやもやしている時は、迷薬ピアノキシンZを二錠飲む。ありがたいことに久保の師匠からクボポタミンDを頂いた。うるうるした。ピアノキシンとクボポタミンを服用したら、目が垂れ、鼻の下が伸び、目が潤んできた。そして、副作用だっていう言い訳をしつつ美女に飛び掛かる。イイワケねえーだろってっ! そうではなくピアノに飛び付いた。クリスチャン・バツサーールとのデュオコンサートのイメージがぐおっと湧いてきて、アホのように弾き捲った。そういえば、チャーリー・ブラウンの中に出て来るピアノ小僧みたいすっね、裕さんは。と随分前に言われたことを思い出した。

ピアノキシンとクボポタミンと赤ワインの三つのハーモニーが体を駆け巡り始めたら、終わりのないエレベーターが見えてきた。次から次から出て来る人生のステップ。怖くて乗れない俺がいる。怖い怖いっ! ピアノキシンZをもう一錠飲む。エレベーターのメーカー名が目の横を掠る。Cocode Note Sakurai Seisakujo。

わっ、俺、明日からランス、ノルマンディー地方の長距離ドライバー。二日酔いじゃなくて二日ぐらい休筆です。兄貴、記事、ありがとうございましたっ! 漁に行って来ますっ! 質より漁。

当初の行程は、パリ、ストラスブール。ストラスブール、ランス、モントロイユ・シュール・メール。モントロイユ、オンフルール、パリ。初日がドタキャン。一日の走行距離約500km。結局、パリからランスへ向かいお客様とミート。

こまごましたことはいいのだけれど、モントロイユからオンフルールに行くまで、どこかお薦めの景勝地はないか？ ということになった。フランスの地理に詳しい方もいらっしやるかもしれない。このルート上の景勝地といえばモネの連作で有名な断崖絶壁の町エトルタとなる。お薦めしてみたら是非是非ということになった。

「エトルタといえば断崖絶壁の景勝地。その風景はモネの連作にても有名です。それからルパンシリーズを執筆したモーリス・ルブランの別荘があり代表作はそこで書かれたんですよ。奇岩城のモデルは間違いなくエトルタの風景といわれています。ところでご昼食はいかがいたしましょう？」。運転手さんにお任せしますということなので、断崖絶壁の上のゴルフ場のクラブハウスの展望レストランを予約する。では、一時間半後に参りますとお辞儀を仕掛けたら、運転手さんも是非ご一緒にとなった。

レストランの窓から曇り空、海、白い断崖が一望に見渡せる。お客様が歓声を上げる。食事実に美味しい。シイタケと鴨の背肉燻製入りのポタージュスープ。ノルマンディー産牛ステーキ、ポテトフライ。

「わっ、絶壁の先端に男の人！　なんか飛び降りそうな感じじゃないですかっ！
わぁー、大丈夫かな？」
「ここはフランスの足摺岬みたいなところでもあるんですよ」
「わっ、なおさら、拙くないですか、あの感じ？」

その男の姿は良く見えるとはいえ、その先端までの距離はレストランから駆け付ける距離ではない。食事の手が止まり凝視する。男も海面を凝視している。少しすると、我々にはなんかを決意したような感じに見えた。突然、くるっと向きを変えると断崖の先端へ続く小道をゆっくりと戻り始めた。

「わっ、なんか、あの男、切羽詰まっているような感じでしたねー」とお客様。私はだまって頷く。

曇り空と海の境目がなくなってしまったようなエトルタという町は、生と死の境界線を如実に感じさせてくれるところである。死へ向かうために、最終地として訪れる人々も多いことはして

いる。しかし、私個人を魅了するのは、それではなく、その境界線からく
るっと生の方へ戻ってくる、たぶん、前者よりずっとずっと多い人々がいることの方なのだ。

モネの連作で名高いエトルタの断崖。数年前から登頂とは大袈裟かも知れないが、断崖に登るには医師の診断書が必要になった。職業、年収、連れとの関係、持ち物、精神状態。それから登頂の目的と諸々の精神科医の診断を受けなければならない。どうしてフランスのここに日本人医師渡辺先生がいるのか、作者にも分からない。たぶん、モーリス・ルブランのせいということにしよう。

受付の田中美佐江が「お次の方あー」と待合室に声を放つ。高年の痩せ型の男と男好きしそうな若い女が椅子を立つ。田中美佐江の目にいじわるそうな光。眉間に皺。扉を開けながら渡辺先生に「要注意目線」を投げる。

「あなた、ジャズピアニストなんだ？ どういうジャンル？ あっ、フリー。あっそ。私も若い頃、嵌った。阿部薫に。それから、そちらの人は？ ふうーん、妾。年収は？ 赤貧とか清貧とかいうカテだわな、悪いけど。で、そのリュックの中、ちょっと見せて頂けます？ わっ、シャトー・マルゴーとジャズのコード表か。ふうーん。お連れの方はいくつですか？ 二十七歳。うん、あなたは？ 五十七。うん、親子でもおかしくない年齢差ね。で、お連れの方のご職業は？ パンク歌手。ふうーん、私、町田康の大ファンですよ。ふうーん。で、登頂の目的は？ 飛びたい？ ふうーん。田中さんっ、登頂券、差し上げて」。

田中美佐江が、あからさまに驚愕の表情で飛んで来る。「せっ、先生っ、職、失いますよっ！ 誤診はっ、先生の命取りですよっ！ あたしはどうすりゃいいんですかぁーっ！ 独り身の私はっ！」。

「あっ、田中さん。誤診？ いいから登頂券を渡して上げて」。渡辺先生の目の奥の不思議な赤い光。

その二人は断崖の上に腰を掛け、ゆっくりと紙コップ。シャトーマルゴーにはふさわしくないと読者の方はおっしゃるだろう。でも、実際にそうなのだ。二人は飲み干すと立ち上がる。ゆっくりと断崖の突端へ向かう。ムササビのように跳躍した。

「先生っ！ どうしてどうして、あたしの生活は……。どうして登頂券を……。結果は目に見えていた。看護師の私を舐めてんですか？ 看護師には分からんってっ！」

「田中さん。改めていつもありがとう。看護師なしには医者は成り立たない。ありがとう、本当に」

「先生、なんか引退声明みたいな話し方ですよ、そういう言い方っ！」

「田中さん、ごめんごめん。あのね、詳しい話は、いわゆる個人情報だから言えない。でもね、一週間ぐらい後でいいよ。彼らはロンドンのライブハウスに二人ともいる。これだけは断言しとくよ、田中さん」

渡辺先生は診察室に入ってきた二人を見て直感したのである。たぶん、二十数年前にも彼らに会っていると。ハイランダー、不死の一族であることを渡辺先生は見抜いた。二十数年前の彼らの姿が、先ほどと、まったく、変わっていない。そういえば、二人とも、「死んでみたいね、いつか」と囁いていたことが鮮明に脳裏を過った。

作者追記

またまた、数日、休筆でえーす。心肺ゴム用。

See You soon James Bond will be came back

わざと、受動態にしてみたんだ。馬鹿じゃね。

ゴッホのファンの方はご存知の通り、彼は一年半、サン・レミの当時は「健康の家」と呼ばれる病院にいた。私は、一昨日、そこにいたのである。サン・レミを訪ねるのは二度目。知らなかった。彼が入院していた部屋を見学できることを。

ゴッホ晩年の地、オーベエーニュ・シュール・オワーズ村は私の住む町の隣だ。ここの下宿も実にみすばらしい。私が初めて訪ねたサン・レミのそれも実にみすばらしい部屋だった。二階に上る。壁にアルル、サン・レミで描かれた作品の複製。迸るエモーションと色が狂気と正常心の境界線をかろうじて保っている。彼のいた部屋。元現代美術家であるから胸が熱くなる。涙腺が緩む。

現代美術家として私はゴッホの影響はまったく受けていない。マルセル・デュシャンの孫の系譜にいるからである。しかし、胸が熱くなる。感情が込み上げてくる。不思議ではない。私のピアノ演奏は確実に彼の影響を受けているのだ。エモーション、狂気の解放、色、音の解放、こういった要素はバン・ゴッホと近似している。今、私はパリのDOCでの両師匠とのコンサートを聴きながら書いている。まさにバン・ゴッホではないか、と自分で思う。

私はプロの物書きではないけれど、物を書く時、もっとも影響を受けているのはヘンリ・ミラー。ミラーはゴッホの熱烈な信奉者だった。そしてヘンリ・ミラーの才を一早く評価したのがマルセル・デュシャンである。ここにもメビウスの輪が広がっている。

ミラーは即興ライティングの創始者。私が敬愛する日本の詩人吉岡実も一切推敲をしない。バン・ゴッホはフリーペインティングのたぶん歴史的な創始者なのかも知れない。この即興という一瞬に掛ける。生きていることを最も実感できる方法のひとつなのだと思う。生を強烈に実感し続ける。この疾走は当然にして健康によくない。いや、医学的にはどうなのだろう？

渡辺先生は自宅のテラスでパイプを燻らせていた。エトルタの断崖、真っ青な空、文字通り水色の海が一望に見渡せる。いつものように赤ワインの二級酒とでもいうべきコート・ド・ローヌをゆっくりと飲む。ゆっくりと飲みながら古いノートを開き始める。ノートの表紙には「ハイランダー不死の一族」と書かれている。20数年前から書き始められた。そう、彼らとの初めての出会いからである。

やはり、彼らに24年前に会っている。モンペリエの大学病院に勤務している頃。サオイウユノス。生誕地ギリシャ。1935年。ジャズピアニスト。軽い鬱病。マミムメモスノ。生誕地ギリシャ。1965年。パンク歌手。軽い鬱病。昨日の彼らである。当時の年齢は同じだ。昨日の生年月日は当然プラス24年になっている。

初めての出会いから渡辺先生は古文書を調べ捲った。今では真実を知っている。サオイウユノスの出生年は1259年。マミムメモスノ、1589年。遺伝子の突然変異なのだろう、いつからか不死の一族が生まれた。渡辺先生の推定では、現在、世界各地に散らばるほぼ3万人が存在しているはずだ。彼らは科学、芸術、芸能へ特殊な才を備えている。ただ、社会的な事象の把握、物欲、金銭欲は皆無に等しい。渡辺先生の推測では、レオナルド・ダ・ビンチもバン・ゴッホもマルセル・デュシャンも同族であったはずなのだ。ひとつの仮想死というべき形で墓は存在している。しかし、内部は空なのだ。彼らもハイランダー。渡辺先生には確信があるのだ。どうも「この事実を知った最初の医者」はノストラダムスらしいと確信したのである。バン・ゴッホがサン・レミの病院にいた事実。ノストラダムスの生誕地である。偶然ではないはずだ。ノストラダムス以降、数千の医者たちが「この事実」を知ったはずである。しかし、渡辺先生と同じく彼らは一切「それ」を公表していない。ノストラダムスの予言書の中の一節に唯一暗号が残されていただけである。その数千の医者たちは「それ」を解読していたと渡辺先生は思うのである。

ピルルルるるるうー、田中美佐江からの電話。

「先生っ！　今、パソコンを開いて、とっても気になったので、彼らの名前をグーグル検索したらっ！　わっわっわっ、あの二人、ロンドンでのコンサート案内が出てきましたっ！　ぴったり、昨日から一週間後に。　誤診ではなかったんですねー、先生、凄いつつ！　見直しちゃったあーっ！」

「あっ、田中さん。レレレ、ははは、御真実の護身の誤診だね、はっはははあーっ」

渡辺先生は、彼らが飛べることも、世界各地に住まいがあることも知っていた。赤貧清貧は仮の姿。いや、実際にそうではある。しかし、心の豊かな一族であると断定している。錦族と自分で命名し、少し、くすっと笑った。

渡辺先生は、ずっとテラスの肘掛け椅子に座ったままパイプを燻らしコート・ド・ローヌをゆっくりと飲み続けている。ボトルの四分の三が空になっている。若い時分から酒煙草が好きだったのだ。幼少期からピアノをやっていたから一時期は医学部進学を放棄しジャズピアニストになろうかと本気で考えていた。山下洋輔トリオの白熱の演奏に痺れていた。しかし、内科医である父親が許さなかった。家の掟のようなもので、医者という職業以外に渡辺家では選択肢がないのである。馬鹿げていると彼はいつも思う。

彼なりの唯一の抵抗。たぶん、かなりの抵抗ではあったと思う。フランスのモンペリエ大学、そう、フランス最古の医学部へ進学した。つまり、日本を離れた。そして、食いつぱぐれのない内科医にはならず精神科医になった。父親は失望した。以来、疎遠になってしまった。精神科医を選択した大きな理由は、フロイト、ユングに耽溺しアンドレ・ブルトンのシュールレアリズム宣言に触発されたこともある。けれど、彼自身が自分の中の暗い闇に興味を持ったことなのだ。少しでも「それ」のベールを剥がしてみたいと・・・。

諸々の精神疾患の患者、いや、患者とはこちら側の言い分。そうではない、人々を見てきた。渡辺先生には、どうしても彼らを患者と呼ばせないなにかが彼自身の中にあることを発見したのである。狂気と正常の狭間の規定は社会的な定規である。それは便宜的なものでしかないことを彼は悟った。今もって、バン・ゴッホは精神疾患であったのか定義が分かれるところである。

「ふーん、24年前、彼は57歳だった。そして、24年後、俺が57歳になった。そして、24年後の彼は、カルテ上は57歳。実際は857歳。こんな時間を生きてきた彼に人間、世界はどういう風に映っているのだろう。彼はインサイダーの間では実に名の知られたピアニストだ。しかし、ライブ演奏以外頑なにやらない。しかも、小さなライブハウス以外には出演しない。無名性を貫いている。ハイランダーたちの中のなんらかの掟があるに違いない。そう、絶対にそうだ。しかし、いつか死んでみたいねと彼は少し微笑みながら便宜上の妾マミに囁いていた。マミも笑いながら頷いていた。たぶん、彼のピアノ演奏が鍵なのだろう。不思議な覚めた激情。リリシズム、リリカル、そして、どこかユーモラスな、あの不思議な演奏の中に鍵がある。はずだ。彼のピアノ演奏は800年の時空を超えた悟りの鏡像に違いない」

その頃、サオイとマミはロンドンのピカデリーサーカス地区の中華屋にいた。彼らのロンドンの住まいの地上階が中華屋なのである。古いながらロンドンの一等地に600平米のアパートをサオイは所有しているのである。諸々の骨董品に囲まれている？ スタンウェイのフルコンサートマスターが一台、大きなサロンに置いてあるだけである。

「ねえ、マミ。渡辺先生。気付いてたよな、俺たちのこと。彼が俺たちのことを延々と調べていたことは知っているし、正体も知っている。素敵な先生だよな」

「うん、あたし、好き、あの先生」

「なんちゅうかな、ありゃ——、一種の医者のなら損ねだね。文学者だよ、彼は。一度さ、彼と飲みに行かない？」

「うんうん、いいんじゃない」

「エトルタさ、ロンドンに行く時、いつも行くじゃん。飛び易いしね、あの断崖。それとさ、モーリス(ルブラン)が使ってた別荘。あれさ、モーリスの仮想死ごっこしてから博物館になっちゃったけど、その横の一軒家あるじゃん、ピアノ以外なんもないけど。あそこに先生呼んじゃおうよ。レオナルド(ダ・ビンチ)とさ、一緒に撮った、おわっ、やばいかな、あの頃に写真があったことばれちゃうかな？ まあ、いいよな、エジプトの全盛期に開発、そう、俺たちがな、いや、俺たちの先祖？ いや、まだ、生きているからなんちゅうのこういうの？ わっ、人類史は我々が作ったってこと？ 僭越じゃねえーよな、こういうのってよ。なかなか美味いね、ここのスペアリブ」

「ねえ、サオイ。いつまであたし妾なの？ 結婚して3世紀以上は経っているのに」

「えっ、なんかお洒落じゃん」

「馬鹿でねえーの」

「いいから食えってのっ！」

「ねえ、あなた、飲み過ぎよ」
「えっ、その台詞、３００年前から言っているよな。よっぽど気に入ってんだ」
「体に毒よ」
「いいねえー、その感じいいー」
「長生きできないわよ」。マミは自分で言ってゲラゲラ笑うのが常なのだ。
「もっと言って言ってっ！」
「あなたのことを思って言っているのよ、あたしは」
二人でゲラゲラ。
「いいよなあー、一般人の会話ちゅうやつだな」
二人でゲラゲラ。
「健康健康長生き長生きもいいけどさあー、８世紀も生きてみなっちゅうのっ！ しんどいぜ、マジでよおー。俺は普通の体で生まれたかったよ、本当」
「うん、あたしも」
「お前もよ、超絶ばあさんなのにパンク歌手だもんな。見てくれが２７。後、うだな、２００年ぐれえーのしんぼうだぜな」
「普通の結婚、したかったあーっ！」
「なに、それ？ 拙かったかな？ うちの子供たち、２８７人だよおーん孫曾孫のそのまたのたまたまの孫族３０００人ぐれえーだよおーん。少なくとも世界中にハイランダーたちは３００００人はいる計算だ。いいのかしらね、こういうことして。深沢七郎の人類滅亡の歌の真逆をやっちゃっている。いつから俺たち出現したわけ？ エジプトのツタンカーメンのところにその記述があるから、相当前だ。わっ、３００００人で収まんのかつ、馬鹿作者っ！」
「えっ、なんか言った？ 作者に、あんた、盾突くの？ 殺すぞっ！」
「やってみろっ、ばあーかつ！」
「なんだなんだ、作者に向かってその態度はっ！」
「まあまあ、裕センセ」
「なに、マミちゃあーん」

その頃、渡辺先生は、ちょっと、時間帯がおかしくなっているけれど(夕飯時は閉まっているぞ。あれっ、中華屋、夕飯って書いてないよな。うだば、昼食昼食)モーリス・ルブラン記念館にいた。ルブランの諸々の資料を丹念に見て回る。幼少期、シャーロック・ホームズ、アルセーヌ・ルパンシリーズはすべて読破しているのだ。ついでに実家の日本文学全集も世界文学全集も全部読んでいる。三島由紀夫の潮騒に初めて性的興奮を覚えた。奇岩城の模型をじっと見る。３０分は見ていた。奇岩城、祈願城と日本語の語呂合わせが突然思い付く。はっとする。奇岩城の模型。

「わっ、こっこんなっ・・・・・・・・・・、DNA、構造があ——、あるのかっ！ これこそ、津軽海峡お——冬景色い——ではなく、不死の遺伝子構造の模型っ！ モーリス・ルブランっ、あやつも——っ、ハイランダーだっ！ 今、今っ、どこに居るっ、あやつは？」

その時、入り口の警備員、初老の男が渡辺先生に声を掛ける。

「先生。近いうちにサオイとマミがエトルタに戻って来ます。ご招待したいと申して居ります」

その警備員の眼鏡は、あの片側だけの眼鏡だった。渡辺先生、一瞬、気を失い掛けた。初老の警備員の片腕が想像以上の筋力で渡辺先生を支えていた。

「渡辺先生、いいでしょう、そろそろ真実をお伝えしても・・・」

ぜえぜえぜえ、なんでこんなもん書いてんの俺。小説書く予定はなかったんじゃね。しかも、連載してんじゃん。くだらない？ おっ、どこのドイツ人だっ！ 人の批判を安易にするのではないっ、ああーた。えっ、ゲエーテ？ ドイツもこいつもスイススイスって、どっちだっけゲエーテ。ゲエーテもの食い。ゲッ。

築百十六年の古い家に住んでいるから、ちまちました修繕は日常茶飯事。本日の課題は二つ。一昨日取り付けた便座の位置の修正及び洗濯機用の蛇口の取り換え、以上だった。古い便座の支え棒が折れてしまったから同じグレーだけれど娘の見立てでメタリックグレーのものを買ってきた。ちょこまかに取り付けた。翌日、蓋を開け、お尻を乗せる部分も開けようとしたら重力に逆らわずすぐに閉じてしまう。算数上の答えは簡単。便座をもう少し手前にしないと二枚目の蓋が後方の重力圏へいかんということなのだけれど、前後位置の調整が構造上できるのか確認せんといかん、で、分解し二秒で理解。取り付けた。うっししし、できた。

その二の方は、覚悟していた。一日作業になるかもしれん。重たい洗濯機を手前に出す。接続されているホース類を外す。当然、半地下室の水の元栓は締めてある。二十年前に自分で取り付けたのだけれど、簡単に外れるのか？ 元栓は締めてあるけれど湯沸かしタンクに繋がっている水道管だ。熱湯が逆流してきたらやばいぞ。新しく買ってきた蛇口のサイズが違っていたら・・・、わっ、一日中大工格闘選手と化す。午後の予定はパーになる。

と、とりあえず、考えられるやばい状態を全部想定して始めた。一時間で終わっちゃったっ！ うっししし。で、午後は明後日以降のドライバー家業のルートチェックをやるぞっ、となった。昼食。コーヒーを飲みながらお玉割りゲーム。勝った。うだば、そろそろ。でも寒いからセントラルヒーティングのスイッチを入れようとした。半地下室のボイラーが起動する音がしない。りゃ？ パンパカパーーン、げっ、これ、予定表に入っていないぞっ！ スイッチ類のチェック、ヒューズ類、水圧、石油の残量、ボイラー起動部の電線類、諦めた。どうやっても着火しない。寒いよおー、なるおー、スポーツピアノで暖を取るという手が俺にはある。とはいえ指さんたちが冷え切りスピードがでない。無理やりやったら骨折する。三十分で諦め「これ」を書いている。とほほ。

でも、古い家の持ち味。外、八度ぐれえーだろうけれど、暖房なしで室温十六度強。石壁の厚さ五十八センチ。半端じゃないね、やっぱ。石強固。

あっ、そうそう、洗濯機の裏側に水道ホースをパチッと嵌めるプラスチック部分があるのだけれど、なんか、パチッと入れる瞬間に指を怪我する予感。怪我するな怪我するなお前はピアノ弾きだぞ、クリスチャンとのコンサート来週だぞ怪我やばいぞと呪文を唱えながらやった。結果、馬鹿じゃん、掌を切った。でも、ピアノ弾く時に当たらないところだったからセーフ。でも、なんのための呪文だったの？ 呪い文？ あら、逆に唱えれば良かったんだあー。ローラの口調で。

まず、大工オヤジの顛末を書く。今朝、セントラルヒーティングの管理会社に電話。いつもの親切なおばさんが出る。昨晚はカミサンと二人であらん限りのネガティブシンキングをやった。ヒーティングなしの冬越え。ひえー、北フランスは寒いぞっ。ヒーティングシステムの新規設置。ひえー、懐が寒いぞっ。中古車一台分ぐらいの費用が掛かる。ひよおー。来週、クリスチャン・バッサールが夫婦で来る。三日間、そこそこには立派なシティーハウスにご滞在なさる。ヒーティングなし。二人で凍えた手でデュオコンサートかよおーっ。やばぐね。ロシア人みたいに朝からウォッカを飲ムツカない。

「もしもし、お早うございます。〇〇番地の裕です」

「あら、裕さん、どうしました？」

「一昨日の晩からセントラルヒーティングが作動しなくなりました。昨日、午後、スイッチ類、水圧等々、素人なりに確認致しましたが原因不明です。わっ、おばさんっ、助け
てえー、ヒーティングなしの冬越え。新規設置の高額費用。しくしくしく。でね、クリスチャンが泊まりに来るし・・・」泣き崩れる。

「まあまあ、とりあえず電話で確認しましょう、一緒に」

「ウイ、マダム」

「ターモスタットのスイッチは入ってますか。はいね。半地下室のスイッチは、はい。石油水圧は十分ですか、はいね。おかしいわね、先日、整備点検したばかりよね」

「わっ」泣き崩れる。

「ボイラー全面の四角い箱のスイッチは入ってますか？」

「えっえっえっ、四角い箱は知ってますけどスイッチ？」

「オレンジ色のライトが点いてませんか？」

「ライトは点いてますけど・・・」

「それ、着火機のスイッチです」

「スイッチ？ 二十年以上住んでのに単なる作動確認ライトと思ってたけど・・・」

「押してみてください」

ぐうおー。ボイラー作動。

昨晚は、久保のアニーキーの記事で暖を取った。記事「アナーキー」で爆笑し暖まる。それから、「対コンピューター」、同感である。クレーン車と腕相撲して意味があるのか？ ほとんど、ちょっと違うけれど似たようなものである。そして、人工知能にアニーキーの記事、そしてわたくしの記事も絶対に書けないと確信している。無理やり試しにやらしてみたら、たぶん、爆発しちゃうと思う。メビウスパラレル脳のボイラーに、けけけ、人工知能なんぞなんぼのもんじゃいっ！

ははは、自動生成ブログを読んでも良く分かるはずだ。所詮、人様のブログの盗用。めちゃくちゃ抜粋。へんちくりんなタイトル。あれ、これは俺もだ。

えー、昨日の私のオフィシャルな勤務時間17h25。通勤時間を足すと19h00。一日の残り時間5h。この中に晩酌煙草食事排便風呂などが含まれるから睡眠プールの時間はなくなる。脳麻痺である。

ところで、脳を邪教に侵された男のことを邪頭メンと呼ぶことはご存知の通り。出鱈目ばかりする奴はデタラメン。ラの音ばかり出す奴、ラーメン。ペコペコする奴、ゴーメン。と男たちにも色々の種類がある。本日はデタラメンについて書く。

「知を捨てよ、出鱈目しよう」、これは寺山修司ではなく裕イサオの台詞。たとえば、英語。もうどうでもいいから知っている単語を並べてジョークってしまう。馬鹿丸出し。いいのだ、これで。熱意は伝わる。そして、凄まじい勢いで上達する。

えー、お手持ちのカシオの安いキーボードをご用意下さい。酒飲める人はがぶがぶ。「一時間弾けないピアノをノンストップで弾いてみる」。はい、この実験をやって下さい。普通、五分でピアノ筋がないとフェドアップ。仮に筋力があっても出鱈目を五分やると人間の脳はノーという。我々の遺伝子は出鱈目嫌々プログラミングされていることが分かる。じゃ、拳骨だけでやってみる。せいぜい十分持てばいい。キーボードを荒れ狂って振り回す。これも十五分。結局、ぜえぜえ言っておしまい。で、ピアノの基礎知識がある方は多少は持つけれど、無調性でやって下さい。つまり、すべての知識を初期化して下さい。苦しいぞっ、逆噴射。二十分で力尽きる。

無調性で一時間ピアノを弾くには筋力エモーションセンチメントスピード集中力技術強弱こけおどし静寂悟りの境地色気食い気性欲馬鹿丸出しお笑い・・・、と諸々の要素が合体口ボしないのでけんことが皆さんお分かりになるはずだ。

そう、人間の脳は秩序と反復を求めるから「これ」に逆らうには相当な力と技術がいるのだ。いや、あたくしは逆らわない。それも正解。でも、私のような逆らうことが生き甲斐だもぉーんなんちゅう輩は逆噴射力を磨くしか方途がない。

改行なしで行っちゃうよ。俺の名前は枝切ジョー。今朝、八時半に起きた。コーヒーとタバコする。三時間睡眠の激務の一日の消耗は凄まじい。でも、俺はタフだから九時間熟睡で復活。歯を磨き顔を洗い髪を整え、二杯目のコーヒーと二本目のタバコする。さらに復活。そそくさとハイパーマルシェの買い出し準備。ルクレールに行く。俺は物欲がないのに物欲センターのようなハイパーマルシェが好きなのだ。ブランド店は嫌い。でも、庶民物欲の宝庫は好きなのだ。帰って来てチャーハンを作る。食べ終わる。階下の庭へ行く。畑奥の垣根的低木がアフロしている。チョキチョキする。皺がれたトマトを抜く。畑耕しする。玉割りゲームを三十分してピアノ。それからギョーザと春巻きを作った。一つ忘れた菩提樹の垂直に伸びた枝切りを延々と畑耕しの後に鼻水垂らしながらやったのだ。菩提樹の拳が十三。各拳に枝50-60x13=990本を切った。へろへろになった。長生きはでけんだろーなあーと思った。ピアノ演奏中、または、俺の庭で息絶えている俺を想像した。なんかワクワクしたりする。毎年、枯葉の絨毯を見て剪定枝切りしながら、己の散り際は美しくしたいと思う。すでに散り際は過ぎている。若葉は俺じゃない。こういう単純な生物と歴史の循環を理解しないで高齢化は頂けない。新陳代謝が我々の歴史。

短編小説「エトルタ診療所」、次から次へとネタが浮かび困っている。いい加減な思い付き記事だから本腰入れて書くという感じでもないのに頭の中が三文小説家になっている。私は嵌り症だから自分でも困っている。でも、続きを読みたいと悶絶している読者様がいらしちゃったり・・・、しない。から中断してしまう。

何週間か前に「ミーハー政治」という私としては初めて政治について書いた。来年のフランス大統領選は裕センセのほぼ予想通りの方へ向かっている。それはいいのだけれど、たぶん、皆さんの中にもご存知の方がいらっしゃる？ 現職のホランド大統領が再出馬しないことを公式に発表。健康問題で辞退はあるけれど、自身の判断で再出馬をしない。これは前代未聞。テレビのニュースでは結婚はしていなかったけれど実質的な前奥さんシゴレーヌ・ロワイヤルと子供たちの強力な説得によるとなっていた。けれど、当然にして最後は本人の判断。この冷静な判断は凄いと正直に思った。世論調査でも再選はほぼ不可。しかし、現職の大統領が現職に心情的にしがみ付くのが人間の性。ホランドさんの人としての評価が急上昇したことは間違いないし美しいと思う。

随分前に大統領候補ナンバーワンと呼ばれたジャク・ドロー。欧州議会議長がいらした。フランスの国会議事堂、ブルボン宮の長大な階段の前でテレビインタビュー。彼はあっさりと辞退した。「僕は七十歳。大統領候補として高齢過ぎると自己判断しました。それじゃ、急いでるので」と急な階段を駆け上っていった。高齢で辞退するという表明と、その駆けっぷりのコントラストに私はうるうるしたし格好いいなあーー、美しいなあーーと思った。

なんか現職とか権力とか金力とかに我々はしがみ付く。そういうものを自己判断でばっさりする人。私は格好いいと心底思う。引き際が美しい人って素晴らしいと思う。孫の面倒見て庭の手入れしてカミサンと仲良く旅行して時々コンサートして・・・、隠居ジャズという新しいジャンルを作る。「老いては子に従え」を既に実践している。

なんかの落語に「あたしゃね、息子が成人したらあいつを父親にしちまおうって思っくんすよ」。俺って変ですか？

ロシアのプーチン大統領とフランスのサルコジ前大統領との会談が話題になったことがあった。サルコジさんが人権について延々とプーチンさんに話した。プーチンさん、随時、不機嫌。沈黙。最後に「俺んちは大国だ。お前んちのような小国がぐだぐだとうるさい。捻り潰すぞっ、てめえー」という意味のことを言った。権力の権化ちゅうやつなのかしらね。しがみ付くどころか君臨している。こういう人は隠居ジャズなんか聴かんね、絶対。

エトルタのモーリス・ルブラン記念館の隣に、同じく古びれた一軒家がある。その8角形の出窓のあるサロンにアルセーヌ・ルパンそっくりのモーリス・ルブラン。裕イサオそっくりのサオイ。だれに似ているのかサッパリ分からないマミがいる。そして、渡辺先生。渡辺先生は渡辺淳一に似ている。

「渡辺先生、なにをお飲みになりますか？」モーリスが聞く。

渡辺先生は、この異様な雰囲気の中で混乱している。

「えっ、あっ、僕ですか？ なんでもいいです」

「そういう答えが一番困ります」「じゃ、ビール」「銘柄は？」「なんでもいいです」「そういう日本人的答えが一番分からない。せめて、ベルギー、日本のビールとかおっしゃって下さい」「あっ、すいません、じゃ、シメイを下さい」「そうこなくっちゃね、渡辺先生」。

モーリスはシャンパンを飲んでいる。サオイはレフビール。渡辺先生と同じくベルギーの修道院ビール。マミはキールロワイヤル。シャンパンとブドウのカシスを割ったやつを飲んでいる。登場人物各自の飲み物の設定、こういう細部が小説算数の醍醐味なのだ。どうでもいいけど。

渡辺先生の困惑振りのご想像にお任せする。膝が少し震えているのだ。

「渡辺先生、今回でお目に掛るのはマミ、つまり私の妻を含めて3度目ですね。先生は我々の秘密をご存知ですよ。我々の出生年も。ご存知の通りです。そう、我々是不死なのです。どうしてこういう遺伝子構造ができたのか我々にも分からないのです。現在生きている同族はツタンカーメンが最高齢です。もう、2000年以上の時空を生きてきた」

「やっ、やはり・・・」

「先生、医者の世界でそれを認識したのはノストラダムスです。彼の予言書の中に我々の存在が暗号で記されています。ツタンカーメンの墓の内部にも同じ暗号が隠されている。そう、老いては子に従えという。何百年も何千年も我々は生き続ける。次世代はどうするのですか？ そういう意味です。寿命100年の時代？ 我々には一般人の戯言と申し上げる。先生、我々には選択肢がないのです。生死という。生き地獄ですよ、あなたたちには」

私見では人類初のコンピュータは、ピアノだよぉーんと思っている。８８鍵盤。キーボードでしょ、文字通り。ヨーロッパ人は非常に理知的な人々である。こういうものを開発しちゃう。まあ、この棺桶みてえな奴に「すべての音楽が詰まっている」とは思わない。音楽は各国、民族、長い歴史、諸々の中から発生してくる自然な人間の営みの一つだから、この黒い箱にすべてが入ってまーすというのは傲慢の極みである。とりわけ、似非インテリとか似非ブルジョワがヨーロッパのクラシック音楽を「音楽の最高峰」と思い込んで信奉している。というのは別に悪いことではないけれど、ランキングして１位とか脳内で思っちゃったりしているのは馬鹿だ。でも、ヨーロッパのインテリ、ブルジョワがそうおっしゃるなら「あっ、そ」である。でも、日本国にそういう人々がいるのは解せない。津軽三味線聴いてみいーんってのっ！ 凄いぞって。棟方志功の版画見ながら聴いてみいーん、すげえーの一言です。詩吟とかも、お経も、演歌もポップスも・・・と、音楽にランキングすること自体が馬鹿ということ。人のランキングと同じだ。あっ、ワールドオーダーのインタビュー見たんだけど、インタビューアーが「メンバーの中でだれが一番ダンスが上手いですか？」。皆、「えっ？」。須藤元気が「無粋な質問は止めましょう」で閉めた。さすがだ。

ピアノ弾き、小柄で眼鏡してて勉強できたもぉーん、僕、系が多い。男子にはという意味ね。それと、御家が若干裕福でしたぁーというお坊ちゃま系、まあ、前者と絡んでる。一步間違えると嫌な野郎になり易い系ないしは人畜無害のピアノ馬鹿かどっちかかな。私はそんなに小柄ではないけれど、眼鏡は今ではしているし入れ歯と鬘も模造筋肉下着も靴も全部付けている。半分嘘。勉強は、きっぱりと「過去形で」できた。

なんか、いまでも友人が家に来ると、げっ、豪邸。げっ、ピアノ。裕福なんすねというリアクションが起きる。豪邸はいくらなんでも、自分の住むパリのワンルームと比較すればそうなる。しかし、値段は同じだ。田舎に住んだだけなのだ。ピアノ、ヤマハのサイレントピアノの中級版イギリス製。８０００００円。ローランドのステージピアノ、展示品を値切り捲って３５００００円。裕福？ 中古の軽自動車ぐれえーじゃんなぁー。でも、なんか「そう」映るらしい。ちゅうことは、「そういうものがあることが裕福感」ちゅうことかな？ まあ、心は裕福だし、俺の名前と同じ漢字でいい感じいー。

でね、どうして数多の楽器の中からピアノを選んだのか？ まあ、幼少期にやっていたことは事実。でも、たぶん、このコンピュータ的なところが一番の理由と思う。先に書いた。「すべての音楽は詰まってはいない」、けれど、西洋音楽のすべての論理体系歴史こういう「うざったいもの」はすべて８８鍵盤の中にある。一つの数学ゲームでもある。和声弾き方強弱まで入れるとほとんど無限大。一人将棋一人チェスに似てくる。

ずっと前におこがましくも書いた。「私はマルセル・デュシャンの正当な孫だ」と。彼は３３歳で通称「大ガラス」を未完のまま放棄。その後はチェス三昧。６０歳ぐらいから秘密のアトリエで通称「遺作」を亡くなるまで２１年間制作していた。死後公表。この彼のチェスと私のピアノがクロスオーバーしていることは明白なのだ。ここに美術家裕イサオの真の姿があったと死後

、歴史家が書くであろう。えっ、そんな人いんのか？ だから、自分で書いとくね。

あれ、そういうこと書きたかったんだっけな？ あっ、そうそう、俺は岩手県で生まれて幼少
期仙台で実家は福島のいわきだ。こういう風景とピアノちゅう黒い物体。ミスマッチそのもの。
でも、ピアノ狂と化した。しかも、くどいけれど「うなもんには音楽、ひいては人間が網羅される
」わけねーだろうっ！ と思いながら弾いているところが俺のす
げえーところなんじゃね？ あらぁー、自己賛美記事だったのね、裕センセ。

最後に決めようっ！ 名前は伏すが私のお気に入りブロガーさんたちの約1名は相当なピアノ
力があると推測している。やはり、ご迷惑になるから名前は襖。いやぁー、桜がね。カチカチ
になっちゃってんだけど、いい音欲しいと思ってんラー。

「ピアノが音楽ではない。手段の一つである」ユウイサノビッチ・コモロフ だれ？

なんかブラックな近未来SFが一日中脳裏を過る。その一「ぽっくりと死ねる薬」と「七十歳で檜山と呼ばれる人間廃棄場に行くことを法律で定められた社会」。後者は筒井康隆の小説に若干似たものがあった。実際に高齢の筒井さんがお書きになった。しかし、五十七歳の私書くと、腹を抱えて笑う方々も少なくはないと思うけれど、嫌悪不快、こういうリアクションの方がもっと多いと推測する。

私はご高齢の方々が元気で長生きなさることに異論はなにもないのだ。でも、どうしてそういうブラックな発想が脳裏を過るのか？ 一つには私には長生き願望がないせいかも知れない。毎日が絶頂期みたいな暮らしをずっとしてきたから翌日が来なくてもまったくもって問題なしなのだ。と言いつつ、なんか私は物凄く長生きすんじゃないのか？ という疑惑もある。私の家系は長寿。

でも、実際に私が八十歳の時に同じことを考えているのか？ これはまるっきり分からない。ギンギラ銀のスケベ爺さんもあり得なくはない。いんごじじいになっているかもしれん。隠語じじい？ こっちは十分あり得る。なんのこっちゃ。

五十七歳のフリージャズメン。老害だ。客観的にそう思う。阿部薫は二十九歳で睡眠薬で事故死ということになっている。正解だろう。限界だったのだ。フリージャズという音楽をやる体力的な。三島由紀夫が自決したのが四十五歳。なんか凄くおっさんのように若い時は思ったけど、四十五か。バン・ゴッホは三十六だった。なんか物凄く相対的に若い感じがする。ジョン・コルトレーンが亡くなったのは四十。しみじみ考えるとすげえー

若っ！ 相対的に。やはり、ブラックSFその一、裕センセのケースということで以下書きちゃう。明日からコンサートで忙しいから休筆。三回ぐらいに分けてお読み下さい。

わっ、おこがましい言い方。

「ポックリキシン」

ある意味、人類の一つの夢というのか分かりませんが、ポックリ死ねる薬を不老不死の薬とパラレルに我々は夢見てきた。今回、潮時製薬からついに「それ」が発売されました。開発された脳ベル医学賞を受賞されているイーチャン・ユング教授に、そのコンセプトをお伺い致します。センセ、よろしくお願い致します。「ありゃ、僕、女子アナのインタビューしか答えないもおーん」「えっ、あつ、皆のみな実、バトンタッチ」「わっ、みな実ちゃん、可愛いねえー、うんうん」「えー、ユング先生、触るのは止めて頂けますか」「えっ、変なおずさんってわたすのことでえーす」「先生、いい加減にしなさいっ」「冗談冗談、上段の構え。げらげらげら」「ウモォー、センセ、ぶりっ子しちゃいますよおー」「してして」「ポックリキシンてえー、おいしいでちゅか」「うんうん、おいしいよおー。イチゴ味もあるよおー」「でね、飲み飲みしてからどれぐらいでちゅか」「うんうん、いろんなね、種類があるわけ。十五分、二時間、二十四時間、三か月とかね、調合すればいいの、うんうん」「センセイは試すんで

すかぁー」「うんうん、第一号だよぉーん、うんうん」

イーチャン・ユング教授は六時間後に調合されたポックリキシンを持ち、自分の葬式を取り仕切る手筈となった。元々、几帳面な性格、自分の死期を自分で予約投稿したいというブロガー的発想がそもそもの開発の主旨であったのだ。断捨離、終活、遺言書、墓の購入、諸々の借金、遺産相続、こういう諸々のうざいものは五十代にてすべて清算しているのだ彼は。その後は、ポックリキシンの開発一筋。ぶっちゃけ、自分のためだった。

牧師さん、親族一同、ミュージシャン絵描き小説家詩人ブロガー、ユング教授の交友関係は多岐に渡っているから、本人がそれぞれにお別れの言葉。ジョーク好きの教授らしく自分で穴を掘るパフォーマンス、受ける。葬式の前に、ポックリキシン。教授は、その仰々しい箱のデザインを好んでいない。ドリプランみてえな一般的な箱に一錠だけ入っているところが粋、つまり逝きなんじゃね、と。

お花とシャンパンと酒と笑い声が木霊す墓地。「けけけ、ぼちぼちでんなぁー、ほな。げっ、寒いねぇー、もう一枚毛布入れて亡父、げらげら」と赤ワインのグラスを持ちながら棺桶の中に横たわる。ふわふわマットが敷いてある。自分で内部からパタンと蓋を閉める時に教授はVサイン。パタン。その途端、教授も安らかにパタン。土を掛けて以上。宴会は盛り上がり、夜な夜な墓地ディスコ。

こんな感じがいいなぁー。「アスタラビスタ、ベイビー」。

昨晚、今年の閉めのコンサート。ギターの名手クリスチャン・バッサールとのデュオ。シャ・ノワール。何度か書いた通りクリスチャンはバロック音楽フラメンコを得意とするギタリスト。私はフリージャズ屋である。音楽のベースが違う。二人の共演はお互いにとって実験勉強新しい可能性の模索ということになる。今回のルールは「無調性」。彼はクラシック音楽の調性とか和声を一切使わない。当然、私もジャズのそれを一切使わない。このようになる。これで何ができるのか？ しかも、お互いにアコースティック。私の自宅でリハーサルをした。一時間半ぐらいいやった。コンセンサスができた。

シャ・ノワールのピアノ。ヤマハの一番安いアップライト。ジャズメンだから毎々なんとかしてきた。しかし、昨晚は参った。私のピアノと違い音が金属的で奥行きがない。一音だけで空間を作り、その静寂の中に彼のリリカルなギターをフューチャリングする算段がすべて崩れた。十五秒ぐらいの沈黙という無音の音を作るイメージがピアノ自体のキャパシティーがないから五秒で切れてしまう。十秒間が沈黙ではなく単なる空白になる。これでは沈黙というもう一つの音楽にならない。なるべく音数を少なくという私の逆噴射の予定が真逆になった。空白を埋めるために音数とスピード。結果、私の弾き過ぎになってしまった。ピアノ自体のクオリティーを思い知らされた。やろうとしていることに楽器自体が付いてこれない。参った。

なんとなく、照れ隠しに喋り捲る人と、照れを隠さずに無言でいる人。本来、後者の役だったのに結果、前者になったという感じ。私本来のキャラが前者だからそうなっちゃったのか？ 沈黙静寂というもう一つの音と、私には単なる無音という空白は違う。後者は恐ろしいしステージの上で演奏者がそれをやるのは恐怖。と、少し哲学的なことを考えたりもした。

次回はリールでグランドピアノでやることになった。おちゃらけへらへらちゃらお系の私が沈黙という音に挑戦するのであ——。少しは大人になれるかしら？

なんか仰々しいタイトルにしてしまった。別に意味はないといえ言える。カトリックの国ではクリスマスが年越しみたいな感じになることは以前書いた。その後、新年が来る。人生のメリハリは自分で決めるという気張り裕センセには、あんま、関係がない。無宗教、無政府な人間に月日とか祝祭日とか、うーん、言い難い。意味的なものがないのだ。

お祭りとかも好きではない。いわゆる年中行事みたいのが苦手なのだ。夏祭りの金魚掬い、仮面ライダーのお面、ソース焼きそば・・・。とりたてて郷愁が沸くわけでもない。ちょっと違うな？ ソース焼きそばの匂いと盆踊りの音、これには一切郷愁ではなく食いたい、聴きたいっ！

年賀状、一切書かんっていうのは嘘で、これが超「難しい」。「書きたい人にだけ」書く。これって簡単そうで難しいのは知っているけれど、私は昔からそうである。儀礼なんてミュージシャンの世界ではいも(最低)になってしまう。

脳という内臓のキャパシティーは宇宙的。なのに偏見とか好みとかあたしはそう思うというこういうベクトルに侵される。そして、年中行事だ旦那の勤め先だ学歴だという宇宙の星屑地球の更なるゴミのような我々は考え出す。

本日は超快晴。気持ちがいい。一月中旬からドライバーの仕事がびっしり。ありがたい。

五十八回目の新年ということになるのだけれど、新年の抱負はじえんじえんなし。単純にピアノの自主トレメニューをどうしようかと考えているだけ。考えていても先に進まないからとにかく始めてしまう。インスピレーションは練習の積み重ねの先に現れる。インスピレーションの練習というものは当然にしてない。退屈な練習を延々とやるだけなのだ。結局、いろいろと考えても自分で作ったピアノメソッドに戻ってくるだけ。複雑なコードワークがびっしりと並んでいる。十二音階の長調短調計二十四の音階の複雑なコードワークを口笛を吹くように指の先が動くようにするしかないわけ。で、またまた初心に帰り始めた。ハ長調ハ短調から始める。ピアノをなさった方はご存知の通り、長調の音階に短調からのコードを借用代理コードとすると音がお洒落になるから、最後は、まぜこぜにしてしまう。そして格好いいサウンドを作る。今のところしつこくD♭音階を捏ね繰り回している。

去年は庭の木々の剪定をさぼりノバしてしまった。今年はお天気がいいし若干暖冬なので少しずつやっている。一年さぼると靦面で菩提樹の木アフロヘアー。とはいえ菩提樹の剪定は隔年にしている。それとめどうなことに右隣のお宅。庭の木々知ったこっちゃねえーシフト。それとなく「あのー」と切り出したら逆切れされたことがある。「あんたたちが引っ越して来るまでそんな話は一切なかったっ!」。こういう隣人とはお話のしようがない。庭の奥のお隣のドングリの木が我が手塩に掛けたリンゴの木二本の上に覆い被さり日光を遮っている。昨日、長い梯子を掛けてばさばさと切った。一昨年はリンゴ豊作。今年はじえんじえん。剪定をさぼったこととドングリ君の木々による日光不足であろう。あーあ、よーく読むと人間関係とそっくりだよねえー、こういう話。

「追記」

日本でも同じだろうけれどフランスでもお隣の庭の上空侵犯は法律上駄目。私は律儀だから一切私側からの侵犯はない。それをやるとご近所から「だらしのない旦那マーク」を額に張られる。左隣とは仲良しだから、ごく普通に「ありゃ、ごめんごめんそっち行っちゃったのね、さっそく散髪いたしやしょう」とお互いにやっている。国交というのはこういうことなんだなあーなんて思う。右隣は我々(我が家と左隣)二軒の1.5倍の豪邸。お金持ちである。「自分でさ、やらねえーんだったら庭師さん雇えばいいのにね。お金持ちなのにね」という庶民的な会話になる。そして、単純な算数理論、ケチだからお金が溜まる。ははは、右隣の右隣にたぶん私の住む町の要職にあるであろうご家族が越してきた。相当なクレームが行ったはずだ。業者が来て庭の大規模な手入れをした。なぜか、私の家側の手入れは大雑把。反対側の上空侵犯はゼロなのに私側は相変わらず。こないだお隣の旦那にぼったり。「あっ、ちょうどいい。あんた

んちの方に飛び出している枝、好きに

切っていいから。私は庭の手入れ性に合わないんだ」だって。ケチおよび確信犯がばれた。小枝なら分かる。飛び出している大木を好きにして頂戴って言われてもねえー。プロの業者じゃないと手に負えないレベル。俺のことなんだと思ってんだっ！ あっ、便利なお隣さん。日本人は律儀で礼儀正しくて働き者。わっ、確信犯のさらに上ってんな右隣さんっ！

「生んでやった」という言い方をする人々は結構多い。例えが悪いかも知れない。「やってあげた」という気持ちのベクトルのことである。これは私には分からないものの一つ。悪い例えをそのまま使う。一番インパクトがあるから。

私には子供が二人いる。もちろん、一人で制作したわけではない。「生んでやった」。口が裂けても出てこない和音だ。「生ませてしまったっ！」＝「やっちまった」、ご免して頂戴という感じにしかならない。私は取り立ててペシミストではないけれど、生きていることがそんなに素晴らしいとも思わない。どっちでもいいから、じゃ、楽しくやろうぜっ！ という逆噴射オプティミスト。これって、たぶん、東洋思想のなんらかの影響下にあると思う。

竹下久美子さんの的に言うと、例えばですよ、裕センセという個体は1959年まで存在していなかった。そして私の葬式の後には存在していない。宇宙史の微細なゴミ以下でしょ？ 裕センセという個体は。でも、「裕センセ的遺伝子は不滅」。すいませーん。となる。あーっあっ、やっちまったっ！ よ。となる。

あっ、当然にして段々チャンジーになっているから、孫の世話でもしないとお詫びができないのだ。私の論理では。「生んでやった系老人」。こういうのは絶滅した方がいいと思う。チャンジーバイオレンス。なんかこういうのが蔓延し始めていませんか？ 健康は大切、元気も大切、それは次世代をサポートするためにある。自己表現なんて五十過ぎてやっている。みっともねえーっ！

俺って変なのかな？ 自然の一部に俺らがいるのであれば、そういう風にしか考えられないのだけれど……。自我なんているのかよってのっ！ さまーず三村さんの口調で。あっ、全然関係ないけれど、ローラって凄い人だ。デビュー当時からそう思っていた。ため口おバカキャラに踊っていた我々の負け。

一応、年末という言葉タイトルに入れちゃったけれど、無粋な私にはじえんじえん関係なし。こういうマイウェイが年と共に増長してきている。増長増長お鼻が長いのねえー理論である。

ところてんで、今、気が付いた。にほんブログ村エッセイ・随筆部門参加者数699。私が参加酸化傘下し始めた五年前は613だった。一時、598だった。なんか「にほん」って付いているサイトのエッセイ部門とすると凄く少ない感じがする。大体、私自身が部門の常連化している。大家の退化の対価のような存在になっているかもしれん。

うーーん、来年は少しブログサーフィンしちゃおうかしら？ ね。ちょっと、考える振りをするけれど、お気に入りブロガーさんたちの記事で十分ちゅうところもある。

今年はいろいろとあったというのは嘘で毎年いろいろとあるようでないようで……。巨視的に見れば、大した話ではない。とはいえ、個人レベルの喜怒哀楽的には若干いろいろあった気もする。けれど、すでに過去。過去過去かっこう格好恰好とか歌えば仕舞だ。

息子が難関試験を二位通過。皆で駄目だったかぁー。一週間後、一位が辞退。正確にはもう一つ受かっていた。息子が繰り上げ当選。内の息子は同じことを三年前にもやっている。三つのポスト。彼は四位。その年、ポストが四つになった。当選した。政治家ではないけれど、正直、試験のレベルは難関。これを繰り上げ当選を二度している。彼のキャパシティーは凄い。糞忌々しいエリート君にならんままそういう世界にいるところがジャズメンの息子らしい。粹だ。そう、親バカの私が鼻高々なのは、彼の職業ではなく、そこに至るまでの人間的な感じ。ここの部分に親バカなのだ。

娘。なんだか巷の雑音が煩かった。「燃え尽き症候群」。はっきり言って、私の娘と言うよりミニチュアなのだ。彼女の脳構造は私が世界一知っている。そう、なんであんなに優秀憂愁だったイサオ君はジャズのピアノ弾き「なんて」なっちゃったの？ 「期待外れ」。大きなお世話なのだ。有終の美というものである。と、我が娘も同一傾向があるから本人の意思以外にはない。そして、それが見付かった。えがったえがったぁー。

と、子供たちのキャパシティーは絶大。親父の出る幕なんてないのだ。すいませーん。

「独り言」

あのね、次世代の人のキャパを見抜くのが高年、老人の役目。そういうことをしない人が増え過ぎ。駄目だって、それは。俺だのあんたなんてどうでもいいのだ。次世代は次世代が担う。そう、聡明な親、多少馬鹿も入るけれど科学的な見地はいるのだ。

皆さん、良いお年を！

明けましておめでとうございます。

長期に渡り私の愚ブログにお付き合い頂いている皆さま、新規にご訪問頂いている皆さま、改めて御礼申し上げます。

本年も皆さまにとって良いお年になりますこと、心よりお祈り申し上げます。

早速、馬鹿なダジャレ。

「新年とかけて？」

はいっ、意志の堅い人＝信念

はいっ、無責任な人＝俺、しんねえー

はいっ、意味のないシャーペン＝芯ねえー

相変わらず鳥とめのない愚ブログを鳥急ぎ書き海の鳥トンを見て鳥つくしまなしの鳥達え。

本年も色鳥鳥の文体を駆使しなにも内容にて迫りくる所存にてございます。お辞儀。

ボナネエー ア トウルモンドっ(良いお年を皆に)！ ダボォー ラ サンテ エ
ミュージックっ(まずは、健康。そして音楽)！ 網戸すめて の 麻布十番肉襦袢(Copyright
TAMORIフランス語に聞こえる日本語より。アラン・ドロンの仕草でぼそぼそと) 新聞くれ の
下膨れ(パリ旅行業界のシルブプレの覚え方より。東北弁でいうと通じる。スンブンクレ スモ
ブグレ)

タイトルに意味なし。2年前から大晦日の飲み会に行くのも億劫になってしまった。午前5時ぐらいまで飲んで3日酔いみたいな感じで新年。これがめどうになった。大晦日も元日もピアノを弾きたいせい。暮れても明けても結局ピアノにしがみ付いているだけ。ピアノお宅のあるべき姿である。

12月27日まで快晴暖冬。毎日、庭の手入れをした。29日は社長と恒例の年末ミニバス大掃除夜は飲み会。フォルクスワーゲンの9人乗りカラベルという名のミニバス。後ろの座席は一人で取り外しは無理。超重いのだ。二人でひいひい言いながら取り外し、掃除機を掛けお湯、セム皮で内部を拭く。2列目の座席を前に倒そうとした時、思った以上のスピードでパタンと倒れた。一瞬、黒い鉄の蝶番に左手を挟まれたような幻影。ちょっと吐き気がし、俺のピアニスト生命は終わったとなんとなく他人事のように思った。複雑骨折をした左手の人差し指の鮮明なイメージが脳内を過り、ちょっと、気を失い掛けたような気がした。一瞬の幻影で左手は健在。掃除を続ける。透明なビニール手袋の中が赤い。ぎょ、血、血、血、起きたままの正夢？ 気を失い掛けたような感じがもう一度した。素早く手袋を取る。わっははははあー、人差し指の背の皮の掠り傷だった。後で考えると、本当に左手を挟んでいたらピアニスト生命を失っていた。ぞっとする。そういや、ドングリの枝切りしている時、小枝が右目の下に当たった。これも後で考えるとぞっとした。洗濯機の蛇口の取り付け時、右手の平を切った。なんか気持ちが悪くなるのかお前っ！ ピアノを弾けなくなった裕イサオ？ これは粗大ゴミ以上のものになる。恐ろしい。

ところで、大晦日は前回行った中華和食食べ放題レストランは車で行かないといけないので止める。歩いて行ける寿司食べ放題に行くことにしたのだけれど、息子と娘が「美味しくない」と言っていたから若干迷う。息子も娘も何度も日本に行っているから寿司の味には敏感である。しかし、家で食べるか徒歩圏内だとそこしかない。やはり、まあ、行ってみんべとなった。

元々、フランス料理のレストランだったところ。内部構造は知っている。和風になったけれど素敵だ。食べ放題＝バイキングではなく、何度でも注文できるシステム。これは中々いい感じ。毎々、お皿を持ってうろつかなくていい。取り敢えず、エビフライを頼む。カラッと揚がっていて中々美味しい。焼き鳥手羽。うーむ、まずくはない。けれど、私は塩が好み。ふむ、まずいであろう寿司を試しに頼む。マグロと鯛。板前さんは、たぶん、ベトナムないしラオスないしカンボジア出身と推測。でも、きちんとお寿司の勉強をしている板前さんもいるから先入観を取り払う。来た。サイズは合格。お魚の鮮度も合格。ただし、お米は日本米もどきであることが視覚的に分かる。食べた。酢の入った小さなおにぎりの上にマグロが乗っている感が口内に広がった。まずくはない。でも、お寿司とは違う食べ物になっている。なんか失礼を承知で板前さんにアドバイスをしたくなってしまう。まず、お米は夢錦を使うこと。炊き方、酢の混ぜ方、そして、「握り加減」。寿司は諦め、マッシュルーム、クルジェット、大エビの炭火焼き。これは美味しかった。最後に揚げ物を頼みお腹パンパカパンで28日以降の超絶寒波の中へ。ほとんどエスキ

モールック。

以前、営業マンをしている時、ナンシーへ出張で行った。なんとなく寿司が食べたくなった。店構えからまあまあ行けると判断し入る。ただし、板前さんは日本人ではない。そこのお寿司、中々美味しかった。ただ、サイズがお稲荷さんの大きさ。これが難点。カウンターの後ろの板前さんに「すいませんねえー、余計なアドバイス。あのね、お寿司自身は美味しかったですよ。でも、一口で入らないと触感が変わってしまって、そここのところだけおいしいと思いました。でも、フランス人の胃袋にはあれぐらいの量はいいかも。そうすると数を増やす感じがベストだと思うのですが・・・」。板前さん、怒るかなと思ったけれど、最初に美味しかったと言ったことが余程嬉しかったようで、通りすがりの日本人客のアドバイスを神妙に聞いていた。上から目線では断じてないと今でも思っている。

メトロノーム使ってジャズのシンコペーションの練習している方がいたら、同じく私はアドバイスするはずだ。人生自体から始めないとおー、と。

昨晚、初夢を見た。ははは、私の現実の夢はジャズピアニストになること。既に夢は現実になった。「しがない」でもじえんじえんかめへん。しかし、なるまでの屈折、社会的負の圧力は台風のだった。でもなった。凄いじゃん。夢ちゅうもんは現実化しないと意味がないと思っている。なあ——んてね。そうねえー、私にとっては「夢」っていうのは人生設計ということ。美術家になりたい。小説家になりたい。こう思っていた時は実際にやる。以上なのだ。「夢」ちゅうより、やっぱ、プロジェクトに近い。私は無趣味人間。唯一の趣味はブログと料理と庭弄り。それ以外は趣味ではない。

「初夢一部追加脚色」

俺は大型バスのたぶん助手席に乗っていた。大海原が視界に飛び込んてくる。「わっわっわっ、海い——」となんとなくタイタニックの船の先端にいる感じ。大海原が迫ってくる。青い海の表面の一角が長方形に開いている。なんで海水がその中に零れないのか、ちょっと、不思議に思うけれど実にそのバスと切り取られた長方形は美しかった。海中トンネルなのだ。

コンサート会場らしき所に俺はいた。真師匠のドラムス。なんとなく東欧のグランドピアノが置いてある。俺はピアノを弾き始めた。音がしない。ステッキみたいなもので弦を叩いてみる。音がしない。コンサートの開演は午前4時。段々と眠くなってくる。ふと、目を覚ますと、午前5時。真師匠が怒るでもなく、「イサオ君、皆、帰っちゃったよ」「えっ」。いきなり、俺は凄い勢いでピアノソロ。自分でもそのレベルの凄さに唖然とする。

2本の栈橋が出た船着き場。広い栈橋に時代劇に出ていたような人々が300人ぐらい船というよりバスに向かって列。コンサートのお客様の多さとその格好に少し仰け反る。

「ピアノメーカー名ダジャレ」

ロシア ショスタコビッチ・ペトロフ

アメリカ ジョンサン

フランス カトリーヌ

韓国 アスハヤスミダ

中国 ニーチャン

日本 ハマヤ

来週十二日に我々トリオ+ケイで今年初のコンサート。うで、いろいろと考える。俺の音楽は「フリージャズ」だ。でも、即興音楽＝インプロビゼーションと、ないしはフリーを取ったジャズとしばしば一緒にされる。まったく他意はないし流派がどうのこうのも俺の中にはない。でも、俺の音楽は「フリージャズ」なのだ。

ジャズの発端は黒人奴隷の歌。彼らはアフリカ大陸から拉致されてきた。重労働の毎日。その極限状態の労働歌が発端。暗いから明るい。白人が作った音階音感とは違うソウルがあった。以下、略。このソウルに気付いた連中がいる。そして、ジャズ、ブルース、ロックというグローバル化が始まる。

超絶長くなるから端折る。うで、ジャズが生まれた。けれども、キャバレーのBGMみたいに段々になってきた。商業化ちゅうやつね。これではいかんという黒人たちが出てきた。俺たちのルーツだっ！ 白人へのご奉仕音楽なのかつ、ばあーたれっ！ こういう人たち。

怒り、エモーション、叫び、こういう諸々の過去の歴史を音にしたらどうなるのか？ 晩年のジョン・コルトレーン。コード進行無視。涎を垂らしながらの狂氣的演奏。オーネット・コールマン。アルバート・アイラー。セシル・テイラー。こういう後続部隊が出現した。ジミー・ヘンドリックス。そして、日本へ飛び火。我が師匠沖至、阿部薫、山下洋輔とそうそうたる後続部隊が出現した。

と、当然にして裕イサオは「この」延長線上にいる。延長線上のアリヤリヤである。

しかし、浦島太郎じゃないけれど、ジーちゃんになってしまった。怒り、エモーション、叫び・・・、アリヤリヤ？ 体が持たない。

あー、拙いかなあー、こういうこと書いて・・・。インプロビゼーション、以前にも書いたけれど音大出身が非常に多い。フリージャズ、ほとんどが独学系。なんかどっか人種が違う感じがする。まあ、お互い貧乏だから縄張り争いなんてしねえーっ！ でね、俺のこだわりは、フリージャズ、つまりスイングしている暗くて明るい。難しい音に聴こえるけれどお笑いがある。奴隷は明るいのだ。音の実験をしているのではない。ニャーおーっ、世間の馬鹿あーっ、ギャラ上げろっ、こちとらジーちゃん、もっと大切にせんかいー、などと言ったり言ったりは決してしないけれど、そういうことが発端にある。かも？ は？

インプロビゼーションもフリージャズも「既成概念の破壊」がベースにあった。「破壊」？

昔はなんか「血が騒いだ」のだけれど・・・。

昨晚、「怒り新党」をユーチューブで見えていたら、有吉さんのツイッターフォロワー四百万人と出てきた。私はマツコさんと有吉さんの大ファン。四十代のテレビ界の両横綱。とにかく頭のいい人だ、お二人とも。頭のいい人のやる馬鹿と馬鹿がやる馬鹿はまったく違う。後者は選択肢がない。前者は余裕と共に自分で自分を笑っている感じ。タモリさん、たけしさん、さんまさん(さんまさんはちょっと異常天才的に異常)。後続にさまーずとかがいる。その次の世代である、お二人は。

私のブログのフォロワーという欄。二人。毎々閲覧数、本日、最長不倒距離で十三人。考えてみると私のライブハウスの集客力が二十人前後。有吉さんの桁違いのパワー。やはり、時代を作る人、一流の人というのは規模が違う。で、妬みやっかみ羨ましいのか？　というと、チェンジャーだから、へえー、すげえーと思うだけ。なんのなんの有吉っ、一億まで行けえーなんて応援してしまう。

ご存知の通り、fc2ブロガーさんのご訪問は「足跡を残さない」とシステム上しなければ、私には把握できる。私は「足跡を残さない」としている。でね、いつも応援して下さる方々ってのもぎりぎり複数形です。深謝および深々とお辞儀です。その方々に混じって、時々、「ブログで収益を上げる」「閲覧数アップの方法」なんていうのが出てくる。

と、私にとってのブログは「自己満足」と普通、悪い意味で言われるそれなんだろう。それでも、テンプレートの左下に競馬の宣伝なんかが出てくる。削除でけんです。そりゃー、テンプレート無料で使わせて頂いてるんだもんなァー。

どうなんだろう、「ブログで収益を上げる」、実験としては面白い気も若干するのだけれど、ばぁーたれっ、ピアノが先だろってのっ！　なんか言いたいことが分からなくなった。私はピアノは無料では弾かない。僭越とか自己満足とは違う。金銭絡みでしかやらないというかやれない。プロと毎々共演しているから、私が無料では仲間が感無量でしょ？

でもでも、「書くことで救われる」ことって物凄く多い。ピアノだって、やはり、同じことである。そうかァー、祈りに近付いてんのか？　自己満足とはなんか違う気がする。

じゃ、だれになにに祈ってんの？　えっ、もじもじ、俺だ。自分のキャパシティーだ。

一昨日のスーパーのレジでの出来事を書いてみる。国名などは私の推定。なるべく読み易くということで推定のまま書いてみる。

ハイパーマルシェ「ルクレール」のレジ。私の前に八十は過ぎていると思われるフランス系フランス人男性。キャッシャーのコンピュータがダウン。レジのフランス系フランス人女性二十七、八歳が無表情で「すいません。コンピュータダウンのため、隣のレジへ移動して下さい」。私の前の男性、すべてのものをターンテーブルに乗せている。籠も片付けられてない。一品ずつ隣へ移動するのは難儀だ。男性怒り出す。「私は九十三歳だ。なんでこんなことをせんといかん。そっちの問題だろう。私はここから動かんっ！ こんなことは初めてだっ！」。レジの女性。「私のせいではありません。コンピュータダウンです」。日本人の私の感覚にいつも奇妙に聞こえる。「私のせいではない」。ルクレール社に帰属しているレジ担当者。会社に所属している人間に「私のせい」なんていう言い訳が分からない。会社員としてお詫びするべき。

私は当然、レジの女性が移動のお手伝いをすると考えた。しかし、男性の怒りに不快感丸出しで自分だけさっさと移動する。「あたしのせいじゃないのに・・・」と呟きながら。男性、ますます怒る。「私は九十三歳だっ！」。この怒り方も若干不思議に聞こえる。その時、私の後方のアルジェリア系女性が、「ムッシュー、私がお手伝いします」と名乗り出る。その時、日本人の私は「ムッシュー、私は大きな買い物袋を持っていますから、これに入れて運びましょう」とほぼ同時に申し出る。アルジェリア系女性と一緒に袋に入れ私が隣に運ぶ。

隣のレジにすでにセネガル系の女性が並んでいる。我々からすれば横入り。しかし、すでに会計が始まっているから彼女の後に男性の品物を並べる。その後にアルジェリア系女性の品物。彼女、私を見て、「あらっ、横入りしちゃいましたねえー」「マダム、いいですよ、私、まったく急いでないですから」「ムッシュー、ありがとう」。

男性が会計を済ます。知らぬ間に横入りをしてしまったセネガル系の女性が男性の品物の袋詰めをしている。その間、レジの女性は随時不機嫌。男性、レジに嫌味を言う。それから笑顔で、セネガル、アルジェリア、日本(私は日本国籍)のいわゆる移民系フランス人三人へお礼を言う。「皆さん、ありがとう。良い一日を」。

彼が帰宅後、もし、妻がいいたら「なあ、お前、移民の連中捨てたもんじゃないねえー、彼らの方がフランス人の馬鹿垂れよりずっと優しいよ」って言っている風景が脳内を過る。

先日、ユーチューブでビストロスマップ最終回を見た。ゲストはタモリさん。諸々のスマップとタモリさんとの昔の映像。「タモさん、どうですか?」「俺、自分の出ている番組一切見ないの」「えっ、どうして?」「見ると、嫌な野郎だなんて毎々思うから」。

タモリさんは大学の哲学科出身である。ネガティブシンキングの好例。

我々には二面性がある。いや、私とか久保の兄貴とかは多面性だろう。諸々の事象を諸々の切り口で見てみる。これは我々のインテリジェンスである。二面から見る。三面から見る。多面から見る。面が多い方が自由度、世界観が広がる。から、インテリになる。第一、私はジャズ面だよおーん。

わたくしが最も親しくしている裕センセ。自己顕示の塊。ナルシスト、上から目線、サディスト、メガロ。嫌な野郎である。で、裕センセが最も親しくしているわたくし。「自己顕示ですかあー? 中上健司以降はもういいっていう感じー」「ナルシスト? だったかちら? まあ、多少はハンサム系ではあったけれどねえー。えっ、セックスアピールゼロ人畜無害系ハンサム? しくしく、あーた、そこまで言わなくても・・・、しくしく」「上から目線? 上から見ようとするとね、なんか、もっと上にカミサン」「サディスト? うん、これはある。自分に対しても・・・、ここが君と違うところおーん」「メガロ? これは今じゃ、ガメラ」。

で、裕センセであるわたくしとわたくしである裕センセ。このお二人に存在の意味があるのか? あるようなないような・・・。第一、人間自体に意味があんのか? あるようなないような・・・。で、ないと言ってしまえばない。あると言えばある。

結局、どっちでもいいのであれば、楽しくやろうぜってっ!

ネガティブ、ペシミスト、シニク、ニヒリスト・・・、こういう感じで考えてみると世界観がいつの間にか逆転する。つまり、楽天主義の鏡像なのだ。ドイツの哲学者ヴィドゲンシュタイン。諸々の哲学論の果てに辿り着いた結論が「すべては無意味である」。天才が天才を振り絞って辿り着いた。あっはははっ、彼は思考に息詰まると映画館へ行き一番前の席のど真ん中に座って映画を見ていたそうである。映画を見ていた? なんか違うものが見えていたと推測する。

鬱の原因は「出口のないトンネル」である。ビジョアライズし易いイメージでしょ。トンネルに出口がないのであれば・・・。複数の選択肢が推定できる。トンネル自体を消滅させる。意識からでもいいし、実際でもいい。トンネルを掘り進む。意識内でも実際でもどちらでも結構である。羽毛おーんっ、めどうっ! エトルタの断崖に行く。

あらあー、そもそも、「トンネル」自体が存在しているのかしら？ と無理やり思い込む。ぜえぜえ……。で、あんまりぜえぜえやっていると、エトルタの断崖が手招きする。そうかあー、一番手っ取り早いのは……。ってなる。しかし、わたくしではなく裕センセはハイランダーなのだ。裕センセはわたくしだから選択肢がねえー。裕センセは永遠なのだ。ふしふしふしって泣くしかない。ふしだら？ 芸術芸能多面性遺伝子は永遠。生きるって、大変かも？ でも、プラプラしててもいいのだ、別に。で、世間の圧力がくる。この圧力に対抗拮抗でけるのか？ となる。だから、ね、ピアノ弾く。おっ、悪魔を蹴散らすための祈り？ わっ、俺のピアノって技術じゃなくて、その存在意義って凄くね？ 半端ねえー。

今朝、起きる。庭の木々の剪定で痛い右腕の痛いところを、ずばり、サロンの扉の取っ手に激突。取っ手も痛い。ヤノピをくんなまし。やっぱ、痛い。ところで、ジャズはなもげら用語の基本は、ドミソ、ミソド、ソドミ。日本語の転回形。本記事は音楽についてなのでジャズ用語満載にする。脳トレとしてお読み下さいね。

ところで、明日からリムジーン螺子回しのゴトシ始め。月火、ゴトシ。木にコンサート。来週からゴトシゴトシ。なかなかいいリズムである。

で、ゴトシが増えると財布も潤うからピッハー。

うなことを書きたいのではなく、十二日のコンサートは我々トリオ、フューチャリング、ケイ。アルトサックスのフランソワ、出たい出たいと言ってきた。ベルリンからポールがこの日、パリにいる。ケイは日本から来ているトランペット。ポールもペットだ。うで、一応、ゴトシをゲットしたやつがバンマスだから十二日は俺だ。とはいえ、真師匠は俺の師匠である。親しき中にも礼儀あり。当然にして、相対的に若いオリビアをないがしろにはできない。女子をないがしろにするとナイアガラになる。結局、バンマスとして強権病をするか、穏便にやるか、和洋折衷をするかとバンマスの政治手腕が問われる。個人的には大家族いいじゃんと明るい系なのだけれど、それぞれの「その日のイメージ」がある。ケイをフューチャリング。このイメージで真師匠もオリビアも音を模索しているから、俺がじゃじゃーん、大所帯いーっ！　なんか場違い。

でね、結局、なにを言いたいのか。ユニットのバランス、各楽器の出番、その夜の雰囲気・・・、こういうことを考える。うで、これはミュージシャンは全員考えている。ガロメ系以外は。ほっほおーん、結構、俺たちってまとも。人間ができています。年のせい？　いやいや、音楽に携わると「そう」なる。俺が俺があーって出しゃばりつつ引っ込むという「このバランス」のことね。ほれっ、自己表現なんちゅう、野暮なもんじゃねってっ！　なっ、お若いのっ！　若ぐねえーんの？　あーた。じゃ、やめろよっ！

解凍は、四人で四十分。六人で二十分。ちと、長いけど、法被着てニュー嫌々だぜってっ！

新年の一句

苦しみ手苦しみ手　取っ手二の腕　痛い痛い
たらちりの　ふぐなべおして　ちどりかな
我　ピアノと　泣き濡れたい

えっ、五七五ってなに？ うなっ、ルールなんてへらまこいてやるっ！ いや、定型の美しさは別物です。

あたしは 不逞な不定形 どうだっ

編集部

裕センス、大丈夫なんすかねえー？

なんか、今、タイトルを付けて気が付いた。「人間」って漢字、「人の間」って書くのだ。うーん、そういうことだったのだ。で、個人を車のバッテリーにたとえてみる。元々のバッテリーの品質容量がある。これは製造元にクレームしてもらえない。

新品のバッテリー。「その存在」さえ念頭にない。普通にエンジンが掛かる。突然の不具合。その時、初めて「それ」に気付く。諸々の老朽化の兆候が出てくる。常に「その存在」が脳裏を過り始める。バッテリーも切れる時がくる。寿命。バッテリーは重い。

酷使されたバッテリーは寿命も短い。しかし、元々、酷使に耐えられるように作られているものは必ずしもそうはならない。

とすると新車、まだ新しい車のバッテリーのことは普通は考えない。しかし、私は逆。その頃の方が今より「その存在」を考えていた。意識していた。第一、事故を起こしたらバッテリーは粉々である。新品でも。その恐怖が脳裏に常駐していた。恐怖？ 甘美な夢でもあったところがやばい。バッテリーの破壊なんちゅう恐ろしいことも随時脳内を過っていた。自己破壊は怖いから消耗し寿命を迎える作戦を遂行した。しかし、酷使に耐えるバッテリーであることが発覚した。なんだよおー、俺は四駆なのかよおーっ！ フェラーリのように美しくありたかったのにジープだった。良くいえば大器晩成型。そうではない。大器晩成。結局、高年になって空気を食う生活となった。

私というバッテリーの製造元の期限は切れている。五十年と書かれているからだ。しかし、まだ、作動している。こうなると、破壊なんていう甘美な夢ではなく長持ちの秘訣ちゅうノウハウが人情的には生まれる。で、私にはそれはない。寿命が過ぎてんだからいつお釈迦になってもいいのだ。でも、定期的な確認はする。そして、現代の自動車テクノロジーでは、老朽化したバッテリーを交換しちゃったりする。老朽歌を歌うしかない。私は嫌だ。「自分のバッテリーで十分」である。来生ほど傍迷惑は私にはない。人生は一度で十分。ハービー・ハンコックの「処女航海」は弾くけれど、後悔はないのだ。まだ、バッテリーが持っていることの方が不思議だと思う。

最後に、実は一番書きたかった一行。

でも、から、始まる。

バッテリーは走らないと充電しない。新品でも同じ。寿命じゃないのにエンジンが掛からない。こういうのは元自閉症の私としては却下と言いたいけれど……。私が相談に乗ります。心肺

ゴム用。押したら掛かるからね。

なんども書いているのだけれど、私はミュージシャンのくせにコモリ系。自分でコモリのおじちゃまと呼んでいる。元自閉症の後遺症なのか、元々根暗なのか？ 家で料理だの庭仕事だのブログ書きだのをやっている方が好きなのである。ミュージシャンより、やはり、物書きとか美術家の方が向いているような気がする。というより、実際にそうだから「無理矢理」ミュージシャンになったのである。などと言いつつ元「営業マン」、今はリムジーンドライバーと客商売は一見手慣れたものという感じには見える。でも、あまり好きではない。と、自分の性質と真逆のことをやるのも大事なのだ。そうでもしないと・・・、わっ、高年の自閉症再発。やばいやばいっ！ コモリじゃなくて孫の子守りをやらんといかん年でそれはやばいっ！ 傍迷惑だ。

昨晚は、我々の新年幕開けコンサート。箆っている訳にはいかないから、コンサート前にポンピドゥーセンターに行ってきた。サイ・トゥオンブリーの回顧展を見に。私は美術家として彼の影響はまったく受けていないけれど、大ファンである。初期の作品から最後の作品までゆっくりと見た。私は彼はもっと後の世代だと思っていたのに1929年生まれ。なんかピンとこない。彼の作品は非常に現代的でお洒落に見えるから少し違和感が

あった。初期の模索時代の作品も大変興味深い。そして、花開く中期の作品群。一言で言うと子供の落書きスタイル。でも、題材はギリシャ神話。この辺りの作品群には圧倒された。素晴らしい。先駆者とはこうじゃなくっちゃ。そして、名声を得た後期の作品。ほとんどの美術家がそうである。商業主義的大作というやつになっていてお金の臭いしかしなくなっている。残念。芸術なんていう不必要なもので大枚を得るとこうなってしまう。金券、タブローではなくなってしまう。

コンサート会場へ行くまで少し時間が余った。常設展の会場を見ることにした。そう、私の大師匠の数少ないフランスにある作品を見に。キュビズム、ダダのセクションへ行く。見知った作品群がこれでもかと展示されている。しかし、私には過去の遺物。断捨離の対象品にしか見えない。ちょっときつい言い方だけれど・・・。我が師匠のセクションは小部屋。いくつかのオブジェ。大ガラスの習作。グリーンボックス。絵画は一点しかない。我が師匠は「できる限り同じコンセプトの作品は作らない」というポリシー。繰り返しはしないということ。数少ない作品はほとんどフィラデルフィアにあるという、これまた前代未聞の美術家でもある。アンチ商業主義を貫いた孤高の人の面目がそのまま出ている。我が師匠はピカソと同時代の人なのに、その数少ないポンピドゥーのコレクションの「他の美術家との途轍もない乖離」はとんでもない。二十世紀の美術史を変えてしまった人の凄みとその穏やかないまだに過去にはならない原石。ちょっと、禅の庭を思い浮かべたりもする。こういう印象を与えるのはダ・ビンチと我が師匠しかない。私と同世代のカップルが通り掛かり、「あっ、マルセル・デュシャンの絵があるっ！」とじっと見ていた。常設展のインフォメーションのカウンターの右上にも金色の額に入った我が師匠の作品。髭を生やしたモナ・リザ。「LHOOQ」そのまま発音すると「彼女はお尻が熱い」と

いうフランス語になる。こういう裕センスのような馬鹿ジョークも真面目な顔で我が師匠はやる。

コンサート。トランペットのケイをフューチャリング。うまく作動した。新年の一発目にふさわしい出来。オリビアが凄くハイテンションでやってくれた。バンマスのピアノの俺は超らくちん。合いの手入れるだけ。真子こと真師匠のドラミングは申し分なし。俺は、まったく平常心で全体の音のバランスを聴きながら弾いていただけなのだ。ちょっと、老境ピアニストってこんなかしら？　なんて弾きながら考えたりしていたところが我ながら凄い。ケイのペット、いかしている。フランソワの新しく買ったビンテージ・テナーサックス、これもいかしていた。

打ち上げ。超可愛いバーウーメン。仲良しだからいちゃつく。コンサートを聴いたお客様の中に、三十代ミュージッシャン女子が二人。音楽論をしつついちゃつく。えっ、私が？　ちゃうちゃう、我々メンバー全員がいちゃいちゃ。ということにしておく。一番、いちゃついていたのは・・・、痛っ！

小雨、寒波、寒風の中のパリで、我々はまだ蠢く。

タイトルとまったく関係はないのだけれど、今、スイスの系たんさんの記事を拝読。私は薬指の方がずっと人差し指より長い。自称理科系ではなく理科系だったのですね。ピアノ弾きは本質的に理科系が多いと推定している。ピアノは人類初のコンピュータと思っているから。

ブーツさんの記事。錬金術。自動人形・・・、下落合の下宿で澁澤龍彦の著作を読み捲っていた時代がぐわっと脳内を過り懐かしい感じがした。そうですねえー、人形って人の形をしたものって怖いです。どうして？ 人間が怖いせい？

サクライさんの観覧車の横顔。カミサンとアンジェに小旅行で行った。大広場に観覧車。カミサンが乗ろうと騒ぐ。私は高所恐怖症。下で見ていることにした。カミサンが小娘のように上から手を振っていた。「なんだあいついい年こいて・・・」などと呟きながらなんかジーンとした。おっ、いつかコンコルド広場の観覧車に乗っちゃおうかしら？ オシメして。

そうなんですよ、兄貴。私が美術を止めた宣言はしていませんけれど休止したのは、場所取り過ぎ。アトリエおよび作品群の保管場所。それから、詩を書いたり小説を書いたり、これの滞りは「フランスで日本語で書いている矛盾」。結局、ミュージッシャン。音に質量がないことと通訳がいらん。ずばりです。

あれ、そうそう「いつかはクラウン」。これは私が思春期の頃の日本のおじさん向けのコピーライトだった。結局、クラウンに辿り着けないおじさんはマークツーとかローレルなんかに乗っていた。日本の景気が良かった時代。私も若干そういう教育を受けたような気もする。でも、私はカーキチだから「いつかはGTR」という感じではあった。結局、クラウンでもGTRでもなくスズキスイフト。でも、リムジンドライバーだからメルセデスベンツSクラスという恐ろしい車にも乗っている。どうでもいいけど。

うちの息子娘世代。日本でもそうらしいけど車の購入まったく念頭にない。必要に迫られたら一番小さい燃費のいいやつを買うだろうという程度。ほとんど自転車購入と同じ感じ。乗ってる車で金満度を見せ付けるというスタンスは崩れ去ったんだらうなあーとはいえ、元々、フランスにはそういう傾向はほとんどない。身の丈、必要度に合わせてという感覚。当時の日本の方が変だったのかも・・・。

ところで、私が一番嫌いなのは安い小型車が銀モールみたいな付けて高級感を演出というやつ。安いんだから高級感なんかいらん。ぺらぺらしている方が粋というもんだ。ベンツのSは高級感じゃなくて高級そのもの。模造ルイビトンじゃんね、うなもん。スズキスイフト、しみじみと日本もこういう車を作れる時代になったんだなあーって思うのである。高級感の演出の欠片さえない。機能美そのもの。燃費がよくきびきびとよく走る。と裕センセが書くとなあーんとなく人間論のようにも読める。因みにわたくし酒飲みだから燃費はわりいーぞっ！

すいませえーん、勝手に裕イサオユニットとタイトルに入れてしまった。私のブログということで、そうせんとなんかピシっとこないからねえー。まっ、各自がそれぞれ同じことをしていてもじえんじえん構わんのがフリージャズ屋。とは言え、添付ビデオは一応は私がバンドマスターなわけ。

午前中に「いつかはクラウン」という記事を書いた。今日は1月14日なんだけれど、明日から反抗期ではなくてドライバーの繁忙期に入る。更新はちと難しくなる。こっちも寒波ネラで寒い寒い。やはり、裕センセの記事を読まんと頭痛が痛いなどという二重障害が出る方もいらっしゃるかものかも南蛮。おっ、ユーチューブにドクターX4全話があった。反抗期前にみるみるとみる。俺は米倉涼子さんの大ファン。ミーハーだ。一緒にパリを歩きたいっ！ 恰好えーん。フランス女的な感じがいかしてる。文学的容貌要望。おパリに似合う女優さんだ。おっ、今、独身だよなえーん、ばしっ、痛っ！

で、俺は医者馬鹿長男。馬鹿は医者にならん方が、まあ、いいしゃね。でも、医者は世間知らずの馬鹿が多いから、更なる馬鹿を医者にしようとする。で、なる。でも、俺は、若干分別があったから馬鹿に相應しいフリージャズ屋になった。と、謙遜じゃねえぞ、ならないという理知があった。つまり、頭が良かったのであると自分でしてしまうからあてにしないでね。と、こういう医者の世界の馬鹿げた世界を戯画化していると一応してしておく。内部告発はゴルゴサティーンが日本医師会から送られてくる。

でも、一応、若干、頭というのか受験勉強はなんとかあった程度の馬鹿が親が医者だからと、医者になる。その結果がドクターXの戯画の中に描かれている。政治とか社会に疎い人たちが病院という組織金権力。無理だ。そういうことは東大では教えていない。外科医のスキルだけで生き抜くミチコは、フリージャズだ。

と、えっ、前置きの？

はい、以下、添付するビデオは私失敗しないので、じゃなくて、あのね、日本から帰って来て、自分のユニットで初めてやったのだけれど、なんだか、ジャズのエッセンスがぎゅっしりちゅう演奏。出口のないトンネルを掘り進んでいる圧搾機っていう感じ。

「使用説明書」

パソコンスピーカーでは聴かないで下さい＝それなりの音響システム要

フリージャズの聴き方ポイント 全員のバランスというよりベースをまず聴くこと
ベースだからです

オリビアがすべてをコントロールしている 私は愛妻家だからベースに女子というのは正解だったのである

男は馬鹿 女子がベースを作ると舞い上がって以上おしまい

オリビアのベースに リズム隊員真子と伊沙子 疑似女子が土台を作り その上に旦那連 ケイとフランソワールが乗っている

という感じなんだけれどねー ジャズ狂の方はよくご存じ ベース音を追っ掛けて行くと・・・

結局、オリビアに操られている猿なのだ。我々は。だからこそ、素晴らしい出来になった。

五日間、朝から晩までドライバー。待機車中、お気に入りブロガーさんたちの記事を拝読。心の支えになる。拝読していると私自身の書きたいベクトルが上昇線。でも、書けない。ピアノも弾けない。辛い。この書けない状況、弾けない状況の逆噴射。一日だけの休み。原稿用紙三十枚ぐらい書きたいことがある、けれど、今日はリンクさせて頂いているブロガーさんたちとのバーチャルミートについて書く。リンクさせて頂いた順およびリンクしていないでリンクしているクリンクリンクのブーツさん。しかも、現実にお会いしている。

「久保はつじブログる文学振興会会長」

以前にも複数回書いている。出会いは「記事タイトル」である。「酔った勢いでブログを書いて見た」。こんなタイトルを付けるブロガーさん？ 私は宙酒飲み

と、ここまで書いたら会社から電話。明日の追加の明後日の追加サービス。ブログれない。

続きは繁忙期が終わってからとする。でも、いつも、思う。私なりの詩的な文章を書こうとすれば、生きているのに忙しい人は詩を書かないし書けない。詩自体に本人がなっている。

今年のパリの1月は寒い寒い。今日もこれから仕事。なんだか突然忙しい。

寒波の中冷え切ったお財布。カイロにはならん。その状態でスーツ着て超高級車を運転している男。哀愁というよりお笑いちゃう感じ。そうそう、先日の記事の中に「宙酒飲み」という訳の分からない単語。大酒飲みまで行かないので中という意味で書こうとしていたのだけれど宙と出てきて、その後、会社から電話。なんとなく宙の方がいかしているのものでそのままにした。

睡眠不足と激務でぼわぁーっとしていた。とはいえ労働は人間を単純にする。ジャズのルーツへの回帰だからジャズメンとすれば正しいのである。

ピアノ弾きてえーっ！

「前書き」

繁忙期が1月26日で終わると思っていた。社長から電話。なんのなんの2月中旬まで続く。わっ、2月はコンサートも立て込み。こうなるとニューシフト、弾ける時にピアノを弾き捲り、ブログれる時にブロ捲り、予約投稿ちゅうのがある。酒、煙草、できる時にがぶがぶすぱっすぱっ。時間がなくなると時間捻出パワー全開三足草鞋やってたぞっ、俺っ、ニャローシフト。ジャズメンには望みちゃんである。激務ヘロヘロの果てに奴隷たちの叫び声が体内に充満するから、ジャズる。さっき帰宅しピアノを弾いた。ジャズっていた。

ところで、「大人のブログ」、私が愛して止まないブロガーさんたちとのバーチャルミートの理由と、どうして拝読するのか大変僭越ではありますが、以下、「酔った勢いにて」ブログリ候。リンク順およびブーツさん。

「久保の兄貴」

記事タイトル。開く。仰け反る。過去記事読み捲り。浴衣はだけ垂れ目。すっすげえー。パラレル馬鹿マジへめらも漫画ランボー文学多面体。正直、私はブログという媒体の中でこういう天才にお会いするとは思っていなかった。でも、いた。すぐに師匠認定。ブログる文学振興会会長とさせて頂いた。兄貴はブログ界のジャズメンである。音がするブログかも知れない。脱毛です。失礼っ、脱帽でした。

「蝶姉さん」

一応、若干年長のようなので姉さんとしている。私のブログリング歴にてお付き合いが最も長い、ペーペーの私のブログを最初に認めてくれた方である。バーチャルミートは1位だったから。私は1位というものは尊敬に値すると思っている。簡単ではない。どの世界でもどの分野でも、極小の世界でも1位というのは私は凄いことだと思う。私は12歳以降一度もない。姉さんの定点観測、永遠の乙女的視点、随筆のあるべき姿。そして、私が最も共感するのは姉さんの1行「書くことで救われる」。同感である。

「サクライ君」

なんか楽しいので「君」にしている。サクライさんとのバーチャルな出会いはサムネイル。お月様。凄くセンスのいい人という直感。開いた。開いた開いた桜の花があー。読んだ。その文章力。散文詩である。彼女のブログは。その柔らかい優しいようで芯のある文体。過去記事、小説サイトも拝読。文章のプロだ。鳥瞰目線。こういう文体は簡単にはできないことを、一応、分泌(誤字じゃねっ)業をやったことのあるわたくしには良く分かる。

「系たん姉さん」

出会いはスイス在住。田舎出身。なんか海外になんかの間違いで来てしもおーたっ！感。正直、私は海外在住者のブログ、一般的にあまり好きではない。なんとなく「お自慢上からご紹介」、こういう貧乏臭いのが大嫌い。エッセイ部門で私の近所にいらした。開いて見た。写真がとても

綺麗。生き生きとした文体。私とて海外で暮らすことの苦勞に関しては玄人。ダジャレだぜってっ！ 姉さんのユーモアと明るい文体。とても素敵である。

「フェアリーさん」

1位だから、である。開いた。タイトルから始まり、文豪の言葉。日常。詩。ご本人の詩。最近読んだ御本。短歌俳句川柳。この定型の美しさに魅了されました。私事で恐縮です。私のような自己顕示の塊、芸術(僭越ですが)の化け物のような嫌な野郎にとって、フェアリーさんのブログは戒めであり、ご教示清涼飲料水抗生物質更生物質です。なんか私が忘れていたこと。忘れてしまったから嫌な野郎に増長していることの実感がなくなる。こういうことへの戒めと思いながら拝読して居ります。

「ブーツさん」

お会いした切っ掛け。ブログの方は1位だから、である。開いた。その博識インテリフランス文学に精通。仰け反りました。そして、実際に私のライブにいらしてくれました。ブログのイメージ通り、インテリ紳士。きちんと調べて書いている。ブログというお気楽な世界で「これ」はなかなかできないと思いました。お元気でいらっしゃいますか？ 沖至師匠とのセッション。2月から再開します。奥様にもよろしくお伝え下さい。

そう、ブログが続かない人。やんなくていいと思う。大人のブログって、違うと思う。ねっ、お若い人たち。あんたら、忙しいからブログなんか止めろっ！

なんか沖師匠は日本国では「伝説の」という風になっている。うなことはまったくない。パリのフリーズジャズシーンを牽引し続けているジャズジャイアントである。

初めてお会いしてから十八年が経過している。師匠の一言は非常に私には重い。

「弾いている姿がいい奴の音はいい」

「イサオ、ちょっとトリル多いな」

「和声を覚えると自分が楽になる」

「体調が悪いとか、そういう話はするな。少なくともコンサート前はな」

「ごりごり行けるんだったら、今の内にやれ。いずれできなくなる」

「自分より上手い奴とやれ」

「俺より上手い奴はごまんという。自分のスタイルがあればいい。それが一番難しいけどな」

お会いした頃の静かなアドバイス。

「イサオ、ブロックコード、覚えろ。それだけで食って行ける」

これが、三年半前ぐらいの最後のアドバイス。

「お前、ヤノピ上手くなったな。ブロックコードいかしてる。お前には洋輔(山下)に負けないスピードとパワーとエモーションがある。自分のスタイルがある。それでいいんだよ」

と、好々爺口調でおっしゃる。なんか、お笑いビックスリーに例えると、沖師匠はタモリさん。真師匠はさんまさん。俺はたけしさんだ。一番、熱くて暴力的なところがある。勝手に性格分析しちゃったけれど、若干、外れてないような気もする。ミュージシャン的に。

現在、23h41。今帰宅。まだ夕飯をとっていない。でも、なにはともあれ晩酌。

明日は、オフの日だった。でも、仕事が入る。日曜日と同じ。オフだったはずなのに仕事。土曜日は夕方だけのはずが、午後から夜まで。この突然の変更。若干、むっとなる。なんだよぉ——————、明日は風呂ビールピアノの日って決めてたのに
よぉ——————っ！ 珍しく社長に悪態。「えっえっえっ、明日、も、
ですか……。ちょっと疲れ溜まってんですけどねえ——」。二秒後に「なぁ——んてことはございません。ばしばし行きましょうっ！」。元営業マンの習性が修正できない。

やっぱ疲れる。とはいえ待ちの車内で来月のコンサートの手配をしているところが……。これって格好よぐね？

第一弾。沖至、佐藤真、裕イサオ+鈴木ケンタローのベース。よくもまあ、数少ない日本人ジャズメンを揃えたものだっ！ 俺は相変わらずチンピラレベルだけど、このメンバー。泣く子も黙る感じ。パリ沖組コンサート。

第二弾。沖至、佐藤真、裕イサオ、オリビアとモーガンのテナーサックスとクラリネット。女子二名。パリ音大出身。日本のオジサンのパワーにフランス女子が対抗する。オジサンたちは百戦錬磨のツワモノ。しかし、チンピラ優男風の裕イサオが変圧器になる。

なんかさぁー、俺のバンドの位置って、スマップの中居君なの？ 北島三郎、島倉千代子、中居正広、中堅女優、売り出し女優。ジャズ史的にはこんな感じになるのだけれど、中居さんの方がずっと俺の上だ。これはバンド構成の例えね。前者二名は例えではない。本当にそうなのだ。しかしだ、変圧器的人間裕センス。なかなかそれはそれで粋じゃない？

今帰宅して着替える前にビール。着替えて、仕事。メールを読み返信。オーダーシート作成。なんでこんな忙しいのだ？ 赤ワインをちびがぶしながらお気に入りブロガーさんたちの記事拝読。段々と晩酌ブログになってきた。裕晩酌、男爵みたいな感じだよな。

さっき、お客さんから「運転手さんってなんでパリに来たんですか？」「はい、元々は現代美術ってのやってました。でもね、西洋世界で日本人美術家が頭角を現すって至難といえはいえるのですが、結局、一旗揚げようとして白旗(このフレーズは何度か書いている)」「あっははははあー」。

と、結局、私は自慢じゃないけれど「人生の負け組」というやつだ。でも、なんでこんなにしゃあーわせ(SHIYAWASE)なのだ？

えっえっえっえっえっ、くどいっ！ いつの間にか、もじもじ「勝ち組のように見える人たち」、彼らの日常は知らん。けれど、勝ち組に勝ってしまっている？ そういう気もするんだけど……。もしかすると、私も私のブログのご愛読者様も、みんなあー、勝ち組なんじゃね。心がね。これ以上の勝ちはないと断言する。

やはり、何度か書いた坂田明アルトサックス大先輩の名言を以下記して夕飯にするぞっ！

勝負とは 勝ち負けでは ない

なんと、南東の方にじゃなくて十二日間に十一日仕事をした。明日から小休止で三日間お休み。うで、またまた繁忙期。嬉しい悲鳴も声が枯れてきた。第一、ピアノちゃんとの蜜月にヒビ。ピア中人間だから手が震えている。脳も寒波。

なんとなく、「ブログの続く人」ってどういう人なのか、仕事の合間にぼーと考えた。結局、ぼーとしているから分らん。じゃ、俺もその範疇に入っている。自分はなんで続いているのか？ これも、ぼーとしているから良く分らん。

私は蝶姉さんとの共通項。「書くことで救われる」「内向的」「自分の現在地の確認」。これがベース音になっている。根暗なんじゃね？ 根本的には暗いのかもしんねえーけど、表見は明るいぞっ！

結局、ぼーとした思考だから良く分らん。

でね、じゃ、なんでピアノを人前で弾くのだ？ 裕センスの根源に抵触する質問。これが微妙に年と共に変わっている。

三十代四十代半ばぐれえーまで、やっぱ、女子にもてたいっ！ 以上。うで、爺ちゃん予備軍の現在。ふむ、まず、自分のため。己を解放するため。悟りのため。女子？ あわよくばもてちゃっても吝かではねえー。でね、ブログもそうだけれど、聴きに來てくれる方々。ミュージシャン仲間＝共演者。愛読して下さる方＝静かな応援。私はお気に入りブロガーさんたちと一方通行的にセッションしていると勝手に解釈して居るのだ。傍迷惑？ ミュージシャンはプレイヤーが会場にいと巻き添えにしちゃおう感が込み上げて来る。まっ、拙いかしらね。

結局、そういう人の間。これが原動力になっている。さすが、爺さん予備群的結論。自己顕示なんてつまんねえーってっ！

そうかぁー、俺は人とのセッションが好きなのだね？ 根明なんだぁーっ！ 草木とのセッション、ワンちゃん猫ちゃんとのセッション。オブジェとのセッション。またまた、良く分からなくなってきた。

世界はジャズで回っていると豪語しちゃう。

昨晩は十時間寝た。ちょっと充電。今日は中華食材店に買い物に行くぞっ！ ワンタン、お好み焼き、天ぷらうどん・・・、この貴重な三日間のお休み。食べたいものを食べ捲り赤ワインを飲み捲りピアノを弾き捲る。来週からの再繁忙期前に体力およびバッテリーを充電せんといかん。

昨夕、帰宅後晩酌しながら記事を書いた。今朝起きて「セッション」って本来の意味なんなの？ 元々は集会とかそんな感じだったみたいだけれど、完全にミュージシャン用語として認知されていることが分かった。「複数のミュージシャンが共演すること」とか出てくる。ジャム・セッションは「面識のないミュージシャンが即興演奏をすること」なんて出てくる。そういう意味では真師匠と同意見で我々は後者はやらない。ジャム、そう食べるジャムと同じ意味だからジャムのようなぐちゃぐちゃな演奏。こっちには興味がない。相手の技量が分かっているメンバー。音楽的コンセンサスがあるメンバー。この状態でないと我々はやらない。やはり、山下(洋輔)さんのフリージャズはプロレスだ理論に賛成である。あうんの呼吸とリズム感スピード・・・、こういうのが絡み合わないと見ている方は詰まらない。コブラツイストだって美しく決まらなないとねえー。掛けられるの待ってまァーすなんちゅう一瞬の間なんか空いたら興ざめ。我々の音楽も同じこと。

結局、「複数の人間でなにかをやるとか作成する」みたいな意味になるのだけれど、たとえば、じゃ、オブジェとのセッションとか一人セッションってのは不可能なの？ となる。私が頻繁に使う一人で二人の会話形式記事とか、これって一人セッション。第一、ピアノ、俺の指さんたち、脳、耳、演奏している俺自身が自分の演奏を聴いている。これも一人セッションという気もする。そうかぁー、脳内に複数の人格が存在している多面体人間は一人で複数の人間になればセッションになるわけだな？ なんだか分からん結論。まあ、そうかも知れんけれどソロ演奏より仲間とのセッションの方が楽しい。演奏前の安中華屋でお食事飲み会。演奏後の打ち上げ。コンサートのために皆揃っているのか、その前後のために揃っているのか？ 山下(洋輔)さんのエッセイにも出て来る。「打ち上げの飲み会のためにコンサートを主催してくれているのではないか？」。確かに若干、そういう疑惑はある。飲み会もセッションだよねえー。

このタイトルで記事を書こうとして、その前にブーツさんの記事を拝読。ヴォルテールの言葉。これぞ、フランスと思いました。私はこの国を愛して止まない、その理由がずばりでした。ブーツさんの記事はコピーペーストできないこと存じてますので私なりの抜粋。「私は君の意見には反対だ。でも、君が自由に意見を言えることを命を掛けても守る」。そう、そういう国です。

フェアリーさんのブログは毎日拝読。沢山の方々が私と同じである。昨日の「阿修羅」についての記事にどきりしました。

毎々、私事で恐縮です。芸術という阿修羅があることに気が付きました。たとえば、私は芸術至上主義者。芸術を正義と置き換えると、私はやはり阿修羅。芸術は、私にとって絶対的なもの。その見地で世界を見ると、当然にして阿修羅の形相になります。そして、貴記事にて、阿修羅の仏教世界での位置を知りました。なんか、ジャズメンにそっくりで感銘感動、そして、反省。

他人への思いやりが、我々、ジャズの阿修羅にあるのか？ 仲間同士にはあります。でも、しばしば、「仲間ではない人々」「仲間認定をしていない方々」へは、阿修羅になってしまいます。私のユニット名を「阿修羅」にしようかと本気で思いました。フェアリーさんの命名ですが、私も知れません。

そもそもの始まりが田舎のお坊ちゃま。その、最初から上から目線が嫌で、現在の私が形成されました。でも、上から目線には絶対にならないぞっ、という意識が既に「上から」なのでしよう。謙虚謙遜という逆上から目線が私の根底にあると思いました。非常に恵まれた環境にあったことが、私がぐれた原因なのです。延々と清貧をしていることも、元々が恵まれていた。そして、最後の受け皿がどこかにあることを知っているから、余裕があるから、意図的に貧乏している。これは確信犯です。

でも、私の中の心の豊かさは、そういった背景なしには形成されなかったと思います。手前味噌ですが、私は非常に豊かな人間だと自負ではなくて、そういう環境にいたしている。阿修羅の記事を拝読して、そう、思いました。

貧乏を楽しんでいるっ！ こんな心境は、そうそうは形成されませんっ！ 実際に貧乏ですけど、なんか、自分で自分が楽しくて嬉しいのです。粹だぜっ、お前っ！ みたいに。馬鹿ですねぇー、本当。

久しぶりに温度計が十℃。零下六度なんていう朝が続いた。その中で毎日毎日ドライバーの仕事。さすがに若干疲れた。

ところで自由という概念の定義はあるようなないような……。人それぞれで構わない。私の場合、単純に本人に不自由感がないことが自由ということなのだと定義している。だから、パリのプータローピアノ弾きがプータローだから自由という公式にはならない。どういう職業でも人生でも本人が満足し不自由を感じないのであれば、それでよし。監獄の中で執筆していたサド。彼が不自由だったのか？ これは私にも分からない。

たとえば、派閥争いとか権力とか女とか、こういうもので自分自身を不自由にしてしまうことも多々ある。欲望の塊は本人がしんどい。だから、すばっとなくしてしまえば不自由感はなくなる。などと書いているが、これが実に難しい。

なんか若い頃、私は不自由から逃亡することが自由だと思っていたふしがある。中年になってそうではないんじゃない？ と思うようになった。

若干、自画自賛風になるけれど、私は幼少期から自分が納得しないこと、理不尽に思うこと、自分のポリシーに合わないことは絶対にしないというスタンス。つまり、それをするに苦痛的不自由感を覚えるのだ。幸い、幼少期から物欲がほとんどないから、これは結構助かった。物欲から金銭欲権力とかどんどん助長して不自由になるサイクルに嵌らずに済んだ。

何度も書いているけれど、私は愚直なぐらい芸術至上主義者である。芸術？ 別に美術とか文学とか、そういうことを指しているのではなくて、一言で言ってしまえば詩を理解できるのか？ それだけ。

今年で五十八歳。なんか、私が思い描いていた自由感の中に、わっ、すでにいるんじゃない？ と思ったりもする。だって、不自由感がどこにもないのだ。たとえば、世間のしがらみ。若い頃は暴力的に無視するか逃亡とか考えた。でも、今じゃ、「はいはいはいっ！ 了解っ！ やりやしょおー、そう、おっしゃるなら」。実に物分かりがいい。理不尽感がなくなっちゃったんかいな？ 人間とか世間なんて元々が理不尽の堆積。それならそれでいいじゃん。ちゅう、感じ。でも、ピアノから引き剥がしなんていう圧力が掛かると……。裕センセは途端にターミネーター、ジェームズ・ボンド、バットマンとかに変身するから要注意。子供みてえーだわな。

明日から、またまた、忙しい。更新はできない。でね、「阿修羅」という記事を書こうとしていた。本当にジャズメンに似ている気がしてしょうがない。でも、彼は酒を飲まんらしい。これだけで、執筆意欲がゼロになった。いい加減である。でも、彼の生き様はジャズメンそのもの。漢字の雰囲気、音もとても素敵である。フェアリーさんの記事のご教示。「ジャズ阿修羅」という小説まで書きたくなった。これは、相当気合を入れないと書けない。少し考える。私は仏像が大好き。阿修羅像。すぐに興福寺の国宝である三面六本腕のイケメン象が脳裏に浮かんだ。あのお顔、好きだ。腕六本。これはピアニストだ。この辺でいい加減な記事は止めていい加減な記事を書くことにする。

「あっという間に五十年が過ぎちゃう」から、三日の休みなんぞ、あっ、さえ言ってない。

春巻き、お好み焼きを作り、超美味かったっ！ これから五目焼きそばもどきを作る。と、三日間のメニューコントロールは完璧。でね、パリから北西に三十五キロの小さい町で「俺は日本食しか食わん」というクワン君がいたとする。もちろん、可能である。週一でパリの日本人街に行く。ついでに「恵比寿」の海鮮ラーメンを食べて帰るとか、「野田岩」でうな井なんてこともできる。お金と時間があれば。私は時間はあるけれど、お金がないから土台無理。

となると、近所の中華食材店という移民集団フランス現代社会の恩恵。これで、「日本食もどき」を作る。バン・ゴッホもモネも、浮世絵のコピーしてたんだから、俺が逆をやるのは自然でしょ？ 良くも悪くもグローバルゼーションは、ずっと昔から・・・、あ
りゃ、江戸自体じゃなくてエジプトの最盛期ぐらいから始まってんだよっ！ お若いの。

わっ、阿修羅の寿命は五千年ってインターネット上は出てきた。ごめんなあー、そう、俺もそれぐらいは生きてきたと思うけれど、忘れちったあーっ！

ドライバーの仕事が忙しいのに、結構、ブログを更新している。無内容？ とはいえ更新はしている。しかも、下書き保存記事も多々ある。「エトルタ診療所5」なんて随分前から保存状態。

さっき、帰宅。部屋着に着替える。明日の「自己愛弁当」のために米をとぎ日本製の炊飯器セット。ビール。お気に入りブロガーさんの記事拝読。赤ワイン。

私は晩酌をしないと夕飯に辿り着かない。夕飯はカミサンが作ってくれている。温めるだけだ。とにかく、ビール小瓶一本と赤ワインをちびちびやりながら、メールチェック、今日の仕事の内容の確認レポート帳簿付け、ブログ拝読。で、拝読しているうちに書きたくなる。

なんかねえー、労働の後の晩酌。いいんだなあー、こういう時間が。まあ、嬉しいといえば酒。悲しいといえば酒。第一、コンサートを素面でやったのは二回ぐらいしかない。ジャズメンのベストコンディションというのがある。ほろ酔いのちょっと上ぐらいが丁度いい。そうかあー、私のブログ記事、ほろ酔い系と午前中に書く素面系に分かれるということになる。おっ、どれが前者でどれが後者か読者様方に分かるかしら？

一か月ぐらい寒波が続いた。三日前ぐらいから緩んできた。午前七時半。駅に向かう。とても古い手入れの行き届いた市民公園を横切る。芝生、諸々の樹木が春の芽吹きに向けて声高にお話しをしているのが聴こえた。「ねえねえ、どんな感じに咲く？ 今年は」
なぁーんていう声が聴こえる。「えっ、俺？ ばっちし行くぜっ！」なぁーんていう声。「あたしは小振りで綺麗にお淑やかかなぁー」なぁーんて……。土が湿っている。樹木の根っこが、私みたいに「あっ、ビール、うめえー」。こんな感じ。この春に向かって上昇していく感じはとてもいい。そう、むくっと「冬眠から目覚め始める感じ」。寒波の中の激務が、高々三日前なのに懐かしいのだ。

「しかし、運転手さん、こんなでかいベントをパリで良く運転できますね。しかも、客乗せてだからストレス溜まるでしょう？」

「えっ？ ストレス？ 全然ありません。昔、会社員してたんですけど、一日が終わらない。あのストレス、嫌でした。運転手、お客様を目的の場所へ時間通りお連れして、ガレージに帰り車の掃除。本当にその日暮らしです」

「でも、こんな荒っぽくて道の狭いパリでとんでもない高価な車。道はすべて放射状。こんなことは私にはできないですよ」

「あー、コツはあります。そうですね、笑顔で強引って感じです。個人主義が車の運転にそのまま出てますから、笑顔で来るなら来いっ、この野郎みたいな感じで運転するとスムーズです」

夕方、カミサンからSNSメッセージ。「ビールが切れています。買い物に行く時間なし。ソーリー」「オーケー、ノープロブレム」。

駅に着くのは午後九時半ぐらいになることは分かっていた。駅前の小さなスーパーは九時まで。そんなに寒くないし、ノートルダム教会の方までお散歩がてら行けば深夜まで開いている小さなスーパーが三つある。丘の上の大聖堂とは一味違うノートルダム教会。ライトアップされていて実に美しい。一番手前のスーパー、経営者の夫婦が店頭で夫婦喧嘩。「馬鹿っ、お前、バケツバケツ。水抜きしてからじゃないと片付けでけんだ

ろっ！」。オレンジジュースの搾り機の話。「すんませんっ、閉店？」「あっ、ムッシュー、どうぞどうぞ」。缶ビールを購入。それからゆっくり坂を上る。私の家は丘の上にあるのだ。

しかし、仕事をする時に着るコート。少し光る素材の黒いコート。高級品ではない。C&Aの製品。これは珍しく超気に入って、私のサイズを探すのにチェーン店を何件も回った。娘にまで店舗調査してもらった挙句、リボリ通りでやっと見付けた。普通ならMでいいのだけれど、なぜかM

がLサイズ並み。Sを探すしかない。フランス人の男性陣もたぶん同じ状況だったと思う。どこに行ってもSがない。衣類をこんなに探すことは、私には稀だけれど、その材質とデザインがいたく気に入った。あっはははあー、私が衣類に無頓着？ 真逆なのだ。私は気に入ったものしか絶対に着ない。高価なものは気に入らないから着ない。俺が先。服は後。

あっ、蝶姉さん、やっ、やばいっ！ もう一度書いちまうっ！ ブランドは俺だ。いや、俺もあなたもブランドなのだ。だから、デザイナーの名前の入ったものは絶対に着ないっ！ 自分で作るからほっといてっ、となる。

裕イサオ「シンセサイザーソロ再生リスト」を聴きながら書き始める。この自給自足は凄いっ！ 読み物も自分で書いた小説。家の壁に掛けてあるものはカミサンの作品。私の作品は大き過ぎて掛けられない。

そう、1月18日。ベルリンからトランペッターのポール・シュビンゲンシュローグルがパリに来ていた。私がコンサートをアレンジ。結局、沖師匠とポール。真師匠とオリビア。ツインペットのコンサート。つまり、ピアノなしになった。とはいえ、事前にこの日は超難しいぜっ、よっ、仲間たちっ！ と言っていたから「それで」済んだ。それを書きたいのではない。

その「変な味」を覚えた。コンサートのギャラとドライバーのそれを天秤に掛ける。墮落の始まりが始まった。その日のドライバーとしての私の稼ぎは食事代を入れると30,000円近い。もし、ライブハウスにいたら3,000円だった。飲み食いして女の子におごってチャラ。

社長に、毎々のように「その月の不可日」を事前に送る。メールの最後に墮落の始まり・・・。

「仕事内容によっては、コンサートの方を私抜きにて再興致しますのでご遠慮なくおっしゃって下さい」

社長から電話が来た。

「裕さん、そういう問題じゃないでしょっ！ あなたはピアノだっ！ こっちで、なんとかするから・・・」

そう、30,000円に媚びた俺の顔は確実に「負け犬顔」。

そう、負けててもいいのだ。なんのなんの掛かってこいっていう気概があれば。本当の負けは上に書いた。折れた心。

自分をぶん殴る。実際にやると難しいぞっ、これ。例えね。

今朝起きて昨日の記事をコーヒーを飲みながら読み返してみた。30,000円？　なんかパリ在住の方がこの記事を読まれて、「えっえっえっ、リムジンドライバーってそんな高給取りなの？　じゃ、俺も・・・」なぁーんていう誤解を受けるので、ちゃんと計算してみた。とはいえ、ドライバーの給料計算は超難しい。時間帯、走った距離によって変わってくるので、私にもよく分からない。どんぶりで再計算してみた。

1月18日の私の通勤時間を除いた実労時間09h30---00h40=15h10。どんぶりでこれに10eurosを掛けてみると151eurosx120円=18120円。昼食と夕食代4416円。しめて、22,536円。これに深夜料金が加算されるはずだから、たぶん、25,000円ぐらいなのだろう。ここに謹んで訂正致します。なぁーんてどうでもいいのだけれど、文章の流れの中で、やはり、30,000円と3,000円の方がなんか美しいからそのままにする。

で、こういう仕事は毎日はない。仮にあったとすれば3日で入院している。たまたまドライバーのマックスの稼ぎ日がコンサート日に重なった。そういうことなのだけれど、考えてみればいかにミュージシャンが儲からないかということにもなる。ライブハウスでのギャラは入場料を皆で割るからこのようになる。じゃ、ソロピアノでやりゃー、当然にして儲かる。でも、つまらん。とはいえ、企画もののギャラは話が違う。桁が変わる。有名どころになると二桁ぐらい違うはずだ。とはいえ、うな、毎日、そんな仕事はミュージシャンだってドライバーと同じでないのだ。

なんか、急に金勘定記事になっちゃったけれど、うちの社長は偉い人だ。「私はピアノだ」なぁーんて言っている野郎に「ばぁーたれっ！　マネーの問題なのかよっ、おめえーのピアノはよっ！」なんて、言ってくれる。

音楽を定義しようとする、好みという普通のレベルが出て来るから、なんだか分からなくなる。下に、俺のリールのユニットの動画を添付する。左はエリック・ミモザ。リール大学エレクトロニクス研究所の所長。真ん中、ジャン・リュック。高校の地理の先生で詩人、小説家。

マルセル・デュシャンの「オブジェの概念」は、その定義しようというベクトルをへし折った。「定義してみろっ」と。結局、だれもできないことを思い知った。定義という概念が時代と共にカメレオン。そんなものは媚び諂いの歴史である。

エリック・ミモザ。超脳高速人間。音楽教育ゼロ。ドレミという音階、概念すらないのだ。だから、凄い。沖師匠が、ここ近々で涙した唯一のミュージシャンである。もう、その集中力は天才である。

右側になんかタモリさんみたいな日本人親父。彼はピアノ弾きでトランペッターではない。どうして？ So I rebarが吹っ飛んでしまうから・・・。おっ、コノ頃はコロコロできたのだね。この親父はやったこともない楽器を自己流自己中でなんとなくなくなってしまう。

ジャン・リュックは俺より酷い鬱野郎だから、さっき、いきなり、なにも書かずにこのビデオをメールした。友情だぜって。

と、仰々しいタイトル。で、どうしてなのか？ 楽しくないことを列記して立証という感じで始めたわけね。ところで、いつもわたくし事で恐縮です。私は根暗ペシミストシニック系である。当然にして人生が楽しいわけがない。第一、さっき、煙草の箱を見て腹を立てた。いつの間にか、こちらではすべての煙草の箱が黒。入院、肺がん、看取る家族、真っ黒の肺、気持ち悪い目、こういう写真となんだかんだと煙草の害。正直、人口過多の地球。煙草の害で俺みたいに早死にするであろう野郎が早死にしねえーと地球が滅びる。愛煙家に大きなお世話であるっ！ 他人に迷惑とか受動喫煙、これはいかん。マナーはある。でも、俺本人まで不愉快にしてどうするのってのっ！ 気持ちよく吸わせ

ろっ！ たとえば、八十の俺がジャズクラブの前で煙草を旨そうに吸っている。そこに白衣着た野郎が裕センセ、寿命が縮みますよっ！ 大きなお世話。あのね、体に悪いのは「煙草だけじゃないよ」論理。いいとはいわんけれどね。で、だぁーら、俺は会社を辞めたってなんども言ってるってのっ！ 煙草害狂信は止めてくれって。煙草以前に北京には俺は行きたくない。肺がんになる気がする。自分で吸っている煙草以外で死にたくない。とにかく受動死は嫌だ。

あら、そういう話ではなくて、楽しくないことを以下列記してみる。

わっ、ない。

楽しいことを列記してみる。

スーパーの買い出し トイレ掃除 風呂掃除 庭の落ち葉かき 畑の耕し 大工仕事 カミサンとブラブラ ペラペラ たまに激論 入れ歯の手入れ う〇ちの後浴槽で自前ウォッシュレット 酒煙草 コンサートの手配 ピアノの練習 コンサート ブログ拝読 ブログ書き 第一、ドライバー業が楽しい 料理 大好き 今からね、どうでもいいのは知っている 日本本国にお住まいの方にはね 大枚はないからタイ米をね 象印の炊飯器で炊いているわけこれに燻製のサバ キャベツと卵の味噌汁 豆腐 玉ねぎと生姜 第一、貧乏が楽しい 煙草銭の捻出という毎日の作業が楽しい 酒代の捻出も毎々のことである 貧乏だと楽しいぞっ ぱっぱとものが買えないから、買った時の喜びが桁違いになる 煙草一箱 6.50euros シビヤだ だったら止めれば？ あれ？

アンバランスというバランス感覚も当然にしてあるはずだ。でね、いつもいつもわたくし事で申し訳ない。ちゅうても、私という人間は人間の一人だから、この分析をすることは人間論に昇華する。キャ！

昨日の記事を読み返して・・・

元自閉症ペシミストシニックスディストメガロマニア自己顕示欲の塊芸術家しかも芸術至上主義
無宗教無政治慢性鬱

と、裕センスの使用説明書はびどい。ドイヒーっ！

しかし、日常の彼は・・・

明るい冗談大好き良く笑う料理狂スーパーの買い出しが楽しくてしょうがない元自閉症の片鱗さえない物事を深く考えない好々爺自分へだけサディストメガロはガメラ自己顕示めどうだ芸術至上主義これはそうだ無宗教でも樹木に良く祈る空海石アニミズムである無政治でも諸々の人々を束ねてきた上司として慢性鬱あまりに鬱で明るくなっちゃったあー

私の気持ちは体重と一緒にいつも安定している。滅多に怒らない。たとえば、カミサンが「あした、何時に家出るの？」、これに八回笑顔で答えている。「何時に帰るの？」、これにも五回笑顔。九回目には「あなた」「はい、12h30---22h00です」とほんの少しむかっとしながら質問の前に答えている。どうだっ！ 大企業の元営業統括を舐めんなよってっ！ 気配りと先取り、これも楽しい。

あのね、ドライバーの仕事、営業の仕事、バーチャルじゃない生ゲームだよ、俺には。ゲームだから楽しい。寿限無のJeuxGame。複雑な駄洒落だねえー、ブーツさんにしか分かんねえー。エスイーエックスと同じだぜってっ！ でも、これに関しては俺はバーチャルというか脳内エロティシズムだよ、チャンジエのエレガンス。これもブーツさんにしか分かんねえー。

なんかねえー、パリに我々のお客様方が戻っていらしたのかしら？ 忙しいどおー、ドライバー業。猿回しの螺子回し。でも、晩酌しながら更新する。だから、内容なんてないよおー。月火水木。ドライバードライバー。金曜日、沖師匠真師匠ケンタローさんとのコンサートだ。この広いような狭いような広いようなパリで日本人ジャズメン四人。すごぐね？ しかも、両師匠。俺はチンピラだけれど、このメンバー、ちと、怖えー。プラスマイナスドライバーで脳の外れ掛けたネジをぐるぐるされた後だ。だいじょうぶかよおーって。

ブーツさん、毎々、勝手にご登場。ご容赦を。高尚考証ブログへ、わたくしの哄笑馬鹿ブログがセッション。そんなセッションなあー。とうじょ、とうじょ、お好きに。ようしゃっ。ちと、無理のある駄洒落でした。やはり、十八番。パリにブーツさんの銅像を建てましょう。どうぞう。

しかし、久保の兄貴のショートショート。痺れる。すっ凄い。この発想筆力。とても横丁のご隠居とは思えない。もしかしたら、だけれどおー、もしかしたらだけれどおー、すいません、コピーライトの問題ある？ ねえーよ、俺のブログに。兄貴も、まっ、まさかあー、ハイランダー？ はいはい、なんだなんだあー？ ハイランダー。

閉めにサマーズ風英語教室。「シーユートゥモロー」の覚え方。「シュートもろ」痛い痛い。だって。ゲラゲラ笑った。

はい、ちと、休筆かしら？ なに、静かでいい？ なぜか急に添水の音。

スー眠不足で頭がムーミン。四時間スー眠は辛い辛い。今朝、午前三時半に起床。午前十時半に帰宅してドライバーの繁忙期が終わった。中一日ぐれえーでコンサートと行きたかった。けど、明日だ。逆噴射赤ワインがぶがぶブログる。繁忙期中にコンサートの企画、宣伝・・・、良くやるよチャンジー(ジーちゃん)が。即興演奏家の巢窟。以前住んでいたリアルで真師匠、エリック・ミモザとのトリオ出演が三月に決まった。何度か出たでかい会場。裕センセはリアル音楽シーンではそこそそ有名。ピアノ弾きとしてもあるけれど、ライブハウス兼画廊をやっていた。ド赤字で一年で潰れた。で、そのパトロンとして名が知られているのである。そのでかい会場はリアル市のものなのだけれど、三つのアソシエーションが、悪く言うと牛耳っていて簡単に出演できない。そのメンバーの長老格じゃないと出れないという諸々の不満。むっふふふふうー、いいぜ、俺がライブハウス作っち舞う(誤字じゃないぞ)。なんか、そういう馬鹿な気概が不満を抱くミュージツシャンのかっちょえー男になったから有名なわけ。

なんか三十九の時、会社を一度止めた。半年で貯金ゼロでぜいぜい言っていたら、会社本体からお誘い。リヨンで銀色マニキュア。真っ赤なレーシングシューズ、サングラスでコンサートばかりやっていた。沖師匠との出合いの布石になった。で、結局、六か月の脱獄囚みたいに再(刑)務所。四十八の時にリアルに転居。パリまで新幹線通勤ライブハウス兼画廊。良く過労死しねえーもんだと思った。過労死する前にパリ郊外の自宅に避難。

年代の変わり目に無謀なことをする。なんかねえー、お自慢じゃないよ、しみじみ、俺ってよぉー、げいずつかなのげえー？ 福島弁です。と、毎々、思う。とにかく、会社員という印が嫌なのだ。宦官みてえーで、男じゃねえーと鈴蘭高校(クローズゼロ)みたいに暴力が込み上げて来る。チャンジーバーカである。良くカミサン逃げねえーなぁーとしばしば思う。まっ、俺といると波乱万丈、ギャンブルはらはらみてえーで楽しいのかしら？ カミサンの方が俺よりずっとげいずつかだから、たぶん、一枚上ちゅうことだな。えっ、一枚どころなの？ 母性の宇宙みてえーなコスミックワールドの住人。俺みてえーな、多少、お勉強ができましたぁー系げいずつかなんか飲み込んでしまう人だな。まっ、村上龍さんの「男は使い捨て」。はい、その通りでえーす。戦闘戦闘ばかりやっている馬鹿。

おっ、なんだよぁーっ！ 水くせえーなぁーっ！ 言ってクレヨン(Copyright Ko MACHIDA)。俺、四位なんかよ。ブーツさんの次なんだぁー。ローラの口調ね。高尚の次に可笑。いい感じいぁーっ。ローラ。そう、ブーツさん「阿保将棋」こそ、フリージャズと申し上げます。ハイヒールも大好きです。ハイ。シークレットブーツ。ピンボくせえー。男は背丈は関係ないっ！ ピアノが弾ければ。ありゃ？

日本ブログ村エッセイ随筆部門の参加者数710ですって。なんか、皆さんにブログを書く理由と、どうして、この部門なのか聞いてみたい。私のお気に入りブロガーさんたちの順位も見てみた。ランキングに参加していない久保師匠、蝶肆さん。参加していないのに上位。つまり、酸化していないということだよな。あんま行進しないCoco君だって、あたしがせっせっとクリックしてっから上位。あっ、ごめんなさいっ、違う、俺も含めたCoco君ファンでした。毒腺だね、こういうフレーズ。お詫びに「書けよっ!」。あっ、ごめんなさい。ヘンリ・ミラーになってる。

そう、ずんい(ふくすまべん)なんてよ、どうでもいいべっ、ちゅうごどをいうけれど、うでも、ずいんがうええのほうが、上のえぎに近いべっ、読むとがふえるべ、おれはいい、うでも、きにいっですとのブログはよまれてえーべっ、俺のブログじゃなくて、フェアリーさんがいってるべ、すとのきもちになってみんべえーって、俺だってブロガーだから、おぎにいりのすとのやつは、読んでほすう。

飲み過ぎちゃったぁーっ！ なぁーんて。今から料理料理っ！ あっ、わたすのカミサンにげねーのはおれがよ料理すきだからでねえーから？ そうなんだぁー、イサオってえらぁぁーっ！ いや、ローラ、結婚する？

きもぉー-----

ーいっ！

禁則文字のチェック。めどうだから、そのまんまのさんまさん哄笑のまんまの自然体ですたい。

兄貴っ、ショートショート、ショートでいいから書いてっ！ 頭がショートしない前に・・・・。

シーユートゥモロー マリリン朦朧 シュートもろ 男モロー 諸々がモンロー おっ、明日はコンサートだよ マタマタのタマタマの休筆ジャネットジャクソン これ作詞のつもりなんだ。

昨晩は九時間寝た。なんか仕事と仕事の合間に仮眠していたという感じが続いていたので、おっ、これぞっ、睡眠。とはいえ、高年親父の疲れは一晩では抜けない。でも、今晚はコンサート。お酒様のお力添えスーパーマン化するのだ。で、明日の予定は、すでに決まっている。二日酔い日。

昨夕、赤ワインをがぶがぶ飲みながら記事を書いた。年代の節目に無謀なことをすると書いてある。ということは、私は間もなく五十八。そろそろ無謀期間へ突入するはずだ。といたいものだけど、三十代から四十代。そして五十代へ。なんか体力と気力が持った。しかし、しくしくしく・・・、五十代から六十代。体力も気力も金力も権力も筋肉もない。つまり、わたくしは「もう、終わった」のだ。無謀なことはでけん体。いいのだよねえー、それで。水平低空飛行して、そのまんま消滅するのみ。じえんじえん悲しくない。むしろ、おっ、還暦還暦、過去の人。喜びさえ感じる。若い頃に戻りたい願望ゼロ人間の面目躍如である。若い頃、もし、自滅していなければ、はよおー、爺さんになりたいと思っていたから丁度いい塩梅になったということ。

なんとなく気が付いた。最近の記事。若干、私の第一ブログ「筆トーク」文体になっている感じがする。体調と心のバランスが良いということなんだろうねえー。生き生きピョンピョン文体。どうだっ、これぞっ、終活っ！ という明るさに満ちてね？

おトイレ掃除してルンルンしてんだから幸せなおっさんだ。予約投稿完了。



わっ、でけえー。いいよな、景気良くて。このポスターは真師匠の奥さんアンテナさんが作って下さった。メルシーボクウー。この記事が投稿される頃。真師匠のドラムセットのセッティング中。それから別嬪三人のいる中華屋で両師匠とお食事。安くて美味しい中華惣菜店ベストスリーのひとつ。別嬪三人を見ているだけでも食事が美味しくなるし、安ワインのコートドロージュが実にうまい。そして、信じられないくらい安い。スーパーで買うのとほとんど同じ値段。毎々、勘定書見て「あらら、姉さん、ワイン二本忘れてんじゃね？」って聞いてしまう。

ここ数日、またまた寒波。昨日も寒い寒い。コンサートはその夜の一部分だったから、午後九時過ぎにはバーで打ち上げ。皆、二次会へ。私は一か月半のドライバー業で疲れが溜まっている。アウト。一人だけ先に帰宅することにする。

私のホームクラブの一つバビロ。火曜日も閉店、つまり、火曜日のインプロビゼーションの日がなくなってしまった。それ以降、コンタクトを遠慮していた。パトロンのシッファルが「あれれ、イサオはどうしちゃったの？ もう、うちに出てくれないの？」、会いたがっていると風の便り。「えっ、火曜日閉店だから出演日なくなっちゃったんじゃないの？」と若干のすれ違いがあった。昨日、久しぶりに裕センセ登場。シッファル、弟のイケン、経営者のお父さん、皆、超嬉しそうな顔で迎えてくれた。「なんだよぉー、もう、出てくれないのかと心配してたよぉー」だって。「レレレレレ？」。

両師匠とは何度も何度も共演させて頂いている。ベースのケンタローさんとは初めて。例によってなんの打ち合わせもしない。コンサート開始。普段は演奏中に話し掛けたりしない。でも、ベースの音量が強過ぎて自分のピアノが聴こえない。ケンタローさんに小声で、「ケンタローさん、ごめん、少し下げてくれない」。言った後に、わっ、ボリュームって言わなかったよな。演奏自体を遠慮してくれと理解されたら、やっ、やばいなぁーと心配になった。曲の切れ目で早口、「ごめんねえー、ボリュームのことね」。

あっははは、彼もプロだ。じえんじえん気にしていない。四人で炸裂した。でね、ここ近々のコンサートで私は気が付いていた。炸裂しつつハイになりつつ、どこかとんでもなく冷静な自分。この不思議な余裕。明らかにピアノの技量がアップしているからこうなっているはずなのだ。両師匠にも褒められた。沖師匠「イサオ、良かったよ」。真師匠「伊沙子ちゃん、最後のソロんところ、途中でおチャラけるのかと思っていたらばしいーと決めたわね」。私は「はい、少し大人になりました。やっとな毛が生えた」。皆でゲラゲラ。

こういう師匠連、仲間が俺にはいる。なんか少しジーンとしながら寒波の中一人家路についた。

沖師匠「どう、イサオ、ドライバー」「忙しかったすよ。馬鹿でかベンツの中でマイルス聴きながら、サバの缶詰弁当なんか裏道で食べてんすよ、スーツ着て」「いかしてんなぁー、ジャズしてんなぁー、それ」。

いやぁー、昨晚は夕食後、実家(我々の家)に帰って来ている息子のご推薦「テラスハウス」という日本の番組をPCで一緒に見た。実におもしろい。午後十時に睡魔せん。起きたのが午前九時。よっぽど疲れが溜まっていたのだろう。すっきりした。

ところで、この「テラスハウス」。息子に「あのリアリティーテレビちゅうやつ？ パパ、興味ないんだけどそういうの」。きっぱりと全然違うという。「〇〇〇(娘)、東京に行きたがっているから出演を進めてんだよ。ハーフで日本語しゃべるから丁度いいと思って。滞在費浮くしね」「おいっ、リアリティーテレビってあれじゃん筋肉むくむく男と、シリコン娘ばっかじゃん。うちの理科系娘なんか場違いだよ」「だからそういうのじゃないわけ。見れば分かる」。で、見た。結構夢中になって見た。まあ、娘の出演はともかく。

起き抜けに「自己顕示欲」の正確な意味を知りたくなった。グーグル検索。結果、良く分からない。「自分の存在をアピールする」とか、「承認欲と表裏一体」とか。これはだれにでもあると書いてある。そりゃそうだろう。でも、とりわけ「それ」が強い人がいるとも書いてある。むむ、ジャズのピアノ弾きなんて強そうな感じ。ブロガーなんかも一瞬「そう」なんかな？ とも思うけれど・・・。

若い時分、私は現代美術家という肩書だった。いずれ美術史を変革する天才だと思っていた。サラリーマンを馬鹿にしていた。結局、二十四年間自分でやる羽目になった。芸術家だと自分で思っていたし、「そう」ではない人、方々を「一般人」と上から目線だった。これって自己顕示欲過多でメガロマニアという病気なんじゃないの？ ちょっと、自己顕示欲とは違う感じがする。

間もなく五十八になる現在。自己顕示欲はないとも言える。自分の存在のアピール。どうでもよくなっている。じゃ、なんでピアノ、ブログ？ やはり、なんか自分の中身の整理という感じが強い。上手く言えない。なんかねえー、私のこういう心境を分かってくれるであろう人々は確実にいるという推測の元に、つまり、勝手に私が仲間であろうと思う、未知の人々も含めて、そこへ向けて、「どうもおー、俺だよおーん」と私信を送っている感じ。上から目線なんぞ跡形もない。下からもない。仲間は対等。対等に寂しいし鬱だし対等に明るいし・・・。デュシャン大師匠の言葉。「多くの人々の一人であることを忘れてはいけません」。そして、大自然宇宙時間の微細な星屑の一つと悟りを開いた方々が口を揃えておっしゃっている。

あっははははぁー、刹那？ 俺はじえんじえん感じないわけ。そう思うと嬉しくなる。気が駭駭。そっ、だからこそピアノを弾き捲る。「星屑のワルツ」だ。あっははは

はあー、人生でお悩みの方々、裕センスに相談してみ。ロクな回答こないから……。以下、試してみよう。

「彼女に告白できないのですが？」「はい、好きな楽器を選び習得に励みましょう。あんま地味じゃない方がいいね。カスタネット等は避けた方が無難でしょう」

「僕は性欲過多なんでしょうか、病気なんでしょうか？」「はい、自主トレでメニューを消化消火昇華して下さい。傍迷惑です」

「やりたいことが見付からないのです」「うなもんなくても生きて行けます」

「僕は一角の人物です」「他者から見てもそのように見えるのなら本物でしょう」

「僕は頭がいい」「頭の格好のことですか？ それ以外は、あんま、社会で役に立たんことの方が多いです。とりわけ、その自負心の方が弊害になることが多いと頭のいい人はそういう結論に達するはず」

「裕センス、僕はジャズピアニストになりたいのですっ！」「お薦め致しません(大門未知子の口調で)」

さっきまで息子がいて、昨晚はカレーを作り、今日の昼食はハンバーグ。息子の好物。ここに「パパの」カレー、ハンバーグ、スパゲッティーボロネーズ、トンカツ、ソース焼きそば、チキンカツ、握り寿司、うどん・・・と、私は簡単クッキングのプロと申し上げる。冷蔵庫になにもなくても、シーチキンチャーハンとコーンスープなんぞをすぐ作る。好きなのだ、料理。でも、プロの料理人には絶対になれない。技量がなさ過ぎ。料理道を突き詰めると、楽しい趣味なんぞでは無理だ。それは、ピアノ弾きと同じ。趣味ではない。むしろ、苦しいし息苦しいから楽しいといのかマゾ楽しいという感じだな。道を究める。しんどいぞぉーっ！

ところで、私がいつも驚くこと。日本を出た、おん出されたのは既に三十六年前である。当然、俺が高年になるころ「残業のないフランスのような日本」になっちょるだろうと推測していた。真逆。私が憂愁(誤字じゃないけん)な高校にいたころ、四十年前だ。「不況に左右されない仕事、つまり、医者ブーム」だった。憂愁な伝説の学年だったらしく、百人近い医療従事者が生まれた。今でも、四十年の時空を超えて、「まだ、ブーム」。疑問符だねえー。

ところで、不況に左右されない仕事の代表は娼婦男娼坊主・・・。こういう感じになる。医者もそうだろう。人間が滅亡しない限り、医者と弁護士はいる。俺の回りは医者ばかりだ。一步間違えると、俺自身が白衣を着ていた。

しかしだ、優秀な人間が医者？ 医者の息子だから、ばつつす、書く。人間の修理工。俺は自動車の修理工には敬意を表するけれど、どうしてもいい生物の修理なんぞ嫌々。早死にする人はした方が地球のためになる。優秀な人間は、親父が言った通りである。数学者、哲学者、芸術家、以上、三つと。

第一、お笑いがなさ過ぎる。わっ、間違っって心臓取っちゃったあー。盲腸だったよねえー、げらげら、盲点だねえー。こういう馬鹿ができんから詰まらない。ちょっとX字に切ってみただ、俺。こういう遊びがでけん。それとね、一日中、生死。富岡生死工場。一日中、宇満子見てたら、性欲の対象にならん。糞尿生死肛門、じえんじえんHする気にはならんはずなのに、医者は逆噴射する。ストレス溜まり過ぎだね、あんたら。

そう、頭が超絶優秀なのに医者なんちゅう生物修理工になるから歪む。ごめんなあー、自動車の修理工の方々、逆説逆説ね、俺、あんたらの方を尊敬している。マジで。

脳高速の子供たちは、医者にならん方が絶対にいい。哲学しろよっ！

うちの親父は正しい。「医者なんて、二流脳で十分」と、超学歴テレビ人間がそうおっしゃっ

とる。しかし、医者って可哀そうだぜっ、自分で自分の診断できるから余命まで分かる。これって、やっぱ、辛いよねえー。尊敬します。そういうところは。だからね哲学した方がいいんだよって、子供たちはね。

お気に入りブロガーさんのバナーをクリックした。別の部門のランキングが出てきた。改めてその閲覧数、インポイントの数字を見た。私のブログより桁が二つか三つ違う。私は「読まれないブログの書き方」を自然と得とくしているのかしら？ 閲覧数を十前後に抑えたいという凄い野望をお持ちの方は裕センセのブログをお手本とされると自然にそうなる。どうしてこういうことになっているのかの分析はめどうだからしない。我が道を行くちゅう感じだねえー。部門を変えることも一時期検討したけれど、ジャズとエッセイ以外どう考えても浮かんでこない。で、ジャズにすると考えてみるとジャズのことはあまり出てこないのだ私のブログの中に。そうなりと一番グローバル解釈ができるエッセイになってしまう。

でも、ブログがあまりに閲覧されるとなんか怖い。炎上なんて恐ろしい。と、単なる想像だけれど、なんか、やはり、怖い。

突然、プロとアマの違いについて考える。社会的な尺度はずばり「その行為でお金を頂いている人」がプロということになっている。芸術方面はそう単純ではない。以前にも書いたけれど、バン・ゴッホもマルセル・デュシャンもプロではなかったことになってしまう。でも、今回はそれには触れない。私の日々の営為の中でお金が絡むものは二つ。ピアノとリムジーンドライバー。一流なのかはともかくプロということになる。まあ、三流でもプロということにはなるわなあー。それ以外は、雑事とか趣味。ブログはずばり趣味だ。でも、プロブロガーという人々がいる。これはこれで面白い。私には無理だけれど。

でも、私は例えばライブハウスでのコンサートの動員数を二十以内にしようとか、ブログの閲覧数を十に抑えるなんていうことでやっているわけではない。結果、そうになっている。でも、あんま零細状態をキープするのも広がりがなくなっちゃうからいいことともいえない。じゃ、もっと動員、閲覧の方を検討してみると・・・。音楽についてだけ。ジャズのスタンダードの演奏に特化する。若受けするジャズロックにする。売れっ子と組む。諸々の選択肢はあるのだろう。でも、そのコケットリーがコケコッコになっちゃって裕センセではなくなってしまう。これはやばい。レゾンデートルが消滅してしまう。となると我が道を行くしかない。

仲間たちともよく話すけれど、受けとか売れ筋のマーケティングをしてヒット。これはいかんしサラリーマンをやりたくない、できないという社会の落ち零れであるミュージシャンがそれをやると本末転倒。会社に行けばあーか。という論理になる。でね、自分のやりたい信じる音を出す。それが結果売れる。それならエブリシングオーライ。でも、現実には売れない。でも、やる。

と、ポジティブシンキングに変える。私のブログは、なっなんと、世界中に十名もの読者様

を持っている。謹んでお辞儀です。私のピアノはライブハウスに二十名もの方々を動員する。謹んでお辞儀です。リムジーンドライバー。最近のご指名が多い。謹んでお辞儀です。

独り言。そうだなあー、明日から、ブログ記事タイトルを分かり易いものに変えて、「今後の日本経済の展望」「ブログで月収二十五万円(仮想小説とは書かない)」「おいしいワンタンを作る」、こんな感じにして、そうそう、ブログの総タイトルをまず変えないといけない。「お花の都おパリで活躍する売れっ子ジャズピアニストのお洒落なパリ日記。読んでね[emoji:i-175]」。ハンドルネームを変える。「僕はハンドル」。リムジーンドライバーだもんな。

皆さん、今日は∠(^o^_) ㄣ ヨォ…。今日は、近所の中華食材店でワンタンの皮を購入[emoji:i-1]しましたあー。まず、豚の挽肉を・・・(´・Д・)」。わっ、フランスじゃ売ってねえーんだよっ！豚の挽肉。記事が続かねえー。

日本風呂具村に五十代の生き方という範疇があることは儂も知っている。しかし、儂の様な者にその世代の生き方指南なんぞ到底無理である。闇雲に疾走していたら間もなく五十八歳という高年になっていた。失踪的疾走の失禁と申し上げるだけである。して、その範疇に属することも考えてはみた。しかし、やはり儂の様な者が指南なんぞ至難の業である。そのような結論に至った次第である。しかし、五十代の生き方という範疇に属してみると五十代の中でも相当な年功序列の高位に位置する。先輩面が出来はしないのかという思惑もなくはない。

儂は邪頭の四角い黒箱奏者である。いい年こいて自由邪頭というものをやっている。戯け者である。幸いにして息子も娘も邪頭の教えに染まらなかった。老妻の労災的偉業であろう。儂は心底老妻には感謝して居る。老妻労災老祭老際と引き際が大切であると申し上げるというより、儂は既に弾いて引いて秀でて居る。

儂は高等中学しか出て居らんが、戦時中だった。勉強なんぞをしている余裕は我が家にはあった。しかし、頭が邪教に侵されていた。しかし、痴呆指数は当時福島と呼ばれた界限で一位という偉業を成し遂げた。老いの繰り言ではあろう。しかし、痴呆指数の数値は医術的に信頼に値するのだ。脳高速という病が当然にして併発する。しかし、若気の至りである。儂は脳高速を存在理由としていた。人間世界で優位に立っていると。若氣的傲慢の極みである。しかし、宇宙は儂を見捨てなかった。度重なる失敗を与えてくれた。邪教の教えを学び、今日の好々爺的悟りの境地が現出したと申し上げる。

医術的に脳高速の治療に四角い黒箱は有益だという実証が出ている。敢えて名前は伏せるが有意義な伊沙子という人がいる。男子であり両性具有者でも同性愛者でもない。単に彼の師匠佐藤真子殿助殿がおっしゃって居るからそのようにさせて頂いた。因みに真子殿助氏も同性愛者ではない。

つまり、鬱病、誇大妄想、こう言った精神疾患に謙虚という態度を刷り込む作用が顕著なのだ。世界は自己中心では回っていないと言う強烈な示唆を八十八鍵が教えるのである。これを里見八十八鍵盤と呼ぶ。

独り言「明日は暇人。カミサンとアミアンの大聖堂を見に行く。ルンルン。ずっと忙しかったから自分へのご褒美ちゅうやつ。アミアンの大聖堂。世界遺産。この大聖堂が未完の世界一天井の高いボーベの大聖堂を生み、ケルン大聖堂を生んだ。完成品としてはケルンが世界最大。でも、ボーベの未完の大聖堂、こっちに超惹かれる。未完、でも、世界一天井が高い。アミアンのそれを超えようというその気概が好きなのだ。カミサンの出身地でもある。アミアンの大聖堂は俺にとっては沖至師匠である。唯一、どっか、そう、一か所だけでも高くなりしたい。せめて一か所ね。難しいぞっ！ おっ、予約投稿でけた」。

ご存知の通り、ピアノの鍵盤の数は 8 8 である。当然にして複音楽器。たとえば、トランペットは単音楽器。その奏法は相当に違う。奏者のキャラクターも相当違うと推測できる。たとえば、トランペットの真中のドはドしかない。この真中のドをピアノ弾きが「どの鍵盤でやるのか」、ほぼ、無限大の世界になる。複雑な和声が絡んでくる。トランペットのドにオーケストレーションを付ける形になるから、鍵盤の選択が難しい。でも、ドを堂々と低音部でやるという選択もあるけれど、芋と言われるのは必至。

そういうことを書きたいのではない。以前にも書いた。ピアノは西洋、ヨーロッパの英知の結晶。人類初のコンピュータと私は解釈している。西洋世界、ぶっちゃけ白人「さん」。まあ、理知の人だ。音楽を体系化し、それをピアノと言う 8 8 鍵盤に封じ込めた。

私の大いなる不満疑問は、これを完璧絶対と認識すること。日本人はお習い事お勉強が大変に秀でた民族と個人認定している。

あっ、やばいっ！ また、始まった。裕センスの老いの繰り言おーっ！

どけっ！ 俺はあー、モーニング着て、モーツァルトは絶対に弾かんっ！ 弾けねえーけど。

裕センス、止めて下さいっ、いつものやつ。

どけっ、俺は・・・。8 8 鍵盤の中に世界が封じ込められる。異論。うなわけねえー、三味線はどうすんだよおー、もっと、コスミックだよ、ばーか。完璧面しやがって、あの野郎、なんで黒なんだよ、こけおどしかよっ！ はいはい、完璧です。はいはい・・・。

裕センスは長年の西洋世界との格闘の末にピアノの技術を磨き悟りの境地に達したのである。でも、やっぱ、うなもんに世界だ音楽だ人間が「包括するはずはない」と確信したからこそ、よりを戻したというピアノ愛憎劇。

世界を 8 8 等分。してみろっ！ した方が分かり易いけどな。

皆さん、今日はっ！ 裕イサオです🐼。お元気ですかぁー？ こちらイルドフランスも今日はちょっと春めきました🌸。毎々の応援、ご愛読、心から♥️です。

今年はお陰様で、僕の音楽も少し春めいてきましたぁーっ！ 🌞。3月にはリールでエリック・ミモザと佐藤真師匠のトリオでの演奏が決まりましたっ！ 🐼。それから4月後半に息子の親友マクサンス君との新しい僕のユニットがデビューしまぁーっすっ！ 🐼。マクサンス君の曲添付しまぁーす。僕のようなオジサンじゃない🐼。聴いてね🐼。

わっ、閲覧数増えちゃったら🐼です。

ねえ、裕さん、大丈夫すか？ 大丈夫だぁー、裕さん階級。なんだ、それ？



これ、没になったコンサートポスターの写真でえーす。ピアニストの孤独映ってまぁーっす！

元々、私は自閉症だったから超閉塞という病のことは知っている。今でも後遺症が若干あるというか出る。慢性的に鬱なのも後遺症なのだと思う。出不精、人に会いたくない、これは恐ろしいことに以前のままである。カミサンがいて、たまに息子と娘が来る。これで十分に至福的閉塞感になる。こういう親父がミュージッシャンをやっている。そこがポイントなのだ。そうでもしないと、消滅している。

こういう性分には真逆逆噴射を自分でやらないと灯火人生になってしまう。だから、妙にがんばる。ガンバル・ジャンである。人生はとんでもなくつまらない。十二歳の頃からそんな風を感じ出したから、余生が長過ぎるのだ。

詩人、たぶん、そうだったのだろう。でも、老いた詩人。私は一番質が悪いと思う。詩を書く必要はない。本人が本来的に詩人になっていれば。詩って、そういうものだ。詩人は詩なんて書かない。

先日、カミサンとアミアンの大聖堂を見に行ってきたことは、予約投稿記事にて書いた。久しぶりに訪ねただけだけど、何度見ても驚きの連続である。ケルン大聖堂がアミアンをモデルに更に大きなものになった。ということは世界第二位の巨大ゴシック大聖堂ということになる。フランスの三大大聖堂。シャルトル、ランス、アミアン。アミアンのそれは高さ面積とその存在感は素晴らしい。内部が暗くない。なんか広々感がコンサートホールのような錯覚さえ覚える。しかも特筆すべきことは建造開始1220年、細部も含めた完成が1288年。これだけ短期間で建造された大聖堂は例を見ない。短期間で完成しているから、建築的な統制感は見事である。

以前にも何度か書いた。このアミアン大聖堂を超えよう。つまり、世界最大の大聖堂のプロジェクトはケルン、そしてボーヴェ。ボーヴェという町。人口六万人弱のオワーズ県の県庁所在地である。最近、格安フライトの本拠地となったボーヴェ空港によって少し名が知られ始めている。第二次世界大戦の空爆にて町の七割程度が消失していると推測する。取り立てて見るべきものがない町という印象が強い。ずばり、間違いなのだ。ここに世界最大になるはずだった未完のサンピエール大聖堂がある。グーグルで調べてみた。なんと、「人力で作られた世界最大の建造物」「天井高48.5m。世界一天井が高いゴシック建築」。ほとんど、パリの凱旋門が内部に入る高さ空間。ご存知の方も多いと思う、大聖堂は上から見ると十字架の形になっている。サンピエール大聖堂は、十字架の一番長い部分がない。上部のみの大聖堂である。当然にして正面がない。現在の入り口は右側の入り口である。この横の入り口の巨大感は凄まじい。正門ではない。

未完のせいなのだろう世界遺産にはなっていない。だからこそ、私は惹かれる。もし、完成していたら・・・と脳内絵図が広がる。

とんでもないプロジェクトだった。当時の技術力を超えたものを作ろうとしていた。天井が二度崩落している。このとんでもなさには私は惹かれる。常々、私も含めた人間どもはろくなことをしないと思っているけれど、こういう気概、英知には惹かれる。天に近づく巨大な大聖堂。その意識と作る気概に惹かれる。未完だからこそ、その途轍もない構想が浮かび上がる。

サンピエール大聖堂を訪れる度に、私が何度か架空の物語として書いている不死の一族ハイランダー。彼らの本拠地はここだ、と思うのである。天井を見ていると首が痛くなる。こんな建造物は例を見ない。

先週土曜日。久しぶりにパリ市内観光をやった。ご観光の方が、少し戻って来ているのだろう。折角、日本人ドライバーなのだから「あのぉー、もしよろしければ簡単なご案内致しましょうか？」と聞いてみた。「えっえっ、是非是非いーーーーっ！」とおっしゃるのでパリの諸々の歴史を話しながら運転。楽しかった。と、それを書きたいのではない。

やっと、暇になり、息子娘ご一行が来る。にぎやかだった。ワンタン麺、おでんうどん、ビーフカレー。大量に作ったのにあっという間になくなった。と、それを書きたいのではない。

昨日、夕刻、ピアノ弾き捲りの後、さっ、ブログるぞっとパソコン立ち上げ。レレレ。インターネットが機能しない。息子に聞く。なんらかの機能障害。先方に連絡済み。連絡待ち。あっ、そ。ブログ書けない、ユーチューブ見れない・・・、結局、なんもできないから天ぷらを作りテレビでニュースを見。さっさと寝る。おっ、インターネットのない生活もなかなかだねえーなんて言いながら。

いや、スマホは機能しているからメールとブログの拝読はできた。しかし、スマホで書く気にはならん。一応、愚ブログとはいえ書きながら諸々のことを考えてはいるから、小さいスマホでは考える余裕がない。息子が帰り際、「パパ、スマホ接続でパソコン使えるから、じゃ」。

昨晚やった。やり方が分からず諦めた。今朝、スマホで検索。「テザリング」という機能があると出てきた。やってみた。どうやってもパソコン内のコネクションリストにスマホが出てこない。諦め掛けた。

スマホ＝テザリング中と表示

パソコンのコネクションリストには表示がない

理科系脳としては接続しているとは理解できない。パソコン内に接続しましたという表示が出ると推測。結局、どうやっても出ない。ああーーーーあ、今晚、息子に電話しよう。その時、なんとなく、まっ、ダメもとでグーグル開いて・・・、開いた。なんだよぉー、もう、接続してんのかよぉーーーーっ！ 言ってくれよなぁー、水臭い。単にスマホ内の「テザリング中」、これで接続は完了していたのだ。

なんとなく世の中のことも深読みし過ぎて混乱することもあるよなぁー、単純思考も大切なんだよなぁー、なんて考えた。

私の一万円で購入したソニーのスマホをテザリングして書く。

えっ—とえっ—と、こういう文章が日本文学の中にあるのかよってっ！　さま—ず、三村さんの口調で。おっ、楽譜的。なんかを指定するというのは楽譜だな。じゃ、ジャズメンフレーズにすると・・・。タワシ　プーチ　ニソー　ホマス　ザテリング　カークランド。筒井康隆しかない、こういう文章は。

さっき、社長から電話。「俺、後、五年で引退するから付き合って頂戴ね」。社長は六十三。「しかし、裕さんはいいよな—、ピアノ弾けて。楽器弾けると女にもてるってたよね—、俺、弾けなくてももてちゃったからね—。でも、後悔してんだよな—、もて過ぎて努力せんかった」「あらら」。

「先日、お客様が社長からジャズのピアニストと聞いたって言われました。格好え—って。ミュージシャン仲間も口を揃えてリムジーンドライバー、格好え—って。ジャズしてるって。ピアノを口笛吹くみたいに弾く瞬間ってあるんですか？　って聞かれたから、はい、私がピアノを弾いているのかピアノに私が弾かれているのかしばしば分からなくなりますって答えました」。

「きゃ、かっちょえ—、そのフレーズっ！　俺も言いたいよお—っ！」

なんなんだろう、いい年こいた社長と従業員の会話だ。真師匠とは女言葉だ。いいんだろうか、こういう阿保をやっていて？　はい、いいのだ。

世代ごとの生き方なんぞっ、私には分かん。五十代になっちまった—だけで、別にどうでもいい。私は潮流流行時流、こういうものが大嫌いだから、いいのだ、これで。でも、巨大な川がいずれ私を流してくれるから、生きている内だけでも仁王立ちの弁慶する。馬鹿なのだ。

あっ、息子と娘に、実はパパはハイランダー—って言ってないよ—、まだ。やばぐね、それ。

今週は暇だ。とはいえ明後日はコンサート。さっき、煙草屋までぶらぶら。急にこのタイトルで長い記事を書きたくなった。ブロガーの方々、かなり多くの方が応募歴があると推測する。もし、私の履歴がご参考になるのであれば……。注。受賞歴ではないこと。それと、私は、文学、小説、純文、大衆小説、こういう単語に違和感を覚えるし、定義もそれぞれだから普段は使わない。でも、文章がややこしくなるので敢えて使うことにする。それと、手前味噌と若干の妬みはお許し願う。記事内容の重複もご容赦。

日本の現代詩の影響を受けて詩を17から21歳ぐらいまで書いていた。その後、現代美術の世界へ。初めて小説を書いたのは28ぐらいのはずである。現在まで完成した作品は10。諸々の文学賞に応募。同じ作品を別の文学賞へというのも入れると、10回以上は応募していると思う。群像、すばる、太宰、オール読物、文藝……。すべてノミネートさえしていない。

唯一、私の第4作「水の記憶」という自伝的散文詩系の作品。原稿用紙100枚。どの賞なのか覚えていない。いつものようにノミネートさえされなかった。近代文芸社に送ったら出版してくれるという話になった。その唯一の単行本が福島県が主催する吉野せい文学賞に他薦で応募された。次席になった。芥川賞作家お二人から「賞の性格上(農民文学)、受賞は見送りとさせて頂きました。素晴らしい。次回作に期待致します」。こういうお手紙。後日、同作品およびその後の作品を元編集者に読んで頂いた。

「裕さん。あなたの本領は水の記憶です。お笑い系はちょっと……。この文体で第2作を書いて頂けませんか？」。

ここまでで、非常に気になることは、私の作品はノミネートされていない。つまり、選者の方々は読んでいない。編集部の篩で落選している。文学賞通の仲間に言わせれば、「コネクションなしではそうなる」。そうなる芸能人の書いた小説は選者の手元に直撃するという不公平が生じていることになる。私の大好きな町田康も又吉さんもそういうルートだろうと推測する。才能はもちろん認める。しかし、もし、そうであれば……。理不尽である。それと、編集部の篩のクオリティーには疑問を感じる。本当に、分かっているのか？現代詩、フランス文学と諸々のバックグラウンドが私にはある。篩の方が古いのであれば理解に苦しむ。

しかし、待てよとなる。私は僭越にもジャズジャイアントと共演という恐ろしいことをピアノでしている。当然にして、コネクション。私が築いてきた技量とコネクション。文学賞も、たぶん、そういう世界なんだろうと推測する。もし、そういうことであれば、受賞は無理だ。フランス在住者に日本の出版社とのジャズメン的コネクションは構築できない。

と、こういう推測は、もしかすると本当なのかも知れない。パリで私が沖至と共演している。これは、明らかになんらかのノミネート。こういうことなのかも知れない。でも、技量はある。その次のレベルはコネクションなのか？

自分の小説の技量を鼻屑目で見ている。そうだろう。いや、ちょっと違う。私にはストーリーテラーの才はない。なんどか書いた。フランス語のエクリバンとロマンシェールは違うと。前者の日本語訳は作家、後者は小説家。日本は後者ばかりだ。遅れている。作品の出来なんぞどうでもいい、書くという営為で人間の本質が抉り取られる。それが文学と言うものだと考える。映画のシナリオライターではないのだ。いや、それは一つのベクトル。でも、文学の本質ではないことを分かって書くのか、という結論になる。

私は小説という物語は別のジャンルだと思っている。素晴らしい、ストーリーテリング。なんの他意もない。でも、そういう形、定型からはみ出すもの。それこそが文学だろう。この定義は本当に難しい。

たぶん、私は、もう、小説は書かないと思う。ブログは一つの文学ゲリラ。そう、思い始めている。一つの可能性。

追記 今、読み返して素朴な疑問。「どうして水の記憶2は書かれなかったのか？」。この小説の文体は裕センセが3か月にいっぺんぐらい突然のように蘇る「文学的な記事」、たとえば、「エトルタの断崖」みたいな。そういう文体なんだけれど、この小説を脱稿後ジャズ菌に脳が侵され脳軟化。ということ。ジャズ菌に侵されると純文は無理だ。それと天邪鬼。

今、明日のコンサートの微調整が終わった。沖至師匠、オリビア。何度も共演させて頂いている。ここに、モーガンと未知のドラマーが入る。真師匠がバビロの手違いでダブルブック。この未知数。これがフリージャズの醍醐味。

なんとなく、そろそろここ一年のブログを電子書籍化しようかなと思い始めた。

今週は暇なのでFC2のアクセス解析と電子書籍のサイトを久しぶりに覗いた。前者。意外なことに気が付いた。ユニークアクセスとトータルアクセス。この数字がもろ違う。たとえば、前者6。後者54。なァーんて出てくる。それからブックログのパー。「ピアノは私だ3-A」。トータルアクセスが4300回を超えている。理科系脳で分析すると、ご愛読者の方の数は少ない。しかし、本当に涙が零れそうなのだけれど「私の愚記事を貪り読んで下さる方々」がいる。そういうことになる。数少ないフォロアーさん方がいるということになる。私のピアノとまったくもって一緒である。なんか泣きながら元気を頂いた。

「なんだよおー、閲覧数、またまた一桁あーー」などと、実際は騒いでいないけれど、「あァー、そっ」。でも、数字の問題ではなくて、本気になってというのか面白いと貪り読んでくれる方々がいるという「この数字」。これはありがたいし元気になる。

なんとなく、あまりに零細。こういうのは良くない。縮こまる感。世界に発信してんのに一桁？ 私のビデオの再生回数は一万何千回。これぐらいの数字はいる。「次に」行かなくなる。でも、「貪ってまァーすっ!」。これは超嬉しいのだ。少数の方々であってもいいのだ。大切な人生の時間を私のブログ記事に割いて頂いている。これは、やっば、凄い。謹んでお辞儀です。

おっ、それで、電子書籍にまとめてブログも「次に」なァーんて考え始めていた。でも、タイトルなァー、今のやつ以外なァー、おっ、「Free Blog」。まァ、フリージャズ屋だから当然にして思い付くタイトル。でも、思い付かなかった。第一、サムネイルもなァー。顔出しサムネイルはナルシス丸出しだよなァー、まァ、若干、元ハンサムだったしよおー。

ところで、「水の記憶2」が書かれなかった「訳」をなんとなく考えていた。以下、手短に・・・。

やはり、マルセル・デュシャンの同じことを繰り返さない。この教え。そう、粗削りではあるけれど文学的な一つの私なりの完成だった。そして、十分、評価して頂いた。芥川賞作家お二人から直筆のお詫びと励ましの手紙。こんなことはそうそうは起きない。十分である。私の美術家としての大作「不燃性の木」。全長17メートル。この作品の評価の経緯と良く似ている。私な

りの到達点だったから、それでいいのである。私は媚びとは言わない。そういうへつらった感じでのコネクションは要らない主義。もしかすると有名になっていたかも？ そんなことはどうでもいいのである。一つの到達点、私なりに、しかも、きちんと識者の方が評価。十分である。

ピアノ、インプロビゼーションは繰り返せない。人生と同じだ。この現在形の刹那に嵌って久しい。音は容積がない。この生きている実感。これに嵌った。そして、お客様と人生という時間を僭越にも共有。慢性鬱の私には真逆的に音楽の効用は半端ではない。

と、若干、若い頃の文体が時々蘇る。でもねえ——、裕イサオの物書きとしての持ち味。尖がった散文詩のような小説のようなもの。これは、この年では無理。好々爺になっている。世間へ攻撃態勢にはないのだ。庭の草むしりしてルンルンしているから、無理だわな。第一ね、ヤマハのグランドピアノの横にグラビアアイドルが水着。はっきりきっぱり、私が飛び付くのはピアノ。なのだ。